

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

フランス語の動詞未来時制における
歴史的未來の研究

小川 紋奈

2022 年度

目次

序論.....	1
第1章 単純未来形の先行研究と歴史的将来の検討.....	4
1.1. 本章の手順.....	4
1.2. 単純未来形の用法に関する伝統的な定義.....	4
1.3. 歴史的将来用法に関する伝統的な概念.....	11
1.3.1. WARTBURG, Walter Von et Paul, ZUMTHOR (1958).....	13
1.3.2. IMBS, Paul (1960).....	13
1.3.3. WAGNER, Robert Léon et Jacqueline, PINCHON (1962).....	14
1.3.4. GREVISSE, Maurice (1975).....	16
1.3.5. BARCELÓ, Gérard Joan et Jacques, BRES (2006).....	17
1.4. まとめ.....	18
第2章 分析対象 (コーパス) について.....	19
2.1. 分析の対象と方法.....	19
2.2. 歴史テキスト.....	20
2.2.1 歴史テキストのもつ問題性.....	20
2.2.2. <i>La Proclamation de la Commune</i> の概要.....	21
2.2.3. <i>Jeanne d'Arc</i> の概要.....	21
2.2.4. 歴史テキストにおける単純未来形と歴史的将来の出現傾向.....	22
2.2.4.1. <i>La Proclamation de la Commune</i> の統計図・表.....	23
2.2.4.2. <i>Jeanne d'Arc</i> の統計図・表.....	25
2.3. 訃報 (nécrologie).....	26
2.3.1 訃報のもつ問題性.....	26
2.3.2. <i>Libération</i> 紙掲載の訃報について.....	27
2.3.3. 訃報における単純未来形と歴史的将来の出現傾向.....	29
2.4. 文学テキスト.....	31
2.4.1 文学テキストのもつ問題性.....	31
2.4.2. <i>Le Petit Prince</i> の概要.....	32
2.4.3. <i>Miss Marple au Club du Mardi</i> の概要.....	32
2.4.4. <i>Terre des hommes</i> の概要.....	33
2.4.5. 文学テキストにおける単純未来形と歴史的将来の出現傾向.....	34

2.4.5.1. <i>Le Petit Prince</i> の統計図・表.....	34
2.4.5.2. <i>Miss Marple au Club du Mardi</i> の統計図・表.....	35
2.4.5.3. <i>Terre des hommes</i> の統計図・表.....	38
2.5. まとめ.....	39
第3章 理論的枠組み.....	40
3.1. 本章の手順.....	40
3.2. 「時間」の概念の多義性.....	40
3.3. 発話行為の次元 : discours / histoire.....	45
3.4. 時間論理 : 可能世界と信念領域.....	48
3.5. まとめ.....	55
第4章 歴史的未來と現在・過去時制との競合.....	56
4.1. 本章の手順.....	56
4.2. <i>La Proclamation de la Commune</i> にみられる歴史的未來.....	56
4.2.1. 歴史的未來を示さない単純未來形.....	56
4.2.2. 歴史的未來を示す単純未來形.....	59
4.2.2.1. 歴史的現在と歴史的未來.....	60
4.2.2.2. 過去形・現在形・未來形の共起.....	62
4.2.2.3. 迂言的未來形と歴史的未來.....	65
4.2.2.4. まとめ.....	67
4.2.3. 歴史的現在と歴史的未來の共起.....	67
4.2.4. 過去諸時制と歴史的未來の共起.....	79
4.3. <i>Jeanne d'Arc</i> にみられる歴史的未來.....	88
4.3.1. 歴史的未來を示さない単純未來形.....	89
4.3.2. 歴史的未來を示す単純未來形.....	93
4.3.3. 歴史的現在と歴史的未來の共起.....	97
4.3.4. 過去諸時制と歴史的未來の共起.....	104
4.4. 訃報 (nécrologie) にみられる歴史的未來.....	110
4.4.1. 歴史的未來を示さない単純未來形.....	111
4.4.2. 歴史的未來を示す単純未來形.....	115
4.4.3. 歴史的現在と歴史的未來の共起.....	116
4.4.4. 過去諸時制と歴史的未來の共起.....	127
4.5. まとめ.....	135

第5章 歴史的未來と歴史的迂言未來の意味的差異.....	137
5.1. 本章の手順.....	137
5.2. 迂言的未來形の特徴.....	138
5.2.1. IMBS, Paul (1960).....	138
5.2.2. LEEMAN-BOUIX, Danielle (1994).....	140
5.2.3. MAINGUENEAU, Dominique (2010).....	142
5.2.4. BARCELÓ, Gérard Joan et Jacques, BRES (2006).....	145
5.3. 「歴史＝物語」における単純未來形と迂言的未來形の出現傾向.....	147
5.4. 歴史的未來と歴史的迂言未來の構造的差異.....	153
5.4.1. 歴史的用法を示さない迂言的未來形.....	153
5.4.2. 歴史的未來と歴史的迂言未來の共起.....	155
5.5. 現在形に活用した歴史的迂言未來 (FP-PR-H).....	164
5.5.1. 現在形基調の歴史的迂言未來 (FP-PR-H).....	170
5.5.2. 過去形基調の歴史的迂言未來 (FP-PR-H).....	175
5.6. 半過去形に活用した歴史的迂言未來 (FP-IMP-H).....	180
5.6.1. 過去形基調の歴史的迂言未來 (FP-IMP-H).....	184
5.6.2. 現在形基調の歴史的迂言未來 (FP-IMP-H).....	188
5.7. まとめ.....	196
第6章 歴史的未來と歴史的条件法の機能的差異.....	197
6.1. 本章の手順.....	197
6.2. 条件法の時制的用法の特徴.....	198
6.2.1. GREVISSE, Maurice (1986).....	198
6.2.2. 朝倉季雄 (2002).....	200
6.2.3. PATARD, Adeline (2017).....	202
6.2.4. GOSSELIN, Laurent (2018).....	203
6.3. 「歴史＝物語」における単純未來形と条件法の出現傾向.....	204
6.4. 歴史的未來と歴史的条件法の構造的差異.....	209
6.5. 歴史的未來と歴史的条件法.....	216
6.5.1. 歴史的条件法を示さない条件法.....	216
6.5.2. 歴史的未來と歴史的条件法の共起.....	219
6.5.3. 現在形基調の歴史的条件法.....	226
6.5.4. 過去形基調の歴史的条件法.....	232
6.6. まとめ.....	240

第7章 文学テキストにおける単純未来形.....	242
7.1. 本章の手順.....	242
7.2. <i>Le Petit Prince</i> における単純未来形.....	243
7.2.1. <i>Le Petit Prince</i> をコーパスとした理由.....	244
7.2.2. 物語小説の会話文でみられる単純未来形.....	244
7.2.3. 物語小説の会話文以外でみられる単純未来形.....	252
7.2.4. まとめ.....	254
7.3. <i>Miss Marple au Club du Mardi</i> における単純未来形.....	255
7.3.1. <i>Miss Marple au Club du Mardi</i> をコーパスとした理由.....	256
7.3.2. 物語ジャンル全般にみられる単純未来形.....	256
7.3.3. 入れ子構造の小説でみられる単純未来形.....	261
7.3.4. まとめ.....	268
7.4. <i>Terre des hommes</i> における単純未来形.....	270
7.4.1. <i>Terre des hommes</i> をコーパスとした理由.....	270
7.4.2. 自伝的小説でみられる単純未来形.....	271
7.4.3. 自伝的小説でみられる歴史的未來.....	277
7.4.4. まとめ.....	284
7.5. 物語における先取り (anticipation).....	286
7.6. まとめ.....	290
結論.....	292
参考文献.....	298

本論文中に用いる略語

FH	:	歴史的未來 (futur historique)
FS	:	歴史的未來を示さない単純未來形 (futur simple)
FP	:	歴史的迂言未來を示さない迂言的未來形 (futur périphrastique)
FP-PR	:	準助動詞allerを現在形においた迂言的未來形 (futur périphrastique présent)
FP-IMP	:	準助動詞allerを半過去形においた迂言的未來形 (futur périphrastique imparfait)
FP-H	:	歴史的迂言未來 (futur périphrastique historique)
FP-PR-H	:	準助動詞allerを現在形においた歴史的迂言未來 (futur périphrastique présent historique)
FP-IMP-H	:	準助動詞allerを半過去形においた歴史的迂言未來 (futur périphrastique imparfait historique)
Cond	:	歴史的條件法を示さない條件法 (Conditionnel)
Cond-H	:	歴史的條件法 (Conditionnel historique)
PDV	:	視點 (point de vue)
PDV-N	:	書き手の視點 (point de vue du narrateur)
PDV-E	:	自ら語る出來事自身の視點 (point de vue de l'événement historique)

図の中でのみ用いられる略号

PH	:	歴史的現在 (présent historique)
----	---	----------------------------

言語資料 (コーパス) として使用したテキストの略語

LPC	:	<i>La Proclamation de la Commune, 26 mars 1871</i>
JDA	:	<i>Jeanne d'Arc</i>
LPP	:	<i>Le Petit Prince</i>
MCM	:	<i>Miss Marple au Club du Mardi</i>
TDH	:	<i>Terre des hommes</i>

序論

フランス語の動詞時制の一つである単純未来形 (*futur simple*) は、発話時より後のまだ実現されていない事柄に言及する場合に用いられるものであるとするのが伝統的な考えである。しかし、過去の既に起こった事柄を述べる際、様々な形の過去形はもちろんのこと、歴史的現在 (*présent historique*) と呼ばれる語りの現在形¹、さらには単純未来形も使用されることもある。この最後に挙げた語り方は、歴史的未來 (*futur historique*²、以後 FH と略記する。) と呼ばれるものである。

単純未来形の分析において、従来の研究では、*Emplois temporels* (時間的用法) と *Emplois modaux* (モダール用法) の 2 つの用法の存在を認め、その時間的用法の一つに FH が分類されるのが一般的である。しかしこの二分法的分析は、Benveniste などの言語学者が主張している発話行為の次元を設定せず、ほとんど文単位レベルだけを基準として分析しているという大きな問題点がある。

対話者の存在を前提とする発話のレベルである「話」(*discours*) における分析と、発話時に対話者が存在せず話し手の主観的判断を持たないレベルである「歴史＝物語」(*histoire*)³ の分析では発話文の位相が大きく異なる。単純未来形はこの発話行為のレベル分けにおいて、「話」を示す時制であり、「歴史＝物語」に属する時制ではないと区分されている。しかしながら、歴史テキストにおいて FH としての単純未来形が使用されているのである。単純未来形の使用に関しては、従来の分析において単純未来形にモダール用法を認めていることからして、主観的な側面を持たない「歴史＝物語」レベルにおいてモダール用法をもつ単純未来形を使用することがなぜ可能なのかという疑問が浮かんでくる。

こうした「歴史＝物語」レベルにおける未来形に焦点をあてた研究はほとんど見られ

¹ 歴史的現在とは、語りの現在 (*présent narratif*) とも呼ばれ、同じものを指す。

² この名称の他に、*futur des historiens* と呼ばれることもある。例えば、Imbs (1961) や Martin (1983) などを参照のこと。

³ *discours* と *histoire* に対応する和訳は、各先行研究により異なっており統一されていないため、本論文では「話」と「歴史＝物語」と呼ぶこととする。*discours / histoire* に関しては、第 3 章で詳しく説明することとする。

ず、さらに、「histoire」は歴史と物語の叙述両方を指し示すが、FH を考えるうえでこの2つは区別して考えなければならないものにもかかわらず、この区別が厳密化されていない現状がある。それゆえに、これから本論文で展開する研究はFHの問題に新たな視点を導入する重要なものであると考えられる。

歴史テキストや伝記などは、書き手の現在からも読み手の現在から見ても既に起きた過去の出来事が述べられているものであり、単純過去形 (*passé simple*)、複合過去形 (*passé composé*)、半過去形 (*imparfait*) などの過去時制や歴史的現在ですべてを述べることも可能なはずである。しかしながら、歴史的叙述においてFHを示す単純未来形が用いられることは稀ではなく、FHは多くの歴史テキストに登場するが、いったいどのような場面でどのような効果を担って使用されるのかという問題は未だに詳しくは研究されていない。

後述するように、単純未来形の様々な用法研究は数多くなされており、その用法の一つとしてFHがあることは多くの言語学者に認められている。これは過去の実際に起きた歴史的な出来事の叙述において用いられる単純未来形のことを指しているが、FHは、歴史的記述において過去の出来事を現在形で表す歴史的現在と同様に、歴史テキストで見られる表現方法であり、特殊なテキスト内でのみ用いられるものである。この表現方法は、書き手が書いた叙述した時点ではすでに完全に過去の出来事だが、FHで表される出来事よりも前に起きた出来事に対しては未来であるため用いられるという指摘や、過去の叙述の中で書き手が視点を過去に移すことによって未来の出来事を表すためにFHを用いるという指摘などはなされているが、なぜ過去の出来事を述べる歴史的記述において一般に未来を表す表現である単純未来形を用いるのかという問題に関する研究はなされていない。

過去に実際に起きた出来事を語る歴史叙述では、理論的には過去形や歴史的現在だけで記述することも可能であるはずであるのに、なぜわざわざ未来形を用いる場合があるのだろうか。どのような場合にFHは使用されているのだろうか。この歴史的記述テキストと単純未来形との間に書き手の意図や何らかの語用論的あるいは文体論的機能効果が見いだせるのではないだろうか。しかし、いくら従来の用法研究を行ってもこうした問題を究明するための手がかりを掴むことは不可能であるように思われる。こうした研究を行うためには用法研究の成果を基礎としながらも、歴史テキストというジャンルにおける特定のテキストを、テキスト全体として連続的に考察していかなければならぬ

い。用法研究がある程度議論されてきているため、テキストを考慮に入れた視点からの研究が FH の考察に対して新たな視座を開いていくように考えられるのである。そして、その分析結果を通して、単純未来形の新たな特質を見いだせるのではないかと考えられるのである。

以上のことを踏まえて、本論文では、次に示すような手順によって研究を進めていく。第 1 章では、先行研究を提示し、フランス語の単純未来形に関する定義や伝統的な用法分けを確認する。また、FH に特化している先行研究はあまり見られないが、構造に関して記述されているものを取り上げ、FH についての概念を確認する。第 2 章では、本論文で扱う分析対象（コーパス）に関する概要を述べるとともに、各コーパスにおける単純未来形の統計を取り、生起数と出現傾向を図表化し、特徴を検討する。第 3 章では、分析の基盤となる「時間」の概念・発話行為の次元・時間論理といった理論的枠組みの提示を行う。以降の章ではコーパスの実例とともに理論的な側面からの分析を開始する。まず第 4 章では 2 つの時間軸を導入することで FH が使用可能となる説明を試み、また、FH と現在・過去諸時制との共起に着目し、FH の特徴と使用意図を考察する。第 5 章では同じく未来表現の時制の一つである迂言的未来形との意味的差異を、時間軸と視点を用いたシエマ⁴によってメカニズム上の差異から明らかにする。第 6 章では、条件法の時制的用法を確認しつつ、FH との構造的差異を明示し、過去から見た未来には条件法が用いられるという通説を批判し、テキスト内での機能的な違いを論じていく。第 7 章では歴史テキスト・訃報記事と同じく「歴史＝物語」というレベルに属するテキストジャンルではあるがフィクションである文学テキストを取り上げ単純未来形を観察し、FH との意味的・構造的な違いを体系化することで文学テキストにおける固有の機能を探究する。最後に、全体を総合化した研究結果を結論部分で提示する。

⁴ 本論文では図式化、定式化、形式化などを意味することばとして用いている。

第 1 章 単純未来形の先行研究と歴史的将来の検討

1.1. 本章の手順

この章では、FH の用法について、その特徴を踏まえて、歴史的記述において使用される場合の傾向についての仮説を立てるための基礎を組み立てていくために、従来の研究で行われている単純未来形の用法について、先行研究を挙げながら検討していく。ここではあくまで単純未来形の用法研究についての考察を行うもので、詳しい理論的な分析は第 2 章のコーパスに対する研究の後、第 3 章以降で行う。

以下では 1.2 節で単純未来形の用法に関する伝統的な定義を見るとともに、その中における FH の位置づけを確認する。1.3 節では、FH を多かれ少なかれ明示的かつ実質的に扱っている先行研究を順次検討し、1.4 節でまとめとする。

1.2. 単純未来形の用法に関する伝統的な定義

文法書や研究書で単純未来形についての記述を見てみると、

Le **futur simple** indique la simple postériorité d'un fait par rapport au moment où l'on parle. (Grevisse, 1975 : 730)

単純未来形は、ある事象が発話時よりも単に後のものであることを示す⁵。

⁵ 本論文では、事行、出来事、事態、事象という用語に関しては区別して使い分けることとする。事行 (procès) とは、動詞が表す行為・状態を指す。出来事とは、文内容のレベルにおいて時間的・空間的に限定され位置づけられる事柄を表す。事態 (état de chose) とは、認知レベルのことであり、物事の現象を示す。事象とは、事行・出来事・事態すべてを包括する用語として用いることとする。

Le FS [= futur simple, 筆者註] s'emploie donc en discours lorsqu'il s'agit de situer un procès comme ultérieur par rapport au moment de la parole. (Barceló et Bres, 2006 : 104)

単純未来形は、ディスコースにおいて発話時より後に事行を位置づける場合に用いられる。

とあり、発話時より後に事行を位置づける場合に用いられる動詞時制であると定義している。

しかしながら、単純未来形を用いた文⁶として、

(1) Il **pleuvra** demain.

あすは雨だろう。 (朝倉, 2002 : 227)

(2) Tel qui rit vendredi dimanche **pleurera**.

(〔諺〕) 金曜に笑う者は日曜には泣くだろう。喜びは長続きしない。

(ibid. : 228)

(3) Tu n'**oublieras** pas de me rendre la monnaie.

(買い物頼んで札を渡し) お釣を返すのを忘れないでよ。 (id.)

などの例を挙げることができるように、文脈から推測、命令などが分かるとおり、単純未来形は、単に未来に実現される事柄を表す文にのみ使用されるわけではない。

伝統的な文法書の一つである『新フランス文法事典』(ibid. : 227-229) で単純未来形の用法に関する記述を見てみると、

A. 時制的用法

1⁰ 現在を基点として未来の行為を表わす

2⁰ 過去を基点とした未来

3⁰ 自由間接話法で：歴史的現在形に関係するとき

⁶ 本論文では以降、例文と和訳文における太字および各種下線は本論筆者によるものである。和訳書が出版されていないものに関してもまた、筆者による訳である。和訳文は訳すにあたって日本語に正確に当てはまらない場合もあるが、なるべく沿うよう心がけた。

4⁰ 従属節の未来形：主節が過去時制の場合

5⁰ 一般的真理を表わす

B. 叙法的用法

1⁰ 意志

2⁰ 脅迫

3⁰ 命令

4⁰ 直説法現在に代わる断定的語調の緩和

(futur de politesse)

5⁰ 憤慨・抗議：感歎文・疑問文で

6⁰ 予想，推測 (futur de probabilité) : avoir, être の

単未 [=単純未来形，筆者註]

7⁰ 条件・譲歩

と区分されており，非常に多義的に使用されることが分かる。

フランス語の単純未来形の用法研究に関しては，古くから数多くの研究がなされているが，多くの研究ではこのように単純未来形は大きく分けて二つの用法に区分できるとしており，時間的用法 (*emplois temporels*) とモダール用法 (*emplois modaux*) の存在を認めている⁷。時間的用法とは青木 (1998 : 115-133) によると，極めて客観的で確実なものである。事態の実現を前提としており，事象に関して，それがいつかを指定する。話者が発話時点 (現在時) で，ある参照基準 (客観的なデータ，知識，経験) にアクセスし，共話者に新たな情報を伝達する形式である。一方モダール用法とは，主観的で不確定な事態の実現を前提としており，話者の価値判断が問題となると，青木は指摘している。

本論文では用法研究を研究対象とはしないが，FH は単純未来形の用法の一つとして区分されるため，まず単純未来形の各用法を見ておくことにする。しかし批判的検討は

⁷ *emplois temporels* は時間的用法や時制的用法，*emplois modaux* についてはモダールな用法や叙法的用法などほぼ同語だが用語が異なることがある。引用箇所では各著者の呼び方に従うが，本論文では時間的用法，モダール用法という用語を用いることとする。

行わず、青木（1998）や Touratier（1996）⁸ を参考にしながら検討してまとめた小川（2013）を提示するにとどめる。

（i） 時間的用法

時間的用法の特徴としては参照基準があるため客観性を帯びやすく、時間的な視点が未来に焦点化されている。予定・予告・天気予報、夢想、歴史的未來、法的未來、格言的未來の5つのカテゴリーを含む。

① 予定・予告・天気予報：時刻表や気象庁のデータなどを参照。明確な時間指示。

(4) LiPhone 5 sortira le vendredi 21 septembre.

(22 AOÛT 2012, <http://www.presse-citron.net/>)

iPhone5 は 9 月 21 日 金曜日に 発売されます。

② 夢想：夢の世界は不可侵な別世界であり客観的な参照基準であると捉える。

(5) Suzy racontait à Blaise son rêve, qui était toujours le même :

— Un jour, je me marierai avec un prince. Il sera grand, il sera beau, il sera fort.

スージーはブレイズに自分の夢を語るのです。いつも同じ夢でした。

— いつか、あたしは誰か王子様と 結婚するの。王子様は背が高くて、ハンサムで、力持ちなの。 (青木, 1998:121)

⁸ Touratier（1996：178-179）は、Emplois temporels（時間的用法）、Emplois qui ne ressemblent pas proprement temporels（固有に時間的ならざる用法）、Emplois non temporels（非時間的用法）という三分割を行っている。「On range traditionnellement parmi les emplois modaux du futur tous ceux qui correspondent moins à une valeur temporelle de futur qu'à une valeur subjective proche de celles qu'on reconnaît au mode subjonctif.」（伝統的に未来形のモダル用法の中で、未来の時間的価値よりも、接続法で認められる価値に近い主観的価値に対応するものすべてが分類される。）と述べ、futur de volonté（意志的未來用法）と futur gnomique（格言的未來用法）を分類している。

③ 歴史的未來：過去の叙述の途中で視点を過去に位置づけ、未來の事行を描写。

- (6) Enfin, il part pour Paris. C'est la rupture définitive avec M^{me} Warens [...]; désormais dans leurs rares relations les rôles seront intervertis, et Jean-Jacques enverra quelques petits secours à l'amie qui a tant fait pour lui. La pauvre femme, toujours en dettes, en procès, en projets mourra en 1762.
- ついに彼（ルソー）はパリに旅立つ。これはヴァラン夫人との決定的な袂別だった。（中略）以降ほそぼそと続く二人の交際においては役割が逆転し、ジャン＝ジャックは、かつて彼にあれほど尽してくれた女友だちのために、僅かながらも援助の手を差しのべることになる。負債や訴訟や計画の立案に夜も日もない哀れな女性は、やがて 1762 年 この世を去ることになる。

（Lanson：朝倉・富永・鈴木，1973：46 より引用）

④ 法的未來：法体系が参照基準。

- (7) Tout Français jouira des droits civils. (Code civil, art.8)
- すべてのフランス人は市民権を享有する。

⑤ 格言的未來：歴史・文化・社会的な共通知が参照されるもの。

- (8) Demain il fera jour.
- 明日は明日の風が吹く。

(ii) モダール用法

モダール用法の特徴とは、話者の主観が必ず何らかの形で未來の側面において反映されているというものである。予想判断・推量、確信、決断・意志、願望、約束、命令、憤慨、皮肉・反語、語調緩和、予言の 10 個を含むものとする。

① 予想判断・推量：未來時における事行を話者が発話時に判断。

- (9) Si ça continue, on appellera le docteur.
- また今後こんな状態が続くようなら、医者を呼ぶことになるだろう。

（南館，1998：23）

② 確信：事行の実現可能性を疑わない，確信的判断.

(10) Petit Ours Brun tourne autour de la galette et il répète : — Moi, je serai
le roi...!

茶色の小熊ちゃんは，ガレットのまわりをぐるりと回って，繰り返して言うの
でした。「僕が王様だよ.」 (青木, 1998 : 122)

③ 決断・意志：事行を実現可能とみなしたうえでの話者の自身への決断・意志.

(11) Ma décision est prise : Je terminerai ma thèse cette année.

決心はつきました。今年じゅうに博士論文を終わらせます. (ibid. : 126)

④ 願望：事行の実現可能性にかかわらない話者の強い望み.

(12) Mais ça, il faudra me le pardonner.

(Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, 1999: 25)

でも，それについては許してもらわないといけない.

⑤ 約束：発話者の共話者への決断・意志を共話者と共有保持.

(13) Ne t'inquiète pas ; je ne le dirai à personne.

どうぞご心配なく。そのことは誰にも言いませんから. (南館, 1998 : 29)

⑥ 命令：共話者の判断を考慮せず事行の実現を促す，共話者に対する話者の意志.

(14) Puis elle dit d'un ton solennel : — Tu la liras demain ; d'ici là, je t'en prie,
ne m'adresse pas une seule question ! ... Non, pas une !

それから，彼女は改まった口調で言った。「明日になったら，これ（手紙）を
お読みになってね. それまでは，お願いですから，何もおききにならないで！
…いいこと，何ひとつおききにならないのよ！

(Flaubert : 朝倉・富永・鈴木, 1972 : 44 より引用)

⑦ 憤慨：発話者が内容に賛同しないのみならず憤りの意を主張.

(15) Quoi ? je souffrirai, moi, qu'un cagot de critique.

Vienne usurper céans un pouvoir tyrannique ?

(Molière, *Le Tartuffe*, I, 1, 1664, Imbs, 1960 : 52 より引用)

なんですって！あの偽善者のおせっかいやきが、この家へはいつてきて自分勝手に権力をふるうのを、この私に我慢しろと？

⑧ 皮肉・反語：望みが叶わないと知っているうえで共話者や第三者を遠回しに非難。

(16) L'air frais de la nuit me **fera** du bien.

(Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, 1999 : 40)

夜の涼しい風がわたしに元気をもたらすわ.

⑨ 語調緩和：共話者に対する発言時に虚構的なずれをもたらすことによる。

(17) — Et même je vous **demandera**i un autre verre de vin.

そうね、思いきってもう一ぱい葡萄酒をいだけようかしら.

(Marguerite Duras : 朝倉・富永・鈴木, 1972 : 45 より引用)

⑩ 予言：擬似客観性にに基づき伝達者として未来の事行を述べたもの。

(18) Travail : Vous **trouverez** plaisir à faire des efforts qui vous **débarrasseront** de petits soucis quotidiens au travail, aujourd'hui.

(www.mon-horoscope-du-jour.com/)

仕事：今日は、仕事面では、努力をすれば、日頃のささいな心配事を解消することができるでしょう。

以上で見たように、用法研究では過去の叙述の中で未来の事行を描写する際に用いる単純未来形を FH だと定義し、用法というカテゴリー内の一つとして区分している。しかしながら、単純未来形と同じ性質を保持しながら過去の叙述で使用されているものを FH と呼ぶ、と定義することには疑問が残る。Martin (1983) も以下のように Imbs の 1961 年の著作を引用し、FH と単純未来形の関係性を述べている。

[...] Le présent historique, substitut du passé simple, ne fonctionne pas strictement comme un présent ordinaire : *Il attend dix minutes, puis...* illustre un emploi dont le présent

effectif n'est pas capable en dehors de l'effet itératif. Il est ainsi vraisemblable que le « futur des historiens » n'a pas non plus les propriétés exactes du futur.

(Imbs, 1961 : 46, Martin, 1983 : 131 より引用)

歴史的現在は、単純過去形に置き換えられるが、通常の現在形としては厳密には機能しない。：「彼は 10 分待っていた、それから…」は、反復効果以外には有効性がない現在形の用法を例示している。それに伴い「歴史的未來」もまた未來形の的確な特性を有していないのは確かである。

未來形の正確な特性を保持していないのならば、FH を単純未來形の用法の一つと区分することにも違和感が生じる。次節では FH に絞りさまざまな先行研究を見ていく。

1.3. 歴史的未來用法に関する伝統的な概念

単純未來形は、発話時より後のまだ実現されていない事柄に言及する場合に用いられるものであるとするのが伝統的な考え方であるが、過去の既に起こった事柄を述べる際、単純過去形、複合過去形、半過去形といった過去時制、歴史的現在と呼ばれる語りの現在のほかに、迂言的未來形、単純未來形も使用されることがある。前述したようにその場合に用いられる単純未來形は、FH と呼ばれるものである。

朝倉 (2002) では FH に関して、1.2 節で見たように、単純未來形の時間的用法の中の一つに過去を基点とした未來の用法があるとしている。「過去未來は一般に *futur dans le passé* で表わされるが、過去の叙述の途中で筆者が観点を過去に移し、未來の出来事を単未 [= 単純未來形, 筆者註] で表すことがある。」(ibid. : 227), また、「単未 [= 単純未來形, 筆者註] は語り手が事実として確認していることを述べるもので、単に予想された事実を述べる条・現 [条件法現在, 筆者註] とは異なる。」(ibid. : 227-228) と説明している。

しかしながら、これではどのようなジャンルにおける過去の叙述において FH が用いられるのか、過去に関する叙述のなかでもどのような場合に未來の出来事を FH で表すことがあるのかなどの問題が全く示されていない。

フランス語辞書として最も定評のある *Grand Larousse de la langue française* (1986) では、FH は以下のように記述されている。

Il arrive que le futur prenne appui non sur le point présent, mais sur un point passé : c'est le **futur historique** ; en ce cas, il s'agit d'une action passée. Cet emploi est conforme aux lois de la concordance dans un contexte au « présent de narration » (exprimant un fait passé en transportant le lecteur au moment où il s'est produit) : [...]

(ibid. : 2117)

未来は現在の時点ではなく、過去の時点に立脚することもある。これが歴史的未來である。この場合には、過去の行為が問題となる。この用法は、「語りの現在」のコンテキストにおける一致法則に合わせられる（過去の事実をそれが起こった時点に読み手を移動させながら表す。）

そして、次のような例を伝記から提示している。

- (19) Il s'en fait même, par l'imagination et la littérature, une idée tellement embellie que la réalité le **décevra**. (J. Bainville, *Napoléon* :

Grand Larousse de la langue française : 2117 より引用)

想像と文学性によって、現実には彼を失望させるものであるという、かくも美化された考えを彼は作りなした。

ここでもなぜ過去記述のテキストにおいて単純未来形が用いられるのかについては示されていないが、語りのジャンルにおいて、過去に立脚し過去の行為を表すときにFHが用いられると述べており、過去に関する叙述時に視点を移動させた際に用いるという点で朝倉の主張と共通している。1.2節で見た単純未来形の定義は、単純未来形は発話時より後に事行を位置づける場合に用いられるというものであったが、FHに関しては、過去叙述において、立脚点としての過去の出来事より後に事行を位置づける場合に用いられると述べ得る。

以下では各先行研究で示されている FH の定義を見ていくことにしよう。

1.3.1. WARTBURG, Walter Von et Paul, ZUMTHOR (1958)

La langue littéraire emploie parfois dans le récit un futur indiquant qu'une action a été postérieure à une autre dans le passé. (Wartburg et Zumthor, 1958 : 210)

書き言葉では、語りにおいて時として未来形を用いる。それはその行為が過去の別の行為より後のものであることを示すためである。

Wartburg et Zumthor は、次のような例を提示している。

(20) Le mariage eut lieu 1844. Eugénie **attendra** encore neuf ans. (id.)

結婚式は 1844 年に行われた。ウジェニーは、なお 9 年待つこととなる。

ここでも、過去の叙述においてある出来事とその前の出来事よりも後であることを示す場合に FH が用いられるとしている。しかし *parfois* (時として) とは、どのような場合のことを指すのかについては触れられていない。

1.3.2. IMBS, Paul (1960)

Ce futur marque un fait entièrement passé au moment où l'historien écrit ; mais il est futur par rapport au fait précédemment évoqué. Il représente un *bond par dessus les événements*, il opère une *rupture* dans le déroulement du récit, et cela est en effet conforme à son aptitude à évoquer une période autonome et indépendante du contexte [...]

(Imbs, 1960 : 46)

この未来形は、歴史家が執筆したときにはすっかり過去の事行を

示す；しかし先に言及された事行に対しては未来である。この未来形は、出来事の上での跳躍を表し、語りの展開において断絶をもたらす。そしてコンテキストから自立していて独立している期間を連想させる性質に事実上は一致する。

Imbs は伝記物語に現れる次の例を提示している。

- (21) Alors, même pour présider le Conseil d'Etat, [Napoléon] revêt l'uniforme, qu'il affectait naguère de ne pas porter quand il ne fallait pas qu'on criât à la dictature du sabre. Mais cet uniforme sera toujours sobre, sévère, avec quelque chose de dédaigneux et de menaçant pour les hommes à panaches et à dorures. (Bainville : Imbs, 1960 : 47 より引用)
- 国務院の議長を務めるときも、[ナポレオン] は制服を着ている。かつては、軍事独裁を糾弾されてはならないときには、制服を着ないふりをしていた。しかしその制服はいつも地味で、峻厳で、派手なひとたちにとっては脅迫的な何かがあることとなる。

FH は、歴史家が書いたときにすでに完全に過去である事行だが、その FH が用いられている事行よりも前の事行に対しては未来であるので用いられるとしている。FH はコンテキストから自立している時点を想起させるという性質があり、したがって語りの流れにおいて FH が使用されると断絶・飛躍をもたらすとしている。

1.3.3. WAGNER, Robert Léon et Jacqueline, PINCHON (1962)

Par ce tour, le narrateur crée un décalage expressif dans un récit dont les verbes sont à un temps du passé ou au présent historique. Fort de ses connaissances il évoque au moyen du futur des faits qui sont passés par rapport à lui, mais qui étaient à venir par rapport au moment où se situe l'histoire racontée :
[...]

(Wagner et Pinchon, 1962 : 349)

ここでは、語り手は、動詞が過去時制か歴史的現在である語りにおいて、表現的なずれを作り出す。自身の知識に支えられ、語り手は、自分にとっては過去であるが、物語られた歴史が位置づけられる時点と関連し未来であった事行に対して、未来形を用いて言及する。

これに対して、Wagner et Pinchon は歴史書の中から次の例を提示している。

(22) Jadis Orgon disait, instruit par Tartufe :

Et je verrais périr parents, enfants et femme

Que je m'en soucierais autant que de cela.

La vertu moderne et la piété anglaise pensent autrement ; il ne faut pas mépriser ce monde en vue de l'autre ; il faut l'améliorer en vue de l'autre. Tartufe **parlera** de sa haine et de sa discipline ; Pecksniff de son confortable petit parloir, du charme de l'intimité, des beautés de la nature. Il **essayera** de mettre la concorde entre les hommes. Il **aura** l'air d'un membre de la société de la paix. (H. Taine : Wagner et Pinchon, 1962 : 349 より引用)

かつて、オルゴンは、タルチュフに教えられて言っていた。

「わたしは両親、子どもたち、妻が死ぬのを見ることとなるだろう

それ以上にわたしは何を心配するだろうか」

現代の美德と、イギリスの信心はちがった考え方をする。他の世界を見据えて、この世界を軽んじてはならない。他の世界を見据えて、この世界をよくしなければならぬ。タルチュフは彼の毛衣（修行のときに身につけるもの）と修行を語ることになる。ペクスニフは、快適で小さな面会室、自然の魅力と、親密さ美しさを語ることになる。彼は人々の間の調和をもたらさそうとすることになる。彼は平和の社会の一員のようになる。

ここでは、語り手の知識に基づいて、語り手にとって過去だが語られる歴史が位置する時点に対しては未来である事実を、未来形を用いて言及するとしている。ここで重要なのは知識に基づくという点であるが、ここから歴史的叙述における単純未来形は、書

き手の現在時の知識に基づいて回顧的な (rétrospectif) 見方をするのではなく、前望的な (prospectif) 見方で叙述していることを示していると思われる。

1.3.4. GREVISSE, Maurice (1975)

Parfois, surtout dans les exposés historiques, la pensée du narrateur se transporte à tel moment du passé et en fait fictivement le moment présent ; par rapport à ce présent fictif, tel ou tel événement du passé réel s'exprime alors par le futur simple (futur historique) : [...] (Grevisse, 1975 : 731)

時には、特に歴史的論述において、語り手の考えが、実際は虚構的現在時である過去のある時点に運ばれていく；その場合この虚構の現在に対して実際の過去のしかじかの出来事が単純未来形（歴史的未來）によって表される。

Grevisse は次の例を、19 世紀に文学・政治サロンの花だったレカミエ夫人に関する文献より提示している。

(23) L'ancien maître de chapelle retourna souvent aux assemblées de Mme Récamier. Il y **VERRA** un soir le général Moreau...

(É. Herriot, *Mme Récamier et ses amis* : 71,

Grevisse, 1975 : 731 より引用)

礼拝堂の元館長は、レカミエ夫人が開く会合によく訪れた。ある夜、彼はそこで、モロー将軍に会うことになる。

歴史的な出来事に関する記述では、語り手の思考は過去のある時点に移行する。そのある時点は虚構の現在時と見なされるのだが、FH はそこで実際に起こった過去の出来事を表すのに用いられている、と Grevisse は述べている。つまり、過去のある時点は虚構ではあるが現在時と捉えられ、その現在時が語りの基準となるので、過去の記述でも単純未来形を用いることができるということである。

1.3.5. BARCELÓ, Gérard Joan et Jacques, BRES (2006)

[...] ces événements actualisés au futur sont antérieurs au moment de la parole, et donc appartiennent à l'époque passée.

(Barceló et Bres, 2006 : 110)

未来に現働化されるこれら [現在形と単純過去形に準拠する単純未来形, 筆者註] の出来事は, 発話時より前であり, つまり過去の時に属している.

[...] : le locuteur transporte fictivement le moment du passé dans le *nunc*, d'où il peut considérer l'événement comme futur.

(ibid. : 111)

語り手は現在に過去のときを虚構的に導いており, その現在では出来事を未来とみなすことができるのである.

Barceló et Bres は次のような例を提示している. (24) は歴史的現在が基調に, (25) は単純過去形が基調となっている.

- (24) Les rumeurs fraient avec les manipulations. Celles-ci conduisent, dès juin 1990, sur la piste des « bacchanales » : on apprend que le cimetière sert régulièrement de rencontre nocturne à des jeunes gens de bonne famille. Quarante jeunes sont interpellés. Tous ***seront*** finalement ***relâchés***.

(*Le Monde*, août 1996, Barceló et Bres, 2006 : 110 より引用)

噂は操作と親和性がある. 操作は, 1990年6月から, ひとを「馬鹿騒ぎ」の場へと導いた. 墓地は, 両家の子女たちにとって, 夜の出会いの場としていつも役立っていると知られている. 40人の若者が捕まった. 全員が結局は解放されることとなる.

- (25) Bob Tahri, parti comme un avion, ne put d'ailleurs soutenir le rythme de l'Éthiopien. « *Il est vraiment trop fort. C'était du sprint* », ***dira*** le Français.

Même les Kényans ont dû très vite poser le coude à la fenêtre.

(*L'Equipe*, 21 mars 2004, Barceló et Bres, 2006 : 110 より引用)

ボブ・タハリは、飛行機のようにスタートし、エチオピア人のペースとは比べようがなかった。「彼は本当に強すぎる。短距離レースのようだった」とフランス人は言うことになる。ケニア人たちでさえ、すぐに窓に肘をつくほどだった。

この論によると、語り手は、虚構的な現在の時間性を構成し、FHはその過去に付随する事象を示すものとして提示されることとなる。虚構的に過去の出来事が起きた時点を現在とみなすことにより FH の使用への道を開いている。

1.4. まとめ

以上、本章では先行研究より単純未来形の用法分類と FH はそのうちの一つであるという伝統的な定義を確認した。さらに FH に関するこれまでの先行研究では、歴史的叙述において、ある事行よりも後の事行であることを示すときに FH が用いられるという点では意見が一致しているようである。そして、虚構的な時間性を構成し、その中の現在に対する未来として FH が用いられるという概ね一致した説明が加えられるようになった。しかしながら、このように歴史的叙述において単純未来形が使用可能となる範囲については触れているが、時間軸に沿って時が進んでいく歴史的叙述において、どのような記述方法が用いられ、どのような効果があるのかについてはどの先行研究も詳しく取り組んでいない。したがって、本論文ではこれらを詳細な実例分析を通して解き明かしていくことを目的とする。

第2章 分析対象（コーパス）について

2.1. 分析の対象と方法

ここでは、本論文のテーマである歴史的な記述における単純未来形の働きと効果の研究に取り掛かる前に、分析対象（コーパス）として使用するテキストの特徴について論じておく。その理由は、ジャンルやスタイルを重要とする本研究ではコーパスがどのような特徴を持っているかという事象の提示は欠かせない要素の一つだからである。以降本論文では曖昧さを避けるため、FHは単純未来形の中の一用法とされる歴史的未來のみを、FSはFHを含まない単純未来形を指し、FSとFHの両方を示す場合には単純未来形と表記し、明確に使い分けることとする。

コーパスの収集方法に関して、説明しておく。まず、本論文において使用しているコーパスは、以下のとおりである。

- ・ 歴史テキスト：*La Proclamation de la Commune* (『パリ・コミューン』)
Jeanne d'Arc (『ジャンヌ・ダルクの実像』)
- ・ 訃報 (nécrologie)：*Libération* 紙 (『日刊リベラシオン紙』)
- ・ 文学テキスト：*Le Petit Prince* (『星の王子さま』)
Miss Marple au Club du Mardi (『火曜クラブ』)
Terre des hommes (『人間の土地』)

本論文のコーパスデータは、文学テキストである *Miss Marple au Club du Mardi* 以外、本論筆者が手作業で収集し、データ化を行った。収集する際には、まず未来を表す表現として生起している単純未来形、迂言的未來形 (va + infinitif 型と allait + infinitif 型)、条件法 (時制的用法) を各テキストから抽出し、次にそのすべてを歴史的用法、つまり書き手の現在時から見た未来を表さず、過去に既に実現した「事実」を叙述する方法として用いられているかを基準として歴史的用法を示すもの、示さないものとして

ひとつひとつ文脈とともに確認して分類しデータとしてまとめた。そして生起数、出現傾向などをグラフ化した。*Miss Marple au Club du Mardi* に関しては、後の 2.4.5.2 で提示しているように、複数言語によるパラレルコーパスとしてすでに他の研究者によりデータが作成されていたもののフランス語版を使用し、同じ手順を踏み抽出と分類を行った。

本章では、以下の手順に従って論述していく。2.2 節で歴史テキストが持つ言語学的問題の概略に言及するとともに、コーパスとして用いる歴史テキストの概要と背景について見ていく。また、コーパスをグラフ化し、分析の基盤となる各章ごとの FS, FH の生起数と傾向を提示する。これは、「歴史＝物語」レベルのテキスト内で生起する単純未来形として、FS と FH の使用頻度の例示に関してはこれまでの先行研究ではまったくなされていないため、単純未来形の一用法ではあるがこれまで注目されてこなかった FH は FS と比較して実際に多く用いられる傾向があるのか確認するためである。また、テキスト内における出現傾向の特徴が存在するのかを観察するためにも重要な手順である。2.3 節では訃報 (nécrologie) に関して、2.4 節では文学テキストに関して同様の検討をし、2.5 節でまとめとする。

2.2. 歴史テキスト

2.2.1. 歴史テキストのもつ問題性

文法的側面に関する問題を考えた場合、一般的に歴史テキストにおいてはいかなる時制によって語るかという問題が確固として存在している。さらに過去時制を基調としているのか、それとも現在時制を基調としているのか、過去時制ならば単純過去形なのか複合過去形なのかによって叙述特性が異なってくる。この問題は文脈を考慮しない文レベルでの用法分析に関わっているだけでなく、パラグラフやテキスト全体に対する書き手の考えといった文体論的側面からも分析が可能である。そこにはジャンルやスタイルといった問題も絡んでくる。つまり、選択された時制によって歴史的事実を記述する視点が大きく異なってくる。たとえば、当然のことではあるが、過去時制のみでの記述と、歴史的現在や FH を用いた論述では、出来事に対する様相に相違が見られる。本論文では従来の複数の文献からの短文抜粋を用いた文法研究ではなく、複数のテキスト全体を

観察することによってジャンルという問題も含めた文体論的問題に関しても明らかにし、考察していきたい。なぜならこの観点からの考察はこれまで活発になされていないため、比較的多く研究されてきた文レベルでの研究では分からなかったことが明らかになる可能性を秘めており、複雑なテキスト研究をさらに進めるうえでの一つの新たな方法提示になるのではと考えられるからである。

2.2.2. *La Proclamation de la Commune* の概要

*La Proclamation de la Commune*⁹ はフランス人のマルクス主義社会学者であり哲学者でもある、LEFEBVRE, Henri. (1901-1991) によって書かれた歴史テキストであり、普仏戦争 (La guerre franco-allemande de 1870, 1870-1871) の混乱の中で 1871 年に起きたパリ・コミューン (Commune de Paris) に関して 1965 年に分析・検討したものである。したがって、このテキストはパリ・コミューン発生当時に書かれたものではなく、約 100 年後に歴史的事実について記述したものであるという点を留意しておきたい。

パリ・コミューンという事件に関して一言触れておく。1870 年 9 月セダンの戦いでナポレオン 3 世はビスマルク率いるプロイセン軍に降伏し、その後パリはプロイセン軍に包囲される。1871 年 3 月に首相であるティエールがヴェルサイユに逃亡し、それに伴いプロレタリアを中心とした世界史上初めての共同体政府が確立される、それをパリ・コミューンと言う。

2.2.3. *Jeanne d'Arc* の概要

*Jeanne d'Arc*¹⁰ はフランス人の歴史家であり公文書館上級保管員でもある、PERNOUD, Régine. (1909-1998) によって執筆された歴史テキストであり、彼女は 1997 年にはアカデミー・フランセーズよりフランスの歴史分野に関する賞であるゴベ

⁹ 本論文では、LEFEBVRE, H. (1965) を資料として用い、和訳はアンリ・ルフェーブル (著)・河野健二 [ほか] (訳) (2011) を参考とする。

¹⁰ 本論文では、PERNOUD, R. (1981) を資料として用い、和訳はレジーヌ・ペルヌー (著)・高山一彦 (訳) (1997) を参考とする。

ール大賞を授与された人物である。中世の歴史や特にジャンヌ・ダルク (1412 頃-1431) の研究者としてよく知られており、市立ジャンヌ・ダルク研究センターを設立し初代所長を務め史料の収集に努めた。*Jeanne d'Arc* では裁判記録を中心とする史料を根拠とし客観的な歴史分析を行っている。ジャンヌ・ダルクは「オルレアン乙女」とも呼ばれ英雄視され、死後はカトリック教会の聖人として認定された実在した歴史的人物である。第一章から第十章にかけて一貫してジャンヌの生涯が時系列に沿って描かれており、史料にない死後ささやかれた根拠に乏しい噂や美化などは書かれていない、歴史的事実のみを記述した歴史書である。

2.2.4. 歴史テキストにおける単純未来形の出現傾向

様々な歴史的記述のテキストのなかでも、Lefebvre の *La Proclamation de la Commune*¹¹ では単純未来形の生起が 581 例、そのうち書き手の発言や意見を含まない、純粋に歴史的事実を描写するために用いられている FH の数は 274 例と、非常に多くの単純未来形が用いられており、また、*Jeanne d'Arc* ではテキスト内すべての単純未来形 182 例のうち FH の生起が 130 例であり、約 71%とまれに見るくらいの多くの FH が確認できる。この比率の多さによりコーパスとして十分に機能すると思われる、またこの生起数の量からこれらのテキストにおいて FH の働きの重要性が確認できると考える。過去の実際の出来事を描写する歴史的記述テキストにおける未来形のこの数は、決して軽視できるものではないだろう。このように多くの FH が用いられているテキストはあまり見られず、その点で多くの分析例を有する *La Proclamation de la Commune* と *Jeanne d'Arc* は我々に何らかの手掛かりを与えてくれる可能性が高いと思われる。

La Proclamation de la Commune に関して一言述べておく。テキスト内のすべての FH を分析すべきであるところだが、本論文では範囲を絞って研究していくこととする。なぜなら、7 部構成のこのテキストにおいて第 1 部、第 2 部、第 3 部はパリ・コミュニ

¹¹ Appendices や Table chronique など本文以外は研究対象から除外するため含まない。また、他の作者による歴史書からの大幅な引用が何度もなされているが、本論文ではあくまで Lefebvre による *La Proclamation de la Commune* をコーパスとして分析しているため、以降すべての章において新聞・宣言などからの引用と同様の扱いとし、どの動詞時制も historique とはみなさないこととする。

ンの背景やそれに対する書き手の考察が多く、第7部の第3章、第4章、第5章はパリ・コミューンの結果に対する書き手の考えが示されており、単純未来形自体はこれらの範囲にも数多く確認されるが、歴史的記述における単純未来形の分析対象としては不適當である。したがって、本論文では書き手の考えが少なく、パリ・コミューンという出来事自体を詳細に追っていく第4部、第5部、第6部と第7部の第1章、第2章を研究対象とし、FHの使われ方、既に決定された歴史的事実に対して未来形を用いて描写することによる文体的効果について分析していくこととする。

以下で表している図・表は、各コーパス全体を統計表としてまとめ、章・話ごとにおけるFSとFHの使用率を示したものである。FHは単純未来形の用法の一つと分類されるため、表ではすべてのFSとFHの合計数、つまり単純未来形の生起総数も示し、それからその中に含まれるFHの割合をパーセンテージで示している。

2.2.4.1. *La Proclamation de la Commune* の統計図・表

まず、*La Proclamation de la Commune* における生起数値を可視化した結果を見ていこう。

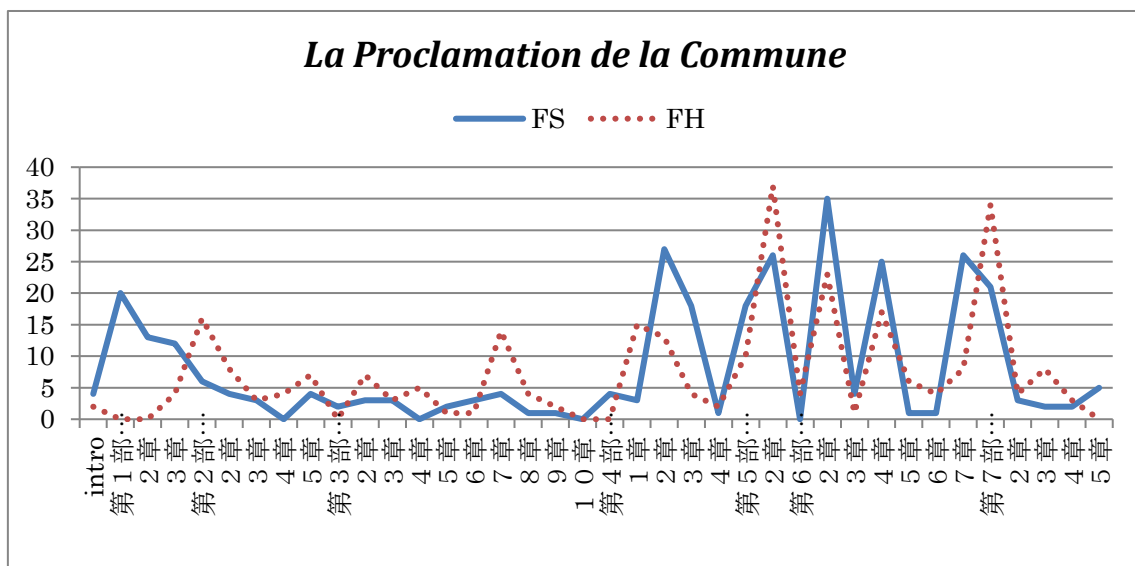


図 2-1: *La Proclamation de la Commune* における FS・FH の出現傾向

表 2-1 : *La Proclamation de la Commune* における FS・FH の生起数

章	Intro	第 1 部			第 2 部				
		1	2	3	1	2	3	4	5
ページ	9-11	15-26	27-42	43-68	69-88	89-96	97-101	102-106	107-118
FS+FH	6	20	13	16	22	12	6	4	11
FS	4	20	13	12	6	4	3	0	4
FH	2	0	0	4	16	8	3	4	7
%	33	0	0	25	73	67	50	100	64

章	第 3 部							
	1	2	3	4	5	6	7	8
ページ	119-121	122-130	131-134	135-140	141-148	149-154	155-160	161-163
FS+FH	2	10	6	5	3	4	18	5
FS	2	3	3	0	2	3	4	1
FH	0	7	3	5	1	1	14	4
%	0	70	50	100	33	25	78	80

章	第 3 部		第 4 部				
	9	10	0	1	2	3	4
ページ	164-168	169-170	171-172	173-182	183-205	206-210	211-218
FS+FH	3	0	4	18	40	22	3
FS	1	0	4	3	27	18	1
FH	2	0	0	15	13	4	2
%	67	0	0	83	33	18	67

章	第 5 部		第 6 部				
	1	2	1	2	3	4	5
ページ	219-232	233-288	289-291	292-317	318-324	325-339	340-342
FS+FH	28	63	4	58	5	42	7
FS	18	26	0	35	4	25	1
FH	10	37	4	23	1	17	6
%	36	59	100	40	20	40	86

表 2-1 (つづき)

章	第 6 部		第 7 部					合計
	6	7	1	2	3	4	5	
ページ	343-351	352-364	367-388	389-398	399-403	404-406	407-410	
FS+FH	5	34	55	7	10	5	5	581
FS	1	26	21	3	2	2	5	307
FH	4	8	34	4	8	3	0	274
%	80	24	62	57	80	60	0	

(※パーセンテージの小数点以下は四捨五入する.)

図表 2-1 を見ると、*La Proclamation de la Commune* では、分析対象の第 4 部から FS・FH の生起が増加している。これにより、「歴史＝物語」レベルでの未来形には単純未来形は通常用いられないとされる従来の研究に反する結果が観察された。特に注目すべきは、テキストのラスト第 6 部後半から第 7 部において FH の生起が FS を大きく上回っている章が多い点であろう。

2.2.4.2. *Jeanne d'Arc* の統計図・表

次に、*Jeanne d'Arc* における統計結果を見ていく。

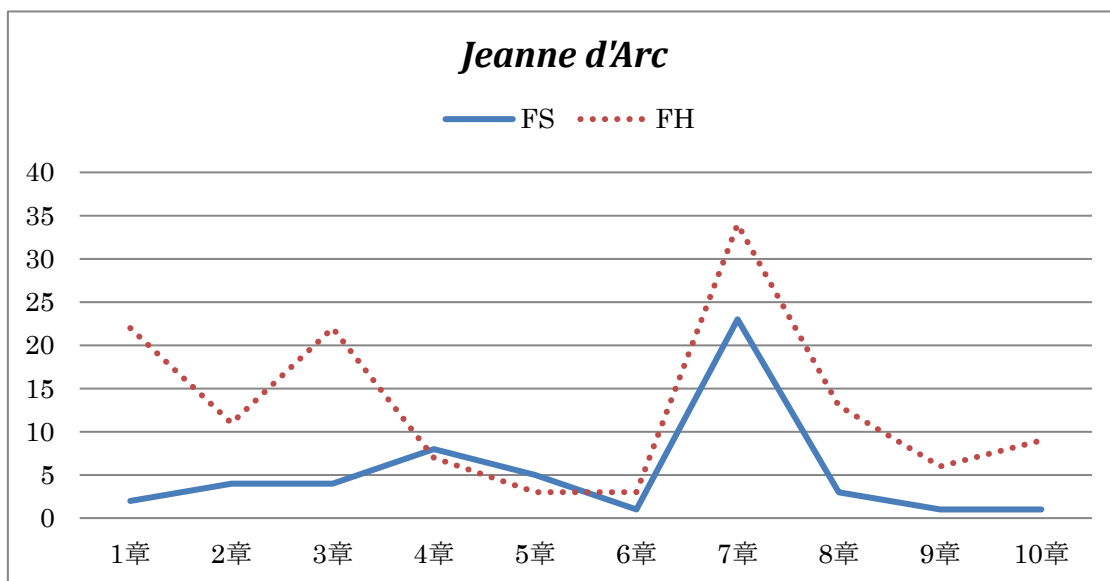


図 2-2 : *Jeanne d'Arc* における FS・FH の出現傾向

表 2-2 : *Jeanne d'Arc* における FS・FH の生起数

章	1	2	3	4	5
ページ	3-13	14-27	28-45	46-55	56-62
FS+FH	24	15	26	15	8
FS	2	4	4	8	5
FH	22	11	22	7	3
%	92	73	85	47	38

章	6	7	8	9	10	合計
ページ	63-70	71-99	100-108	109-121	122-125	
FS+FH	4	57	16	7	10	182
FS	1	23	3	1	1	52
FH	3	34	13	6	9	130
%	75	60	81	86	90	

(※パーセンテージの小数点以下は四捨五入する.)

図表 2-2 を見ると、*Jeanne d'Arc* では、テキスト全体において FS よりも語りの中の未来形として FH が主に用いられていることが明白である。本コーパスにおいても、FH の生起が非常に多い箇所がテキスト後半に確認された。前節と本節の数値化の結果から、FH のテキスト内における何らかの機能や効果の存在を暗示していると考えられる。

2.3. 訃報 (nécrologie)

2.3.1. 訃報のもつ問題性

新聞における訃報は直近の該当人物の死亡事実や過去の経歴に関して語る記事であるため、歴史テキストの問題性同様、過去時制のみで語ることも理論的には可能であり、歴史的現在や FH が用いられている場合には、パラグラフやテキスト全体に対して意図的にそのアプローチが選択されていると考えられる。直近の死という事実を鑑みると、読み手にとって歴史テキストの人物より身近な人物の死であるため、すでに終わった過去を感じさせる過去時制の使用よりも、同時代に生きた該当人物に対する読者の心理的距離が近い感覚で経歴を追っていくことができると思われる歴史的現在、ひいては FH

を用いる傾向が多いのではと推測される。この観点もまた文レベルでは考察できないため、パラグラフも含めたテキスト全体を文体論的側面から観察する必要がある。したがって、訃報というジャンルではどのようなスタイルが適用される傾向があるのか、その効果もまた明らかにしていく。

2.3.2. *Libération* 紙掲載の訃報について

Libération はフランス人の哲学者、小説家、劇作家である SARTRE, Jean-Paul Charles Aymard. (1905-1980) と他数人のフランス人ジャーナリストたちによって 1973 年に設立された大手日刊紙の一つであり、政治、文化、社会、経済など様々なトピックを扱っている。その中の一つに « Disparition » という欄があり、多岐にわたる分野における、直近に亡くなった著名人の死亡情報、経歴や業績などを大部分は数ページでまとめている。したがって、すべての記事は該当人物の過去を振り返って書かれている。

本論文では、*Libération* の web サイト¹² 上の Disparition 記事は膨大なため、そのなかでも 2019 年 1 月 1 日から 2019 年 9 月 30 日までの、タイトルの上に Disparition と記載されている記事に絞って分析対象とした¹³。全部で 46 記事あり、これは訃報における動詞時制の基本的な傾向や特徴などを明らかにするためのコーパスとして十分な量だと判断したためである。

ここで、訃報の記事構成に関しても触れておく。*Le Monde* の訃報記事をコーパスとした宮脇 (2020 : 59) によると、訃報の構成は以下のとおりである。

¹² <https://www.liberation.fr/>

¹³ 2021 年 4 月 12 日最終閲覧。

(訃報記事の構成)

- ①見出し
- ②リード文
- ③死亡時の状況や死因について書かれた詳報 (以下, 詳報)
(・哀悼)
- ④経歴・業績
(⑤晩年の出来事)

⑤晩年の出来事と「哀悼」は記事によっては書かれていないこともある。また「哀悼」は①と②を除くその他の構成部の後に現れることもある、と述べている。これに基づいて *Libération* の訃報構成を観察していくと、*Le Monde* の ③「詳報」に相当する部分がない。これは *Le Monde* の訃報記事は第 1 報 (速報) を兼ねているのに対し、*Libération* では翌日以降に一層詳細な追悼記事として書かれている場合が多いからである。

(*Libération* の訃報記事の構成)

- ①見出し (タイトル)
- ②リード文
- ③印象的な出来事
- ④経歴・業績
(⑤哀悼)
- (⑥晩年の出来事) ⑤・⑥は順不同またはなし

Libération では、③に相当する箇所では、故人の人生のなかでも印象的な出来事を取り扱っている。また、⑤哀悼、⑥晩年の出来事は書かれていないこともある。これにより、新聞社によって細かな構成は異なってくるが、大まかな枠組みはほぼ同じであることは明らかになった。もちろんすべての記事が上記の構成どおりであるわけではないが、本論文における訃報記事では、これを基本的構成として扱い分析していく。

この構成における未来形の出現傾向に関して少し触れると、全 46 記事のコーパス中では①見出し(タイトル)に未来形は全く使用されていない。また、②リード文でも FH の生起が 1 記事に見られ、前未来形が 2 記事に見られるのみであり、他の未来形も全く用いられていない。さらに、迂言的未来形が生起する記事では、ほぼすべての記事において他の未来形の使用も観察され、迂言的未来形だけが使用される記事は 2 つのみしか確認できなかった。そして大きな特徴としては、全 46 記事中 FH を用いている記事は約 7 割に及ぶことであろう。単純未来形の詳しい内訳は次の節で提示する。

2.3.3. 訃報における単純未来形の出現傾向

同じく「歴史＝物語」に分類されるが歴史テキストとは異なるジャンルである訃報 (*Libération* 紙) における、生起数値と傾向を見てみよう。下記の図 2-4 のみ、本論文の他のコーパスと異なり棒グラフを使用している。訃報は章がなくページ数も様々であるため、記事ごとに生起数値がわかる棒グラフを用いることとし、表 2-4 では各記事の単語数を提示している。

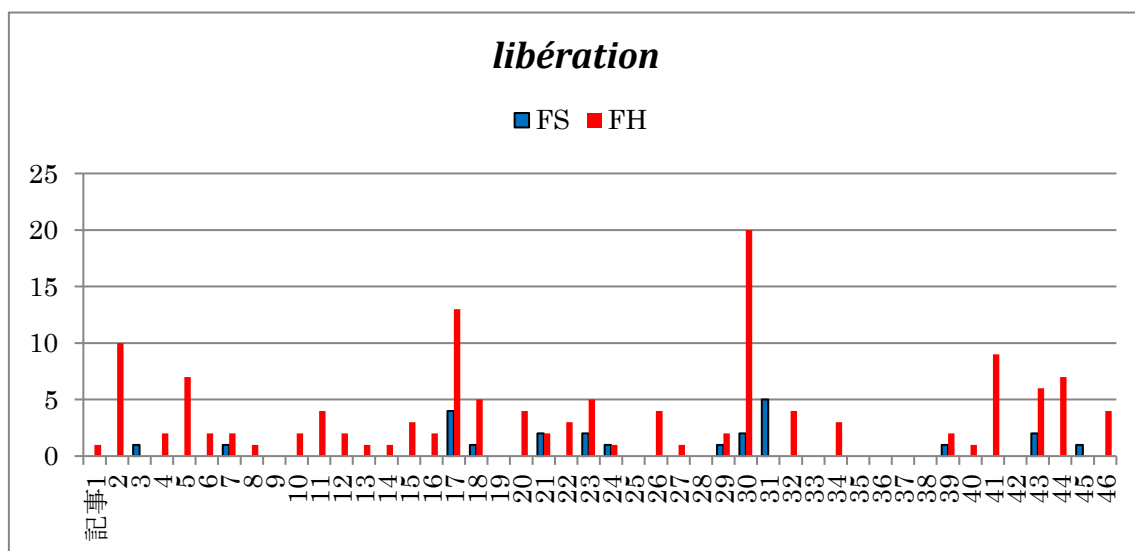


図 2-4: 訃報 (*Libération* 紙) における FS・FH の出現傾向

表 2-4： 訃報 (*Libération* 紙) における FS・FH の生起数

記事	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
単語数	326	711	1023	985	989	1621	690	235	749	543
FS+FH	1	10	1	2	7	2	3	1	0	2
FS	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
FH	1	10	0	2	7	2	2	1	0	2
%	100	100	0	100	100	100	67	100	0	100

記事	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
単語数	1102	704	744	580	932	421	1797	771	443	958
FS+FH	4	2	1	1	3	2	17	6	0	4
FS	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0
FH	4	2	1	1	3	2	13	5	0	4
%	100	100	100	100	100	100	76	83	0	100

記事	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
単語数	643	589	1899	359	317	635	606	641	1422	2528
FS+FH	4	3	7	2	0	4	1	0	3	22
FS	2	0	2	1	0	0	0	0	1	2
FH	2	3	5	1	0	4	1	0	2	20
%	50	100	71	50	0	100	100	0	67	91

記事	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
単語数	702	1006	430	622	564	445	385	401	523	545
FS+FH	5	4	0	3	0	0	0	0	3	1
FS	5	0	0	0	0	0	0	0	1	0
FH	0	4	0	3	0	0	0	0	2	1
%	0	100	0	100	0	0	0	0	67	100

記事	41	42	43	44	45	46	合計
単語数	971	421	1441	2960	210	1152	
FS+FH	9	0	8	7	1	4	160
FS	0	0	2	0	1	0	24
FH	9	0	6	7	0	4	136
%	100	0	75	100	0	100	85

(※パーセンテージの小数点以下は四捨五入する.)

図表 2-4 より、新聞記事の訃報では単純未来形の使用自体が多いとは言えないものの、ここでも FH の使用頻度が際立っていることは明らかである。図表では確認できないが、本論文の他のコーパスと異なり、テキストの後半の山場に FH が多く用いられるなどのテキスト的特徴は見られなかった。これは、先に述べたとおり新聞記事である訃報は書籍ではないためページ数が少なく、故人の主要な経歴と背景をピックアップして記事にしているため、物語的展開のような山場などはないためであると推測される。

2.4. 文学テキスト

2.4.1. 文学テキストのもつ問題性

文法的側面に関する問題を考えた場合、物語にも時制の問題が数多く存在している。たとえば、第 7 章で扱う *Le Petit Prince* では過去時制において単純過去形と複合過去形の混在が確認できる¹⁴。物語におけるこのような問題は文法的な側面から考察できるだけでなく、歴史テキスト同様に、文やパラグラフ、ひいては物語全体に対する作者の意図や思考といった文体論的側面から分析することも可能である。文学作品では、主にフィクションという内容であるため、内に隠された作者の意図や物語のねらいに迫っていくことは重要なものの一つであると考えられる。本論文で扱う文学コーパスは子ども向けの児童文学形式の物語、入れ子形式の短編推理小説、章と章の間につながりのない自伝的小説といった全く異なるジャンル・構成ではあるが、それゆえ作品内の文法的役割の分析に焦点を当てつつも、作者の文体論的な問題に関しても考察していきたい。なぜならこの観点からの考察は、歴史テキストと文学研究といった、同じく執筆された語りという共通点はあるが、それぞれのジャンル固有の特徴があるというテキスト研究を進めるための第一歩ともなると考えるからである。そのはじめとして、単純未来形を観察し同異点を明らかにしていくことは、言語学的に新たな重要な側面が見出せると思われる。

¹⁴ 横井（2009：61-67）を参照のこと。

2.4.2. *Le Petit Prince* の概要

Le Petit Prince は、フランス人の飛行家であり作家でもある、SAINT-EXUPÉRY, Antoine de. (1900-1944) によって書かれた物語である。原文はフランス語だが、1943年当時ナチス・ドイツの占領下にあったフランスではなくアメリカで出版、その後、全世界で翻訳され、今も読み継がれている児童文学の名作の一つである。作者自身による可愛らしい挿絵と、主人公である《王子さま》が子供であることから児童文学と分類されているが、このジャンル分けを巡っては様々な意見がある。また、こうした問題の他にも *Le Petit Prince* の物語性や文体に関する多様な分析や見解がなされている。たとえば、この本の読者の対象年齢についても多くの意見がある¹⁵。作者がこの本を「少年だったころの (quand il était petit garçon)」レオン・ヴェルト (Léon Werth)¹⁶ に捧げるとまえがきに記していることから、一般的には児童文学として読者に提示されているという意見がある。しかしながら、大人であるレオン・ヴェルトに捧げていることから、子供のみならず大人の読者も対象にしているとも考えられる。さらには大人であるレオン・ヴェルトではなく、わざわざ「少年だったころの」と限定していることにより、子どもであったころの自分を、この本を手にした大人の読者に思い起こさせるという作者の意図がそこに隠れていると読み取ることも可能である。このように、この物語はその所属しているジャンルが何かという問題に関しても、読者の対象年齢に関しても、簡単に決定できないという特性をもっている。

2.4.3. *Miss Marple au Club du Mardi* の概要

*Miss Marple au Club du Mardi*¹⁷ はイギリス人の推理作家である、CHRISTIE, Agatha. (1890-1976) によって執筆された 13 編から成る短編推理小説集である。平凡

¹⁵ 片木 (2005 : 84-86) を参照のこと。

¹⁶ レオン・ヴェルトとは、サン＝テグジュペリの 22 歳年上の親友で、ユダヤ系のフランス人であり、ジャーナリストでもあった。祖国を離れ、安全なニューヨークに身を置いたサン＝テグジュペリとは異なり、フランスに残り、ナチスの手を逃れるために田舎に隠れ住んでいた。(ibid. : 140)

¹⁷ コーパスの作成に用いられた原典は、以下のとおりである。

- ・英語版 (原作) : CHRISTIE, Agatha. (2002).
- ・フランス語版 : CHRISTIE, Agatha. (2013).

な田舎村に住む老婦人であるミス・マーブルが、長年村で起こる出来事を観察した結果に裏付けられた知識に基づき様々な事件を解いていく、探偵役としての主人公である。このミス・マーブルを主人公とした推理小説はシリーズ化され、かの有名なシャーロック・ホームズやエルキュール・ポアロらと並ぶ有名な名探偵として名が挙げられるほど世界中で愛され翻訳されている作品である。*Miss Marple au Club du Mardi* は第 13 話以外、6 人の登場人物が各々自分しか結末を知らない事件を話し他の 5 人が推理していく形式であり、事件の語り（事件内人物の会話も含む）部分と登場人物のあいだでの会話部分の二重構造で構成されており、純粋な語りとしてのナレーション部分はほぼ現れない点、どの短編も 30 ページ以内に収められているため簡潔に展開が進む点、さらに原文は英語であるため、翻訳の際の FS の生起箇所は翻訳者によって意図的に行われている可能性があるという点を忘れないでおきたい。

2.4.4. *Terre des hommes* の概要

Terre des hommes は SAINT-EXUPÉRY, Antoine de. (1900-1944) によって執筆された自伝的小説であり、出版した 1939 年にフランスで最も権威のある文学賞のひとつであるアカデミー・フランセーズ小説大賞を受賞している、フランスで特に評価の高い作品である。飛行機による飛行がまだ命がけであった時代における郵便飛行士としての実体験を基に、時に脚色しながら描いているため、自伝と物語の中間的な位置づけとなっている。序文から第 8 章までの構成であるが、各章は異なったテーマに基づいて記述されている。同僚たちとの記憶の回顧や遭難という危機的状況に陥った体験などのエピソードを通して、作者の考え方や人生観を示す、哲学的な作品とも言い得るかもしれない。

アカデミー・フランセーズに関して一言述べておく。この国立学術団体はフランス語という言語を統一し、質の維持をする役割を担っておりフランス語辞書の編纂も行っている。このため、この団体から賞が贈られたことは、小説内における正確な言語使用に対しても高い評価を得ていることと同義であると考えられる。したがって、*Terre des hommes* をコーパスとしての使用することは非常に適切であると思われる。

2.4.5. 文学テキストにおける単純未来形の出現傾向

2.4.5.1. *Le Petit Prince* の統計図・表

まず，児童文学形式の物語小説 *Le Petit Prince* から見てみよう．

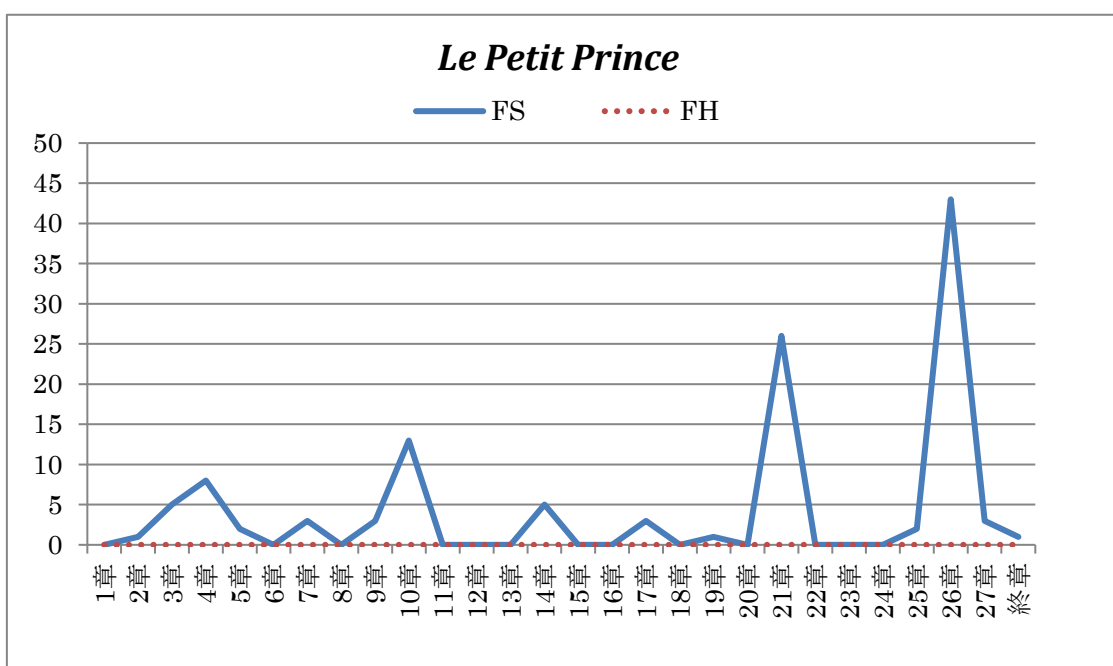


図 2-5 : *Le Petit Prince* における FS・FH の出現傾向

表 2-5 : *Le Petit Prince* における FS・FH の生起数

章	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ページ	13-15	15-19	19-22	22-25	25-29	30-31	31-34	34-37	38-40	40-45
FS	0	1	5	8	2	0	3	0	3	13
FH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

章	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ページ	46-48	48-49	49-53	53-57	57-61	62	63-66	66	67-68	68-70
FS	0	0	0	5	0	0	3	0	1	0
FH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 2-5 (つづき)

章	21	22	23	24	25	26	27	終章	合計
ページ	70-78	78-79	80	80-84	84-87	87-96	95-97	99	
FS	26	0	0	0	2	43	3	1	119
FH	0	0	0	0	0	0	0	0	0
%	0	0	0	0	0	0	0	0	

図表 2-5 を見ると、歴史テキスト同様「歴史＝物語」レベルに分類されるが、フィクションである物語テキストである *Le Petit Prince* では、FH の生起がまったく確認されない。しかしながら、テキストの後半にかけて FS の生起が増加するという傾向は共通している。したがって、数値化だけでは不十分で詳細な分析が必須ではあるが、FH と FS にはテキスト的機能の側面において何らかの類似点が存在する可能性があるという仮説が立てられるであろう。

2.4.5.2. *Miss Marple au Club du Mardi* の統計図・表

次に、入れ子形式の短編推理小説集 *Miss Marple au Club du Mardi* を見てみよう。このコーパスは、科学研究費助成基金 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (C) 課題番号 15K02482 「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」(研究代表者: 山村ひろみ) による共同研究の一環として作成された複数言語のパラレルコーパスのフランス語版である。その中で用いられている単純未来形の例をすべて観察し、FH の生起の有無も確認した。

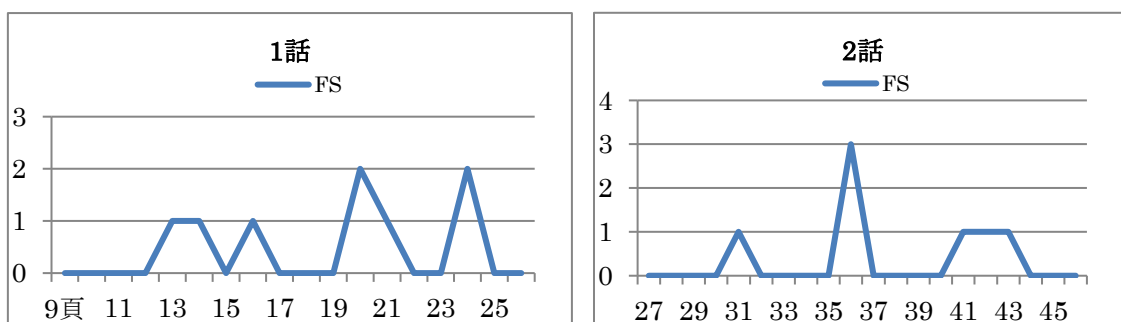


図 2-6-a : *Miss Marple au Club du Mardi* における FS・FH の出現傾向

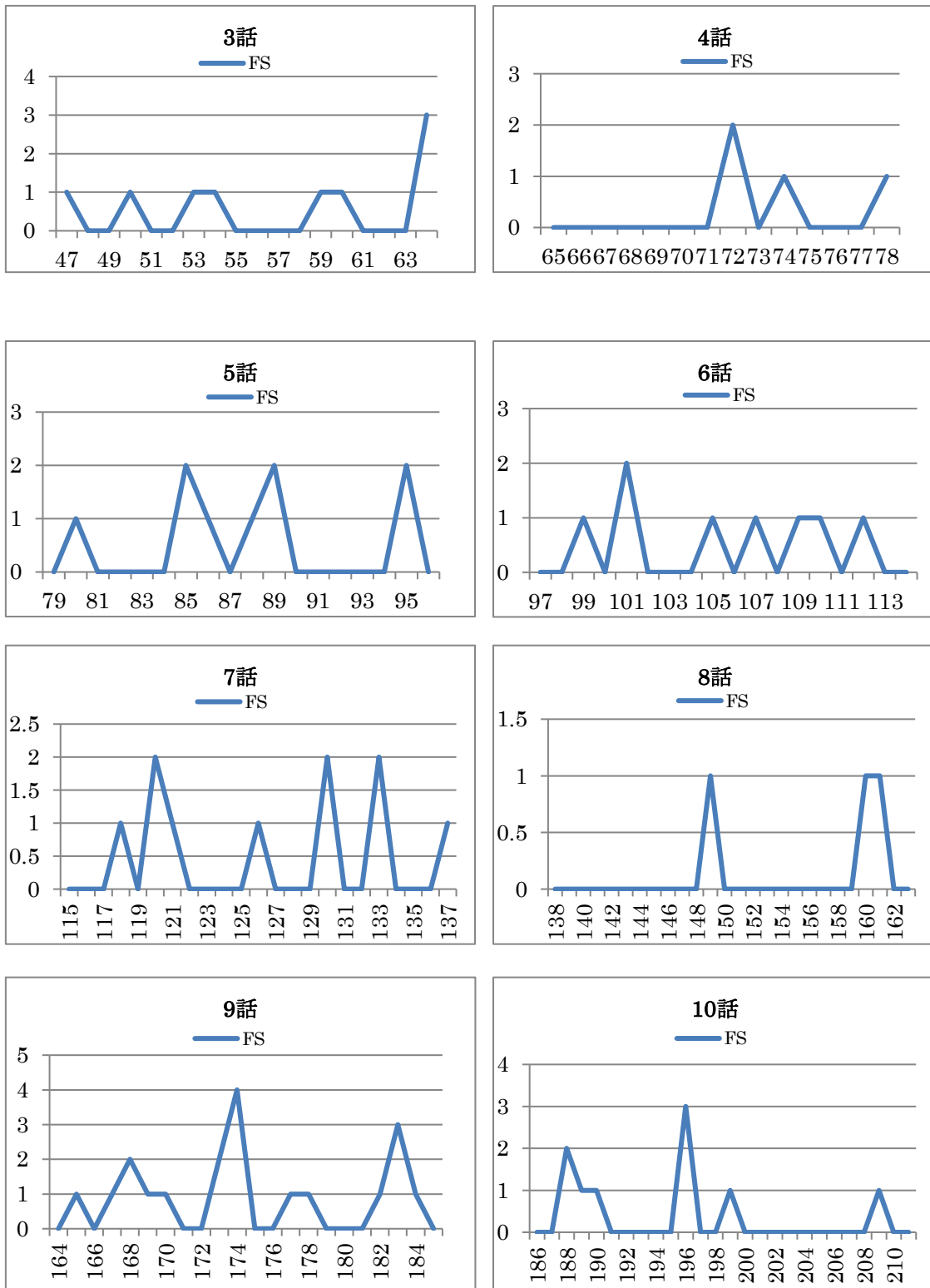


図 2-6-b : Miss Marple au Club du Mardi における FS・FH の出現傾向

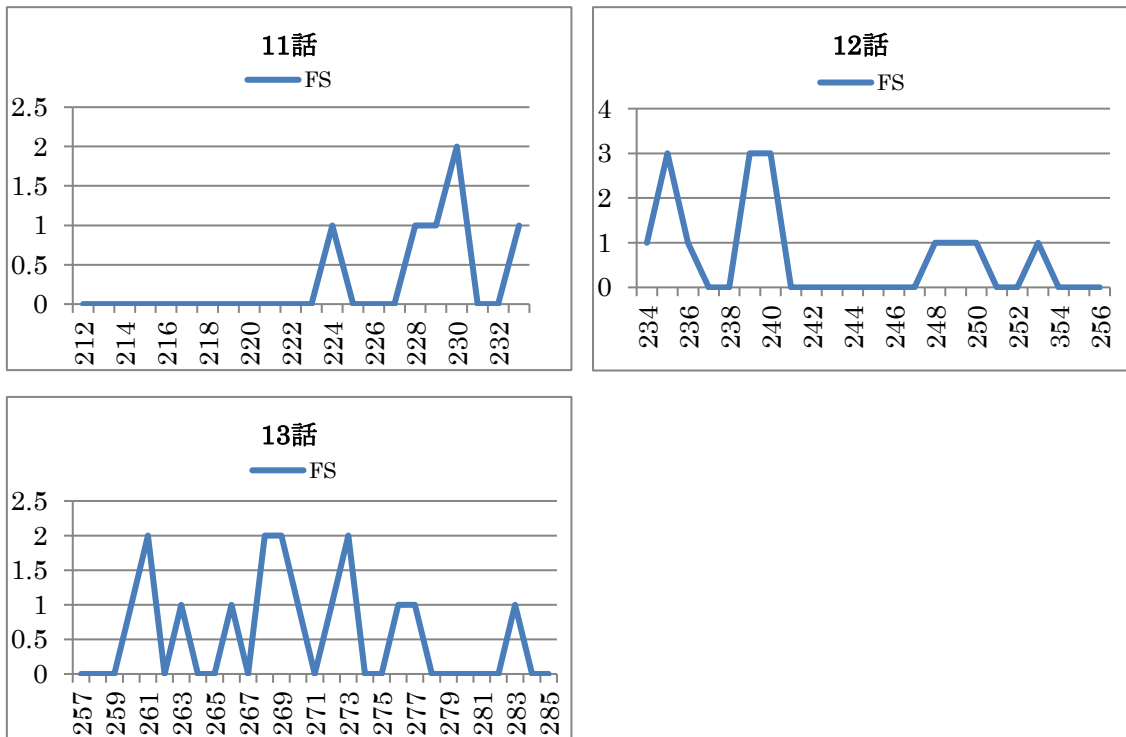


図 2-6-c : *Miss Marple au Club du Mardi* における FS・FH の出現傾向

表 2-6 : *Miss Marple au Club du Mardi* における FS・FH の生起数

話	1	2	3	4	5	6	7
ページ	9-26	27-46	47-64	65-78	79-96	97-114	115-137
FS	8	7	9	4	9	8	10
FH	0	0	0	0	0	0	0
%	0	0	0	0	0	0	0

話	8	9	10	11	12	13	合計
ページ	138-163	164-185	186-211	212-233	234-256	257-285	
FS	3	19	9	6	15	17	124
FH	0	0	0	0	0	0	0
%	0	0	0	0	0	0	

図表 2-6 を見てみると、*Miss Marple au Club du Mardi* と *Le Petit Prince* には、FH の生起がまったく見られないという共通点とともに、*Miss Marple au Club du Mardi* ではテキスト全体における FS の生起において特筆すべき傾向が見られないという相違点が確認できる。後者は、このコーパスの内容は同様に完全なフィクションでは

あるが、登場人物間の会話・会話の中の一人による事件の語り・その語りの中の会話という複数の層から成り立ち、それらは必ずしも出来事の順に沿ってはいないということが理由の一つとして考えられる。

2.4.5.3. *Terre des hommes* の統計図・表

最後に、自伝的小説 *Terre des hommes* を観察してみる。

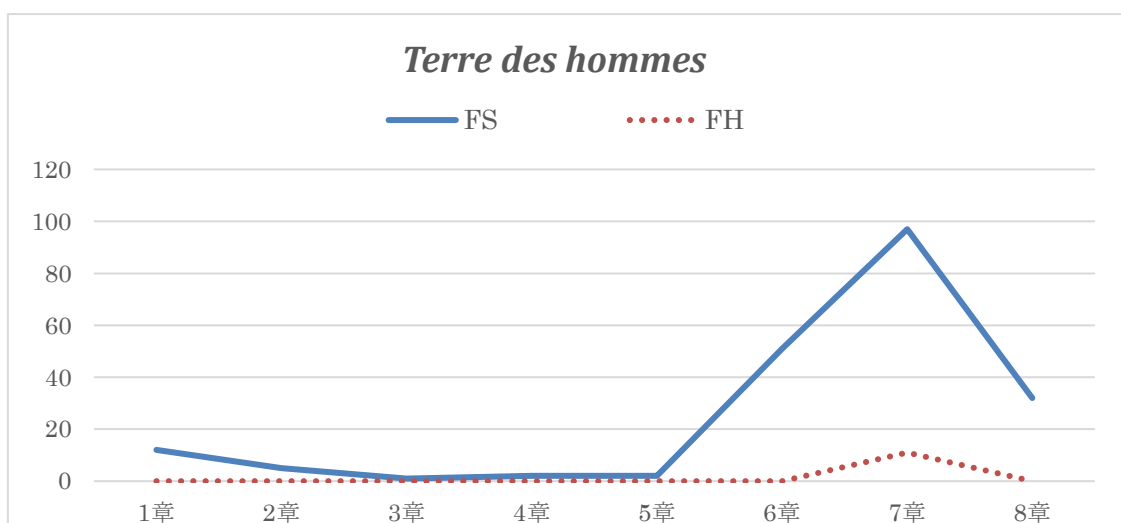


図 2-7: *Terre des hommes* における FS・FH の出現傾向

表 2-7: *Terre des hommes* における FS・FH の生起数

章	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
ページ	8-31	32-53	54-58	59-74	75-83	84-126	127-185	186-215	
FS+FH	12	5	1	2	2	51	108	32	213
FS	12	5	1	2	2	51	87	32	192
FH	0	0	0	0	0	0	21	0	21
%	0	0	0	0	0	0	19	0	

(※パーセンテージの小数点以下は四捨五入する。)

図表 2-7 を見てみると、*Terre des hommes* は他の 2 つの文学コーパスと異なり、わずかながらも FH の生起が確認できる。しかしながら *Le Petit Prince* と同様に、テキストの後半に一気に FS の出現が加速するという特徴も見受けられる。これらには、自

伝的小説という完全な自伝でも完全なフィクションでもない中間に位置するというテキスト的特性が関係していると考えられる。また、なぜ第7章のみFHが生起しているのかについては疑問ではあるが、統計表からでは不明なため、第7章において分析する必要があるだろう。

2.5. まとめ

以上より、歴史テキスト・訃報記事・文学テキストという3種類の異なるテキストにおけるFSやFHの生起率、出現傾向を明らかにした。その結果、歴史テキスト・訃報記事という過去に実際に起きたことを叙述するテキストでは、先行研究に基づいた予想に反して、FHの使用が非常に多い点、文学テキストでも完全なフィクションではない場合にはFHの使用が見られる点、また、歴史テキストと3つのうち2つの文学テキストにおいて、テキストの山場が置かれるであろうテキストの後半にかけて単純未来形の生起が増えるクライマックス効果と呼べるような傾向が確認された。これはFSとFHが共通の特性を有していることを表していると思われる。

第3章 理論的枠組み

3.1. 本章の手順

第1章の先行研究の考察では単純未来形の用法分析を確認したが、これまで見てきたように、歴史テキストというジャンルにおけるFHの場合、短文から観察する用法研究のみでは不十分である。また、第2章はコーパスの生起数・出現傾向のみの観察であるため、FHの機能全体を明らかにするためにはより大きなレベルの理論的な探究が必要であり、第2章の考察を補わなければならない。したがって本章では、「時間概念の複雑さ」(3.2節)、「discours と histoire」(3.3節)、「可能世界と信念世界」(3.4節)という3つの視点から、FHが出現する歴史テキストというものを検討していく。なぜなら、以下のような考察が必要だからである。まず、FHの問題を考えるためには時間という概念の詳しい検討をしなければならず、さらに、FHが言語活動における Benveniste が提唱した discours (「話」と histoire (「歴史=物語」という発話行為の次元の二大カテゴリー内でいかなる機能を持っているかという研究が重要となるからである。最後に、未来形によって示される世界の広がりに対する考察によってFHの特徴をより明確化していく。

3.2. 「時間」の概念の多義性

まず、歴史叙述を考えるうえで基礎となる、時間の概念を見ておかなければならない。一般的に、われわれは時間というものを過去・現在・未来という一本の時間軸で成り立つものとして考えている。しかしながら、多くの哲学者や歴史学者、言語学者が時間

概念が一つではなく、複数あると主張している¹⁸。Ricœur (1985 : 156) は時間概念の現象学的に分析において、Benveniste の時間概念に注目している。Benveniste (1974 : 70-74) は、時間とは、「物理的時間」(le temps physique), 「時系列的時間」(le temps chronique), 「言語的時間」(le temps linguistique) の3つに区別できるとしている¹⁹。

物理的時間とは、「均質・無限な連続体で、線条性をもち、限りなく分割可能²⁰である。」(バンヴェニスト, 2013 : 68) としている。これは普遍的時間とも呼ばれ、われわれの存在とはまったく関係のない、何物にも侵されることのない時間である。これに相関するものとして心的時間を挙げており、これは「人間にとっての持続の感覚であり、伸縮自在で、時々の感情や精神状態に応じて長いとも短いとも感じられる。」²¹ (id.) だと述べている。

次に時系列的時間とは社会化された暦の時間であり、「出来事を序列化する時間」²² (ibid. : 69) であるとしている。「静的基準点 [イエス・キリストの誕生など, 筆者註] から見て、出来事は以前 (過去) ・以降 (未来) のいずれかに配置され、基準点からの距離が計量できるように時間的区分のいずれかに収められる (基準点から何年前 (後), 次いで何月, 何日, という具合に)。各々の一定間隔の区分 (年, 月, 日) が、均質で隙間のない無限の連なりの中に並んでいる。こうして出来事は個々の区分との関係で時間

¹⁸ たとえば, Wilmet (2007 : 296-297) は « Temps cosmique » (宇宙的時間), « Temps climatique » (気候時間), « Temps physique » (物質的時間), « Temps humain » (人の時間), « Temps relatif » (相対的時間), « Temps de conjugaison » (活用時制), « Temps linguistique » (言語的時間), « Temps verbal » (動詞時制) の8つの時間を挙げている。フランス語の temps は日本語では「時間」と「時制」の両方を示すため, Wilmet がここで挙げている temps の一部は「時制」であることに注意しておく。

¹⁹ Ricœur (1985 : 156) は永続する時の流れを示す le temps cosmique (宇宙的時間) と主観的時間である le temps psychique (心的時間) の中間的時間として, 時系列的時間を置いている。

²⁰ *Le temps physique* du monde est un continu uniforme, infini, linéaire, segmentable à volonté. (Benveniste, 1974 : 70)

²¹ Il a pour corrélat dans l'homme une durée infiniment variable que chaque individu mesure au gré de ses émotions et au rythme de sa vie intérieure. (id.)

²² 原書では le temps des événements (id.) となっており, 和訳書の意識と思われる。

の連鎖の中に正確に位置づけられる。」²³ (ibid. : 70) これにより時間的流れに共通知としてのゼロ地点を導入することができ、出来事とゼロ地点との距離を捉えることが可能になり、われわれの今居る位置も分かるようになる。

最後に、言語的時間については次のように述べている。「言語に内在的な唯一の時間はディスクールの中の基準点的な現在であり、この現在は常に暗黙に前提とされている。」²⁴ (ibid. : 73) さらに、「言語は必然的にある基準点から出発して時間を序列化するもので、この基準点はディスクール行為以外にはない。この参照的基準点を移動させ、過去や未来に置こうとしても無駄である。」²⁵ (id.) つまり、発話することによって生まれる今という時を語ることによって基準点がはじめて生まれ、それと同時に基準点から見た過去と未来との関係が生まれるのである。

では、この過去と未来とはどのようなものなのであろうか。Benveniste は「過去形と未来形の扱いの違いは、言語の世界において一般的であるだけに示唆的である。過去の経験が現在との距離に応じてそれぞれ配置される回顧的時間性と、われわれの経験の領域には入らず、経験の予測という形でしか時間化されない前望的時間性との間には、明らかな性質の違いがある」²⁶ (ibid. : 74) と述べている。Koselleck (1990 : 308) は過去と未来をそれぞれ « champ d'expériences » (経験の空間) と « horizon d'attente »

²³ A partir de l'axe *statif*, les événements sont disposés selon l'une ou l'autre visée *directive*, ou antérieurement (en arrière) ou postérieurement (en avant) par rapport à cet axe, et ils sont logés dans une division qui permet de *mesurer* leur distance à l'axe : tant d'années avant ou après l'axe, puis tel mois et tel jour de l'année en question. Chacune des divisions (an, mois, jour) s'aligne dans une série infinie dont tous les termes sont identiques et constants, qui n'admet ni inégalité, ni lacune, de sorte que l'événement à situer est exactement localisé dans la chaîne chronique par sa coïncidence avec telle division particulière. (Benveniste, 1974 : 71-72)

²⁴ On arrive ainsi à cette constatation [...] que le seul temps inhérent à la langue est le présent axial du discours, et que ce présent est implicite. (ibid. : 74-75)

²⁵ La langue doit par nécessité ordonner le temps à partir d'un axe, et celui-ci est toujours et seulement l'instance de discours. Il serait impossible de déplacer cet axe référentiel pour le poser dans le passé ou dans l'avenir ; [...] (ibid. : 74)

²⁶ Ce contraste entre les formes du passé et celles du futur est instructif par sa généralité même dans le monde des langues. Il y a évidemment une différence de nature entre cette temporalité rétrospective, qui peut prendre plusieurs distances dans le passé de notre expérience, et la temporalité prospective qui n'entre pas dans le champ de notre expérience et qui à vrai dire ne se temporalise qu'en tant que prévision d'expérience. (ibid. : 76)

(期待の地平)²⁷ と呼び、Ricœur (1985) は経験の空間と期待の地平に関して、「過去に遡及する期待なしには収集され得ないというのが、経験の時間的構造である」²⁸ (リクール, 1990 : 384) という Koselleck の言葉を引用している。また Ricœur は、「(…), 過去を, 成就し, 変えられない, 過ぎ去ったものという見方でしか考えない傾向に対してたたかう必要がある。過去を再び開き, まだ成就していない, 阻まれた, さらに虐殺されてしまった過去の潜在性を蘇えらせねばならない」²⁹ (ibid. : 394) と述べている。さらに山口 (2000) は過去の出来事に関して、「過去の大部分は, 個人の生活史においても, 一つの文化の歴史においても, 陰の, 忘却の, 闇の部分にとどまっている。(…)。反省的思考を欠いた歴史研究が掘り起こすことができるのは, それらの僅かな部分に過ぎない。」(ibid. : 235), また, 「過去の中の過去, 現在の中の過去を掘り起こすことによって, それらに光をあて, (…)」(ibid. : 236) と主張している。

したがって, 未来を述べることは同時に過去に影響を及ぼすということであろう。過去を開き, 過去の潜在性に光をあてることである。歴史は過去であるためすべての出来事が既に決定されたものであり, われわれの生きている現在へとつながる一つの時間軸上に位置づけられる, とする考えは, 一つの歴史の捉え方であって, 歴史という概念に対する他の見方もあるのである。

以上のことを, 歴史叙述に関して時間概念と動詞時制の面から考えてみよう。歴史叙述とは, 一般的に, 話し手が存在しない客観的なものであるので「時系列的時間」を基調として叙述される。つまり, 出来事を時系列的時間の中に位置づける行為が歴史叙述の本質である。したがって, そこで用いられる動詞時制は主観的側面をもたない単純過去形が基調となることが妥当である。しかしながら, 歴史叙述には現在形や単純未来形が生起する場合があります, 現在が存在しない時系列的時間と矛盾する。未来形を使用するからには立脚する現在の存在が必要となる。その現在は「言語的時間」にしか立脚できないものである。したがって, 歴史叙述は「言語的時間」に基づき表現されることが可

²⁷ Koselleck (1990) のドイツ語版著作 (1979 : 358) では, *Erfahrungsraum* が *champ d'expériences*, *Erwartungshorizont* が *horizon d'attente* に相当する。Ricœur は *Temps et récit* (1985) の中で, *champ d'expériences* を *espace d'expérience* と仏訳している。

²⁸ « C'est une structure temporelle de l'expérience de ne pouvoir être rassemblée sans attente rétroactive » (Ricœur, 1985 : 302)

²⁹ [...], il faut lutter contre la tendance à ne considérer le passé que sous l'angle de l'achevé, de l'inchangeable, du révolu. Il faut rouvrir le passé, raviver en lui des potentialités inaccomplies, empêchées, voire massacrées. (ibid. : 313)

能となる。Benveniste (1974) は言語的時間について、

「話者は、現在として認めるものを、特有の言語的形態を通じて、それがどの時点であれ、すべて「現在」として位置づける。しかし、この現在は発話のたびに更新される、文字どおり新たに未経験の瞬間なのである。」³⁰ (バンヴェニスト, 2013:72)

とも説明している。したがって、時系列的時間に位置づけられた出来事を基準時の現在と定位することによって、歴史叙述に FS が用いられることが可能となるのである。つまり歴史叙述とは「時系列的時間」の中に「言語的時間」も持つ、複雑な構造を内包する叙述方法なのである。

Ricœur (1985) は未来を指す「期待の地平」の「(...)」期待という用語は、希望と恐れ、願望と欲求、懸念、合理的計算、好奇心、要するに未来をめざす個人的もしくは共通のあらゆる気持のあらわれを包含できるほどに広い。」³¹ (リクール, 1990 : 383) と述べている。つまり未来は主観的な側面も内包しており、したがって、歴史叙述において FH によって未来を述べるということは、話し手(書き手)の主観相や期待相がテキストに導入されることを意味している。

歴史叙述とは時系列的時間に位置づけられている出来事を述べることであるが、それぞれの出来事に対して言語的時間を通して記述できる。出来事を歴史的現在を用いて現在として定位するたびにそれは新たに未経験な瞬間として描写されるため、言語的時間の FH を用いることができるようになるのである。つまり、過去を終わったものとしなため、ある出来事はある出来事であるが、その出来事の意味は更新可能なのである。

³⁰ Le locuteur situe comme « présent » tout ce qu'il implique tel en vertu de la forme linguistique qu'il emploie. Ce présent est réinventé chaque fois qu'un homme parle parce que c'est, à la lettre, un moment neuf, non encore vécu. (Benveniste, 1974 : 73-74)

³¹ [...], le terme d'attente est assez vaste pour inclure l'espoir et la crainte, le souhait et le vouloir, le souci, le calcul rationnel, la curiosité bref toutes les manifestations privées ou communes visant le futur ; [...] (Ricœur, 1985 : 302)

3.3. 発話行為の次元 : discours / histoire

Benveniste (1966) は、フランス語の動詞時制を「歴史＝物語」(histoire) と「話」(discours) という二つの次元に区別可能だとしている³²。discours とは「話し手と聞き手とを想定し、しかも前者においてなんらかの仕方で後者に影響を与えようとする意図のあるあらゆる言表行為」³³ (バンヴェニスト, 1988 : 223) であり、動詞時制は単純過去形を除くあらゆる時制が使用されるものだとし、一方 histoire は「物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示するもの」³⁴ (ibid. : 219) であり、使用される動詞時制は単純過去形, 半過去形, 条件法, 大過去形, 予見時称 (allait / devait + infinitif) ³⁵ であると定義づけている。Benveniste のこの概念を参考に、以降さまざまな研究者が多少の違い (histoire ではなく récit としたり, 分類する動詞時制の違いなど) はあってもおおまかにこの二つの区別を肯定している。

discours		histoire (récit)	
passé composé	imparfait	plus-que-parfait	imparfait
présent		passé simple	
futur simple	futur périphrastique	conditionnel	prospectif (= allait / devait + infinitif)

(Benveniste (1966 : 238-245) と Maingueneau (1994 : 76) を参考に本論筆者が改変)

図 3-1 : discours と histoire の主要な時制の区分

³² Weinrich (1973) や他さまざまな先行研究において discours / histoire の二分法は commentaire / récit, また discours / récit など様々な言われ方がなされているが、意味の違いはほぼないことから、本論文では Benveniste にしたがって、discours と histoire と呼ぶこととする。

³³ Il faut entendre discours dans sa plus large extension : toute énonciation supposant un locuteur et un auditeur, et chez le premier l'intention d'influencer l'autre en quelque manière. (Benveniste, 1966 : 241-242)

³⁴ Il s'agit de la présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit. (ibid. : 239)

³⁵ 本論文では予見時称の (半過去形におかれた) allait + infinitif と現在形におかれた迂言的未来形である va + infinitif を区別する。

これまでの先行研究において共通しているのは、単純未来形が *discours* に属するものだけとしている点である。Maingueneau (1994) は、

Les **futurs**, futur simple et futur périphrastique (*tu partiras / tu vas partir*), relèvent uniquement du *discours* : de fait, ils sont le résultat de visées de l'énonciateur vers l'avenir à partir de son présent. (Maingueneau, 1994 : 76)

単純未来形と迂言的未来形という二つの未来形は *discours* のみに属する：実際、それらは発話者の現在から未来に対する照準の結果である。

と述べ、単純未来形は完全に *histoire* には生起しないと断言している。また、Novakova (2001 : 86) は *histoire* に生起する単純未来形を *insolite* (奇異なもの) であるとし、Benveniste (1966) はそれは *artifice de style* (文体的技巧) であると³⁶、Confais (1995 : 387) は映画における *flash back* と同じ技巧であり、過去から見た未来は *artifice narratif* (語りの技巧) であると分析している。

前節で見たように、過去と未来は基準時となる現在を定位しないことには存在しない。このことから、過去と未来は現在を基準とした時間軸の対極にあるものとして捉えることができる。図 3-1 も踏まえた以上のことを図 3-2 で図式化してみる。

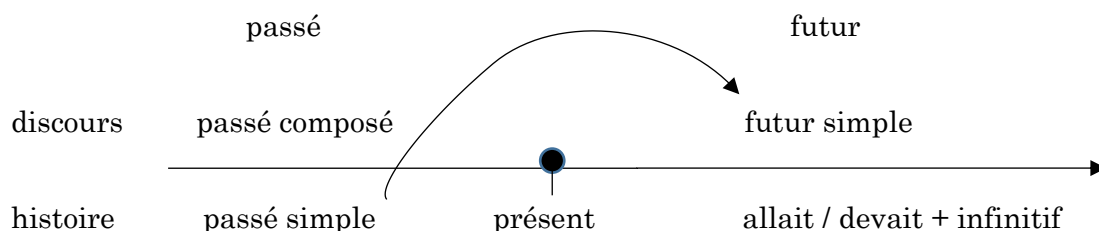


図 3-2：語りと時制の二重移行による飛躍

³⁶ Benveniste は « Nous ne parlons pas ici, bien entendu, du « présent historique » des grammairiens, qui n'est qu'un artifice de style. » (Benveniste, 1966 : 245) と述べ、厳密には語りの現在を文体的技巧であるとしているが、歴史的現在に関して触れている中で歴史的未來も同様だとしているため、文体的技巧は歴史叙述における単純未来形にも当てはまることである。

histoire に属し過去に関する叙述である歴史叙述において単純過去形を基調としていることは、同じ histoire に属するものとして妥当性がある。単純過去形から複合過去形への変化は並行する語りへの移行として違和感はない。単純過去形から現在形（歴史的現在）への移行は、本来現在形には時間性がない³⁷ とする従来 of の考えより歴史叙述に用いられることに違和感はない。しかしながら、過去叙述のため通常単純過去形で叙述するところを FH にした場合、そこには語りの移行だけではなく時制の移行も起こり重要な 2 つの面で変化が発生する。これはまさに飛躍とすることができる大きな変化である。したがって、単純未来形をわざわざ歴史叙述に導入するということは、それはやはり書き手のレトリックとして問題があり、この飛躍に付随する効果を意図して用いていると考えられる。

この語り与时制という 2 つの面での変化が、FH が有する飛躍という機能の根拠となると考える。これについては第 4 章で詳しく述べることにする。

歴史叙述における単純未来形の生起が従来 of の先行研究では想定されていなかった理由の一つとして、客観的な histoire と主観的な単純未来形は相容れないと考えられてきたことがある。histoire では未来を表す際には予見時称を用いるとし、discours の単純未来形、histoire の予見時称として区別されてきた。しかしながら、文語と口語として考えるならばこの区別も可能かもしれないが、歴史叙述においてはこの区別は適当ではない。それには、同じ histoire であっても物語を作ることと歴史を語ることは異なるということが関係していると思われる。歴史を語ることには、書き手の主観が必然的に付随してくる。歴史叙述について山口（2000）は以下のように述べている。

「多くの場合歴史のディスクールは、日常生活のすべての描写が反映するのではなく、一定の部分を排除することによって、それは成り立っているのである。」
(ibid. : 223)

³⁷ たとえば、Serbat（1980 : 38）は以下のように論じている。「[...] le présent ne détient en lui-même aucune valeur temporelle. Il ne réfère le procès à aucune des trois époques temporelles à l'exclusion des autres. Il est apte à figurer dans des phrases qui, pour diverses raisons, sont rapportées, soit à l'actuel, soit au passé, soit au futur, soit à toutes les époques indistinctement.」（現在形とは、それ自身は時間的な価値を全く保持しない。その事行は、他の期間を除いた 3 つの時間的期間のいずれも参照しない。様々な理由で、現在、過去、未来、またはすべての期間を区別せずに言及する文章に適している。）

これは、叙述される歴史は歴史のすべてではなく、書き手によって選択された一部の側面にすぎないということを意味する。したがって、そこには書き手が出来事に対して期待したり失望したりという何かしらの主観性が内包されていると考え得る。それを示すマーカーが FH なのではないだろうか。

歴史叙述は客観的性質を持ちながら、主観的な単純未来形が用いられている。つまり、歴史叙述に生起する単純未来形である FH は、histoire の客観性と discours に属する単純未来形の主観性を併せ持つキメラ状態であると言える。したがって、FH はもはや単純未来形の用法の一つではなく、歴史叙述というジャンルにおける一つのスタイルと考える方が適当ではないだろうか。

3.4. 時間論理：可能世界と信念領域

分岐的時間という概念を用いて、これまでに提示した FH による過去叙述が他の選択肢の潜在性を暗示するという仮説を、Martin (1983: 19-53, 91-149) と渡邊 (2014: 59-82) の論述と図説を用いて検証していく。

Martin は、ある時点 t における可能性は、 t_{+n} における p が真である場合 (P) と偽 (non-P) である場合のふたつの分岐があると主張している。(図 3-3)

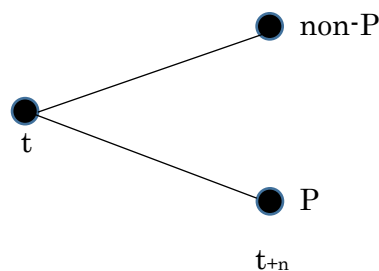


図 3-3：分岐的時間

さらに、 t_{+n} においてこの真と偽の分岐が想定され、以降事行の発生のために無数に続いていく。この分岐的時間において真 (P) と偽 (non-P) が現れるそれぞれの時点 (黒丸) を可能世界 (mondes possibles, m と略号する。) という。可能世界のなかでも、実現しそうな連鎖を表すものを期待世界 (monde des attentes, m^* と略号する。) とい

う。期待世界も可能世界と同様、破棄されることがあり得る。また、時間がたち、未来が過去となる時、可能世界のうち一つの事項だけが現実世界（monde de ce qui est, m_0 と略号する。）を示すものとなる。過去・現在の時間は現実世界に属し直線的時間である。さらに、話者が真と信ずる命題の総体を信念領域とし、可能世界、期待世界、現実世界はいずれも信念領域（univers de croyance, U と略号する。）に属すると述べている。（図 3-4）

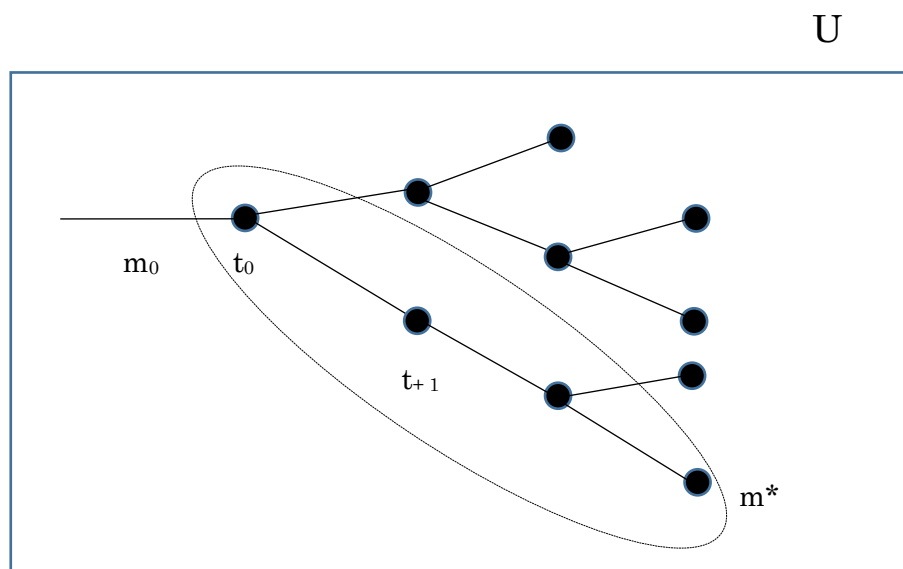


図 3-4：信念領域

上述の概念をもとに、まず FS を見よう。発話時 t_0 に立脚する FS は、 t_0 より後の t_{+1} に事行を位置づける際に用いられる。 t_0 においては t_{+1} は未来のことであり事行の成立が不確実である。したがって t_{+1} における non-P の可能性が必然的に発生し、図 3-3 に当てはめることが可能であり（図 3-3 の t を t_0 に、 t_{+n} を t_{+1} として当てはめる。）、FS には暗黙に分岐的時間を表象する働きが認められる。

それでは、FH はどうであろうか。Martin は過去・現在の時間が属する世界は直線的時間である現実世界（ m_0 ）であるとしている。（図 3-4 参照。）したがって過去の既に達成された出来事に関して述べる歴史叙述は、一見すると真（P）しか存在せず直線的時間軸上で表されても良いはずである。しかしながら、これには問題がある。その理由として、歴史叙述とは言うまでもなく歴史的出来事すべてについて語るものではなく、書き手が出来事の一部を選択して叙述しているにすぎず、また、新たな史料の発見などにより過去の出来事が変わる可能性が存在しているからである。このように、歴史叙述に

において基準時より後に事行を定位する FH は、FS と同様に分岐的時間を有しているのである。

しかし、分岐的時間における真 / 偽の対立は、歴史叙述においては少し異なる。FS ではその基準点から見た未実現性ゆえに可能世界が存在し、話し手が最も実現の期待が高いと考える出来事を期待世界に位置づけ P と表していた。歴史叙述では、書き手によって選択された出来事・現在一般に事実だと認識されている出来事を P (真) と置き、それが記述されなかった・起こらなかった可能性 (偽) の中に他の様々な出来事が起きた可能性を潜在的可能性として (non-P) と定位する³⁸。この non-P の総体をここでは潜在的世界 (monde potentiel, MP と略号する。) と呼ぶことにし、書き手や史料などによって真だと選択され語られる出来事の総体を期待世界 m^* とする。下記で提示する歴史叙述における時間が表すすべてが信念領域 (U) に相当すると仮定できるが、それはつまり $U =$ 歴史叙述における時間であるため、U を別に設ける必要はないと考える。

ここで、歴史叙述の時間は発話時 t_0 が基準となる時間軸と異なることを表すために、2つの異なる時間軸を導入したい。一つはわれわれが実際に生活している日常的な時間軸であり、もう一つは歴史叙述の際に用いられる時間軸である。前者を現実時間、後者を歴史叙述的時間と呼ぶこととする。現実時間では、時間は常に未来に向けて進行し、われわれは現在時 t_0 に位置し、その時点から見て時間の進行方向が未来 t_{+n} であり、その逆方向が過去 t_{-n} である。一方、歴史叙述的時間においてもそれぞれの互いに対する位置関係は同じだが、歴史叙述の現段階を疑似的に発話時 t_0 に準ずる時点として扱うことを表すために、 t_0^1 とする³⁹。 t_0^1 は現実時間の t_{-n} に位置する。これらを図で表したものが図 3-5 である。

また以上は、動詞時制の機能を考える際に、発話時に立脚する discours (話) レベルと基準時を恣意的に定位する histoire (「歴史＝物語」) レベルでは明確に区別しなければならないことも示している。

³⁸ Lansari (2009) や Culioli (1990, 1999a, 1999b) では、non-P と autre que P の両方を指すものを P' としている。

³⁹ Lansari (2009 : 208) を参考とする。

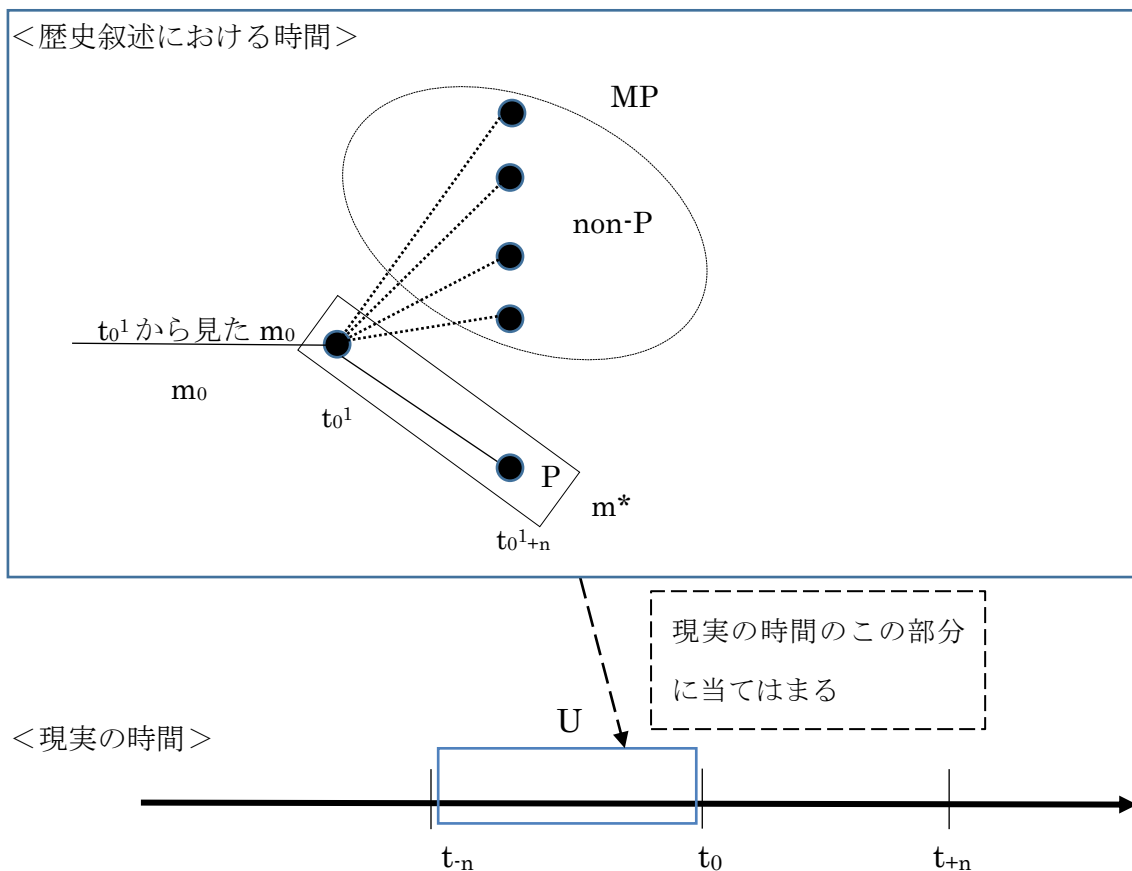


図 3-5：現実の時間と歴史叙述における時間の関係性

ここで、一般的に過去における未来を表す際に用いられる動詞時制の条件法と歴史叙述において用いられる FH の違いを分岐的時間の概念から見てみよう。

条件法は形態的に不定法形態素 $-r$ 、および *ait* という *avoir* の過去形が組み込まれているように、 t_{-1} という基準を明示している時制である。したがって視点 (*point de vue*, 以下、PDV と略号する。) が過去に置かれる。

- (1) Il pleuvait. Le match **aurait** donc lieu en salle.⁴⁰

雨がふっていたので、試合は室内でおこなわれることとなった。

(Confais, 1990 : 294, 渡邊, 2014 : 68 より引用)

⁴⁰ 本節の例文における条件法の太字と波線下線の強調は、本論文筆者によるものである。

これを図にすると次のようになる。「Pは発話時点 t_0 に直接定位されるのではなく、あくまでも PDV (t_{-1}) を介して、PDV (t_{-1}) からの後方性として定位される。そのため、P と t_0 との直接の前後関係はきまっていない。」(渡邊, 2014 : 68)

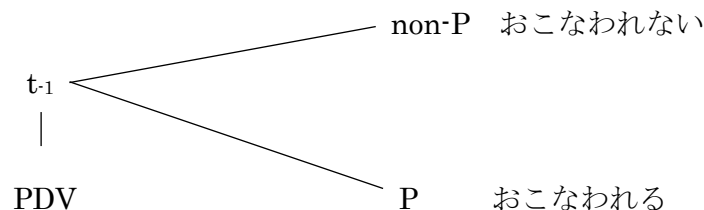


図 3-6：例文 (1) の分岐的世界

また、条件法は視点が過去に置かれるため、結果的に、たとえば反実仮定の性質を表し得る。

- (2) [...] s'il **avait** la chance de prendre un beau poisson, en dessous de l'écluse du canal, on le **vendrait** et on **achèterait** du pain.

運河の水門の下で立派な魚をとることができたら、それを売って、パンを買う
ことができるだろうに。

(E. Zola, *Germinal* : 192, 渡邊, 2014 : 69 より引用)

(2) を図示すると次のようになる。

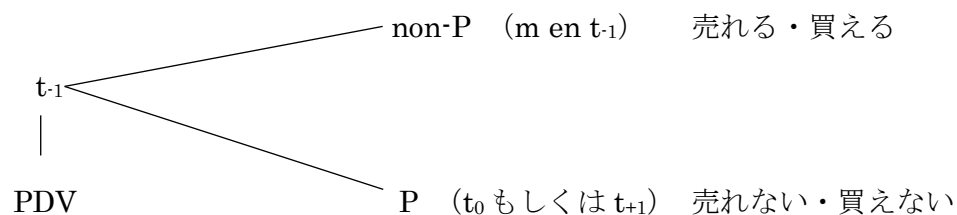


図 3-7：例文 (2) の分岐的世界

過去に起きた事実を提示していく歴史叙述と話し手や書き手の主観である反実仮想、つまり P ではなく non-P を望む条件法は相いれない。条件法が反実仮想用法を有していることから、「歴史＝物語」レベルである歴史叙述において条件法を用いると時制的条件法とも反実仮想の条件法とも両方解釈できることになる。つまり、条件法は期待世界を持たないため不確実性が強い。

一方 FH は不定法形態素 *-r*, および *a* という *avoir* 現在形から構成されており、実際には過去に関する叙述でも過去ということが明示されず、視点 PDV も歴史的現在に定位されるため、純粹に事行が定位された基準時より後に成立するものだという前望的な時間的展開を示すことができる。このことを図 3-8 で図説しよう。

- (3) *22 avril. — La cour martiale prononce (malgré Rossel) l'acquittement d'un colonel trouvé en état d'ivresse, condamne à des peines relativement légères des gardes accusés d'indiscipline et decide la dissolution d'un bataillon, le 105^e. La Commune cassera l'arrêt.* (LPC 第7部1章: 377)⁴¹

四月二二日 — 軍法会議は（ロセルの意に反し）酔態をとがめられた一大佐の無罪放免を宣し、規律違反で告発された衛兵たちに比較的軽い判決を下し、さらに第一〇五大隊の解散を決定する。コミューンはやがてこの判決を破毀するであろう。 (LPC 和訳書『下』: 309)⁴²

⁴¹ 以降本論文では、コーパスである *La Proclamation de la Commune* からの例文の場合には、LPC と表記することとする。また、本論文中の例文における太字ではない下線部は、本論筆者が本論文の研究対象外である単純未来形・迂言的未来形・条件法以外の動詞時制に付加したものである。

⁴² 以降、本論文において LPC 和訳書とはルフェーヴル（著）・河野 [ほか]（訳）（2011）を用いることとする。

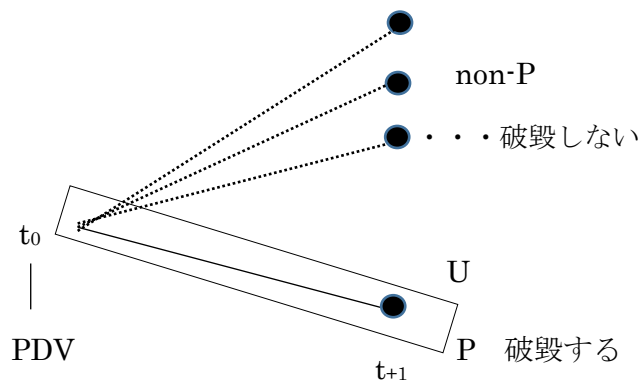


図 3-8：(3) の分岐的世界

(3) の « La Commune **cassera** l'arrêt. » を条件法を用いた文 « La Commune **casserait** l'arrêt. » に変えると、反実仮定の「破毀しない」という解釈も否定できない。

このように、条件法は結果的に反実仮定のモダリティを持つゆえに、FH に比べ確実性が弱い⁴³。この確実性の弱さもまた、過去のすでに発生した事実を述べる歴史叙述と条件法が相いれない理由の一つである⁴⁴。

以上のような性質の違いにより、歴史叙述において未来を表す際（間接話内以外）には、条件法ではなく FH が好まれると思われる。また、分岐的時間が過去においても適用される FH の潜在的可能性の暗示機能を確認したが、これは過去が開かれたもので

⁴³ Martin (1983 : 133-134) が、条件法が一般の可能世界を指示し、単純未来形が可能世界のなかで蓋然性の高さによって卓立された期待世界を指示するとの仮説を立てていることを参照のこと。

⁴⁴ 同じ「歴史＝物語」に属するが物語や歴史小説では異なると思う。なぜならば、これらは事実の叙述ではなく、また登場人物の主観的側面との関係が大いに考えられるからである。しかし歴史叙述を研究対象とする本論文では分析しない。

また、*Grand Larousse de la langue française* (1986) では以下のように指摘している。

(i) Là même où le conditionnel serait le temps propre, des écrivains modernes usent du futur en vue d'un effet de recentrage psychique analogue à celui qu'on obtient par le présent de narration. (ibid. : 2117)

(条件法が適切な時制であるところでさえ、現代の書き手は語りの現在によって得られるものに類似した心的センタリング効果を狙って、未来形を使用する。)

(ii) Elle calcula qu'elle **s'enfuira** dès que Cesare **sera** dans sa chambre

(R. Vailland : *Grand Larousse de la langue française*, 1986 : 2117 より引用)

(彼女はセザールが寝室に来るやいなや、**逃げる**ことを選んだ。)

つまり、条件法ではなく FH を用いる理由の一つとして、FH は歴史的現在で定位された虚構的と呼び得る現在時に立脚することで、読み手の心的距離を物語に引き寄せ、臨場感をもたらす効果があると述べている。しかしながら、これは物語における効果と考えられる。

あることも示している。単純過去形など分岐的時間を持たない動詞時制による叙述と FH を用いた叙述における効果の違いの一つに、この分岐的時間提示の差異にもとづく開かれた過去の表象機能が挙げられるであろう。

3.5. まとめ

本章では、歴史テキストや訃報といったジャンルにおいて FH の使用が可能となる仕組みを構築するための土台となる理論的枠組みを提示した。「時間」という概念からは言語的時間の有効性や FH を使用する一つの意図として過去と未来が暗示するものの違い、特に FH の過去の開在性という機能を明らかにした。分岐的時間という時間論理がこの理論を図説し、また「現実時間」と「歴史叙述的時間」という 2 つの時間軸の導入を提案した。さらに、発話行為の次元より FH が飛躍という特性を有することを確認した。

第4章 歴史的未來と現在・過去時制との競合

4.1. 本章の手順

本章では、FH が典型的に出現する 3 つのコーパスに即して、用例を分類し、詳細に観察することにより、FH の本格的な分析を進めていく。4.2 節では歴史テキスト *La Proclamation de la Commune*⁴⁵ をコーパスとし、4.3 節では概説書 *Jeanne d'Arc*⁴⁶、4.4 節では日刊紙 *Libération*⁴⁷ に掲載された訃報 (nécrologie) に見られる FH について考察する。

4.2. *La Proclamation de la Commune* にみられる歴史的未來

本節ではまず、*La Proclamation de la Commune* より抜粋した単純未來形を用いているすべての叙述を「FH を示さない単純未來形」と「FH を示す単純未來形」の 2 つに分類していく。典型的ないくつかの言表連鎖に対して、以下の手順によってコーパスを検討する。4.2.1 節では「FH を示していない単純未來形」の特徴を挙げ、つづいて 4.2.2 節で「FH を示す単純未來形」を提示し、観察する。さらに、FH の生起を保證する文脈的要因として、他の時制との共起に着目しながら詳細な分析を行う。4.2.3 節では歴史的現在との共起、4.2.4 節では過去諸時制との共起、4.2.5 節では迂言的未來形との共起の事例を検討する。

4.2.1. 歴史的未來を示さない単純未來形

まず注目すべきことは、歴史テキスト内であってもそこに生起する単純未來形のすべ

⁴⁵ LEFEBVRE, Henri. (1965).

⁴⁶ PERNOUD, Régine. (1981).

⁴⁷ 本論文では、<https://www.liberation.fr/> における 2019 年 1 月 1 日から同年 9 月 30 日の Disparition 欄の記事 (2021 年 4 月 12 日最終閲覧) を資料として用いる。

てが FH を示すものであるわけではないという点である。歴史テキストにおいてもテキスト構成上の様々な手続きがあり、歴史的出来事を記述するだけではないからである。このコーパスの言表連鎖を観察すると、FS の使用には、以下に挙げる I、II、III の 3 つの特徴があると考えられる。

I : 「予告」を表す未来形

- (1) Nous **passerons** rapidement sur la « journée » du 22 janvier, au cours de laquelle quelques centaines de gardes nationaux tentèrent de prendre d'assaut l'hôtel de ville et où leur chef, le brave Sapia, trouva la mort.

(LPC 第 4 部 4 章 : 215)⁴⁸

われわれは、一月二二日の「事件」をすばやくすませよう。この日、数百人の国民衛兵が市庁舎を強襲しようと試みた。彼らの指導者、勇敢なサピアはそこで死んだ。

(LPC 和訳書『上』:380)

- (2) Sur la brève histoire et la fin dramatique de la Commune de Paris, nous **nous contenterons** d'une brève et assez sèche chronologie.

(LPC 第 7 部 1 章 : 367)

パリ・コミューンの短い歴史と劇的な結末に関して、われわれはここに簡潔で、かなり無味乾燥な年代記クロノロジーを記すだけで満足しよう。

(LPC 和訳書『下』: 290)

II : 書き手の意志・意図

- (3) Nous en **dirons** autant des événements d'Algérie, qui donnèrent beaucoup de souci à M. Thiers. [...]

(LPC 第 6 部 6 章 : 351)

このことは同じようにティエール氏を大いに悩ませたアルジェリアの運動に関するいえるだろう。

(LPC 和訳書『下』:263)

⁴⁸ 以降、コーパスである *La Proclamation de la Commune* から引用した例の場合には、この著書を構成している各部と各章のみ表記する。

- (4) [...] Volontiers nous le **dirons** transhistorique, ou encore poétique, philosophique et « ontologique » (dans un sens rénové de ces termes). [...]

(LPC 第7部2章 : 390)

われわれはそれを好んで^{トランジストリック}超歴史的、あるいは詩的、哲学的、《存在論的》(これらの用語の新しい意味において)とも呼ぶであろう。

(LPC 和訳書『下』 : 334)

III : 引用箇所に見える未来形

- (5) [...] Vinoy, consulté par les civils, fait répondre, de l'École militaire où il se trouve, qu'en soldat discipliné il exécute les ordres. « Dans une heure les troupes **seront** en route pour Versailles. » (LPC 第5部2章 : 268)

文官に意見を求められたヴィノワは、彼のいる士官学校からこう答えさせる。すなわち、規律正しい軍人として命令を遂行する、と。「一時間のうちに部隊はヴェルサイユへの途につくであろう」。 (LPC 和訳書『下』 : 106)

- (6) « *Citoyens,*

[...]

*La France, coupable de vingt années de faiblesse, a besoin de se régénérer des tyrannies et des mollesses passées par une liberté calme et par un travail assidu. Votre liberté, les élus d'aujourd'hui la **garantiront** avec énergie, la **consacreront** à tout jamais. [...]*

Hôtel de ville de Paris, 28 mars 1871.

Les membres du Comité central. »

(LPC 第6部7章 : 362)

「市民諸君、

(…)

二〇年にわたる無気力の罪を犯したフランスは、今や平静な自由と熱心な労働によって、過去の圧制と怠惰から生まれかわることが必要である。諸君の自由

については、今日の選出議員が力強くこれを保証し、永久に確立するであろう。
(…).

一八七一年三月二八パリ市庁舎にて
中央委員会委員」

(LPC 和訳書『下』: 282-283)

I において見られる FS は歴史テキスト以外にもたびたび確認され、論文などにおいてこの後述べる事柄について相手(読み手)に前もって知らせる場合に使用されている。1.2 節で挙げられた用法分類の時間的用法のひとつである「予告」に相当する。II は叙述されている過去の出来事に対する書き手の意見や考えを述べる際に用いられている FS であり、1.2 節でいうモダール用法のいずれかに相当するものと思われる。III は手紙や宣言など引用箇所内に生起する FS である。

このように I と II のような FS は論文を構成する際に使用される典型例のひとつであり、書き手の主観を排除した歴史叙述のなかでは見られず、FH とは言い難い。III も引用元ではもちろん話し手の主観とともに用いられているため同様である。このような FS も上記のように歴史テキスト内で確認されるものではあるが、FH のように歴史的事実を表してはおらず、分析対象とて取りあげないこととする。

4.2.2. 歴史的未來を示す単純未來形

ここでは、本論文の研究対象である FH を観察していく。次の 3 つの特徴から検討していくこととする：①歴史的現在との共起、②過去形・現在形・未來形の共起、③迂言的未來形との共起。その理由としては、まず①が歴史テキストの言表連鎖の中で最も多く生起するパターンだからである。②はある出来事を歴史的現在のみを使って継起的に述べることも可能であるはずだが、なぜ未來形と過去形が出現するのかを探っていく必要があるからである。③は未來形には単純未來形と迂言的未來形があることは周知の事実であるが、歴史テキストでは両者がどのように使い分けられているのかを見ていくためである。

4.2.2.1. 歴史的現在と歴史的未來

歴史テキストでは、歴史的現在を基調として記述しているテキストが少なくはないが、継起的に歴史的現在で出来事を叙述しているなかに、唐突に FH が生起することがある。以下では、そうした展開を持つ記述において、歴史的現在と FH のそれぞれがテキスト構成上どのような働きをしているのかを見ていく⁴⁹。

- (7) [...] Le bataillon se débande, et la tentative se transforme en manifestation à travers le quartier Latin. Tirée à bras, l'*Alsace-Lorraine* est ramenée place des Vosges par 2 000 gardes nationaux. À la suite de cette manifestation, et devant l'inquiétude générale, les comités du V^e et du XIII^e, en liaison avec Duval, prennent des dispositions, purement défensives : en cas d'attaque, un coup de canon tiré à blanc alertera la population. Vinoy, de son côté, adopte un dispositif d'offensive : deux régiments de ligne, avec de l'artillerie, occupent les jardins du Luxembourg et y cantonnent.

(LPC 第 5 部 1 章 : 221)

大隊は列をみだし、この企てはラテン区を横切るデモ [デモ行進, 筆者註] に変化する。[腕づくで大砲, 筆者註] 人手に曳かれた「アルザス＝ロレーヌ」は、二〇〇〇人の国民衛兵によってヴォージュ広場につれもどされる。このデモの結果、またみな不安を前にして、第五区と第一三区の委員会はデュヴァルと連絡をとり純然たる防衛措置をとる。つまり、攻撃を受けた場合には、一発の空砲が住民に急を告げるようにするというのである。ヴィノワの側はどうかというと、攻撃配置をとる。すなわち、大砲を備えた戦列歩兵二連隊がリュクサンブール公園を占領し、そこに宿営する。

(LPC 和訳書『下』: 15)

ここでは現在形を基調とした叙述となっているが、この現在は書き手が執筆している時点での現在ではない。過去のある時点を現在と定位しているこの現在形は、歴史的現

⁴⁹ 以降、本論文のコーパスからの例文内における動詞時制には筆者による下線が加えてある。ただし、直接話法の被引用部は分析対象外であるため、唯一対象としている第 4 章、第 5 章、第 6 章の「歴史的用法を示さない」節以外では下線は加えていない。

在と呼ばれるものである。この歴史的現在が継起的に用いられ、述べられていることによって、その出来事ごとが時間軸上に点で結びつけられているように感じられる。このように歴史的現在で時間軸に沿って継起的に出来事を叙述できるにもかかわらず、FH が用いられている箇所もある。(7) で FH が用いられている箇所では、継起的に述べられている時間軸から離脱し、「攻撃を受けた場合には」という可能世界の中でこれから起きる可能性のある事柄を FH を用いて叙述している。この可能世界に基づく時間は、出来事の流れとして進行している時間軸とは別なのである。この可能世界での時間軸は元の時間軸と平行となっており、これからとは歴史的現在で述べられている「防衛措置を取る」という事柄の後のことである。そして FH を用いることによって、「攻撃を受けた場合」におけるいくつかの選択肢候補があることが暗黙に示され、そのうちのひとつ「一発の空砲が住民に急を告げることになる」が「示されている現在よりも後に起こる」ことを示している。つまり、この FH は「いくつかの選択肢候補があることを暗黙に示」する機能を有し、その選択肢候補が「これから後に起こる」と見なしている場合に用いられていると考えることができる。

次の例は、第3章3.4節で FH の生起箇所を条件法に変えた、分岐的時間を表す例として提示したが、ここでは FH として観察する。

(8) *22 avril. — La cour martiale prononce (malgré Rossel) l'acquittement d'un colonel trouvé en état d'ivresse, condamne à des peines relativement légères des gardes accusés d'indiscipline et decide la dissolution d'un bataillon, le 105^e. La Commune cassera l'arrêt.* (LPC 第7部1章:377)

四月二二日 — 軍法会議は（ロセルの意に反し）酔態をとがめられた一大佐の無罪放免を宣し、規律違反で告発された衛兵たちに比較的軽い判決を下し、さらに第一〇五大隊の解散を決定する。コミューンはやがてこの判決を破毀するであろう。 (LPC 和訳書『下』:309)

ここでも同様に現在形を基調として継起的に出来事が叙述されている。FH が用いられている箇所ではこの継起的な叙述から離脱し、跳躍している。FH を用いることによって、歴史的現在で定位された時点からこの先のいくつかの選択肢候補のうちどの方向へ進んでいくかが示されていると考えられる。(8) では軍法会議が判決を下した時点か

ら起こりえた出来事の中から破毀する方向へ進む流れが分かる。つまり、FH を用いることで、閉じられた状態で淡々と点で述べられている事実に、開かれた未来の展望をもたらす機能があると考えられる。歴史的現在では出来事ごとに焦点が当てられているが、FH を使用するとより大きな展開図が見えてくるのである。

4.2.2.2. 過去形・現在形・未来形の共起

過去の出来事を叙述する歴史テキストにおいて歴史的現在が基調として用いられたとしても、過去形が全く用いられないということはない。なぜなら、歴史的現在を用いて過去のある時を現在と定位することによって、それに対する過去や未来という概念を導入することができるため⁵⁰、その定位された現在よりも前に発生した事柄に関して過去形を用いて述べることも可能となるからである。未来形も同様の理由で登場する。以下でこうした例の分析を行う。

- (9) En haut de la rue Lepic, le Comité central et le comité local de la rue des Rosiers avaient installé une pièce d'alarme. Toujours prête, la ficelle ne quittait pas l'étoupille et la sentinelle devait tirer le coup à blanc dès la première alerte. Le coup d'alarme ne fut pas tiré, on ne sait pourquoi. Se glissant dans l'ombre, les sergents de ville s'approchent alors de la tour Solférino qui domine la Butte. Tout à coup une ombre se dresse devant eux ; c'est le garde national Turpin, désigné par le comité de la rue des Rosiers pour monter la faction. Il crie : « Qui vive ? », et croise la baïonnette. Aussitôt les gendarmes l'abattent ; il tombe, mortellement blessé, et mourra quelques jours plus tard. Les assaillants débouchent alors sur le plateau et désarment sans difficulté le faible poste de garde : 6 hommes du 61^e bataillon. [...] (LPC 第5部2章:241)

ロジエ街の中央委員会と地区委員会は、一門の警砲をルピック街の高みにすえつけた。いつでも発射できるように紐が大砲の門管につけられていたし、歩

⁵⁰ 第3章で詳細に論じている。

哨は最初の急報があり次第すぐ空砲をはなつはずであった。だが警砲はなぜかわからないが発射されなかった。暗闇にまぎれて市警官たちはビュットを見下すソルフェリノ塔に近寄る。突然人影が彼らの前に立ちふさがる。それは、ロジェ街の委員会から見張りに立つようと命ぜられた国民衛兵のテュルパン Turpin である。「誰か」と彼は叫び、銃剣をつき出す。すぐさま憲兵たちは彼を打ち倒す。彼は瀕死の重傷を負って倒れ、数日後には死ぬ。襲撃者たちはそこで丘の上に出て、手うすな哨所である第六一大隊の六人を難なく武装解除する。

(LPC 和訳書『下』: 54)

- (10) *Lyon.* — Le 22 mars, après trois jours tumultueux, une commission communale (qui comprend 5 conseillers municipaux) est acclamée. Le 23, les conseillers municipaux conciliateurs la quittent. Les autres membres essaient de se maintenir, présentent un programme très vague, purement local, sans allusion ni aux grandes questions politiques ni aux questions sociales. La Commune maintiendra pour Lyon « *le droit d'établir et de prélever ses impôts, de faire sa police, de disposer de sa garde nationale* ». Très vite, malgré l'arrivée des délégués parisiens qu'une foule nombreuse vient applaudir, la Commission se trouva isolée et des éléments républicains de la petite bourgeoisie, et du peuple. Dans la nuit du 24 au 25 mars, la Commune lyonnaise disparaît ; elle s'évanouit littéralement, n'ayant trouvé ni cadres, ni chefs, ni appui sérieux auprès des masses populaires et ouvrières.

(LPC 第6部6章:349)

リヨン — 三月二二日、混乱の三日間がすぎ、コミューン委員会（五人の市議会議員を含む）が選ばれた。二三日、和解派の市議会議員が委員会を去る。他の委員たちは委員会を保持しようと試み、政治的大問題にも社会的問題にも触れない、きわめて漫然とした純粋に地方的なプログラムを提出する。コミューンはリヨンのために「市の税金を決定、徴収し、市の治安を維持し、市の国民衛兵を自由に動かす権利」を保持するであろう。パリの代表者たちが到着し、大勢の群集が歓迎に出たにもかかわらず、委員会はたちまち小ブルジョアジーの共和主義分子からも人民からも孤立した。三月二四日から二五日にかけての

夜のうちに、リヨンのコミューンは姿を消す。幹部も指導者も人民・労働者大衆の心からの支持も見いださなかったリヨンのコミューンは、文字通り消え去るのである。
(LPC 和訳書『下』:259-260)

以上の例では、大過去形や半過去形、単純過去形などの過去形と現在形と FH が共起していることが確認できる⁵¹。このように既に完了した過去における叙述においても出来事の時間の流れを表したいときにこれらの時制を用いることができることが観察される。歴史的現在が継起する叙述でも内容理解によって時間の流れを読み取ることは可能であるが、この時間の流れを過去形・現在形・未来形を用いて表すことで出来事に物語展開が導入される。ここで重要だと思われることは、歴史的現在によってある時点が現在として定位していることによって、それより前の出来事を示すために過去形を、それより後の出来事だと示すために未来形をそれぞれ用いることができる点である。つまり、FH は歴史的現在に常に依存しており単独で生起することは不可能な点である。一方歴史叙述は書き手や読み手が位置する現在時から見て過去の出来事であるため本来過去形基調で描かれる方が妥当であり、過去形が単独で生起することは当然である。また、どの地点に現在を定位して出来事を描写するかは書き手の判断であり、FH は一連の物語叙述の盛り上がりはどこに持っていくかということが関係しているように思われる。たとえば (9) では、「叫ぶ」「剣をつき出す」「打ち倒す」「倒れる」というデュルパンに関する出来事の流れを歴史的現在で表し、「数日後に死ぬ」という一連の流れの最終地点を FH を用いて描写することによって叙述的統一とも言える効果を示しているように考えられる。

歴史的現在との共起の重要性を強調したが、FH はさらに、過去のある出来事が歴史的な事象であったという共通知がなければ FH であるという判断ができないという大きな特徴があると述べ得るだろう。したがって FH を FS の一用法と位置付けることに疑問が生じるが、この問題に関しては後に詳しく論じることとする。

⁵¹ 歴史叙述における諸過去時制の使い分けに関しては、本論文の趣旨とは異なるため取り上げない。

4.2.2.3. 迂言的未来形と歴史的未來

歴史テキストにおける未来形は単純未来形が用いられることが多いが、時には迂言的未来形も用いられることがあることを指摘しなければならない、どのような場合にそれぞれが用いられているのか、両者の差異を観察していく。以下の例を見てみよう⁵²。

- (11) [...] Paris s'éveille libre, la première cité libre depuis qu'il y a des cités. Il va tenter une vie nouvelle : la vie nouvelle, dans laquelle les hommes prendront en main leur destin. Sur une base sociale définie, ni trop grande, ni trop petite - le quartier -, les gens vont participer aux affaires publiques, leurs affaires. Ils vont créer, sur cette base, l'autogestion, le travail libre dans la joie ; ils vont organiser la décentralisation. (LPC 第6部1章:289-290)

パリは、自由なものとして目覚める。都市というものが存在して以来の最初の自由な都市である。パリは新しい生活を試みようとする。その新たな生活のなかで、人々は自らの運命を自己の手に握るであろう。大きすぎもせず、小さすぎもしない限られた社会的基盤 - ^{カルティエ}地区 - の上で、人々は公共の仕事、自分たちの仕事に参加しようとする。彼らはこの基盤の上で、自主管理、喜びのなかでの自由な労働を創造しようとする。彼らは地方分権を組織しようとする。

(LPC 和訳書『下』: 147)

- (12) [...] Il [Le Comité central, 筆者註] a reçu des informations venant des différents quartiers. [...] Le Comité central va coordonner les opérations selon un plan d'ensemble. Il passé enfin de la défensive à l'offensive. A 14 h 30 un ordre part dans plusieurs directions, entre autres vers le XVII^e et le XVIII^e arrondissement, signé de Grolard, Fabre et Rousseau : les bataillons disponibles se dirigeront vers la place Vendôme et l'investiront. Pourquoi la place Vendôme ? Parce que c'est là que fonctionne l'état-major de la garde,

⁵² 以降、本論文ではコーパスからの例文において、歴史的用法として用いられている *aller* を現在形においた迂言的未来形である *va+infinitif* 型は、本論筆者により太字と点線下線で強調することとする。

encore sous le commandement nominal du général d'Aurette de Paladines.

[...]

(LPC 第5部2章:264)

委員会 [中央委員会, 筆者註] はいろいろな地区からの情報を受け取った。(…)
中央委員会は全般的計画に従って作戦を調整しようとする。委員会はついに防
御から攻勢に転ずる。二時三〇分, 命令がいくつかの方面, なかんずく第一七
区と第一八区に対して発せられ, グロラル Grolard, ファーブル, ルソーの
署名が入っている。待機中の諸大隊がヴァンドーム広場に向かい, それを包圍
する。何ゆえヴァンドーム広場に向かったのか。それは, まだ名目上はドーレ
ル・ド・パラディヌ將軍の指揮下にあった衛兵の参謀本部が, そこで機能し
ていたからである。

(LPC 和訳書『下』: 97-98)

単純未来形と迂言的未来形の差異に関してはこれまでに多くの研究がなされている
が, 一般に単純未来形は基準時との断絶が強く, 迂言的未来形は時間的連続性に重きが
あるとされている。歴史テキストにおいても同様に, 迂言的未来形に関しては時間的連
続性を強調したいときに用いられていると考えられる。歴史的現在で叙述されると各事
象は一つの時間軸において点で定位されていくことが可能になるが, もしも現在形のみ
で出来事が提示されたならば, 各事象間の時間軸における緊密なつながりはあまり感じ
られないであろう。

(11) を見てみよう。迂言的未来形も FH もともに「パリは自由なものとして目覚め
る」という歴史的現在で定位された地点を現在時として使用されている。しかしながら
迂言的未来形が使用されている箇所では「パリは…を試みようとする」, 「人々は…に参
加しようとする」など定位された現在時からすぐ近くの未来が述べられ, 現在と密接に
繋がっていることが分かるのに対し, FH で示された箇所は現在時から跳躍し, その事
象の実現が時間的に近いかどうかとは関係がない。「人々は…自己の手に握るであろう」
はもしかしたら時間的にすぐに実現するかもしれないし, しばらくした後かもしれない。
または実現されないかもしれないし違う事象が起こるかもしれない。このように, 迂言
的未来形は未来の決まったある一方向へ進むことが暗示されるが, FH で示された事象
はその時点では未来として開かれているが, 他にも様々な潜在的可能性を有しているこ
とが暗示されている。迂言的未来形はこのように決まったある一方向へ進むことを示す
という特徴が現在とのつながりを浮き彫りにするため, これが迂言的未来形に近い未来

を表すと言われる理由の一つになっているのかもしれないが、この問題は本章の研究から外れるためここではこれ以上問わず、第5章において詳細に分析することとする。一方FHは、時間的なつながりを示すのではなく、複数の潜在的な可能性を提示すると同時に、その中のある一つの事象が選択され、これからその実現の方向に向かうという方向性を示していると思われる。このように同じある一方向へ進むことを示している2つの未来時制だが、明確な違いは潜在的な可能性の暗示の有無であろう。これが開かれた未来形と閉じられた未来形という違いを生み出しているのではないかと考えられる。

4.2.2.4. まとめ

4.2.2節全体でのFHの観察から、次の特徴があると考えられる。歴史叙述とは過去の出来事を述べることであり、その出来事は既に決定され、閉じられたものである。しかしながらFHを導入することによって、その事象は様々な潜在的な可能性を持っていた開かれたものになる。既に終わった過去の叙述でありながら未来への投企性があることは矛盾しているようだが、このずれが単調な歴史叙述のスパイスになっているのではないだろうか。このFHの特徴により歴史叙述に物語的效果が付与されていると考えられる。また、FHは物語的叙述の盛り上がりには匹敵する効果を示すのではないかとという仮説を提示をしたが、FHが用いられたその事象を一連の流れの最終地点に設定するからには、そこには書き手の何らかの観点があると思われる。こうした問題の詳しい検討は次節以降で行う。

4.2.3. 歴史的現在と歴史的未来の共起

本節からは、統辞形態論的、意味論的および語用論的な視点から、これまでの分析を深化させるFHとFHと共起する時制に対する分析を行う。まず4.2.3節「歴史的現在と歴史的未来の共起」では、時制を考えるうえで常に中心となる時制である現在形が歴史テキストにおいて用いられる場合の特徴と、FHの場合との違いを観察する。次に4.2.4節「過去諸時制と歴史的未来との共起」において、過去形との共存を歴史叙述で用いられる際の時制の時間軸がどのように示されるかについて分析していきたい。

これまでの検討の結果を考慮すれば、歴史的現在は時間軸上で継起的に出来事を述べ

るという叙述特徴があり、いわば、点的に現在が並置されていく（出来事間の時間的間隔は決まっていない。）という記述方法である。それゆえ、もしも歴史的現在のみによって歴史的な出来事が描写されたならば、時間的な跳躍性を示すことが難しく、時間軸に沿った事実の羅列に過ぎなくなり、歴史的現在で示される各時点であたかもその出来事ひとつしか存在しなかったかのような印象を与えることになる。言い換えると、過去が閉じられているとすることができるだろう。（図 4-1 以降、図においては歴史的現在は *présent historique*, PH と略号する。）

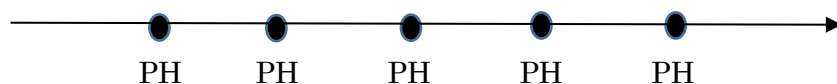
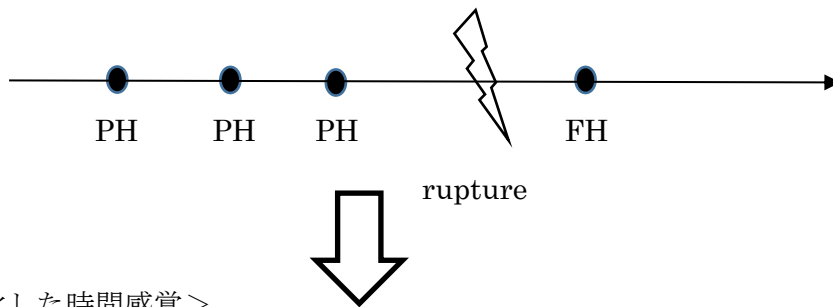


図 4-1：歴史的現在のみによる歴史記述

一方 FH は、まずある定められた基準点の存在なしには用いることは不可能である。なぜなら未来は常に出発点を必要とするからである。後の 4.2.4 節でも述べるが、過去も同様である。過去や未来はある時点を現在と見なすことによって発生する時間であるからして、FH は歴史的現在に依存しているとすることができる。形態論的視点においても、単純未来形の活用語尾（*-rai -ras -ra -rons -rez -rons*）には *avoir* の現在形が含まれていることから、現在形との強い結びつきが内包されていると述べ得る。

歴史的現在で継起的に述べられている時間軸上において、連続的な時間の流れを跳躍した先の出来事を表す際に FH は用いられていることを第 3 章で観察した。いわば事実の先取りであり、点的連続から飛躍的展開へと描写の速度が一挙に速まっている。これにより、読み手はテキストの流れに対する印象として、展開が加速したように感じるのである。この先取りを図説すると以下に示す図 4-2 のようになる。

<時制による時間表示>



<変化した時間感覚>

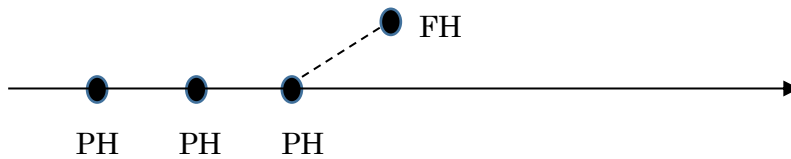


図 4-2 : FH の牽引効果

以下、「飛躍的展開」にかかわる事例を、コーパス中の实例に即して検討してみたい。

まず、段落の末尾で独立的に FH が現れる例をいくつか見ておこう。

- (13) La position politique de ces hommes (parmi lesquels on remarque les noms de plusieurs dirigeants de la Commune) est renforcée du fait qu'ils commandent des bataillons de la garde. Flourens est chef d'un bataillon de volontaires ; Jaclard, blanquiste, élu adjoint dans le XVIII^e, commande le 138^e bataillon et Ranvier le 141^e. Le gouvernement les poursuit, les révoque ; les électeurs les soutiennent. Le nombre des voix recueillies par les « rouges » dépasse celui des « non » au référendum plébiscitaire. Le gouvernement dit de la défense nationale veut que les maires et adjoints n'aient que le caractère d'agents de l'exécutif. Il aura devant lui des patriotes et des révolutionnaires qui soulèveront contre le pouvoir d'État les quartiers de Paris. (LPC 第 4 部 1 章:177)

これらの人々（そのなかにはコミューンのいくつかの指導者の名前が見える）の政治的立場は、彼らが衛兵大隊の指揮をとるという事実によって強化される。

フルーランスは志願兵大隊長であり、第一八区で助役に選出されたブランキ派のジャクラールは、第一三八大隊を指揮し、ランヴィエは第一四一大隊を指揮する。政府は彼らを追及し解任するが、選挙人は彼らを支持する。《赤》が集めた票数は、国民投票のさいの《反対》の数を上回る。国防という名をもった政府は、区長や助役が執行の手先としての性格しかもたないことを希望する。しかし政府は、国家権力に抗してパリの地区を立ちあがらせることになる愛国者や革命家を目の前にもつことになるだろう。(LPC 和訳書『上』:310)

ここでは、和訳で追加的に用いられている「しかし」でも明らかなように、段落の後に FH を用いた文により話題転換が行われている。そこでは、それまでの一連の継起的な事行の流れからはずれ、後の成り行きを先取りするかたちになっている。段落の最後でこのように先取りとしての飛躍効果を持つ FH が用いられることによって、一連の物語的展開が終わることを示している。

つづいて類例を見ておきたい。

- (14) Rive gauche, trois bataillons bourgeois, dans le VI^e, ont été neutralisés par le 59^e après des pourparlers habilement menés par Allemane. Duval progresses lentement mais sûrement vers la Cité. Aux approches de la préfecture de police (alors près de la place Dauphine) il envoie des éclaireurs. Ceux-ci s'attendant à une décharge, veulent enfoncer la grande porte à coups de crosse. La porte s'ouvre, et le concierge, casquette à la main, demande : « *Messieurs, que désirez-vous ? Il n'y a personne. Vous êtes chez vous...* » Duval accourt. Il est un peu plus de 10 heures du soir. Dès lors Duval accélère son avance. Il envoie un fort détachement place Notre-Dame, achevant l'investissement de l'hôtel de ville.

Seul le Palais du Luxembourg appartient encore au gouvernement, pour quelques heures. Sans nouvelle du haut commandement, les officiers se laisseront désarmer. (LPC 第5部2章:278-279)

左岸では、アルマーヌによって巧妙にはこばれた交渉の後に、ブルジョア派の三大隊が、第五九戦列歩兵によって第六区で無力化された。デュヴァルはゆ

つくりと、だが確実にシテ島へと前進する。警視庁に近づくと（当時はドフイーヌ広場の近くにある）、彼は斥候を送る。斥候は一斉射撃を覚悟して銃床で、門の大扉をたたき破ろうとする。扉が開かれ、帽子を手にした門番がだずねる。「皆さん、何の御用ですか？ここには誰もおりません。どうか、御自由に……」。デュヴァルが駆けつける。夜の一〇時をやや過ぎていた。そのときからデュヴァルは前進をはやめる。彼は市庁舎の包囲を終えてノートルダム広場に強力な分遣隊を派遣する。

リュクサンブール宮だけが、数時間にわたって、なお政府側に属している。上からの命令の通告を待たずに、士官たちは武装解除されるままになるだろう。

(LPC 和訳書『下』: 126-127)

この例は、「夜八時から真夜中」という題名の節の最後にあたる。その大きな節の区切りの直前で段落を改めることで話題転換を行い、FH を用いた文により後の出来事に対する独立的な先取りを行っている。この独立的な先取りはまさに FH の使用は一連の展開からの飛躍もたらすということを示す良い例である。

次に、丸括弧 (parenthèses) の中で生起する FH の例を見てみよう。

- (15) Après ce sursaut, l'activité de la Délégation tombe. L'émeute du 22 janvier est préparée par les blanquistes (Sapia, qui sera tué, Raoul Rigault), par Flourens, par quelques bataillons populaires de la garde. Ce sont eux qui prennent l'initiative. Lors des élections générales du 8 février pour la formation d'une Assemblée nationale, 4 seulement des 43 candidats « socialistes révolutionnaires » appuyés par la Délégation sont élus, et seulement avec les voix des républicains modérés. La Délégation ne sortira d'une espèce de léthargie qu'après le 18 mars, au moment des élections pour la Commune. Elle reprend alors le titre de « Comité central des 20 arrondissements » et publie le 23 mars un premier manifeste électoral, puis un second et enfin un troisième, le lundi 27 mars. (LPC 第4部2章: 191)

この飛躍ののち、代表団の活動は衰える。一月二二日の暴動は、ブランキ派（のちに殺されるサピア Sapia, およびラウル・リゴー）や、フルーランス、

衛兵のうちの若干の民衆大隊によって準備される。主導権をとるのは彼らである。国民議会を形成するための二月八日の総選挙にさいして、代表団の支持した《革命的社会主義者》の候補者四三人のうち四人しか当選しないし、しかもそれは穏健共和派の投票も加えてである。代表団が一種の昏睡状態から脱するのは、やっと三月一八日以後、コミューン選挙のときでしかない。そのとき、代表団は再び《全二〇区中央委員会》の名称を復活し、三月二三日に最初の選挙宣言を、それから三月二七日の月曜日に第二および第三の宣言を発表する。

(LPC 和訳書『上』: 335-336)

ここでは、丸括弧の使用により地の文から独立した挿入であることが分かる。そのなかで FH が用いられていることにより、出来事の流れとは関係がない後の展開の補足説明を可能としている。このように断絶と跳躍の性質をもつ FH は一連の展開から離脱し補足説明を行う丸括弧との親和性が高い。

つづいて、ダッシュ記号 (tiret, —) で挟まれた文に現れる FH を見てみよう。

- (16) Pendant ce temps le général Lecomte explique à ses officiers (le capitaine Franck, le commandant Poussargue, le capitaine Dailly, le capitaine Beugnot — qui écrit un récit des événements, sa version — plus deux autres officiers arrêtés sur les fortifications) qu'il tient Clemenceau pour le grand responsable, que c'est lui qui a excité la population. Il écrit un court billet en ce sens, accusant Clemenceau de duplicité. Dans son récit, le capitane Beugnot reproduira cette accusation. (LPC 第 5 部 2 章 : 262)

この間に、ルコント将軍は部下の士官たち（フランク Franck 大尉，プーサルグ少佐，デリイ Dailly 大尉，ブニョー Beugnot 大尉 — 彼はのちに諸事件についての物語、彼の解釈を記すことになる — それに城壁の上で捕えられた他の二人の士官）に、彼はクレマンソーに大きな責任があると見なしていること、住民を興奮させたのは彼であることを説明する。彼はクレマンソーの二枚舌を非難して、この趣旨を短い紙切れに書く。ブニョー大尉は後にその物語で、この非難の言葉を再録することとなる。(LPC 和訳書『下』: 94)

このダッシュ記号も先ほどの丸括弧と同様に、挿入の働きを有している。また、挿入部分は **qui** から始まる関係節を構成しており、ダッシュ記号の機能と協調しあっている。この中で **FH** が用いられることによって、後の出来事を先取りして補足説明することが可能となっている。

さらに、時間副詞との共起を見ていこう。以下の例は (9) でも **FH** が有する物語叙述的効果の例として少し観察したが、それを支えている一部が時間副詞である。

- (17) En haut de la rue Lepic, le Comité central et le comité local de la rue des Rosiers avaient installé une pièce d'alarme. Toujours prête, la ficelle ne quittait pas l'étoupille et la sentinelle devait tirer le coup à blanc dès la première alerte. Le coup d'alarme ne fut pas tiré, on ne sait pourquoi. Se glissant dans l'ombre, les sergents de ville s'approchent alors de la tour Solférino qui domine la Butte. Tout à coup une ombre se dresse devant eux ; c'est le garde national Turpin, désigné par le comité de la rue des Rosiers pour monter la faction. Il crie : « Qui vive ? » et croise la baïonnette. Aussitôt les gendarmes l'abattent ; il tombe, mortellement blessé, et mourra quelques jours plus tard. Les assaillants débouchent alors sur le plateau et désarment sans difficulté le faible poste de garde : 6 hommes du 61^e bataillon. Ils se portent alors vivement vers le n° 6 de la rue des Rosiers, siège du comité de vigilance, et font prisonniers quelques-uns des 18 hommes qui l'occupent et les jettent dans les caves de la tour Solférino. D'autres arrivent à fuir en tirant quelques coups de fusil.

(LPC 第 5 部 2 章 : 241)

ロジエ街の中央委員会と地区委員会は、一門の警砲をルピック街の高みにすえつけた。いつでも発射できるように紐が大砲の門管につけられていたし、歩哨は最初の急報があり次第すぐ空砲をはなつはずであった。だが警砲はなぜかわからないが発射されなかった。暗闇にまぎれて市警官たちはビュットを見下すソルフェリノ塔に近寄る。突然人影が彼らの前に立ちふさがる。それは、ロジエ街の委員会から見張りに立つようと命ぜられた国民衛兵のテュルパン Turpin である。「誰か」と彼は叫び、銃剣をつき出す。すぐさま憲兵たちは彼

を打ち倒す。彼は瀕死の重傷を負って倒れ、数日後には死ぬ。襲撃者たちはそこで丘の上に出て、手うすな哨所である第六一大隊の六人を難なく武装解除する。ついで彼らは監視委員会のおかれているロジエ街六番地に勢いこんで出かけ、そこを占領していた一八人のうちの何人かを捕虜にし、彼らをソルフェリノ塔の地下室の投げこむ。他の連中は小銃を何発か打ちながらうまく逃れる。

(LPC 和訳書『下』: 54)

ここでは、*quelque jours plus tard* (数日後) との共起により、時間的跳躍がなされている。これ以前のなだらかな出来事の連続(継起)とは異なり、時間副詞を伴って、後の出来事に一気に跳躍している。FH で示されている文の後の事行は FH の文の前の事行と繋がっており、FH の流れからの離脱という性質が顕著に現れている例である。時間副詞の例をもう 1 つ見てみよう。

(18) *2 heures du matin.*

Langlois s'est présenté à l'hôtel de ville. « Qui êtes-vous ? » demandent les sentinelles. « Général de la garde nationale nommé par le gouvernement. » On le laisse passer.

Langlois exagère. Proposée par les maires et les ministres « présents à Paris », sa nomination n'a pas encore été ratifiée par Thiers. Elle ne le sera — provisoirement — que quelques heures plus tard. Il a déjà envoyé à l'*Officiel* une proclamation (lui aussi) très lyrique, où il se déclare capable de *marcher au martyre*. (LPC 第 5 部 2 章: 284)

午前二時

ラングロワが市庁舎に現われた。「どなたですか」と歩哨がたずねる。「政府によって任命された国民衛兵の將軍だ」。彼は通行を許される。

ラングロワは誇張している。区長たちと「パリにいる」大臣によって提案された彼の任命は、まだティエールによって裁可されていなかった。彼は数時間後に — 一時的に — 任命される にすぎない。彼はすでに (彼もまた)、きわめて抒情的な布告を『官報』に送っていた。そこで彼は「身命を賭して進む」ことができる」と主張する。(LPC 和訳書『下』: 137)

ここでは、*quelque heures plus tard*（数時間後）という時間副詞との共起のうえ、さらに *ne ... que* による時間副詞の焦点化がなされている。これは FH を用いる基盤となっており、時間副詞を焦点化することによって、局所性が一層強調されている。

最後に、「話題的断絶」の例を見てみよう。

- (19) Dès le 15 février, l'Assemblée s'attaque à la garde nationale. Les « trente sous » ne seront payés qu'aux sédentaires présentant une sorte de certificat d'indigence. Dès lors la garde ne sera plus le peuple en armes mais une foule d'indigents secourus par la charité publique. Puisqu'il est impossible de désarmer la garde (dont on sait qu'elle ne se laissera pas faire) ou de la livrer aux Prussiens (qui n'ont pu forcer les défenses de Paris), on va la discréditer, la dissocier, puis la dissoudre. (LPC 第5部1章: 223)

二月一五日以後、議会は国民衛兵を攻撃する。「三〇スー」は、ある種の貧窮証明書を提示する駐屯兵にしか支払われなくなるだろう。そのときから、衛兵はもはや武装した人民ではなくして、公共の慈善によって救済される貧乏人の群れとなるだろう。衛兵を武装解除し（彼らがされるままにならないことはわかっている）、あるいは、それをプロイセン兵（彼らはパリの防備を破ることができなかった）に引き渡すことは不可能なので、衛兵の信用を失わせ、分裂させ、ついで解散させようとするのだ。(LPC 和訳書『下』: 18-19)

この例は、迂言的未来形の隣接性と FH の跳躍という性質が明白な事例となっている。二月十五日以降を一連のまとまりとしてみると、「国民衛兵を攻撃する」という歴史的現在で表されている事行が基準となり、国民衛兵に対する攻撃の話だと分かる。FH で示されている事行は攻撃の話から話題的に断絶し、攻撃した結果の後の展開へと跳躍していることが明らかである。つまり、前後の文脈から話題的断絶がなされている。

以上で見てきた諸特徴により、FH の用いられる箇所では何らかの断絶が見られ、そのことが FH の跳躍の機能と協調し合っていることが分かる。そしてこの跳躍が FH に先取り機能をもたらしているのである。

また、3.3 節で触れたように、Confais (1995) によると FH は映画の flash back と

同じ技巧である語りの技巧を持つとしているが、この先取りはむしろ **flash forward** とも言い得る未来の牽引効果であると考えられる。未来の概念に関しては、迂言的未来形とともに **prospectif** (前望的) / **rétrospectif** (回顧的) の問題がしばしば取り上げられる⁵³。未来の先取りのもととなる牽引効果は、Novakova (2001 : 144 sq.) が述べている「到来する未来」 / 「行き先としての未来」の「到来」と同様の効果であろう。

以下でこの「到来する未来」の例を見てみよう。

- (20) [...] Au cours même de l'action désespérée de Gambetta, chef de la délégation de Tours, pour galvaniser la défense militaire et organiser des armées, des tendances séparatistes **se font** jour, prises en main par des ligues de départements et de régions ; ligues du Midi, du Sud-Ouest, de l'Ouest. Ces tendances **donnent** du souci à Gambetta, pris entre le désir de maintenir son autorité et le fait que les préfets et les fonctionnaires les plus efficacement patriotes **sont** des gens de gauche, des républicains s'appuyant sur les « rouges » et par conséquent peu soumis au gouvernement central. Les tentatives lyonnaises, en fin septembre 1870, **montrent** bien le péril de la situation et ses contradictions internes. Toutefois, ces contradictions ne **pousseront** pas loin leur œuvre en province. Les ligues, les mouvements séparatistes, les émeutes républicaines, comme en mars les tentatives communalistes, **seront** facilement **matés** par le pouvoir. Coupés de Paris et de son mouvement républicain, démocratique et socialiste, nulle part les « rouges » de province ne **parviendront** à prendre en main les tendances décentralisatrices, à les orienter, à leur donner un double contenu, patriotique et social, en les organisant, en transformant en programme le projet. Quand la Commune leur **tendra** la main, ce **sera** trop tard, ou vainement. Si faible qu'il **fut**, le pouvoir Gambetta **aura rétabli** une autorité « légale » et centrale, à défaut de sa principale mission et raison d'être : la

⁵³ たとえば、Lansari (2009) は迂言的未来を半過去形におかれた **rétrospection** (回顧) と称している。この理由として、半過去形の基準時となる現在時 t_0 から見た視点の方向性を表しているためだと考えられる。

contre-offensive victorieuse contre l'ennemi du dehors.

(LPC 第4部1章：173-174)

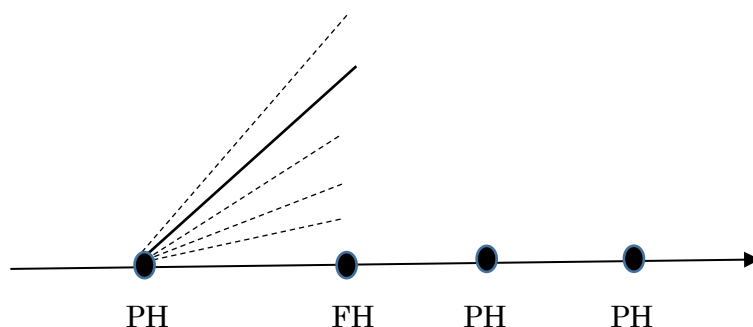
軍事防衛にテコ入れし軍隊を組織するための、トゥール派遣代表ガンベッタの必死の工作のさなかに、分離主義の傾向が現われ、南仏同盟、南西同盟、西部同盟など、県と地域の同盟によって支持される。これらの傾向はガンベッタに不安をあたえる。彼は、自分の権威を維持しようという熱望と、もっとも有力な愛国者である知事や役人は、左翼の人々であり、《赤》に依拠する共和派であり、したがって中央政府にはほとんど従わないという事実とのあいだに板ばさみになる。一八七〇年九月末のリヨンの試みは、状況の危険さと内在する矛盾を十分に示すものである。しかしながら、これらの矛盾が地方においてその作用を深く押しすすめることはないだろう。同盟や、分離主義の運動や、共和派の暴動は、三月におけるコミューン派の試みと同じく、権力によってたやすく屈服させられるだろう。パリと、その民主主義的で社会主義的な共和主義の運動から切り離された地方の《赤》は、どこにおいても、地方分権的傾向を掌握することも、それを方向づけることも、またそれらを組織し、企てをプログラムに変えることで、愛国的かつ社会的という二重の内容をそれらにあたえることもできないだろう。コミューンがこれらの傾向に手をさしのべるのは、手おくれであるか、または空しいであろう。いかに弱体とはいえ、ガンベッタの権力は《合法的》で集権的な権威を再建することになるだろう。もっともそれは、外敵に対する反攻の勝利という主要な使命と存在理由には欠けるけれども。

(LPC 和訳書『上』：304-305)

ここでは、FH が連続して生起している。基準時との断絶機能を持つ FH の連続はそれだけで一種の世界を形成しており、FH で示される事行がつづいて読み手の眼前にもたらされることで臨場感が感じられる。これは映画における flash back と類似した機能であり、過去に起きた事行がまとまって提示されていく flash back に対して、flash forward は未来に起こる事行を先取りした出来事のまとまりが読み手の眼前に提示される（到来する）ことを示している。

前節で触れたように、FH を使用することによって未来の事実が先取りされるとともに、この先取りした事実が起こる方向へ向かって叙述が進行していくことを示すが、同

時に、跳躍先までの時点でいくつかの潜在的な選択肢があったことを暗黙に表していることにもなる。これを図説すれば以下に示す図 4-3 のようになる。



(※点線は潜在的選択肢を示す.)

図 4-3：潜在的な選択肢の暗示

過去叙述というのは書き手によって選択された出来事について述べていることでもあり、過去には他の選択肢もあったという潜在性があることを認めなければならないだろう。そして、その複数の潜在的な選択肢はもちろん複数の未来の展望も含んでおり、その時点で出来事の可能性が様々な方向に開かれていたことを意味する。Ricœur (1985) は、「(…), われわれの未来に対する期待が過去の再解釈に及ぼす反作用は、その重大な結果として、過ぎ去ったとみなされる過去に忘れられた可能性、流産した潜在性、抑圧された試みを開く (この点での歴史の機能の一つは、未来がまだ決定されていず、過去そのものが期待の地平に向かって開かれた経験の空間であった過去の諸時点につれもどしてくれることである.)」⁵⁴ (リクール, 1990 : 411) と指摘しており、歴史テキストでは FH がこのように期待された世界へ向かって展開していく方向性を示す働きをしているのではないかと考えられる。

⁵⁴ « [...], le choc en retour de nos attentes relatives à l'avenir sur la réinterprétation du passé peut avoir pour effet majeur d'ouvrir dans le passé réputé révolu des possibilités oubliées, des potentialités, avortées, des tentatives réprimées (une des fonctions de l'histoire à cet égard est de reconduire à ces moments du passé où l'avenir n'était pas encore décidé, où le passé était lui-même un espace d'expérience ouvert sur un horizon d'attente) ; [...] » (Ricœur, 1985 : 329)

以上の分析から、FH は歴史的現在がある歴史的出来事とともに定立することによってはじめてその歴史空間の提示が可能となるもので、つまり FH は歴史的現在に常に立脚しており、FH にとって歴史的現在との共起は必然的であることが分かった。また、FH は過去の様々な潜在的可能性、つまり開かれた過去を暗示するという機能を有し、FH の導入によって先取りされた出来事に向かって叙述が進行していくという、FH によって描写される出来事が読み手に叙述の方向性を提示を示すことが了解された。

4.2.4. 過去諸時制と歴史的未来の共起

第3章で分析したように、歴史叙述は発話行為の次元分けの方法としての Benveniste (1966) の二大区分に従えば、discours / histoire のうちの histoire に分類される。「histoire の言表行為は(…)過去の出来事を物語るのが特性である」⁵⁵ とあるように、書き手にとっての現在よりも前に起こった出来事を述べるものである⁵⁶。したがって、歴史叙述において一般的に用いられる動詞時制が過去形であることには正当性があり、Benveniste も以下のように述べている。「—歴史の言表行為では、(三人称の形において)無限定過去、半過去形、大過去形と予見時称がはいる。現在、完了、未来(単純形と複合形)は除外される。」⁵⁷

Benveniste (1966 : 245) は、^{アオリスト}無限定過去 aoriste は単純過去形または定過去のことで、語り手の人称の外にある出来事の時称であるとし、また予見時称 prospectif は、allait + infinitif や devait + infinitif などの迂説的時称であるとしている⁵⁸。つまり、歴史的現在や FH が histoire に含まれるものとしては語っていない。しかしながら、本章で観察してきたように歴史叙述において現在形や FH が用いられていることは明白であり、事実、(21) から (23)、および 4.3 節以降に他のコーパスについても見ていく

⁵⁵ « L'énonciation *historique*, [...], caractérise le récit des événements passés. » (Benveniste, 1966 : 238-239)

⁵⁶ 歴史叙述において、対象となる出来事が書き手や読み手の現在や未来にも密接に関係して続いていることを述べることもあり、その場合、書き手の現在に立脚し、FS が用いられる場合がある。こうした FS は Benveniste の histoire の概念としての歴史叙述や本論文の分析対象とは異なるため、取りあげない。

⁵⁷ « — dans l'énonciation historique, sont admis (en formes de 3^e personne) : l'aoriste, l'imparfait, le plus-que-parfait et le prospectif ; sont exclus : le présent, le parfait, le futur (simple et composé) ; [...] » (ibid. : 245)

⁵⁸ バンヴェニスト (1988 : 219) も参照のこと。

ように、ここでのコーパスである *La Proclamation de la Commune* が特殊なものであるわけではない。

- (21) Il s'en fait même, par l'imagination et la littérature, une idée tellement embellie que la réalité le **décevra**. (J. Bainville, *Napoléon* :

Grand Larousse de la langue française (1986) : 2117 より引用)

想像と文学性によって、現実を彼を失望させるものであるという、かくも美化された考えを彼は作りなした。

- (22) Les rumeurs fraient avec les manipulations. Celles-ci conduisent, dès juin 1990, sur la piste des « bacchanales » : on apprend que le cimetière sert régulièrement de rencontre nocturne à des jeunes gens de bonne famille. Quarante jeunes sont interpellés. Tous **seront** finalement **relâchés**.

(*Le Monde*, août 1996 : Barceló et Bres, 2006 : 110 より引用)

噂は操作と親和性がある。操作は、1990年6月から、ひとを「馬鹿騒ぎ」の場へと導いた。墓地は、両家の子女たちにとって、夜の出会いの場としていつも役立っていると知られている。40人の若者が捕まった。全員が結局は解放されることとなる。

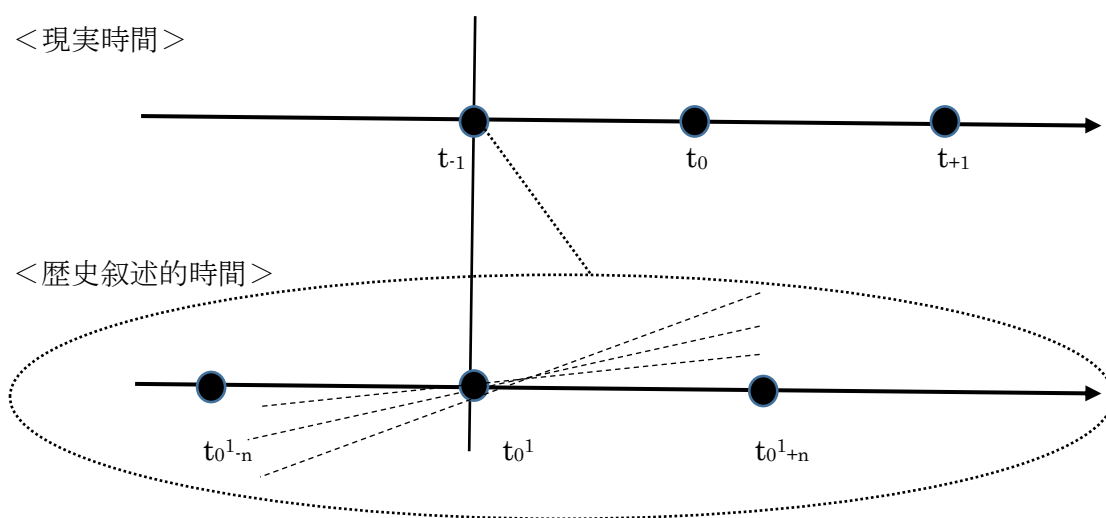
- (23) [...] quand le virtuose se rend en Russie, c'est sur recommandation de Balzac. Imprudence dont Balzac **se repentira**.

(*Mercure de France*, janvier. 1950 : 99, Touratier, 1996 : 178 より引用)

演奏家がロシアにおもむいたのは、バルザックの推薦によってであった。この軽率さを、バルザックは悔やむこととなる。

それではなぜ、現在形や FH が使用されることがあるのか。また、なぜそれらの使用が可能となるのであろうか。この疑問を解くために、ここで、3.4 節で挙げた時間軸を使用する。われわれが実際に生活している日常的な時間軸である現実時間では、時間は常に未来に向けて進行する。われわれは現在時 t_0 に位置し、その時点から見て時間の進行方向が未来 t_{+1} であり、その逆方向が過去 t_{-1} である。現実時間では、この現在という

時を基準とし、時間の互いの位置関係を捉えているが、歴史叙述的時間では、基準時を擬似的に現実時間における t_0 に準ずる時点として t_0^1 と表し、これは現実時間の t_{-1} に相当する。この t_0^1 を基準時とした時間前後の位置関係は、現実時間と同様であり、それぞれ t_0^{1+n} と t_0^{1-n} と表される。しかし、現実時間での基準時 t_0 は通常「発話時」であるが、歴史叙述的時間では発話時は重視されないため、未来形を用いる上では、その際の使用の立脚元となる t_0^1 の基準点は何かという点が重要である。(図 4-4)



(※各時間の間隔は決まっていない。また、歴史事実は新発見などによって変わるため点線で潜在性を表す。)

図 4-4：現実時間軸と歴史叙述的時間軸

過去に対する歴史叙述は、実際に起こった出来事について述べるので、現実時間軸の過去の中に位置づけられるものと考えがちである、それでは過去の歴史叙述において現在形や単純未来形を用いることができる理由を説明できない。しかしながら、上記の2つの時間軸の導入によってその説明が可能となる。

歴史叙述的時間軸では各時制が現実世界と同じ性質を有し時間軸上で機能していると考える。現実時間において FS には発話時より後に事行を位置づけるという性質があるが(第1章参照)、これは発話時を基準時とみなすことによって有効となる性質である。したがって、4.2.3 節で分析したように FH は歴史的現在に立脚することで使用可能となり、これは歴史テキストに用いられる複合過去形に対しても同様である。つまり、

重要なことは発話時ではなく、基準時の存在である。複合過去形や単純未来形は「話」(discours)に属すとみなされているため、多くの先行研究では単純未来形は発話時に立脚すると定義している。したがってテキストの語りが行われる発話時と描写している出来事の現在時とが異なる歴史記述において単純未来形の使用は不可能であると思われるが、基準時という立脚点を導入することでFHの使用が可能となる。このように歴史叙述では時間軸の現実時間から歴史叙述的時間への移行が見られる二重構造化現象が起こる。それゆえ、過去の歴史叙述における現在も未来も一般的には過去の出来事であり、現実時間と歴史叙述的時間での時間軸上でのずれが生じている。また、過去時制は現実時間においても過去であるが、語りの問題となっている過去性は基準時からの過去である。さらには、歴史叙述における時間の進行は現実時間軸の進行のように一方向に一直線に向かうものではなく、歴史的史料の発見などによって進行方向が変わるものであり、その広がりの可能性も様々なものである。したがって、図4-4のようにその方向性は潜在的に無限になり、その点から見ても、FHを使用した歴史描写は過去形のみによる歴史描写とは異なり、決定論的なものではなく、語り手の主観的な予想や期待なども内包した開在的なものであると述べ得るだろう。

次に、FHが使用可能となる理由については分析したが、ではなぜ歴史叙述にわざわざFHを用いるのかについて見ていこう。それには過去形の性質が関係してくる。まず過去形の定義を見てみると、Grevisse (1980)は単純過去形について以下のように述べている。

Le **passé simple** (passé défini) exprime un fait complètement achevé à un moment déterminé du passé, sans considération du contact que ce fait, en lui-même ou par ses conséquences, peut avoir avec le présent. Il n'implique en soi ni l'idée de continuité ni celle de simultanéité par rapport à un fait passé et marque une « action-point » : [...] (Grevisse, 1980 : 837)

単純過去形(定過去)は過去の定まった時点に全く完遂された事実を示す。その際、その事実が、それ自体によって、あるいは結果によって、現在ともし得る接触を考慮することはない。単純過

去形は、それ自体では、ある過去の事実との連続性の観念も、同時性の観念も含意しない。

また、Benveniste (1966) は単純過去形または定過去 (aoriste) を用いる歴史叙述の特徴に関して次のように述べている。

A vrai dire, il n'y a même plus alors de narrateur. Les événements sont posés comme ils se sont produits à mesure qu'ils apparaissent à l'horizon de l'histoire. Personne ne parle ici ; les événements semblent se raconter eux-mêmes.

(Benveniste, 1966 : 241)

実は、このときはもはや語り手さえ存在していない。出来事はそれが歴史の領域に現れると同時に生じたものとして提示される。ここには誰も語るものはいない；出来事自身がみずから物語るかのようである。

次に、Grevisse (1980) は複合過去形については以下のように定義づけている。

Le **passé composé** (passé indéfini) indique un fait achevé à une époque déterminée ou indéterminée du passé et que l'on considère comme étant en contact avec le présent, soit que ce fait ait eu lieu dans une période de temps non encore entièrement écoulée ou que ses conséquences soient envisagées dans le présent ; [...]

(Grevisse, 1980 : 839)

複合過去形 (不定過去) は、過去の定まった、あるいは定まっていない一時期において完遂された事実を示す。その過去の時期は、現在と接触しているものと考えられている。ある場合には、この事実、まだ完全に過ぎ去っていない時期において起きたものであり、またある場合には、その事実の結果が現在において考えられる。

一方、Maingueneau (1994) は単純未来形の本質を以下のように主張している。

[...] Énoncer au futur, ce n'est pas situer un événement dans l'avenir, c'est désirer, ordonner, craindre, etc. Seule une vision réductrice du langage qui en fait un simple véhicule d'informations permet de rejeter dans les marges ce qui est en réalité l'essence même du futur : la tension modale.

(Maingueneau, 1994 : 103)

未来形で述べることは、未来にある出来事を位置づけることではなく、切望したり、命令したり、おそれたりすることである。言語活動をただの情報伝達とみなす還元的な見方だけが、モデルな志向という、実際には未来形のまさに本質であるものを周辺へ追いやってしまうのである。

つまり、単純未来形は本質的にモダリティを内包していることを意味し、現実時間である FS の歴史叙述的時間における役割をしている FH の使用には、必然的に主観的側面が付随するということである。

複合過去形は話者の体験として記憶にある、現在につながる事実を主観的に表すと朝倉 (2002 : 374) は述べている。話者は歴史叙述では書き手となり、したがって複合過去形での叙述には書き手の主観的側面が存在することを意味する。現在に立脚した主観的様相を有する動詞時制ということで、歴史叙述的時間において同じ性質を持つ FH の対極に置かれるものと認められるだろう。一方朝倉 (ibid. : 376) は、単純過去形とは、現在と断絶し完全に過ぎ去った過去における瞬間的行為 (点行為) を客観的に表すものとしている。これは、単純過去形による歴史叙述には主観的側面が全くないことを意味する。単純過去形はもともと書き言葉のみに用いられ「歴史＝物語」の動詞時制の代表のような存在であり、歴史叙述的時間に位置することに疑いはない。しかしながら、その類似性質により FH の対極に位置する複合過去形とは異なり、単純過去形はモダリティが付与されていないと言われる歴史的現在と似ているだろう。本論文では過去形に関しては詳しく分析しないためこれ以上の考察は行わない。

複合過去形・単純過去形どちらも FH との共起に疑問はないことを見たが、この3つ

の時制すべてが共起することも可能であることにも触れておく。なぜなら、朝倉 (ibid.: 374) によると複合過去形は「孤立した過去の事実」を表すという性質も持っており、「継起する事件を単過 [=単純過去形, 筆者註] で叙しながら、一連の事件に関係のない事実を複過 [=複合過去形, 筆者註] で述べる」という共起した場合の役割り分担もあるからである。

過去形だけで叙述しない理由の一つとしては、各時制本来の存在意義から、時間の流れを明確に表現したいということが考えられる。過去形や現在形など1つの時制による叙述では、現実時間軸上の過去を振り返った事実の列挙しか感じられない。しかしながら時間の概念である過去・現在・未来が揃うことで時間の流れが発生する。そして時間の流れは出来事に物語的展開を付与する。つまりさまざまな時制の共起によって、歴史叙述に生き生きとした劇的な印象効果を与えるのである。ここにも歴史叙述的時間軸の導入の有効性が認められるだろう。そしてそこでFHは、ある出来事に関する一連の物語的叙述の最終地点を表す働きをしている。これは4.2.3節で観察した、FHは開かれた過去を表すという機能とも関係している。複数の潜在的 가능성이暗示され、その中のFHによって選択された一つの出来事の方角へ進むという未来の展望は、そこを最終地点とみなすことに妥当性があり、またある出来事に関する一連の物語的叙述の盛り上がりを表すとも言える。なぜなら、第1章で確認した単純未来形のモデル用法や上記でMaingueneauが述べているように、単純未来形にはモダリティが内包されているため、一連の流れの最終点をそこに定めFHを用いたということには書き手の主観的側面が反映されており、そこに歴史事実を配置していると言えるからである。

Benveniste (1966) は過去叙述について、「この三つの用語、「物語」と「出来事」と「過去」とは、平等に強調される。これは、物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある特定の時点に生じた事実を提示するものである。」⁵⁹と指摘しているが、少なくとも過去形・現在形・未来形が生起する歴史叙述においては、書き手の介入が認められ、そこでは主観性が生じていると考えられる。そしてこのことは、従来の研究においてはFHは単純未来形の用法の一つとして分類されているが、FHは単純未来形の統辞論的一用法というレベルでのみ機能するものではないことを示すだろう。

⁵⁹ « Ces trois termes, « récit », « événement », « passé », sont également à souligner. Il s'agit de la présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit. » (Benveniste, 1966 : 239)

以下、コーパスの実例に即して過去時制との共起の事例を検討してみよう。はじめに、「半過去形」との共起から見ていくことにする。

- (24) Or, selon Louise Michel, le comité de Montmartre (toujours lui) et plusieurs bataillons ouvriers exigeaient cette offensive. Elle était à coup sûr possible. Les trois itinéraires sur Versailles (par Châtillon, par Sèvres, par la côte de Picardie) n'étaient gardés que par quelques contingents de gendarmes, endiguant le reflux de l'armée en retraite. Versailles ne disposera de troupes fraîches et en bon état moral qu'à partir du 2 avril. Pendant plusieurs jours, avec 20 bataillons, quelques canons et mitrailleuses, le Comité central pouvait prendre Versailles sans grandes difficultés. « *Il fallait immédiatement marcher sur Versailles* » (Marx).

(LPC 第5部2章：281-282)

ところで、ルイズ・ミシェルによれば、モンマルトルの委員会（いつもこの委員会だが）と労働者大隊のいくつかは、この攻撃を要求した。攻撃は確実に可能であった。ヴェルサイユに向かう三つの道筋（シャティヨン経由、セーヴル経由、ピカルディの丘経由）は、退却中の軍隊が引き返すのを食いとめるために割り当てられた数の憲兵が守っているだけだった。ヴェルサイユが、あら手の士気良好な部隊をもつのは、四月二日以後のことになるだろう。中央委員会は、二〇大隊と数門の大砲、霰弾砲をもって、数日でさしたる困難もなくヴェルサイユを占領することができたのである。「すぐさまヴェルサイユに向かって進軍しなければならなかったのだ」(マルクス)。(LPC 和訳書『下』:132)

まず、à partir du 2 avril（四月二日以後）という日付によって局所性が示されている。さらに、半過去形が多く共起していることにより、過去の状況の描写が基調になってくるくでありであることが分かる。ここで、1箇所だけ FH を用いることにより、局所的な先取りの効果が見られる。前節の(18)で見たのと同じように、ne ... que によって時間副詞が焦点化されており、その効果の基盤になっていると言える。また、歴史的現在を介さず半過去形から FH へと続く文脈から、歴史的現在基調の文連鎖で使われるよりもより距離感がある、大きな飛躍性が感じられる。

次に、「単純過去形」との共起も見てみよう。

- (25) Pendant les années suivantes, la lutte politique se déroule en grande partie autour de la Commune, de la réhabilitation des Communards et de l'amnistie. Les légalistes (Clemenceau), les républicains centralistes (Gambetta), les conciliateurs (la franc-maçonnerie), les centristes et opportunistes bénéficièrent de la conjoncture, c'est-à-dire du sacrifice des Communards, mais ce n'est qu'un aspect mineur de l'histoire. La république bourgeoise fut consolidée le 30 janvier 1875, puis en février 1876 par les élections générales. Cette république d'abord conservatrice, recevra lentement un certain contenu démocratique. (LPC 第7部2章:397)

続く何年かのあいだ、政治闘争の大部分はコミューンをめぐり、コミューン派の復権と特赦をめぐって展開する。合法主義者（クレマンソー）、中央集権的共和主義者（ガンベッタ）、和解派（フリーメイソン）、中央派、日和見主義者などが、このような情勢から、すなわちコミューン派の犠牲から利益を得たが、しかしこれは歴史の小さな局面にすぎない。ブルジョア共和政は一八七五年一月三〇日、ついで一八七六年二月の総選挙によって強化された。この共和政は最初は保守的であったが徐々に一定の民主主義的内容を受け入れることになる。(LPC 和訳書『下』:346)

継起的な単純過去形による描写は、歴史的現在による叙述と平行関係にあるため、テクスト的な機能は前節で見た歴史的現在の事例と類似している。(25)の例も前節で検討した段落の末尾に生起するFHであり、そのテクスト的効果は同様であると言える。最後に、「複合過去形」との共起の例を見ておこう。

- (26) Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement, véritable conseil de guerre, qui ne se séparera que vers 2 heures du matin, au moment où vont commencer les opérations, arrête le dispositif militaire. M. Thiers est arrivé depuis deux jours à Paris. A Paris, il n'a trouvé que 12 000 hommes armés (la division Faron) plus 3 000 gendarmes. Il a

immédiatement obtenu de Bismarck l'autorisation de porter l'armée à 40 000 hommes. Il doit se présenter le 20 mars devant l'Assemblée nationale. Cette échéance approche. Thiers est pressé d'agir. (LPC 第5部2章: 236)

この間に(零時), 実際上の作戦会議である政府の一会議が軍隊の配置を決定する。この会議は作戦がいよいよ開始される瞬間, 午前二時頃にやっと解散されるだろう。ティエール氏は二日前からパリに来ていた。パリで彼が見つけたのは, 武装した一万二〇〇〇人の兵士(ファロン師団)と三〇〇〇人の憲兵だけであった。彼はただちにビスマルクから, 軍隊を四万人に引き上げる許可を獲得した。彼は三月二〇日に, 国民議会の前に姿を現わさなければならない。この期限は近づいている。ティエールは行動を急ぐ。(LPC 和訳書『下』: 46)

複合過去形は, 文脈上歴史的現在とも共起している。歴史的現在が視点をおく t_0^1 における結果状態を複合過去形が示しており, 視点が共通しているため, 歴史的現在と協調し合って FH を用いる基盤を提供していると言える。(26) では, 歴史的現在で示されている *arrête le dispositif militaire* (軍隊の配置を決定する) に視点としての基準時が定位され, その時点よりも *depuis deux jours* (二日前) にティエール氏が来ていたという結果状態を複合過去形で表している。そして同じ基準時よりも後の事行を FH によって示しており, 共通の基準時を通して複合過去形との共起が成り立っている。ここでの FH は *vers 2 heures du matin* (午前二時頃) という時間の提示によって局所性が示されると同時に「軍隊の配置を決定する」という基準時とは断絶しているため, それに付随する飛躍性が見られる。

以上より, 過去形との共起が可能な仕組みや, 現在形と同様, 過去諸時制との共起においても飛躍性やテキスト的效果が確認できることが明らかになった。

4.3. *Jeanne d'Arc* にみられる歴史的未來

本節では, 4.2 節で提示した先行研究を踏まえたうえでの単純未來形と歴史的未來に関する意味的機能・テキスト的效果, 時制構造的仕組みなどに関する仮説が, 一つのテキスト固有のものではなく他の歴史テキストにおいても適用されるものであるかを検証していく。手順は 4.2 節同様, 以下のとおりである。

まず、4.3.1 節でコーパス *Jeanne d'Arc* における「歴史的未來を示さない単純未來形」の例を 3 つの分類ごとに挙げ、つづいて 4.3.2 節では「歴史的未來を示す単純未來形」の典型的な例を提示する。さらに詳細な例文観察として、4.3.3 節では歴史的現在との共起、4.3.4 節では過去諸時制との共起の事例を分析する。

4.3.1. 歴史的未來を示さない単純未來形

まず、コーパス観察の結果、4.2.1 節で提示した I, II, III の 3 つの特徴を踏襲した分類が可能であることが明らかになった。ひとつづつ例を挙げていこう。

I : 「予告」に相当する

- (27) [...] L'Université de Paris a subi là une défaite ; elle ne manque pourtant aucune occasion de se présenter comme étant l'autorité suprême au sein du monde chrétien. Ayant une fois pour toutes pris le parti de la double monarchie sous l'égide du roi d'Angleterre, elle s'est sentie atteinte par les victoires de Jeanne ; sa première manifestation en l'occurrence remonte à l'année précédente, lorsqu'un clerc de l'Université de Paris avait adressé à Jean Gerson une réponse au traité sur les victoires de Jeanne composé par ce dernier — réponse violente, qui accuse Jeanne de sorcellerie et lui fait grief — détail sur lequel on **aura** l'occasion de revenir ! — de porter un habit d'homme. (JDA 第 6 章:66)⁶⁰

パリ大学はこの時点で敗北を喫していた。だが大学はあらゆる機会を捉えて、自分がキリスト教世界の最高権威であることを主張してやまなかった。イギリス国王の支配下の英仏二元王国の構想を明瞭にする立場からは、ジャンヌの勝利によって傷つけられたと感じていた。大学のジャンヌに絡む最初の意見の表明はジャンヌ逮捕の前年まで遡っており、パリ大学の一学者はジャン・ジェルソンに書簡を送って、ジェルソンがジャンヌの勝利に関してこの少女に好意的

⁶⁰ 以降、コーパスである *Janne d'Arc* からの例文の場合には、JDA と表記することとする。

な一文を記したのに反論を加えている。それはかなり激しい反論であり、ジャンヌを妖術使いと弾劾し、彼女に男装の罪を非難するものであった、詳細は改めて触れる機会があろう。(JDA 和訳書第 6 章 : 84)

I はこの後叙述する一連の出来事に関して読み手に予告する場合に用いられる FS である。ただし、本コーパスでは明確に予告を示す例は確認されなかった。その理由は、本コーパスがジャンヌ・ダルクの裁判記録や証言などの公式史料に基づいて歴史事件を継起的に叙述するタイプのものだからであると考えられる。

II : 書き手による意見・意図

(28) Nous ne nous **donnerons** pas ici la peine de réfuter après tant d'autres historiens cette prétendue naissance bâtarde, qu'à l'époque où les bâtards étaient tout naturellement élevés dans la famille paternelle, on aurait éprouvé le besoin de cacher ! et celui de faire élever l'enfant dans un village vraiment lointain prévoyant de la faire intervenir lors d'événements que nul ne pouvait imaginer à la date de cette naissance supposée ! [...]

(JDA 第 2 章 : 14)

私はここで、なんら正当な根拠のない〈ジャンヌ私生児説〉に対して、多くの歴史学者に続いてここで反論を加えるつもりはない。だが正式の結婚によらない庶子でも、父親の家庭の中で育てられるのが不思議でない時代に、その子を隠す必要があったとでも言うのであろうか。また、遠い片田舎でその子を育てさせたのは、オルレアン包囲という事件の際に遠路はるばると舞台に登場させる効果をねらったのこともかもしれないが、この娘が生まれたと称する一四〇七年という時点で〔この説によれば、少女の実の父とされるオルレアン公ルイは一四〇七年に暗殺されているので、ジャンヌ誕生の年もこの年まで繰り上げられている〕⁶¹、オルレアン包囲という事件が予想できたとも言うのであろうか。(JDA 和訳書第 2 章 : 22)⁶²

⁶¹ [] 内は、訳者が付け加えたものである。

⁶² 以降、本論文において JDA 和訳書とはペルヌー（著）・高山（訳）（1997）を用いる。

(29) [...] Cependant les questions relatives au signe donné au roi, à l'ange et la couronne, et surtout aux « voix » amènent à parler de la question cruciale : la soumission à l'Eglise. Or on peut suivre à travers le procès les incertitudes de Jeanne elle-même et tout aussi bien celle des juges pour qui ce point est essentiel : ils ne **pourront** la déclarer hérétique, si elle se soumet à l'Eglise.

(JDA 第7章 : 85)

しかしながら国王に示された〈兆^{しるし}〉, 天使と王冠, とりわけ〈声〉にかかわる訊問の結果は, 極めて重大な問題に通ずるものであった。〈教会への服従〉という問題である。審理全体を通じて窺えることは, ジャンヌ自身がこの点について十分な理解をもっていないことと, また判事たちも重大なこの問題についてのジャンヌの態度を確実に把握しきれなかったことである。もしジャンヌが教会に服していれば, 彼らはジャンヌを異端とはできなかつたであろう。

(JDA 和訳書第7章 : 108)

IIは出来事に対する書き手の意見や立場を表すときに用いられるが, 本コーパスではしばしば確認された。明確な根拠のない仮説ではなく, ジャンヌ・ダルクの研究者として綿密な史料分析を行った結果に基づく疑問や意見を述べている。

III : 手紙・裁判記録などの引用内で生起

(30) [...] ; elle a envoyé aux Anglais deux lettres de sommation, la première le 22 mars – c'est la fameuse « lettre aux Anglais » conservée dans le texte du procès de condamnation –, l'autre à une date imprécise ; elle en **enverra** une troisième depuis Orléans. Elle se considère donc comme prête pour le combat : « Menez-moi à Orléans et je vous **montrerai** le signe pour lequel j'ai été envoyée », répondait-elle à ceux qui l'interrogeaient à Poitiers, lui demandant un « signe de sa mission ».

(JDA 第3章 : 39)

ジャンヌはイギリス軍に二通の勧告の書簡を送っており, 最初の一通は三月二十二日の日付で – 有名な「イギリス人への書簡」で「処刑裁判」の記録に収録されている –, もう一通の日付ははっきりしない。彼女は後に三通目をオル

レアンからも送ることになる。ともかくこうして見ると、彼女は三月下旬の時点で既に戦場で戦う心の準備を整え終わっていたものと言えよう。「オルレアンに連れて行って下さい。私はそこで私が神から送られたという兆をお見せします。」ポワティエで彼女を審査し、「彼女の言う使命の兆」を要求する人々に対し、彼女はこう答えている。(JDA 和訳書第 3 章 : 51)

- (31) C'est finalement le 7 juillet 1456 que, dans la grande salle du Palais archiépiscopal de Rouen, les commissaires pontificaux, présidés par l'archevêque de Reims, Jean Jouvenel des Ursins, rendirent leur sentence : « Nous disons, prononçons et déclarons que ledit procès et sentence, entachés de dol, de calomnie, d'iniquité, de contradictions, d'erreurs manifestes en fait et en droit, y compris l'abjuration, les exécutions et toutes leurs conséquences, ont été, sont et **seront** nulles, invalides, sans valeur et sans autorité. » [...]

最後は一四五六年七月七日、ルーアンの大司教公邸の広間において、ランス大司教ジャン・ジュヴネル・デ・ジュールサンの司会のもとに、教皇任命の委員たちが判決を行った。「我らは、前裁判および判決は事実認識においても手続きにおいても、欺瞞、中傷、不正、矛盾、および明白な過誤を犯すもので、被告の改悛、断罪、およびそれらの全結果を含め、過去・現在および未来にわたり⁶³ 無効であり、否認されるべきものであることを宣言し、布告する。」

(JDA 和訳書第 9 章 : 147)

Ⅲは会話や判決からの引用内に見られる FS であるが、本コーパスが基盤としているのは裁判記録のためジャンヌの証言記載が多く、この FS は頻繁に確認された。(30) の太字ではない下線部 enverra は FH だが、分類 I・II・IIIには当てはまらずジャンヌが行った事行を客観的に叙述している。この例により FS と FH の違いがよく分かる。

⁶³ 和訳書では「過去および現在にわたり」と翻訳されており、原文の « ont été, sont et seront » という FS による未来をより正確に表すために本論筆者が加筆した。

4.3.2. 歴史的未來を示す単純未來形

第2章の統計表からも明らかなように、*Jeanne d'Arc*ではFSと比べFHの生起が全体を通して圧倒的に多い。まず本節では本コーパスにおけるFHの生起の典型的な例から概略的な特徴を観察し、詳しい分析は4.3.3節以降で行うこととする。

次の例(32)を見てみよう。

- (32) Pierre Cauchon commença alors la lecture de la sentence définitive ; à ce moment Jeanne l'interrompt : « Elle dit qu'elle voulait observer tout ce que l'Eglise ordonnerait et que nous juges voudrions dire et arrêter, disant qu'en tout elle obéirait à notre ordonnance » ; on lui ordonne alors de signer une cédule d'abjuration. Le secrétaire du roi d'Angleterre, Laurent Calot, s'approche d'elle avec un feuillet probablement rédigé en français, une courte cédule — sept à huit lignes —, précise l'huissier Jean Massieu qui probablement l'a eue en main à ce moment-là ; ce n'est donc pas celle qui figurera plus tard dans le texte du procès de condamnation mis en forme par les soins de Thomas de Courcelles pour l'évêque de Beauvais, car elle tient une page d'impression ordinaire, soit une cinquantaine de lignes. [...]

(JDA 第7章 : 93-94)

ピエール・コーションはここで最終判決の朗読を始めた。この時、ジャンヌはこれを妨げた。裁判記録はこう記している。「被告は、すべて教会が命ずること、我ら判事が述べ、決定すること、すべて我らの命じ、望むところに従う旨を申し立てた」と。そこで彼女は、改悛の誓約書に署名するよう命じられた。イギリス国王の秘書ローラン・カロなる者が、おそらくはフランス語で記された紙片を持ってジャンヌに近づいた。多分この際に、この紙片を手にする機会があった廷吏のジャン・マッシュューの証言するところでは、それは短い書状 — 七、八行 — であった。したがって、後にトマ・ド・クールセルのピエール・コーションへの配慮から、処刑裁判の記録の中に掲載されることになる書状はこの紙片ではない。掲載されているものはおよそ五十行、普通の印刷でも一ページに及ぶものである。

(JDA 和訳書第7章 : 116)

ここでは、語りの現在形基調によるジャンヌ・ダルクの裁判の最終判決に関する叙述が展開されている。その中で、共起している時間副詞 **plus tard** (後に) からも分かるように、FH で表されている事行は継起的な展開から跳躍している。また、その事行は **qui** 節内であることから飛躍的展開が挿入のマーカーと親和性があることが確認できる。このように、展開から離脱し飛躍して事行を先取りするのが FH であると 4.2 節のコーパス LPC で観察され、その先取りとは現在、歴史的に重要と認められる出来事、歴史的価値のあるものに行われると考えられるが、本コーパスでも同様の機能として FH が用いられているようである。

つづいて、様々な動詞時制が用いられるパラグラフの中においても生起する例⁶⁴ を見てみる。

- (33) Cependant, Jeanne ne perd pas de vue son but premier et insiste à nouveau pour que le dauphin se rende à Reims : ce qui fait le roi, c'est le sacre ; et pour le peuple il n'y aura [FH] plus d'hésitation lorsque Charles aura été sacré ; elle-même ne l'appelle que : le dauphin ; c'est après le sacre qu'il deviendra [FH] son roi. Perceval de Cagny qui fut le familier du duc d'Alençon et plus tard raconta son histoire nous montre pendant cette seconde quinzaine de juin Jeanne « fort marrie du long séjour » que le roi faisait à Gien. C'est dans cette ville que l'armée du sacre allait être rassemblée [FP-IMP-H] ; « bien que le roi n'eût pas d'argent pour payer son armée, tous les chevaliers, écuyers, gens de guerre et du commun ne refusaient pas d'aller le servir pour ce voyage en la compagnie de la Pucelle, disant qu'ils iraient partout où elle voudrait aller ». Elle eut certainement à renouveler ses instances et à le presser d'aller recevoir ce sacre après lequel il n'y aurait [Cond-H] plus de doute pour les populations ; de fait, selon

⁶⁴ (33) における各未来時制の略号は、すべて本論筆者による加筆である。FH は歴史的未來 (futur historique), FP-IMP-H は迂言的未來形の *aller* が半過去形におかれる *allait+infinitif* の歴史的用法 (futur périphrastique imparfait historique), Cond-H は時制的用法を表す条件法の歴史的用法 (conditionnel historique) を示した略号である。迂言的未來形と条件法に関しては第 5 章、第 6 章で用語の略号を詳細に説明している。前未來形と条件法過去に関しては本論文の分析対象ではないため、未來表現ではあるが太字として扱わないこととする。

l'usage, le roi expédia de Gien les invitations aux bonnes villes du royaume et à ses vassaux ; [...]

(JDA 第4章 : 51-52)

だがジャンヌは当初からの目標を見失うことなく、王太子が直ちにランスに赴くことを改めて主張した。人を国王にするもの、それはカペ王家以来の伝統のランスの教会で行われてきた、国王の身を神聖化する聖別の儀式である。王太子シャルルが聖別されれば、一般大衆の中にはもはや迷いはありえない [FH]。今はまだ彼女自身もシャルルを〈王太子〉としか呼べないのであり、シャルルが彼女にとって〈国王〉となる [FH] のは聖別・戴冠の儀式を終えてからのことである。アランソン公に親しく、後に同公の生涯の記録を著すことになるペルスヴァル・ド・カニーは、その年代記で、王太子のジアンにおける六月後半の「長い滞在」をジャンヌが無念がっていた状況を伝えている。ジアンの町は聖別式に向かう部隊の集結地であった [FP-IMP-H]。「国王は軍隊に支払うための資金を持っていなかったが、あらゆる騎士、準騎士、兵士その他の人々も、乙女が同行するこの遠征に、国王のために参加することを拒まず、口々に乙女の望むところならどこへでも赴くと述べた。」確かに彼女はその主張を繰り返す、聖別式を受けに行くことを急がせて、これが終われば大衆に迷いはなくなる [Cond-H] ことを説かねばならなかったが、ともかくもその結果、国王は慣例に従い、ジアンから聖別・戴冠式典への招待状を国王に忠誠な町々や国王の家臣団に送ることとなった。

(JDA 和訳書第4章 : 65)

様々な時制と FH との共起が成立する理由に関しては 4.2 節で論じ、*La Proclamation de la Commune* でも見られた事実である。(33) では、現在形のほか、過去形では単純過去形・半過去形が用いられ、未来を表す時制としては FH 以外に前未来形・迂言的未来形 (aller の半過去形 + infinitif) ・条件法が確認できる。

まずジャンヌにとっての王太子の聖別の儀式に関することを現在形基調で叙述され、そこに FH が生起している。二度目の FH である deviendra の後からは王太子が聖別の儀式の前にジアンという街に滞在し、その出来事を過去形基調で語っている。この中では、未来表現として迂言的未来形や条件法が用いられている。この 2 つの時制は第 5 章、第 6 章で FH と比較しながら詳細に分析するため、本章では存在の提示のみとする。

3.3.節で提示しているような discours (「話」) / histoire (「歴史＝物語」) に関する Benveniste や Maingueneau の定義は様々な他の先行研究でも踏襲されているが、このようにコーパスの実例を詳細に観察すると、実際には用いられる動詞時制のバリエーションはより豊かであることが分かる。

そのことを示すために彼らへの反論として、さらにもう 1 例提示しておこう。

- (34) Les questions et réponses se succèdent sans résultat ; Jeanne précise :
« De ma venue en France, je dirai volontiers vérité ; mais je ne dirai pas tout... », et encore : « Je dirai volontiers ce que je sais, mais encore pas tout. Je suis venue de par Dieu et n'ai que faire ici, et demande qu'on me renvoie à Dieu de qui je suis venue. » Enfin Cauchon devra se contenter d'un demi-serment : « Je suis prête à jurer de dire vérité sur ce que je saurai touchant le procès : je le jure. » (JDA 第 7 章 : 77)

ここで続けられた問答も結論は出ないままに、ジャンヌはこう明言している。「私がフランスに来たことに関してはすすんで真実を言いますが、全部は申し上げません……。」さらに「自分の知っていることはすすんで答えますが、まだ全部は申し上げられません。私は神から遣わされてきた者であり、この法廷でなすべきことはないのです。私を遣わされた神の許に送り返してくれるよう要求します」と、述べている。ついにコーションは次のような不完全な宣誓で満足せねばならなくなった。「裁判に関係することで私が知っていることについては、真実を申し上げるつもりです。」 (JDA 和訳書第 7 章 : 98-99)

従来ならば、「歴史＝物語」における未来時制は prospectif として allait + infinitif とともに devoir の半過去形 devait + infinitif を用いるのだと主張されているが、(34) から分かるように、ここでは devoir が活用し devra [FH] を使用している。したがって、devoir で未来を表現したいときは devait + infinitif を用いるという理論だとしても、これには現在形基調だからだという反論も考えられるが、その場合には、そもそも「歴史＝物語」では現在形の代わりに単純過去形を用いるとされているところから考え直さなければならないだろう。これらを成立させる理論が、4.2.節で提示した現実時間軸と歴史叙述的時間軸という 2 つの時間軸の導入とそれによる視点の変化である。

実際に *devait + infinitif* を未来表現として使用している例が全く存在しないというわけではないが、少なくとも本論文の様々なコーパスではあまり出現しない。次の (35) はその貴重な例である。

(35) L'Université de Paris avait informé de l'événement le collège des cardinaux ; la plupart d'ailleurs de ceux qui avaient participé au procès se mettaient en route aussitôt après pour gagner la ville de Bâle où devait se tenir le concile dont il avait été décidé qu'il serait désormais périodiquement réuni : l'Université de Paris en particulier avait tenu à ce que l'Eglise fût désormais gouvernée par un collège de prélats, une sorte d'assemblée parlementaire. (JDA 第 8 章:101-102)

パリ大学はローマ教皇庁の枢機卿会議に事件を報告していた。ジャンヌの裁判に参加したメンバーの多くは間もなくバーゼルの町に向かって出発していた。ここでは今後は定期的に行われることになった教会公会議が持たれることになっていた。パリ大学はとりわけ、ローマ・カトリック教会は今後高位聖職者の会議で運営されることを強く主張してきていた。ある種の議会制である。

(JDA 和訳書第 8 章 : 124-125)

ここでは、過去形基調の叙述であり単純過去形・大過去形・半過去形・条件法も出現する。そのため、Benveniste らが主張する *histoire* (「歴史=物語」) 理論をもっとも具現化している例であろう。過去形が基調のため、未来形を表す表現は *prospectif* の *devait + infinitif* となっている。

本コーパスにおいても *FH* が用いられる傾向が高いことやその仕組みに関して観察したが、以降では様々な例文に即して 4.2 節と同じ主張が成り立つのかを検証し、本論文でこれまで示した理論や明らかになった特徴が妥当なのかを確かめていく。

4.3.3. 歴史的現在と歴史的未来の共起

本節からは、4.2 節で提示した理論に基づきながら、意味論的・語用論的・文体論的視点から詳細な分析を行っていく。まず本節ではいくつかの歴史的現在基調、つまり歴

史叙述的時間軸上で展開するパラグラフから一部を抜粋し、FHの「飛躍的展開」とそれによる効果を見ていこう。

(36) [...] Le 27 mars, puis encore le 2 mai, quand on lui demande : « Voulez-vous vous en rapporter et vous soumettre au concile général ? », elle répond : « Vous ne m'en tirerez pas autre chose » ; il est vrai que cette réponse agacée survient après un long et pénible interrogatoire et encore :

« Voulez-vous vous soumettre à notre seigneur le pape ?

— Menez-moi à lui et je lui répondrai. »

Elle répétera son appel en une circonstance plus solennelle et pour elle définitive, le 24 mai, au cimetière Saint-Ouen : « Je m'en rapporte à Dieu et à notre seigneur le pape. » (JDA 第7章 : 86-87)

三月二十七日、次いで五月二日に再び、「教会公会議の判断には従うか？」という質問にこう答えている。「あなたがたはこれ以上私から答えを引き出せないでしょう」と。この挑発的とも言える答弁は、だが長く耐え難い訊問の挙げ句のことで、さらに問いかけがある。

「おまえは我らの首長である教皇には服従するのか？」

「私を教皇様のところに連れて行って下さい。そしたら教皇様にお答えします。」

彼女は、五月二十四日のサン・トゥーアン墓地という、もっと厳粛な、彼女にとっては危機的な状況の中でもこの訴えを繰り返している。「私は神に、そしてわが^し主教皇様にお任せ致します」と。(JDA 和訳書第7章 : 109)

まず、FHの生起は立脚元となる歴史的現在に依存しているが、ここでは三月二十七日、五月二日の事行に現在形を定位し、継起的に淡々と叙述している。そこから時間副詞を伴い継起的展開から離脱し描写のスピードが速まり、五月二十四日のFHの事行へ跳躍している。また、ここで跳躍しFHを用いることで、五月二日から五月二十四日の答弁までたとえばこれまでの主張を否定するなど複数の潜在的候補が存在するなかで、訴えを「繰り返す」という事行の方向へ展開が進んでいくことを提示している。このように、継起的から逸脱し跳躍することで潜在的な選択肢が存在する可能世界の存在も同

時に暗示し、叙述の方向性を提示するという機能がこの例からも確認できる。

つづいて、展開の区切りとして機能している FH の例を見ていこう。

- (37) Deux mois se passent ainsi, sans aucune action décisive : quelques sorties tentées sans conviction par les assiégés auxquels répondent quelques tentatives également indécises des assiégeants ; entre-temps cependant la garnison d'Orléans est renforcée par l'arrivée de Louis de Culant avec quelques combattants et d'un contingent d'Ecosse que dirige leur connétable John Stuart : son frère William ne tardera pas à le rejoindre. De leur côté les Anglais se trouvent renforcés par l'arrivée de John Falstolf qui leur apporte, avec quelque douze cents combattants, des vivres et « ravitaillements de guerre ». [...]
- (JDA 第 3 章 : 33)

こうして、なんら決定的な行動が見られぬまま、二ヵ月が過ぎた。籠城側からは何度か小規模な出撃が試みられているが、これに応ずる包囲側の反応も同じように決定的なものではなかった。しかしそのうちに、ルイ・ド・キュランが、若干の騎兵とジョン・スチュアート指揮下のスコットランド兵の一隊を率いて到着して、オルレアンの守備隊は補強された。ジョンの弟のウィリアムも 間もなく加わった。イギリス側もジョン・フォルスタフの到着で強化された。彼はおよそ一万二千名の兵士と、食糧および「武器・糧秣」をもたらした。

(JDA 和訳書第 3 章 : 44)

ここではすべて歴史的現在を用いて出来事を追っている叙述になっている。FH の生起より以前はフランス側の状況が叙述展開なされている。決定的な行動がないまま時が過ぎ、やがてジョン・スチュアート率いる隊の合流により守備隊が強化され、彼の弟もまもなく加わることになった。この「まもなく加わる」ことを、フランス側の一連の流れの最終地点として設定し FH を用いて表している。これは FH の飛躍という性質が一連の展開の終わりのマーカーとしての機能することを可能にしている。FH 以降の叙述を見てみると、これまでのフランス側が終わり、イギリス側の状況の語りへに転換していることが分かる。

さらに、段落の終わりに用いられることで同様に一連の流れの最終地点を表す例が (38) である。

(38) [...] Des scènes de violence se déroulent au mois de mai 1413, à la suite desquelles est promulguée l'ordonnance qu'on appelle cabochienne, laquelle n'arrête pas le flot des violences de moins en moins contrôlées. Finalement, au pouvoir bourguignon, dans Paris, succédera celui des Armagnacs : [...] De plus en plus d'ailleurs se succèdent les batailles réglées et cette fois ce sont les cités de Bourgogne qui sont menacées : après Compiègne et Soissons, Laon, Saint-Quentin, Péronne et en général l'Artois ; c'est à Arras que la paix sera conclue entre Armagnacs et Bourguignons le 4 septembre 1414. (JDA 第1章 : 7-8)

一四一三年五月、多くの衝突が行われた末に、一般に「カボッシュ党の勅令」と呼ばれる法令が發布されたが、この勅令も、しだいに統制からはずれて頻発する暴力沙汰を止めることはできなかった。遂にパリでは、ブルゴーニュ公一派に代わってアルマニャック派が支配者となった。(…) しかも戦闘状況も好転し始めて、ブルゴーニュ派に組していた諸都市、まずコンピエーニュとソワッソンが、続いてラン、サン・カンタン、ペロンヌが、さらにフランス東北部のアルトワ地方全域も脅威を受け始めた。かくて一四一四年九月四日になって、アラスでアルマニャック派とブルゴーニュ派間の和議が成立することになる。

(JDA 和訳書第1章 : 12-13)

まず、一つ目の FH である succédera は Finalement と共起し、多くの衝突があったがついにパリではアルマニャック派が支配者となったという流れの着地点になっている。さらに FH を用いていることで飛躍しているが、未来という時制本来の曖昧さから、違う派が支配者となっていたかもしれないという跳躍先の方向の潜在的可能性も感じられる。その後二つ目の FH は段落の最後に用いられているが、時間副詞も伴い、最終的に 2 つの派閥の争いがどの方向へ進むのか一連の展開の最終結果を表している。もし歴史的現在が用いられていた場合、出来事ごとに継起的に焦点が当てられるため大きな展開が感じられず、そのため、一連の流れのおわりではなく途中であるとの印象を与え

る可能性もある。歴史的現在でも成り立たないわけではないが、FH を用いると叙述の盛り上がり地点を示唆し、物語的統一効果が発生すると考える。

また、FH が連続で用いられる例も複数確認された。以下がその例である。

- (39) Désormais alliés, Anglais et Bourguignons étaient maîtres de la France au nord de la Loire, et déjà l'on ébauche des projets de mariage qui renforceront les alliances : le fils de Jean sans Peur, Philippe, comte de Charolais, épousera Michèle de France qui lui apportera pour dot les châtelainies de Péronne, Roye et Montdidier, ainsi que le pays de Sancerre. Jean, duc de Bedford, frère du roi d'Angleterre, épousera Anne, fille de Jean sans Peur ; quant à Henri V de Lancastre lui-même, il est question dès ce moment de ses fiançailles avec Catherine de France. (JDA 第 1 章 : 10)

これ以後、同盟関係になったイギリス軍とブルゴーニュ派がロワール川以北のフランスの支配者となった。両者の結合を固める幾組かの結婚話が進められた。まず、ジャン無畏公の息子のシャロレー伯フィリップ〔後のフィリップ^{ル・グ}善良公〕とシャルル六世の王女のミシェールの結婚で、王女の持参金はペロンヌ、ロワ、モンディディエの城主支配地とサンセール地方であった。いま一つは、イギリス国王の弟のベッドフォード公ジャンとジャン無畏公の娘のアンヌとの組み合わせであった。ランカスター家の国王ヘンリー五世自身に関しては、この時からシャルル六世の王女カトリーヌとの婚約が画策され始めていた。

(JDA 和訳書第 1 章 : 15)

ここでは、結婚による結びつきの強化の話が立てられるという事行に歴史的現在を定位し、そこに立脚して結婚に関する事行に連続して FH が使用されている。これにより、後に到来する未来の結婚話という枠組みを虚構的に構築し、一つの世界として読み手にまとめて鮮明に提示することができる。これを本論文ではフラッシュ・フォワード (flash forward) 機能と呼んでおり、叙述の中の FH は事行を先取りする性質を有することから未来が到来するとも言え、つまり未来の牽引効果がこの機能を可能としている。

そのあとのランカスター家の国王ヘンリー五世の結婚話が現在形に戻るのは、国王自身の結婚という他より重要な事行のため虚構＝想像世界ではまとめないと考えられ、

FH が立脚した「幾組かの結婚話が立てられる」という歴史的現在の事行 ébauche (進められる) とつながっている。これは、共起する時間副詞 dès ce moment (この時から) がこの事行を指していることから明らかである。

さらにもう 1 例連続して生起する例を見てみる。

- (40) De même, Jeanne reçoit-elle une « maison militaire » à l'égal des autres capitaines : elle a désormais un intendant, Jean d'Aulon, qui plus tard sera sénéchal de Beaucaire, deux pages, un nommé Raymond qui sera tué lors de l'assaut devant Paris et Louis de Coutes qui survivait et déposera lors du procès en nullité, et deux hérauts nommés Ambleville et Guyenne.

(JDA 第 3 章 : 38)

またジャンヌは他の指揮官たちと同様に「指揮官用従者」を与えられていた。まず、これ以後専任の従者として付き添うジャン・ドーロン。彼は後に南フランスのボーケールの奉行となった。次に二人の小姓で、一人はレーモンという名で、パリ攻撃の際に戦死しており、もう一人はルイ・ド・クートで、ジャンヌより後まで生きて「処刑判決破棄審理」で証言をしている。さらにアンブルヴィルとギュイエンヌという二人の伝令がいた。(JDA 和訳書第 3 章 : 50)

この例文では厳密には長い一文の中、また qui 節という従属節内ですべての FH が用いられているため、flash forward と言えるか微妙ではあるが、ひとりひとり別人の説明に用いられているためピリオドで区切られているものと同様であると考え、連続生起と捉えた。ここは記号文字 : (deux-points) があるため分かりやすく、まずすべての FH は、はじめの avoir 現在形に立脚している。ジャンヌの専任従者 3 名についての説明であり、彼らひとりひとりが後にどのような未来の方向を辿るのかを plus tard (後に) , lors de (～の時) という時間表現との共起とともに FH で表している。3 名の従者の未来を、構築した一つの虚構的世界にまとめて先取りして読み手に提示している。

この例で特殊であるのは、連続した FH の途中にある survivait (生き残った) であり、出来事と時制の前後性を考慮するとパラグラフのどの歴史的現在にも立脚していないことが分かる。つまり、この部分だけ書き手が存在する現実時間軸 t_0 からの回顧的な視点によって「生き残った」という挿入となっているのである。

最後に、現在形基調での叙述における、上記の現実時間軸からの挿入である過去形の事行と、歴史叙述的時間軸上での過去形の事行の違いを見て、時間軸への理解を深めておこう。

- (41) C'est dire que les jours qui suivirent le sacre de Reims durent être pénibles à l'impatience de Jeanne ; à Corbeny où il touche les écrouelles comme l'avaient fait ses prédécesseurs immédiats, c'est à une promenade militaire que se livre Charles devenu roi tandis que, à Paris, Bedford fait fortifier la cité ; le Valois tout entier est désormais rallié à la couronne et l'armée royale, sans encombre, se retrouvera à Saint-Denis, le 26 août ; entre-temps un défi du duc de Bedford avait été lancé en date du 7 août. [...] (JDA 第4章 : 55)

確かにランスの聖別式に続く一時期は、ジャンヌの忍耐心にとって辛いものであったろう。コルブニーの町ではシャルルは国王たちの先例に倣って、^{るいれき}瘰癧患者を治癒するため彼らの首に手を触れていた。王位を手に入れたシャルルが身を任せたものは散策的行軍にすぎず、一方パリではベッドフォード公が町の武装を強化していた。パリ北方のヴァロワ地方はすべてフランス国王に服していたから、国王軍は妨害を受けることなく八月二十六日にはパリ郊外のサン・ドニに到達した。この間の八月七日、ベッドフォード公から挑戦が行われていた。

(JDA 和訳書第4章 : 69)

ここでは聖別式後の国王の行動に関して歴史的現在で継起的に叙述しており、八月二十六日にサン・ドニに到達することを流れの最終地点として定位し、時間的跳躍を行うため FH を用いている。

過去形に関しては、はじめの avaient fait (していた) という大過去形はその前の動詞 touche (触れる) が立脚点となっている。そして二つ目の avait été lancé (行われてた) という大過去形は八月七日という時間副詞が示しているように、語りの最終地点の FH の事行が行われた八月二十六日よりも時間的に過去に起こった事行であるため、過去形が用いられている。これらは (40) の現実時間軸 t_0 からの過去形とは異なり、歴史叙述的時間軸上の t_0^1 を基準時とした時間の流れに従った結果であるため、同じ過去形という時制であっても生起する構造や視点の向きは同じではないのである。

次の節では、過去形基調に生起する FH を観察するため、上記の 2 つの時間軸の移行を実例に即しながらより詳細に分析する。

4.3.4. 過去諸時制と歴史的将来の共起

過去諸時制との共起は、避けて通れないものである。歴史的現在基調の叙述でも過去形基調も叙述でも、一つのテキストである限りは事行の前後関係を表すためにも過去諸時制が用いられないテキストは存在しないであろう。しかしそこに未来表現として FH が生起するかはテキストによるところがあるのかもしれない。そこで、本コーパスでも過去諸時制基調と FH の共起の例を検索したところ、多くの例が確認された。

まず、半過去形・大過去形・複合過去形が生起する以下の (42) を見てみよう。

- (42) Au soir du 5 mars 1450, Guillaume Bouillé qui déjà avait rédigé un mémoire sur le cas de Jeanne de sa propre initiative et sans doute très peu de temps avant d'avoir été chargé de l'enquête, tenait en main les preuves suffisantes de l'iniquité du premier procès. Il jouera par la suite un rôle essentiel dans le déroulement de la procédure, comme l'ont établi les éditeurs de son mémoire, P. Doncoeur et Y. Lanhers (1956).

(JDA 第 9 章 : 112)

既に自分の発意で、かつ調査を命ぜられる僅か前にジャンヌに関する『回想録』を作成していたギヨーム・ブイエは、一四五〇年三月五日の夕方には、前の裁判の不正を語る十分な証拠を手にしていた。彼はこれ以後新しい裁判の推進に重要な役割を演ずることになる。その経緯はこの『回想録』を編纂・公刊した（一九五六年）ポール・ドンクールとイヴォンヌ・ラネールによって明らかにされている。

(JDA 和訳書第 9 章 : 137-138)

4.2 節で論じたとおり、過去時制・未来時制が用いられるには基準時としての現在形の存在が必須である。ここでは、その現在形は非明示であり、現在形を介さず半過去形から FH への叙述であるため、大きな飛躍性が感じられる。また、それに伴い歴史叙述的時間軸と現実時間軸の 2 つの時間軸の移行が確認できる。

まず、前者の時間軸で FH の事行までを叙述しており、この FH は前節でも見られたように、時間副詞 *par la suite* (これ以後) を伴って、「彼がのちに重要な役割を演じることになる」という展開の方向性を提示しながら同時に跳躍することで区切りを示している。以降は後者の時間軸上で書き手の現在と接触し、書き手の知識を伴い回顧的な視点から「経緯が明らかになった」という事行を述べている。これは FH の事行 ***jouera*** (演ずることになろう) と複合過去形 ***ont établi*** (明らかにされている) の事行の時系列の矛盾からも明白である。

次に、歴史的現在を介した例を観察してみる。

- (43) Quoi qu'il en soit il y ***eut***, au village de Domremy, à la frontière même de la Lorraine, une petite fille qu'on ***appelait*** Jeannette et qui ***était née*** de ce ménage de « laboureurs » de l'endroit nommés Jacques et Isabelle ; très probablement elle ***était*** la quatrième d'une famille comptant déjà trois fils, Jacquemin, Pierre et Jean, mais non la dernière de la famille, puisqu'elle ***eut*** une sœur nommée Catherine, sans doute plus jeune qu'elle. A l'époque on ne ***tient*** pas encore, sinon de façon tout à fait exceptionnelle, le registre paroissial qui ***sera rendu*** obligatoire au siècle suivant par l'ordonnance de Villers-Cotterets (1539). [...]

(JDA 第 2 章 : 15)

それはともかく事実は次のとおりである。ロレーヌも国境いの片田舎にあったドンレミ村に一人の小娘がいて、人々にジャネットと呼ばれていた。彼女はジャックとイザベルというこの土地の「農民」夫妻の家の生まれであった。史料から推定できるところでは、たぶん彼女は夫妻の四人めの子で、彼女の上にはジャックマン、ピエール、ジャンという三人の兄がいた。だが末っ子ではなく、おそらく彼女より年下のカトリーヌという妹を持っていたはずである。例外的な場合を除いて、この時代には教区の信者名簿が整えられて保存されることはなく、これが義務づけられるのは次の世紀の「ヴィレール・コトレの勅令」

(一五三九年) 以後のことである。

(JDA 和訳書第 2 章 : 23)

ここでは、単純過去形基調に半過去形・大過去形も用いられ、つづいて現在形を介して FH が生起している。ジャンヌの家族構成を過去形基調で叙述しており、信者名簿に

関してからは現在形基調となっている。過去形基調では現実時間軸上からの書き手による知識を伴った回顧的視点により叙述されており、単純過去形は現在時と接触がなく、点行為を客観的に表すものである。それに対してつづく現在形基調は時間軸が移行し、歴史叙述的時間軸上での語りとなり、視点も基準時からの前望的なものになる。したがって、(43)における FH は信者名簿がまだ保存されていないという ne tient pas encore を基準時として、次の世紀という時間副詞を伴って前望的に跳躍している。すでに何度もこれまでの例文に出現し以前も触れたが、流れから断絶して跳躍する FH は補足説明を挿入して行う qui 節と親和性が高いため、ここでも共起している。

時間軸の移行により視点が変化することで、読み手に対して百科事典のような事実の「継起性」ではなく「物語性」⁶⁵ を付与することを可能にしているというのが本論文の考えである。

つづいて、過去形基調における先取りの未来の例を挙げよう。

(44) Jeanne ce soir-là fut logée près de la porte Renard chez Jacques Boucher, trésorier du duc d'Orléans ; ses deux frères Pierre et Jean, qui étaient venus la retrouver à Tours, y furent aussi logés. La maison avait été conservée à peu près telle quelle jusqu'à la guerre de 1940, après laquelle elle fut reconstituée.

Jeanne n'y passera d'ailleurs que dix nuits exactement, les neuf jours ayant été employés à libérer la ville, avec une rapidité qui fit la stupéfaction de l'Europe entière. Journées longues pourtant à son impatience. Le 30 avril, les 1^{er}, 2 et 3 mai, elle doit la réfréner et ne peut engager l'action. [...]

(JDA 第3章 : 41)

ジャンヌはこの夜、オルレアンの城壁のルナール門の近くにあるオルレアン公の財務官ジャック・ブーシェの家に宿泊した。トゥールの町に妹を訪れて以来同行することになった兄たち、ピエールとジャンもここを宿とした。この家

⁶⁵ 本論文において「物語性」とは、Benveniste が述べている、まるで出来事自身が物語るかのような物語世界の自立性を指し、この自立性は、ある出来事の後に別の出来事と言う連鎖が時間順に語られる 1) 継起 (succession), 2) 出来事の継起間には展開が存在している, 3) 発話時点 t_0 とのかかわりがない, という 3 つの特性から成り立っている用語として用いている。

は一九四〇年の戦争で破壊されるまで、ほとんど昔のままの姿で残っていたが、現在再び建て直されて市立のジャンヌ記念館となっている。

ジャンヌがこの家に宿泊したのは正確には十泊でしかない。滞在中の九日間は町の解放のために費やされたが、この速度はヨーロッパ中を驚かせた。だが、使命の実現に性急なジャンヌにとっては長い日々であった。四月三十日、五月一日、二日、三日は、急ぐ気持ちを抑えねばならず、行動には出られなかった。

(JDA 和訳書第 3 章 : 53-54)

この例文でもはじめは単純過去形が基調となっているため、現実時間軸からの回顧的な叙述であると考えられる。しかし途中で FH が段落のはじめに用いられており、今後のジャンヌがとる出来事の展開の方向性を先取りして提示している。このように、飛躍的展開として先取りの機能を有する FH は、段落のはじめに用いられることも少なからずあることが本コーパスにおいても確認できる。FS の予告用法と類似しているが、FS の場合は書き手の主観的様相とともに予告されるが、FH では発話行為が塗りつぶされている、まさに、4.2.4 節で Benveniste (1966) を引用したように「出来事自身がみずから物語るかのようである。」とすることができ、出来事自身が予告しているように用いられる。

この段落はじめの FH は歴史叙述的時間軸の原点 t_0^1 (非明示) を立脚点として生起している。歴史叙述的時間軸は現実時間軸の過去 t_{-1} に相当するため、現実時間軸上の fut logée (ブーシェの家に宿泊した) という過去の事行を歴史叙述的時間軸に置き換えて非明示の基準時 t_0^1 としていると考えられる。このように 2 つの時間軸は密接に関係しており、叙述の途中で時間軸の移行は特異なものではないと言えるだろう。FH の段落は以降歴史叙述時間軸上の現在形基調で叙述されている。ただし、FH と同一文内の qui fit という単純過去形は、この一部分だけ現実時間軸からの回顧的視点の挿入となっている。

このように、時間軸を導入することによって視点の方向性も関係しながら、なぜ様々な時制が共起できるのかの説明が難しくなくなるのである。これは 4.2.節で提示した仮説であったが、本コーパスでも同様に機能している。

さらに、段落のはじめのあとは段落のおわりに用いられる例文を見てみよう。

- (45) [...] : quelques semaines seulement après son élection il était assiégé dans Rome par les Colonna et devait quitter la ville, ne pouvant faire face à l'insurrection. Peu de temps après il était frappé d'hémiplégie ; pourtant, ses facultés intellectuelles demeurant intactes, il n'allait pas moins se maintenir durant seize années qui furent celles de ce long concile de Bâle. On devait y voir les juges de Jeanne se transformer en juges et adversaires du pape ; Jean Beaupère, Nicolas Loiseleur, Nicolas Midy, Pierre Maurice, plus encore Pierre Cauchon lui-même et Thomas de Courcelles **compteront** parmi les plus acharnés. Ce sont eux qui élisent contre Eugène IV le dernier anti-pape de l'histoire, Amédée de Savoie, laïc et père de neuf enfants, qui à plusieurs reprises s'était entremis dans les débats de l'Assemblée ; par la suite une délégation qui avait à sa tête le Bâtard d'Orléans devenu comte de Dunois, le compagnon de Jeanne d'Arc, le **convaincra** de démissionner.

(JDA 第 8 章 : 102)

教皇に選出された直後の数週間、彼 [= エウゲニウス四世、筆者註] はローマでコロンナ党によって閉じ込められ、反乱に対処できずに町を捨てなければならなかった。やや経ってから病のため半身が不随となったが、知的活力は失われなかった。なお十六年間教皇位にあったが、これは長期にわたったバーゼル公会議の時期に当たっている。この会議にはジャンヌ裁判の判事や陪席者が教皇の敵として臨むことになる。ジャン・ボーパール、ニコラ・ロワズルール、ニコラ・ミディ、ピエール・モーリスに加えてピエール・コーションおよびトマ・ド・クールセルまでが出席して、最も激しい論敵となっている。エウゲニウス四世に対抗して、非聖職者で九人の子供の父であるアメデ・ド・サヴォワを担いだのは彼らであり、この人物は数度にわたって会議の席にも参加している。その後、ジャンヌ・ダルクの仲間であり、後にデュノワ伯となったオルレアンの私生児を中心とする代表団が説得して辞退させている。

(JDA 和訳書第 8 章 : 125)

この例では、はじめは過去形基調で回顧的な語りとして展開されている。しかし二度目の記号文字 ; (point-virgule) を境に内容がバーゼル公会議のジャンヌ関連の話に変

化するとともに現在形基調に移行している。現実時間軸での回顧的な語りではすでに達成された出来事として展開が閉じられており現在時に位置する読み手と過去の登場人物との距離感があったが、現在形基調へ移行し前望的な時制 FH を導入したことで、読み手は自身を歴史叙述的時間軸の原点 t_0^1 に置いて一緒に展開を追っているように、展開が開かれたものとして感じられる効果があると考えられる。

ここでも最後に *par la suite* (その後) を伴った FH により時間的に飛躍し、会議のジャンヌ関連の展開が進む方向を提示し未来へ重心がかけられて段落が終わっている。

最後に、FH が連続して生起する例を過去形基調においても確認しておこう。

- (46) [...] : *c'était un oncle du roi légitime Richard II, ce Jean de Gand, duc de Lancastre, qui ne manquait aucune occasion de susciter des embûches à son neveu au point qu'à sa mort celui-ci avait banni son fils Henri et l'avait dépouillé de tous biens, se faisant de lui un ennemi irréconciliable. Henri, profitant des difficultés de Richard après une expédition incertaine en Irlande, saura rallier à son tour les mécontents et ranimer la popularité dont son père avait joui ; il s'installera finalement sur le trône d'Angleterre à la place de l'infortuné Richard II, réduit à abdiquer et qui meurt misérablement dans sa prison au mois de février 1401. Henri IV de Lancastre, après avoir ainsi usurpé le trône, devra déployer toute son énergie à faire face aux malaises intérieurs ; [...]* (JDA 第 1 章 : 8)

正統な国王リチャード二世の叔父であるランカスター公ジョン・オブ・гентは、ことあるごとに甥の失脚をはかった。このためジョンが死んだ時、リチャードはジョンの子供ヘンリーを追放して財産を没収した。が、その結果この人物を決定的な敵に追いやることになった。すなわちヘンリーは、成果の乏しいアイルランドへの遠征の末にリチャードが困難な立場に置かれたのに乗じて、不満分子を糾合し、かつて父が得ていた人気を取り戻した。ついにリチャード二世に代わってイギリス王位についた。王位を追われたリチャードは憐れにも一四〇一年二月に獄中で死去した。王位篡奪に成功したランカスター家のヘンリー四世も、以後は国内不安に対処することに全精力を注がざるをえなかった。

(JDA 和訳書第 1 章 : 13)

この例では全般にわたって過去形が基調になっているが、歴史的現在を介さずに3つのFHが連続して生起し主節に用いられている。FHの文以前は現実時間軸、以降は歴史叙述的時間軸での語りとなっている。前者ではリチャード二世とランカスター家の争いの様子を回顧的に語り、後者ではFHで事行を表しているランカスター家ヘンリーの逆襲と結果がスピードを伴って一気に一つの虚構的世界として眼前に提示されている。これは flash forward 機能である。

また、実際には「リチャードが困難な立ち場に置かれた」ことがFHの基準時となっていると文脈から読み取れるが、この例文では必ず存在するFHの立脚元の歴史的現在が明確に明示されていないため、第3章図3-2で示しているように単純過去形からFHへ語りの時間軸と時制、両方の大きな飛躍を表しているように感じられるであろう。

以上より、4.2節のコーパス *La Proclamation de la Commune* で提示したFHがどの時制とも共起が成り立つ構造的仕組みやFH特有の諸機能に関する仮説が、本コーパス *Jeanne d'Arc* においても適用可能であり、また同様のテキスト的特徴も確認できることが明らかとなった。一方で、細かなテキスト的特徴の傾向を観察すると、挿入マークとの親和性が高い点は共通しているが、前者のコーパスで頻繁に観察された丸括弧 (parenthèses) やダッシュ記号 (tiret, -) といった補足説明の挿入記号とFHの共起が本コーパスではほぼ確認できず、本コーパスでは que・qui 関係節内にFHを用いた挿入が目立つという相違点も見受けられた。FHに関してではないが両コーパスに共通していた点として、過去形基調の叙述であっても複合過去形メインによる語りは見られないという点も挙げておくことにする。

4.4. 訃報 (nécrologie) にみられる歴史的未來

本節でも4.2節と同じ手順を踏みながらコーパスを検討していく。まず、2.3.2節で述べたとおりに *Libération* から抜粋したFSを用いて執筆されているすべての訃報を、「歴史的未來を示さない単純未來形」と「歴史的未來を示す単純未來形」の2つに分類する。4.5.1節では「歴史的未來を示さない単純未來形」を例示し特徴を挙げ、4.5.2節で「歴史的未來を示す単純未來形」を観察する。さらに他の動詞時制との共起による統辞論的、文体論的特徴をつづく節で検討していく。4.5.3節では歴史的現在との共起、4.5.4節では過去諸時制との共起を分析する。

4.4.1. 歴史的未來を示さない単純未來形

まず、歴史テキストと同様に、訃報においても生起する単純未來形のすべてが FH として機能しているわけではない。コーパスの観察より、4.3.1 節で述べた歴史テキストの区分分けと同じ特徴が観察されたが、比較的昔の過去の歴史的事実について語る歴史テキストとは異なり、訃報で述べられている出来事は書き手と読み手が存在している「今」と時間的乖離がほとんどないため、区分分けをする際に基づく内容は少し異なる。訃報においても FS の特徴は、以下の I, II, III の 3 つに分けられると考える。

I : 「予告」に相当する

- (47) Les hommages à Johnny Clegg ont plu, mercredi, sur les réseaux sociaux et dans la presse nationale, venus d'artistes, de personnalités, de politiques de tous bords et de milliers de citoyens ordinaires. Beaucoup ont célébré sa carrière et son engagement, d'autres évoquaient leurs souvenirs, lors d'un concert ou lorsqu'une de ses chansons avait accompagné un événement important de leur vie. « *Il a laissé une marque indélébile dans le pays, a déclaré Pule Mabe, le porte-parole du Congrès national africain (ANC), le parti au pouvoir. Sa musique continuera à résonner à nos oreilles pendant de nombreuses années.* » Les funérailles **se dérouleront** dans l'intimité, à la demande de la famille, mais une cérémonie devrait permettre au public de payer ses derniers respects au chanteur. (*liberation.fr, 17/07/2019*)⁶⁶

水曜日、ジョニー・クレグへの賛辞がソーシャルネットワークや全国紙に殺到しました。アーティスト、著名人、あらゆる立場の政治家、そして何千人もの一般市民から来ています。彼のキャリアや献身を称える人もいれば、コンサートや人生の重要な出来事に彼の歌がともにあった時の記憶を思い起こした人もいます。「彼はこの国に消えない足跡を残しました。と与党であるアフリカ民族会議 (ANC) のスポークスマン、ピュール・マベ氏は語った。彼の音

⁶⁶ https://www.liberation.fr/planete/2019/07/17/mort-de-johnny-clegg-l-afrique-du-sud-pleure-une-icone_1740592/

楽はこれから何年も私たちの耳に鳴り響き続けるでしょう。」葬儀は遺族の希望により内輪で行われることになりましたが、一般の人々がこの歌手に最後の敬意を表すことができるセレモニーが予定されています。⁶⁷

II : 書き手の意見・感情

- (48) **Enigmatique.** L'année dernière, il avait rejoint le service de presse de l'ambassade de France à Bangkok. Il était apaisé de l'angoisse du pigiste, mais le métier de journaliste lui manquait. Arnaud était un bon compagnon de reportage. On se souviendra d'un fou rire devant les pingouins enfermés dans une pièce glacée du zoo désert de Naypyidaw, en Birmanie en 2012. Il avait l'allure d'un éternel ado, mince, toujours l'air rêveur, dans la lune, énigmatique, souvent un béret de titi parisien vissé sur la tête. On le pensait secret, discret, timide, et tout à coup il sortait une blague absurde, avec un goût prononcé pour l'humour des années 70, à la *Charlie*. Puis, il repartait, avec un petit sourire en coin. C'est ce sourire-là que l'on gardera en mémoire. Salut Arnaud.

(*liberation.fr*, 29/04/2019)⁶⁸

「謎めいた人物」。去年、彼 [=アルノー、筆者註] はバンコクにある在フランス大使館のプレスオフィスに加わった。フリーランスとしての苦悩からは解放されたが、ジャーナリストという職業が恋しくなった。アルノーは良き取材仲間だった。2012年、ビルマのネピドーの閑散とした動物園の氷の部屋に閉じ込められたペンギンを前に笑いだしたのを覚えている。彼は永遠の10代のように細い外見をしていて、いつも夢見がちで、ぼんやりとしていて、謎めいていて、よくパリの若者のベレー帽をかぶっていた。私たちは、彼は秘密主義で控えめで恥ずかしがり屋だと思っていたが、*Charlie* 誌では、70年代のユーモアのセンスが際立ったばかげたジョークを急に放っていた。そして、片隅にち

⁶⁷ 以降、*Libération* から引用した記事の和訳はすべて本論筆者によるものである。

⁶⁸ https://www.liberation.fr/planete/2019/04/29/mort-d-arnaud-dubus-ancien-journaliste-de-libe-a-bangkok_1724098

よつとした笑顔を携え去っていった。私たちはこの笑顔を忘れないでしょう。
さようなら、アルノー。

- (49) Jean-Louis Chrétien est mort vendredi, à 9 h 28 du matin, à l'âge de 66 ans. Encore peu connu du grand public, il a préféré l'ombre à la lumière. Fuyant sa propre image, quoiqu'il n'eût rien à cacher, il se refusait par principe à revêtir une de ces renommées factices qui se bâtissent à coups de bonnes fortunes médiatiques. Philosophe et poète, il voulut l'être sans se soucier de le paraître. Maintenant que son corps a péri et que peut éclater dans son ordre la grandeur de l'esprit qui l'habitait, il **faudra** bien se rendre à l'évidence : il fut l'un des plus grands de sa génération.

(*liberation.fr*, 02/07/2019)⁶⁹

ジャン＝ルイ・クレティアンが金曜日の午前9時28分に66歳で亡くなった。まだ一般にはあまり知られていないが、彼は光よりも影を好んでいた。隠すことは何もないのに、自分のイメージから逃れ、メディアの財力で作られた偽物の評判を身につけることを拒否するのが主義だった。哲学者であり詩人でもある彼は、見た目を気にすることなく、ありのままにいたいと思っていた。彼の肉体が失われ、宿っていた精神の偉大さがそれ自体の次元で輝けるようになった今、私たちは明白な事実受け入れるべきでしょう：彼は同世代の偉大な人物の一人だった。

Ⅲ：インタビューやコメントなどの引用箇所内に生起

- (50) L'année dernière, Richard Williams était l'invité d'honneur du festival d'Annecy. Depuis une vingtaine d'années et la sortie de son livre *The Animator's Survival Kit*, il était devenu un des grands professeurs d'animation. « *Si on partage un savoir-faire avec vous, vous pourrez travailler vite et mieux*, avait-il dit. *Moi, il a fallu que j'arrache des conseils*

⁶⁹ https://www.liberation.fr/debats/2019/07/02/mort-du-philosophe-et-poete-jean-louis-chretien_1737588

un par un. Les animateurs de l'époque ne partageaient pas leurs secrets comme ça. C'étaient des tueurs. » (liberation.fr, 18/08/2019)⁷⁰

昨年のアヌシー映画祭では、リチャード・ウィリアムズが主賓として招待された。20年ほど前 *The Animator's Survival Kit* という本を出版して以来、彼はアニメーションの偉大な教授の一人となっていた。「もし私たちがあなた方とノウハウを共有すれば、あなた方は早くより良い仕事ができるでしょう、と彼は語っていた。私は、アドバイスを1つ1つ自分からもぎ取っていかねばなりません。当時のアニメーターは、そんな風に自分たちの秘密を共有しませんでした。彼らは [若いアニメーターにとっては] 人殺し同然でした。」

- (51) C'est cette ouverture, cette audace, et ce respect de l'autre que l'Afrique du Sud retiendra de Johnny Clegg. « *Nous continuerons à chanter Asimbonanga. Nous continuerons à travailler pour construire le pays de ses rêves* », a tweeté la Fondation Nelson-Mandela à l'annonce de sa disparition. (liberation.fr, 17/07/2019)⁷¹

南アフリカがジョニー・クレグから学ぶことになるのは、このオープンさ、大胆さ、そして他者への敬意だ。「私たちは *Asimbonanga* を歌い続けます。私たちは、彼の夢見た国を作るために努力を続けます」と彼の死の発表に対してネルソン・マンデラ財団はツイートした。

I で挙げた FS は、読み手が記事を読んでいるだろう時点を現在という基準点におき、そのうえで今後起こるとされている事柄について述べる場合に使用されている。1.2 節で挙げた時間的用法のひとつ、「予告」である。II は亡くなった人物に対する書き手の考えや感情を伴った意見などを述べる際に用いられている FS であり、1.2 節のモデル用法のいずれかに相当する。この分類内では、われわれを示す On という主語とともに用いている場合が多く見られる。III は亡くなった人物が過去に答えたインタビューや、

⁷⁰ https://next.liberation.fr/cinema/2019/08/18/richard-williams-createur-de-roger-rabbit-pose-un-lapin_1745911

⁷¹ https://www.liberation.fr/planete/2019/07/17/mort-de-johnny-clegg-l-afrique-du-sud-pleure-une-icone_1740592/

亡くなった人物に対する知人によるコメントなど引用箇所内で使用されている FS である。インタビューやコメントは当然その発話時現在に立脚している発言のため、「話」レベルに分類される FS を用いる。

これら 3 つの特徴に区分される FS は、書き手やインタビューなどの主観が排除されておらず、また出来事の発生時が読み手が記事を読む時点、つまり読み手の現在時より後である際に用いられる点から FH とは言い難い。したがって、本論文が掲げる研究目的と合わず、本節においても分析対象として取りあげないこととする。

4.4.2. 歴史的未來を示す単純未來形

ここでは、訃報で用いられる FH を観察していく。まず、FH と FS の違いがわかりやすい例を見てみよう。

- (52) Day étend sa palette au drame, mais toujours musical, aux côtés de James Cagney en gangster dans *les Pièges de la passion* (1955). Elle **se réinventera** ensuite dès les années 60 dans des comédies romantiques dont le sympathique *Confidences sur l'oreiller* (1959), sa seule nomination aux oscars comme meilleure actrice. Son décès **permettra** peut-être de réévaluer une carrière jugée trop lisse. (*liberation.fr*, 13/05/2019)⁷²
- デイは、ドラマにも幅を広げるが、ミュージカル界にも居て、*les Pièges de la passion* (1955年)ではギャング役のジェームズ・キャグニーとともに演じた。その後、1960年代からロマンティック・コメディで**再起を図り**、共感を呼んだ *Confidences sur l'oreiller* (1959年)で唯一アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた。彼女の死によって、順調すぎると思われていたキャリアが見直されることになるかもしれない。

ここでは 2 つの単純未來形が用いられているが、前者は実際には FH であり、後者は FS である。これを理解する手順としてまず、このコーパスがどのようなジャンルのもの

⁷² https://next.liberation.fr/cinema/2019/05/13/mort-de-doris-day-actrice-pas-si-lisse_1726759

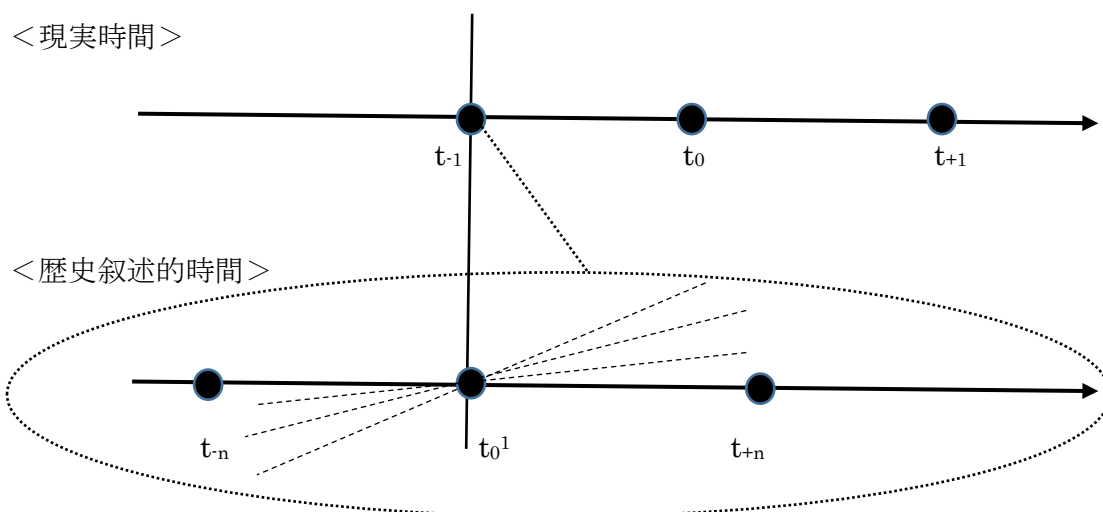
かを思い出す必要がある。訃報は読み手から見て直近の死に関する記事であるため、後者の「彼女の死によって」より、今という現在に位置する読み手から見て時間的に後の出来事を FS を用いて述べていることが分かり、この FS の使用には妥当性がある。一方前者は亡くなったデイの経歴を追っている文脈の中で、「その後、1960年代から」再起を図り、どのような結果に至ったかという叙述となっている。この言表連鎖を踏まえると、再起を図ったのは読み手から見て既に起こった過去の事実であり、書き手の考えなどでもないため、FH であることが導かれる。このように、FS と FH は分かりやすくパラグラフや段落で区切られて用いられているわけではなく、また同じパラグラフ内でも両者が近い位置に生起することも稀ではないため、文脈から読み取ることでも明らかになることもある。したがって、従来の短文抜粋を用いた研究では不十分であり、テキストのジャンルを踏まえながらより大きな言表連鎖の流れの中で観察する必要があることが分かる。

以降の節では、4.2 節内で提示した歴史テキストにおける各時制の働きの図表を適用し、4.5.3 節で歴史的現在との共起、4.5.4 節では複合過去形、単純過去形、半過去形、大過去形などの過去諸時制との共起を観察し、訃報記事というジャンル上での働きを検討していく。これにより、単純未来形が歴史テキストや訃報といった過去の出来事を叙述するテキストジャンルにおいて、同じような仕組みを持って機能しているのかを明らかにし、歴史的将来の一般化を試みる。

4.4.3. 歴史的現在と歴史的将来の共起

訃報では、分析の結果、歴史的現在を基調とする記事が大半を占めることが確認された。これは、過去時制を基調とする場合が多い歴史テキストとは異なる傾向である。以下では、その理由を探るとともに両テキストの共通点を見出していく。

まず、4.2.4 節で提示した図 4-4 を再度適用してみよう。実際には現実時間の過去 t_1 に位置する出来事を、歴史叙述的時間軸の導入により、疑似的に現実時間の発話時 t_0 に準ずる時点としての t_0^1 に置くことができる。



(※各時間の間隔は決まっていない。また、歴史事実は新発見などによって変わるため点線で潜在性を表す。)

図 4-4：現実時間軸と歴史叙述的時間軸

歴史叙述的時間は、読み手からみて比較的時間的乖離が大きい歴史テキストに限らず、過去の出来事を叙述しているテキストジャンルに属するすべてに適用できるだろう。つまり、読み手の現在から直近の過去に逝去した人物の詳細を語る訃報記事も含まれる。語りの時制として単純過去形を基調とした場合、4.2.4 節で引用したように、Grevisse (1980) は、単純過去形には「現在ともち得る接触を考慮することはない」と述べている。これは、単純過去形は閉じられた時制とも言い換えられるだろう。この現在と接触を考慮しない閉じられた時制基調での叙述は、現在に位置する読み手に時間的乖離の印象をもたらしやすいと考える。したがって、歴史テキストに用いられやすいともいえるかもしれない。一方訃報記事は上記に述べたとおり、読み手の現在から直近の過去に逝去した人物に関する記事であるため、読み手にとって同じ現在に起きた出来事と捉えられ、時間的乖離はほぼなく、読み手自身は当該人物との時間的・心的距離を近く感じる傾向があると思われる。ゆえに、訃報記事では歴史的現在基調の記事が多いと考えられる。ここでも歴史的現在は、読み手の存在する現実時間の現在 t_0 に立脚しているわけではないが、現実時間の t_{-1} との時間的距離は短く、歴史叙述的時間の t_{0^1} へ読み手の意識を移行することにより、心的距離もさらに近く感じるだろう。これが訃報記事と歴史的現在基調との親和性の理由であろう。4.2.4 節の Grevisse から再掲する。

Le passé simple (passé défini) exprime un fait complètement achevé à un moment déterminé du passé, sans considération du contact que ce fait, en lui-même ou par ses conséquences, peut avoir avec le présent. Il n'implique en soi ni l'idée de continuité ni celle de simultanéité par rapport à un fait passé et marque une « action-point ».

(Grevisse, 1980 : 837)

単純過去形（定過去）は過去の定まった時点に全く完遂された事実を示す。その際、その事実が、それ自体によって、あるいは結果によって、現在ともち得る接触を考慮することはない。単純過去形は、それ自体では、ある過去の事実との連続性の観念も、同時性の観念も含意しない

次に、歴史的現在と FH の構造図として提示した図 4-1 と図 4-2 を再び見てみる。4.2.3 節で示したように、歴史テキストにおける歴史的現在での叙述は、歴史叙述的時間軸上で事行を継起的に並べていくものであり、その点的連続性から跳躍した先の事行を述べる際に FH が用いられていることを確認した。この特徴が訃報記事においても同様の機能として見られるのかを、以下でコーパスの実例に即して検討していきたい。

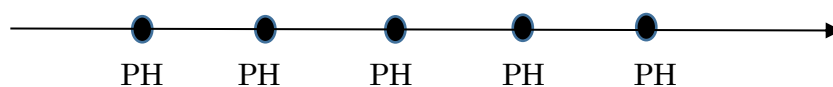
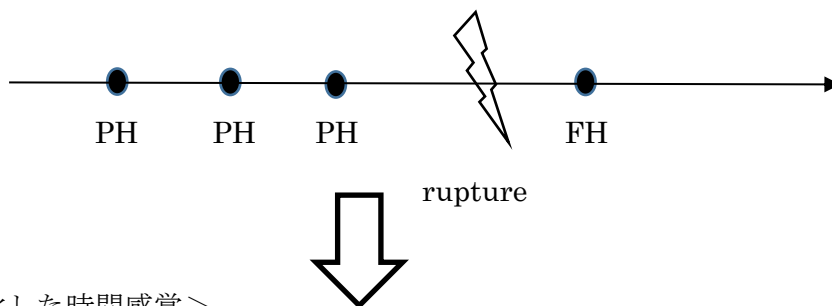


図 4-1：歴史的現在のみによる歴史記述

<時制による時間表示>



<変化した時間感覚>

図 4-2 : FH の牽引効果

まず、段落の終わりでまとめとして現れる FH を見てみよう。

- (53) Fils d'un vendeur de bonbons, Peter Brodbeck est né en 1944 à Lissa (Leszno), en Pologne. Le petit Peter — il changera plus tard de nom à cause d'un autre photographe homonyme — grandit dans la Ruhr, à Duisbourg, près de Düsseldorf, dans une ambiance spartiate, la famille ayant fui la Pologne. Jeune homme, il parcourt l'Europe en autostop, passé par Berlin où il découvre artistes et galeries et s'inscrit aux Beaux-Arts. Rentré à Düsseldorf, dans le vivier de l'art conceptuel où il s' imagine un temps artiste avant de tout lâcher après avoir vu les œuvres de Joseph Kosuth, Peter Lindbergh devient l'assistant d'un photographe commercial « *dénué d'ambition* » qui lui enseigne les ficelles du métier et n'étouffe pas son disciple. Il ouvre alors son propre studio et travaille pour le magazine *Twen* puis pour *Stern*. Puis s'installe à Paris. Il gardera en tête le principe de Joseph Kosuth : c'est l'idée qui fait la photo et non pas le sujet. (*liberation.fr*, 04/09/2019)⁷³

⁷³ https://next.liberation.fr/arts/2019/09/04/peter-lindbergh-regard-sans-fard_1749314

お菓子の販売員の息子であるピーター・ブロードベックは、1944年にポーランドのリッサ（レシュノ）で生まれた。リトル・ピーターは、一彼は、他に同名の写真家がいたため、後に名を変更することになる。家族がポーランドを逃れてきたため、デュッセルドルフ近郊のルール地方にあるデュイスブルクで、スパルタ式的环境の中で育つ。若い頃はヒッチハイクでヨーロッパを回り、アーティストやギャラリーと出会うベルリンを経由して、そこで美術アカデミーに入学する。デュッセルドルフへ戻り、コンセプチュアル・アート発祥の地で、すべてをやめる前に一時期アーティストである自分の姿を想像するが、ジョセフ・コーススの作品を見た後、ピーター・リンドバーグはある「野心のない」商業的写真家のアシスタントとなる。彼はリンドバーグに仕事のコツを教え、弟子を潰すこともしなかった。それから、リンドバーグは自分のスタジオを開き、雑誌 *Twen* や *Stern* の仕事をする。その後、パリに落ち着く。彼はジョセフ・コーススの主義を念頭に置くようになる。：写真を作るのはアイデアであって、被写体ではない。

この段落では、リンドバーグの経歴の動きを出生から継起的に叙述している。しかし段落の最後は行動ではなく「主義」で終わっている。このように一連の流れから離脱し話題転換が行われ、今後どのようになるのかという成り行きを跳躍して先取りをするかたちで **FH** が用いられており、これは **FH** が段落内の展開のまとめの機能を果たしているといえるだろう。また、(53)の初めの **FH** はダッシュ記号 (tired, -) のなかで生起している。この記号文字は地の文から独立して挿入されていること、物語的事行展開と断絶して後に起こる事行を補足説明していることを示す。この記号文字の中で **FH** が用いられているように、断絶し跳躍して事行を先取りするダッシュ記号などの記号文字と同様の機能を有する **FH** は親和性が高い。これは歴史テキストの例でも見られ、訃報記事でも同様に用いられていると確認できる。

つづいて類例を見てみる。

- (54) Dans les années 80, Peter Lindbergh collabore au magazine *Lei* dirigé par Franca Sozzani, une reine de la mode qui prendra la tête de *Vogue Italie*. Le photographe est alors sur des rails. A la fin des années 80, Alexander

Liberman, directeur des éditions Condé Nast, lui commande une série mode. Les clichés ne plaisent finalement pas à la rédaction du *Vogue* américain qui les range au placard. Ils seront publiés un an plus tard, en 1988, lorsque Anna Wintour prendra la tête du magazine avec la ferme intention d'imprimer sa patte. (liberation.fr, 04/09/2019)⁷⁴

1980年代、ピーター・リンダーバーグは、後に *Vogue Italie* のトップとなるファッションの女王、フランカ・ソツァーニに指揮されている雑誌 *Lei* と働く。当時、このカメラマンの仕事は順調だった。80年代末、Condé Nast の編集長であるアレクサンダー・リーバーマンは、彼にファッションシリーズを依頼した。結局、この写真たちは *Vogue américain* の編集部の気に入るところとならず、彼らはクローゼットに入れてしまった。その1年後の1988年には、アナ・ウィンターが自分の技量を示したいという固い意志とともに同誌のトップとなり、それらの写真は掲載されることになる。

ここでは、雑誌の仕事が歴史的現在で継起的に語られており、最後に FH が用いられパラグラフが閉じられている。この例では時間副詞 *un an plus tard, en 1988* (1年後の1988年) を伴って FH が用いられ、明確に時が指定された後の出来事へ跳躍している。このように、継起的な流れと断絶し指定された時点へ視点が跳躍する時間副詞と FH の共起はよく確認される。そして一連の淡々とした説明的な展開を記述していた語り、展開の終わり示す先の未来へと一気に跳躍するため、展開の終着点、つまりパラグラフのまとめとして機能していると考えられる。

また一つ目の FH は、*qui* から始まる説明の役割を果たす関係節内に用いられている。(54) のダッシュ記号という記号文字同様、説明的挿入では地の文の流れを乱さず一時的に補足として未来の事行を先取りすることができるため、FH と共起しやすい。

同様の例をもう一つ見てみよう。

(55) **Androgynie et simplicité**

En 1988, un cliché le met sur orbite commerciale pour une carrière qui

⁷⁴ https://next.liberation.fr/arts/2019/09/04/peter-lindbergh-regard-sans-fard_1749314

durera près de quarante ans : sur une plage de Malibu, il fait poser six filles en chemise d'homme blanche et petite culotte. Les super bombes Estelle Lefébure, Karen Alexander, Rachel Williams, Linda Evangelista, Tatjana Patitz et Christy Turlington ont l'air de s'éclater entre copines, intimes et naturelles. Elles deviendront riches et célèbres. Peter Lindbergh, père des *supermodels*, déniche au crépuscule des eighties l'émotion sans artifice qui caractérisera ses images, à l'instar d'un Bruce Weber ou d'un Paolo Roversi qui adoptent une veine sobre, noire et blanche, pour se démarquer, dans la filiation d'un autre photographe allemand célèbre, Helmut Newton... Kate Moss en fermière nue dans une salopette pour *Harper's Bazaar* en 1994 sera un autre cliché iconique, inspiré de Paul Strand. Là encore, androgynie et simplicité appliquées à une féminité sans fard sont les secrets de beauté lindberghienne. (liberation.fr; 04/09/2019)⁷⁵

「両性具有とシンプルさ」

1988年、一枚の写真が彼 [=リンドバーク, 筆者註] を、40年近く続くことになるキャリアへの商業的な軌道に乗せた：それは、マリブのビーチで、白い男性のシャツと小さいパンツを着た6人の女の子にポーズをとらせた写真。エステル・ルフエビュール、カレン・アレクサンダー、レイチェル・ウィリアムズ、リンダ・エヴァンジェリスタ、タチアナ・パティッツ、クリスティ・ターリントンといったスーパーボム [あだ名, 筆者註] たちは、親密で自然な、友人たちの間で大いに楽しんでいるように見える。彼女たちはお金持ちになり、有名になる。「スーパーモデル」の父であるピーター・リンドバークは、80年代の終わりに、ブルース・ウェーバーやパオロ・ロヴェルシにならって、自身のイメージを特徴づけることになる人工的でない感情を見出した。ウェーバーやロヴェルシは、ドイツの著名な写真家、ヘルムート・ニュートンの系統の中で、自分たちを差別化するために、白黒のシンプルな着想を取り入れた。1994年に *Harper's Bazaar* に掲載されたオーバーオールを着た裸の農民役のケイト・モスは、ポール・ストランドの影響を受けたもう一つの象徴的な写真となる。

⁷⁵ https://next.liberation.fr/arts/2019/09/04/peter-lindbergh-regard-sans-fard_1749314

ここでもまた、飾らない女性らしさを適用した両性具有とシンプルさが、リンドバーギアンの美の秘密となっている。

ここでも **qui** から始まる関係節や時間副詞との共起が確認できる。**qui** の関係節とともに用いられている **FH** は、主節の動詞が歴史的現在であるため、その事行よりも後の出来事だと示すために用いられていることは自明であるが、それだけではない。3.4 節の図 3-5 や 4.2.3 節の図 4-3 のとおり、**FH** はその事行が潜在的選択肢の一つであることを暗示するため、歴史叙述的時間軸上で歴史的現在に沿って淡々と出来事を追っている読み手に、開かれた未来の印象を与える。加えて 4.2.3 節の図 4-2 が示すように歴史的現在から **FH** へのこの視点の飛躍は、読み手にその事行を際立たせる機能を持たせると考える。

同時に、過去を叙述するということは、必ず現実時間軸上からの回顧的視点とともに **FH** が用いられており、現在時基準と過去時基準による視点の二重構造を形成することになっている。この視点の二重構造は、主節と **qui** 関係節という二部的構造と対応している。関係節は主節動詞が存在している以上追加説明の情報と捉えられ、事行を振り返る回顧的視点をともなう **FH** と補足説明の関係節は親和性があると言えるだろう。

さらに、パラグラフの初めでテーマとして、段落の終わりでまとめとして現れる例を見てみる。

(56) **Spectacle total**

Cinq ans plus tard, en mai 1965, Jarman sera ainsi l'un des vingt signataires de la charte originelle de l'AACM, une organisation qui révolutionnera le monde du jazz, en prônant tout à la fois l'émancipation de tous et la responsabilité de chacun. Jarman s'y retrouve d'autant plus qu'il pratique le théâtre et écrit des poésies. C'est d'ailleurs l'une des particularités de son premier disque, *Song For* en 1966 : il déclame d'une voix sombre des textes qui rappellent l'influence d'Amiri Baraka, dans un engagement qui voit plus loin que les termes du nationalisme noir. Le texte de *Non-Cognitive Aspects of the City* est exemplaire de sa vision d'un monde, où tout en critiquant ardemment la ségrégation, il interroge la question du pouvoir, « *noir ou*

blanc ». Cette ligne de conduite sera toujours la même lorsqu'il intègre l'Art Ensemble. (*liberation.fr*; 11/01/2019)⁷⁶

「トータルショー」

5年後の1965年5月、ジャーマンはAACM [= Association For The Advancement of Creative Musicians, 筆者註] の設立趣意書に署名した20人のうちの1人になる。AACMとは、万人の解放と個人の責任を唱え、ジャズの世界に革命を起こすことになる組織だ。ジャーマンは、そこで演劇をしたり、詩を書いたりしていた。以下は、1966年に発表された彼の最初のアルバム *Song For* の特徴のひとつだ。:彼は、黒人のナショナリズムという言葉を超えてみえるアンガージュマンの中で、アミリ・バラカの影響を想起させる歌詞を暗い声で歌っている。 *Non-Cognitive Aspects of the City* という曲の歌詞は、人種隔離を熱烈に批判しながら、「黒人か白人か」という権力の問題を問っている、彼の描く世界の模範となるものだ。この路線は、アート・アンサンブル [=フリー・ジャズ・バンド] に参加しても変わらない。

ここでは、パラグラフの最初でFHが用いられ、続く叙述はFHが用いられている文の事行よりも後に起こったことである。Cinq ans plus tard, en mai 1965 (5年後の1965年5月)と文頭にあるように、明らかに前パラグラフの歴史的現在で語られた事行に立脚している。ここから、文やパラグラフ単位ではなくテキスト全体を観察する必要があることが分かるだろう。

FHはパラグラフの最初で用いられることにより、これまでの事行の流れから時が飛躍した印象を与えるとともに、強調としての機能をもたらすと思われる。補足や挿入という機能よりも、一つの世界を構成し、そのテーマとして機能している。つづく叙述はこのテーマに立脚したものになる。実際に、(56)ではFHを用いた文が基軸となり、これに対応しFHで表される事行より後に起こった事行がつづいて歴史的現在で述べられてる。

また、段落の最後にもFHが用いられているが、それまで現在形で語られてきた事行から飛躍し、後の成り行きを先取りしている。このように、一連の物語的叙述の区切り、

⁷⁶ https://next.liberation.fr/culture/2019/01/11/joseph-jarman-mort-d-un-guerrier-poete-du-jazz_1702322

つまりまとめとしての機能を果たしている。

最後に、複数の FH が連続して生起する例を見てみよう。

- (57) En 1987, Agnès Varda réalise le beau et trop méconnu *Kung-fu master*, histoire d'amour entre une quadragénaire (Jane Birkin) et un ado de 14 ans (Mathieu Demy). Juste avant la mort de Jacques Demy, elle réalise *Jacquot de Nantes* (1990), reconstitution quelque peu académique de l'enfance du cinéaste, qui vaut surtout pour la façon dont elle y monte des extraits de ses films et pour d'émouvants plans sur ses mains et sa peau d'homme malade, même si elle occulte que cette maladie est le sida, ce qui lui fut beaucoup reproché par la suite. Car ce film et, plus tard, *les Demoiselles ont eu 25 ans* (1992) et *l'Univers de Jacques Demy* (1995) contribuent à alimenter une vision capitonée de l'auteur des Parapluies de Cherbourg, assez idéalisée du couple qu'ils formaient. Même si, avec sa fille Rosalie, Varda effectuera un travail essentiel et précieux de restauration et de diffusion des films de Demy, cette mainmise sur sa légende, occultant notamment l'homosexualité de son compagnon, agacera bien des admirateurs. Il faudra attendre les Plages d'Agnès (2008) pour qu'elle évoque les véritables causes de la mort de Demy, affirmant que lui-même avait tenu à ce silence.

(*liberation.fr*, 29/03/2019)⁷⁷

1987年、アニエス・ヴァルダは、40歳の女性（ジェーン・バーキン）と14歳の少年（マチュー・ドゥミ）の愛の物語である、美しいけれどほとんど知られていない *Kung-fu Master* を監督した。ジャック・ドゥミの死の直前、彼女は *Jacquot de Nantes*（1990年）を監督した。この作品は、映画監督の子供時代をやや学術的に再構成したもので、彼の映画からの抜粋方法や、病人としての彼の手や皮膚を撮影した感動的なショットを見せるという方法によって特に価値あるものとなっている。ただし、この病気がエイズであることは隠しているが、これは後に彼女が大いに批判されたことだ。というのも、この作品や、

⁷⁷ https://next.liberation.fr/cinema/2019/03/29/agnes-vara-grande-a-part_1718323

後に発表された *les Demoiselles ont eu 25 ans*(1992年), *l'Univers de Jacques Demy* (1995年) は, *Parapluies de Cherbourg* の作者のイメージを助長するのに貢献し, それは彼らが形成したカップルをかなり理想化したものだからだ. ヴァルダは娘のロザリーとともに, ドゥミの映画の修復と普及という必要かつ貴重な仕事を行うことになるが, 特に彼女の伴侶の同性愛を隠蔽して彼の伝説を支配することは, 多くのファンを苛立たせることになる. 彼女がドゥミの死の真の原因に言及するのは, *Les Plages d'Agnès* (2008年) を待たなければならず, ドゥミ自身がこの沈黙にこだわっていたと述べている.

いくつか過去形も混ざった叙述の段落となっているが, 基調は歴史的現在である. この段落は, ヴァルダの夫であるジャック・ドゥミに関する作品に関する叙述である. 淡々と作品に関して語っているが, それまでの語りの流れから離れ, その先の叙述の方向性であるドゥミの同性愛に関連する未来を最後に連続して FH を用いながら語ることで, 局所的に切り取られた一種の虚構的世界を構築し語りのスピードを上げている. つまり, 4.2.3 節で触れた flash back と類似した機能で未来の先取りした事行をまとめて提示する, flash forward となっている.

以上の歴史テキストでの分析で構築した FH に関する理論や図説に沿って分析してきたが, 訃報記事でも FH は歴史的現在による継起的な事行の列挙から断絶し, 飛躍した先の未来の出来事を局所的に先取りして提示することができ, またその未来の出来事は, 立脚元の歴史的現在時点での複数の未来の潜在的選択肢の一つから定立されているのだと考え得ることを確認した. そして, FH の使用は歴史叙述的時間軸上の視点からの開かれた過去を暗示すると同時に, 現実時間軸上の視点から定立された一つの選択肢とともに叙述の方向性を決定し, 先取りする. そのため, 時間副詞や補足情報を示す記号文字や関係節と親和性があるのだと考えられるであろう. 歴史的現在が用いられているので FH を使用するという一見シンプルに思える事実の裏には, 2つの異なる時間軸での 2つの視点が共存していることにより可能となるという構造があると仮説が立てられるであろう. また, FH は理論上では歴史叙述的時間軸の歴史的現在に必ず立脚することで使用可能となるが, その立脚元は必ずしも前後の文にあるとは限らず, 時にはパラグラフレベルを超えたところに位置していることが確認された. では, その立脚元

の歴史的現在が見当たらない場合は存在しないのであろうか。FHと同様に立脚元の現在形を必要とする過去諸時制との共起とともに、次節でさらに確認していくこととする。

4.4.4. 過去諸時制と歴史的将来の共起

過去諸時制とFHの共起に関しては4.2.4節でその仕組みを理論立て分析した。従来の先行研究では、時制は「話」と「歴史＝物語」に分類分けされているが、それでは説明が難しい場合がある。そこで、2つの時間軸と発話時とは異なる基準点という概念を導入し、説明を試みた。それにより、「話」に属するといわれる過去時制と「歴史＝物語」に属するといわれる過去時制のどちらとも共起可能であると確認した。さらに、さまざまな時制による叙述のテキスト効果の仮説も立てた。ここでは、本論文が提示するFHに関する理論を裏付けるために、歴史テキストと同じ「歴史＝物語」のジャンルに分類されるテキストである訃報記事においても同じ理論で説明可能であるかをコーパスの実例に即して確認していく。

- (58) Le 1 août 1976, le champion du monde 1975 ressort grièvement brûlé au visage et aux poumons d'un accident sur le circuit du Nürburgring, au volant de sa Ferrari dans les premiers tours du Grand Prix d'Allemagne. Passé à deux doigts de la mort (l'extrême-onction lui fut administrée), il est de retour sur les circuits, la tête dans les bandages, six semaines plus tard, là où d'autres auraient abandonné la discipline, à une époque où la F1 était beaucoup plus dangereuse que maintenant, avec de nombreux morts et blessés au cours des années 70.

Mais il laissera le titre à son rival, le Britannique James Hunt, en mettant volontairement pied à terre lors du dernier Grand Prix de la saison, au Japon, en raison du déluge qui s'y abattait. Le duel entre les deux hommes sera porté à l'écran par Ron Howard en 2013 dans *Rush*, dont le scénario avait été relu par Lauda. James Hunt, c'était le beau gosse fêtard et bagarreur, quand Niki Lauda donnait une image d'arrogance et de froideur.

Déterminé, il accordait une grande importance au travail avec ses ingénieurs et à l'analyse, ce qui lui valut le surnom d'« ordinateur ».

(*liberation.fr*, 21/05/2019)⁷⁸

1976年8月1日、ドイツ GP のオープニングラップでフェラーリのハンドルを握ってニュルブルクリンク・サーキット上で事故に遭い、1975年のワールドチャンピオンは顔と肺に大やけどを負いました。死の淵に立たされました（終油が施された）が、6週間後には、彼は頭に包帯を巻いてサーキットに戻っていました。他の人がスポーツをあきらめてしまっていただろう状況で、F1が今よりもはるかに危険だった時代で、1970年代にはレースで多くの死傷者を出していた時代でした。

しかし彼は、シーズン最後のグランプリである日本で、襲い掛かった大洪水のため、わざと地面に足を付け、ライバルであるイギリスのジェームス・ハントにタイトルを譲ることになります。ロン・ハワード監督が2013年に発表した *Rush* で、二人の決闘をスクリーンに再現することになります。ラウダによって脚本がチェックされていて、ジェームス・ハントはハンサムで気性の荒いパーティーボーイで、ニキ・ラウダは傲慢で冷徹なイメージを与えていました。彼は決断力があり、技術者との共同作業や分析を重視していたため、「コンピューター」というあだ名に値していました。

まず、半過去形や大過去形によって構成されている二つ目の段落のはじめで FH が用いられている。どれも立脚する基準時を必要とする時制のため歴史的現在を探すと、一つ目の段落のはじめの継起的な 2 つの文で見られ、つづく条件法過去形と半過去形は時代背景を説明している。「けがを負った 1976 年 8 月 1 日のレース」（歴史的現在）、「復帰した 6 週間後のレース」（歴史的現在）、「シーズン最後のレース」（FH）と事行が継起的なことからも明らかなように、二つ目の段落の初めの FH は一つ目の段落の歴史的現在を基準時としている。ここでも、段落の外に基準時が置かれている例が見られ、文レベルや段落レベルでの観察では不十分なことが分かる。また、二つ目の段落は FH で表されている事行に関することが叙述されている段落となっている。断絶と跳躍により

⁷⁸ https://www.liberation.fr/sports/2019/05/21/formule-1-niki-lauda-l-ordinateur-s-eteint_1728521

継起的な事行の結末としてのマーカーとなると同時に、同性質により事行に局所的に焦点化される FH は、段落やパラグラフのはじめに用いられることでテーマとしての機能を有すると言えるだろう。そしてそこには書き手がどこに重きを置くかという主観的な側面が反映されている。

二つ目の段落では半過去形による描写が多いが、これは周囲の歴史的現在や FH と基準時の関係から、現実時間軸からの回顧的な視点によるものであることが分かる。したがって、現実時間軸の半過去形と歴史叙述的時間軸の FH の並列には時間軸の変化という大きな飛躍がある。現実時間の基準時から振り返る視点では、情報を与えるという説明的な客観性をもち、歴史叙述的時間軸での時の前望的な視点では事行展開を目の前で追う臨場感が強調されると考えられる。

つづいて「単純過去形」との共起も見えていく。

- (59) Pour avoir su se mettre au service des autres, Marcel Azzola n'en fut pas moins à l'initiative d'un vrai renouveau pour son instrument, qu'il dépeussiera patiemment sans ôter la part de plaisir qu'il y a à faire valser les pieds. C'est grâce à lui, entre autres, que ce piano dit du pauvre put entrer au Conservatoire national supérieur de musique en 2002. Avec le jazz, il éprouva tout autant ses qualités d'improvisateur que de compositeur, dans les pas des meilleurs du genre, dont l'esthète virtuose Tony Murena, sa référence, dont il partageait les élans explosifs. En la matière, il sera guidé par son pote d'enfance et complice de toujours, le guitariste Didi Duprat, qui lui présenta Django Reinhardt et l'introduisit plus généralement dans l'univers manouche. Il deviendra bientôt l'éclaireur inspiré d'une nouvelle génération, celle de Richard Galliano, avec lequel il enregistrera même une *Afro-musette* et une terrible *Panique* sur l'album *Paris musette* en 1990. (*liberation.fr*, 22/01/2019)⁷⁹

マルセル・アゾーラは、他人のために伴奏をしていただけではなく、自分の楽器を真に復活させた創造者でもありました。彼は、足のワルツを作らなければ

⁷⁹ https://next.liberation.fr/musique/2019/01/22/marcel-azzola-a-bout-de-soufflet_1704678

ならない喜びを失うことなく、辛抱強く埃を払っていました。いわゆる貧乏人のピアノ [アコーディオン, 筆者註] が、2002年に国立高等音楽院 [の種目に, 筆者註] に入ることができたのは、彼のおかげです。ジャズでは、即興演奏者としての資質と作曲家としての資質が試されました。彼が参考にした美学の巨匠、トニー・ミュレナをはじめとするこのジャンルの最高の人たちの足跡をたどり、その爆発的な衝動を共有しました。彼は、幼馴染で生涯にわたって心の通じ合う仲間であるギタリストのディディ・デュプラに導かれ、ジャンゴ・ラインハルトを紹介され、より一般的なジプシーの世界に触れました。彼はやがて新しい世代を担うスカウトマンになり、リシャール・ガリアーノとは、1990年には、アルバム *Paris musette* で *Afro-musette* と恐るべき *Panique* を一緒に録音しています。

ここでは、出来事を継起的に語るのに単純過去形が用いられている。単純過去形は、Grevisse (1980) や Benveniste (1966) が述べているようにそれ自体に連続性や同時性の概念がなく出来事みずからが物語するという性質を持っており、現実時間軸で用いられる。これと似た性質を持ち平衡関係にあるのが、歴史叙述的時間軸での歴史的現在である。(59) では、基準時となる歴史的現在がなく FH が生起している。このように基準時が明示されない FH の使用は訃報記事では少なくない。これは、歴史テキストと異なり、経歴を比較的短い記事にまとめなければならない訃報記事というテキストジャンルに起因するものであると思われる。il sera guidé (導かれる) という FH は単純過去形基調の中では異質だが、導かれるというのは瞬間的な事行ではなく、少し時間的な長さがあるものに使われるため、FH の持つ焦点化された未来の先取りという機能を利用する意図が読み取れる。このように、何かを叙述するときにはつづく展開を先取りして提示する場合が多々あるが、現実時間軸での過去形を基調とした叙述ではこれを表すことができる時制が存在しないため、時間軸を超えて FH が用いられると考えられる。一般に過去未来と言われる条件法にはこの機能がない。条件法との比較に関しては、第6章で詳しく分析する。他の FH はというと、Il deviendra (…になる) は *bientôt* (やがて) と il enregistrera (録音している) は *en 1990* (1990年に) という、前にも触れた FH と親和性がある時間副詞と共起しており、最後は 1990年という大きな成功が起こった時に飛躍し、物語的展開の結末を示している。

さらに「単純過去形」との共起の類例を見ておく。

(60) « Piano à frissons »

Ce ne sera pas la seule expérience de ce type, même s'il dut longtemps enregistrer des séances où il n'était pas question de prononcer le mot jazz. Marcel Azzola tissa ainsi des ponts entre deux univers où les malentendus n'avaient que trop duré. De Stéphane Grappelli à Christian Escoudé, de Swan Berger à Didier Lockwood, il fut toujours attaché au Paris qui swingue dru. Il n'en était pas moins élégant lorsqu'il s'agissait de ralentir le tempo, comme avec l'emblématique duo qu'il formait depuis des dizaines d'années avec Lina Bossati, la pianiste de son orchestre de bal qui deviendra sa fidèle complice sur scène et sa meilleure amie dans la vie. Sur le « *soufflet à chagrin* » que beaucoup désignent aussi comme le « *piano à frissons* », il pouvait ainsi faire siennes les *Gymnopédies* de Satie, non sans digression mais toujours avec délicatesse, pour paraphraser un de ses plus beaux thèmes. (*liberation.fr*, 22/01/2019)⁸⁰

「スリリングなピアノ」

このような経験は、たとえジャズという言葉が出てこないセッションを長い間録音しなければならなかったとしても、それだけではない。マルセル・アゾーラは、このようにして誤解が長引いていた2つの世界の橋渡しをした。ステファン・グラッペリからクリスチャン・エスクードまで、スワン・ベルガーからディディエ・ロックウッドまで、彼は激しく揺れるパリに常に執着していた。ステージでは忠実な協力者、人生では親友となる社交界のオーケストラのピアニスト、リナ・ボッサティと何十年にもわたって結成してきた象徴的なデュエットのように、テンポを遅くする必要がある時にも彼は劣らずエレガントだった。多くの人が「スリリングなピアノ」と呼ぶ *soufflet à chagrin* で、彼はサティの *Gymnopédies* を自分のものにすることができた。それは本筋から脱線せず常に繊細さがあり、彼の最も美しいテーマの一つを言い換えて説明した。

⁸⁰ https://next.liberation.fr/musique/2019/01/22/marcel-azzola-a-bout-de-soufflet_1704678

(60) のパラグラフのはじめの FH は、Ce ne **sera** pas la seule expérience... (それだけではない) とあるように、話題転換が行われ、ne...pas la seule と共に強調されながらパラグラフのテーマとして機能している。一つの未来展開を提示し、つづく事行たちはこの未来の方向へ向けての叙述となっている。また、単純過去形基調の言表連鎖のなかで qui 関係節内に FH が用いられているが、これはリナ・ボッサーティとの関係が今後どのようになるのかという展開を先取りする未来が補足説明として挿入されている。

次に、「複合過去形」との共起の例を提示する。

(61) Crash de Boeing

La société connaît des hauts et des bas économiquement, et surtout, plus tard, le 26 mai 1991, le crash d'un Boeing 767 lors d'un vol Bangkok-Vienne qui a entraîné la mort de 223 personnes. Un drame qui l'a particulièrement affecté. Lauda Air **sera rachetée** par Austrian Airlines en 2000. L'Autrichien **créera** une autre compagnie, Fly Niki, en 2003, revendue en 2011.

(*liberation.fr*; 23/07/2019)⁸¹

「ボーイングの墜落」

会社は経済的に浮き沈みを経験し、特に後の 1991 年 5 月 26 日には、バンコクからウィーンへのフライト中にボーイング 767 型機が墜落し、223 名の死を引き起こした。この事件は、とりわけ会社にダメージを与えた。Lauda Air は、2000 年にオーストリア航空によって買収されてしまう。このオーストリア人 [=ニキ・ラウダ、筆者註] は、2003 年に Fly Niki という別の会社を設立することになり、2011 年に売却した。

ここでは歴史的現在、複合過去形、FH が用いられているが、複合過去形基調の記事は全コーパスの中に見当たらなかった。それは、連続性の概念なく現在との接触なしに自らが物語るような性質を持つ単純過去形と異なり、語りで使用される複合過去形は常に歴史的現在 to¹ との接触し、その結果状態を表すためである。(66) 内の複合過去形は

⁸¹ https://www.liberation.fr/sports/2019/05/21/formule-1-niki-lauda-l-ordinateur-s-eteint_1728521

2 つとも *La société connaît* (会社は経験する) という歴史的現在を基準時としてそれより過去を描写している。FH も同じ基準時に立脚し、それより後の事行を示してゐる。これら 3 つの時制は同歴史叙述的時間軸上に属しているため、物語展開を述べていくうえでの共起は自然なことと言える。1991 年の事行、2000 年の事行とつづいた後、段落の最後の FH は時間的副詞 *en 2003* (2003 年に) を伴って、未来へ跳躍し展開を終えている。

最後に、「基準時の明示がない」例を見てみよう。

(62) « Yellow Moon »

Encouragés par ces succès, les Meters allaient s'essayer au rhythm'n'blues chanté à partir de *Struttin'*, en 1970, avant de glisser progressivement vers des formes plus pop et plus policées. Mais malgré des arrangements toujours plus touffus et ambitieux, le grand public allait décrocher. Déçu par les effets collatéraux du succès (pression, tensions, excès), Art Neville raviva sa flamme avec les Wild Tchoupitoulas, groupe de Mardi Gras Indians mené par son oncle, le Big Chief Jolly, alias George Landry. Publié en 1976, l'album homonyme du groupe serait aussi le premier à rassembler derrière le micro les quatre frères Neville. Comme une évidence, la fratrie allait profiter du retour en ville de Charles, saxophoniste en errance, pour se constituer en supergroupe pas la pire des idées, puisque le cadet, Aaron, avec sa voix en or, avait plusieurs hits à son actif depuis le début des années 60, à l'instar du magique *Tell It Like It Is*. Grâce à *Yellow Moon*, méga-hit produit par Daniel Lanois qui allait se vendre à un demi-million d'exemplaires, les frères Neville, Art en premier, devinrent plus que des gloires locales, des ambassadeurs de La Nouvelle-Orléans jusqu'à Vladivostok.

Toujours très occupé, notamment par les Funky Meters, Meters reformés pour le plaisir du jam et des tournées, Art Neville sera le seul de sa famille étendue à ne jamais quitter son berceau de Valence Street, même quand sa maison sera dévastée par l'ouragan Katrina et vidée de ses souvenirs par les

pillages. Miné par l'âge et les maladies, cet insatiable du jam et de l'impro éludait toujours, même quand il avait du mal à tenir debout, les balades au profit des furies funk. Ainsi, à la veille d'un concert pour ses 75 ans, au Tipitina's de Tchoupitoulas Street, le vieil Art annonçait à un journaliste d'un quotidien local : « *On va essayer d'incendier tout ça, sans y mettre le feu pour de vrai.* » (liberation.fr, 23/07/2019)⁸²

「イエロームーン」

これらの成功に後押しされて、1970年の *Struttin* を皮切りに、*The Meters* は歌入りのリズム・アンド・ブルースに挑戦していくことになり、その後、徐々にポップでより洗練された形へ移行していきました。しかし、どんどんより込み入って野心的なアレンジをしても、一般大衆は興味を失っていった。成功の副作用（プレッシャー、緊張、過剰）に失望したアート・ネヴィルは、叔父のジョージ・ランドリーことビッグ・チーフ・ジョリーに率いられているマルディグラ・インディアン・バンド *The Wild Tchoupitoulas* とともに再び情熱を燃やした。1976年にリリースされたこのバンドの名を冠したアルバムは、ネヴィル4兄弟をマイクの後ろに集めた（初めてマイクを握った）初めての作品でもあろう。当然のように、兄弟は、放浪のサクソ奏者であるチャールズが町に戻ってきたことを利用して、スーパーグループを結成しようとしていた。— 最悪のアイデアではない。なぜなら最年少のアーロンは、その黄金の声で、すばらしい *Tell It Like It Is* にならって、60年代初頭から自分の功績としてヒット曲をいくつも出していたからだ。ダニエル・ラノワによりプロデュースされ50万枚が売られることになる大ヒット曲 *Yellow Moon* のおかげで、アートをはじめとしたネヴィル兄弟は、地元の栄光にとどまらず、ニューオーリンズの大使からウラジオストックの大使までになった。

特に *The Funky Meters* (The Meters から改名) によっていつもとても忙しく、ジャムやツアーを楽しむために再結成された *The Meters* のアート・ネヴィルは、ハリケーン・カトリーナによって自宅が 大被害を受けることになり、

⁸² https://next.liberation.fr/musique/2019/07/23/la-nouvelle-orleans-pleure-le-grand-frere-du-funk-art-neville_1741684

略奪によって思い出の品々が空っぽされることになっても，大家族の中でただ一人，バレンシア通りの彼の出生地を決して離れない，家族「拡大した」の中で唯一の人物となります。年齢や病気に蝕まれた，この飽くことのないジャマーであり即興演奏家は，立ってられないほど痛かった時でさえも，ファンクの激しさのためにバラードをうまく避けていました。そういうわけで，75歳の誕生日のためのコンサートの前日に，チャパトゥーラス通り（Tchoupitoulas Street）の *Tipitina* で，年老いたアートは地元新聞の記者に宣言しました。：「本当には火をつけずに，すべてを燃やしてみよう」と。

テキスト全体は過去形基調だが，記載した部分以外の記事全体を確認しても，FHの基準時となる歴史的現在の痕跡が現れていない。かろうじて第二段落はじめの *Meters reformés...* の分詞で語られている再結成という事行が語りの現在形を暗示しているだけである。このように，訃報記事では基準時の明示がない場合も存在することが確認された。これは，長く詳細に綴っていく歴史テキストとは異なり，一般的に数ページの長さに簡潔にまとめるという訃報記事というジャンルの性質によるものだと考える。またこの例でも FH が複数連続して生起しており，すべてハリケーンに関連することが述べられている。これは (57) と同様に先取りした未来の事行群で一つの世界を構成し，語りのスピードを上げている *flash forward* 効果であると思われる。

以上 4.4 節での分析により，時間副詞や補足説明を意味する記号文字や関係節との親和性，用いられる位置によるまとめやテーマとしての機能，歴史テキストと同様の結果が確認された。また，FH は理論上では歴史叙述的時間軸の歴史的現在に必ず立脚することで使用可能となるが，その基準時は必ずしも周辺にはない，または明示されていない場合もあることが明らかになった。

4.5. まとめ

以上より，本章では前章で提示した理論を基にし，コーパスからの実例とともに FH の機能や特性に関して詳細に分析・検討した。その結果，2つの時間軸の導入の有効性が証明され，これにより FH の使用やその他の動詞時制との共起が可能となることが明ら

かとなった。この異なる時間軸は途中で挿入されることにより視点が変化し、読み手に対して効果をもたらすテキスト的側面もある。

FHの機能的側面では、テーマ展開としての機能という重要な役割が明らかになった。つまり、叙述の方向性を提示する機能、一連の展開・流れの区切りのマーカーとしての生起が多く見られるため前未来形のように *bilan* (総括)⁸³ としての機能や、連続して生起することによる *flash forward* と呼べる機能などを有することが確認された。さらに、時間副詞や補足説明の記号文字、関係節との親和性も観察された。

⁸³ 本論文では、*bilan* という用語は総括という意味を指すものとして用いることとする。また、前未来形の「*bilan*」機能に関しては、たとえば Maingueneau (1994:105-106) を参照のこと。

第5章 歴史的未來と歴史的迂言未來の意味的差異

5.1. 本章の手順

本章では、単純未來形と類似した用法をもつ迂言的未來形 (*futur périphrastique*) が歴史テキストや訃報記事に生起する場合について考察する。迂言的未來形とは、準助動詞 *aller* に本動詞の不定法を後続させたものであり、時制的用法においては *aller* を現在形または半過去形に活用させる。*aller* を現在形に活用させた迂言的未來形を FP-PR (*futur périphrastique présent*)、*aller* を半過去形に活用させた迂言的未來形を FP-IMP (*futur périphrastique imparfait*) と略号し、FH ではない単純未來形である FS と同様に、上記 2 つの総称を FP とする。これらが特に歴史テキストなどに用いられ、歴史的現在・歴史的未來用法に相当する迂言的未來形のことを以降歴史的迂言未來 (*futur périphrastique historique*) と呼び FP-H と表記し、さらなる区分を便宜上現在形に活用した歴史的迂言未來 (*futur périphrastique présent historique*) を FP-PR-H と、半過去形に活用した歴史的迂言未來 (*futur périphrastique imparfait historique*) を FP-IMP-H と略号する。また、FP と FP-H の両方を示す際には総称として迂言的未來形と表記することとする。

以下の論述の手順は、次のとおりである。5.2 節では先行研究を参照しながら迂言的未來形の特徴を確認する。5.3 節では、「歴史＝物語」における単純未來形と迂言的未來形の統計表を作成し図式化を行い、本論文のコーパスにおいてそれぞれの未來形が使用される傾向と差異を明示する。5.4 節では FH と FP-H の共起事例を観察するとともに、後者の 2 種類の時間構造を図式化し、異同の仮説を提示する。5.5 節では現在形に活用した FP-H である FP-PR-H、5.6 節では半過去形に活用した FP-H である FP-IMP-H に着目して考察し、コーパスから引用した実例に基づいて、それぞれの迂言形が歴史テキストや訃報記事においてどのように機能しているかを明らかにすることを試みる。5.7 節でまとめとする。

5.2. 迂言的未来形の特徴

3.3 節ならびに 4.2.4 節で触れた Benveniste (1966) の「予見時称」に関する議論を別にすれば, FP-H に特化して論じている先行研究はほぼ見られないため, FP に関する先行研究をいくつか提示する.

5.2.1. IMBS, Paul (1960)

Imbs は FP の意味論的機能の時制的価値とモダールの価値を提示しており, まず時制的価値を以下のように定義している.

Aller + infinitif sert à exprimer le *futur proche*, c'est-à-dire un futur qui est en contact immédiat et en continuité avec le présent. (Imbs, 1960 : 55)

Aller + infinitif は, 近い未来を表す役目を果たす. その未来とはつまり, 現在と接触し連続している未来である.

これは, aller + infinitif で表される事行は基準時となる現在時と接触し, そこから事行が継続していることを示し, ゆえにそれは近い未来に開始されるということである.

Imbs はさらに, duratif (継続相), inchoatif (起動相), そしてプロセス全体表わす perfectif (完了相) などの価値を有するものであると述べている. 以下がその例である.

- (1) Ça ya durer dix sept ans comme ça.

(Labiche : Imbs, 1960 : 55 より引用)⁸⁴

このままそれは 17 年続きます.

- (2) Quoi qu'il arrive à présent, je vous promets que je vais commencer et que je vous obéirai jusqu'au bout. (Péguy : Imbs, 1960 : 55 より引用)

今何が起ころうとも, 僕は始めて, 最後まで君に従うと誓うよ.

⁸⁴ 以降, 本論文では例文における FP-PR-H は, 本論筆者により太字と点線下線で強調することとする.

- (3) D'ici à deux heures, me dit-il, l'affaire va s'engager.

(Mérimée : Imbs, 1960 : 55 より引用)

2時間以内に事件は始まる, と彼は私に言っている.

現在時は未来の出来事が飛び出す *tremplin* (踏み台) のようなものであるとも述べている. 上記の例では *comme ça* (このまま), *d'ici* (今から) などがマーカーとして明示されており, 立脚時となる現在時とのつながりが重要な特徴の一つであると言える. また, 同じく未来時制である FS との明確な差異の例として以下を挙げている.

- (4) Elle se mariera l'an prochain. (Imbs, 1960 : 56)

彼女は来年結婚する予定です.

- (5) Elle va se marier l'an prochain. (id.)

(婚約をしている) 彼女は来年結婚することになっています.

(4) の FS の例では, 結婚自体が新しい出来事として捉えられ, 今現在婚約している状態であるなど何かが進んでいるという含みがない, 中立的なものであると説明している. 一方 FP を用いている (5) の例に関しては, 以下のように説明している.

[...], l'avenir est considéré comme distinct du présent ; mais à l'aide du verbe *aller* employé au présent, je construis un pont entre le présent et l'avenir (*aller* suggère le chemin qui relie les deux divisions du temps). [...], c'est le présent qui est ici inclus dans l'avenir, [...]. (id.)

未来は現在と明確に異なると考えられる ; しかし現在形で用いられる *aller* という動詞により, 現在と未来との間に橋を構築する (*aller* は二つに分かれた時をつなぐ道を暗示する). (...) ここでは現在が未来のなかに含まれている.

つまり, FP は現在のつづきである延長線上に生起する事行であることを意味し, (4) とは逆に, 現在において何らかの進行中の出来事があるため FP が用いられているとい

うことを暗示する。現在との結びつきが強いと言えるだろう。この特徴の裏付けとして Imbs は以下のように断言している。

Si l'on veut souligner que l'évènement à venir est vu et se situe dans le prolongement du présent, on recourt aux auxiliaires de temps et de mode *aller* et *devoir*. (ibid. : 59)

もしこれから起こる出来事がわかっている、それが現在からの延長上に位置すると強調したいのなら、*aller* や *devoir* といった時と法の助動詞に頼ることになる。

つまり、一般的に FP は準助動詞 *aller* の存在で示される現在時を踏み台・立脚時として開始され、さらに事行の達成まで継続されるものであることを示す。言い換えると、現在時と密接に隣接した連続性が特徴であり、そのため FP はすでに何らかの準備状態が始まっているため FP の事行が起こるとの認識の上で使用されるものということであろう。しかしここで強調したいのは、Imbs は *futur proche* (近い未来) ということばを何度も用いている点である。ここで言う近い未来は (1) が示しているとおおり、時間的にすぐ・間もなく起こるであろう事行を指すのではなく、現在と接触し何かが始まっている状態であるため、客観的に考えて比較的遠くない未来に実現するであろう未来事行を指す意味で用いていると思われる。

5.2.2. LEEMAN-BOUIX, Danielle (1994)

Leeman-Bouix は、以下のように現在時点で既に FP で示される事行の実現が始まっている状態であると述べている。

Le futur périphrastique engage donc la réalisation dans le présent ; se préparant à quitter quelqu'un, [...].

(Leeman-Bouix, 1994 : 162)

迂言的未来形は、したがって、現在において実現を開始する。たとえば、誰かと別れる準備をしながらなど (…).

この例として以下の FS と FP の 2 つを対比した例を挙げている。

- (6) Bon, ben je vais te dire au revoir. (id.)
よし, じゃあ帰るね.
- (7) * Bon, ben je te dirai au revoir. (id.)

(6) は Bon という間投詞が追加で表しているように、現在における準備が明確に明示されていなくとも、たとえば話が一段落した、時計を見たなど、何らかの兆しが現時において開始され、その連続上で帰るという流れが出来上がっていることを FP は表すことができる。対して (7) は FS により現時との断絶を示すため、Bon, ben による現時における兆しと両立することは難しく、「今から」帰るつもりであることを表すことはできない。もし現時とつなぐ間投詞がない文脈において、Je te dirai au revoir. (帰ろうかな) ということを口に出したとしても、その時に何らかの兆しがあるわけではなく、現時との隣接性がないため事行の実現に不安定さが残ることになる。

Leeman-Bouix はさらに、FS との比較を用いて時系列順における成立例を挙げている。

- (8) Reste assise, tu vas te détendre et ensuite tu partiras. (id.)
座ったままでいて。くつろいでから、出発すればいいよ.
- (9) *Reste assise, tu te détendras et ensuite tu vas partir. (id.)

ここで明らかのように、他の例のように FP は現時との連続性が重要である。そして FS は断絶を伴い、一連の流れの終着点を表している。(9) の場合、FS の断絶により「座る」と「くつろぐ」ことの連続性がなく、さらにこの例では「出発する」は「座る」という現時に隣接しているため、文が成立しなくなっている。

彼女はまた、迂言形は、発話時現在との距離を表す時間的間隔の説明を認めないと述べている。

Le futur périphrastique ne correspond pas nécessairement à un procès immédiat objectivement, mais il le présente comme tel pour en garantir la réalisation [...]. (ibid. : 163)

迂言的未来形は必ず客観的に即時である事行に一致するわけではないが、実現を保証するものとして事行を提示する。

この主張の例として以下の FS と FP の 2 つの比較を挙げている。

(10) Il y a des problèmes, on va s'en occuper. (id.)

問題がたくさんある。我々はそれらに取り組んでいくつもりだ。

(11) Il y a des problèmes, on s'en occupera. (id.)

問題がたくさんある。我々はそれらにいつか取り組むことにしよう。

これらは政治家の選挙前の予告であるが、(10) は (11) よりいっそう実現を約束することを表していると述べられている。たしかに準助動詞 *aller* が保証する漸進性は聞き手に訴える政治家の選挙前に行う発言に適しているだろう。(11) のように FS を用いるとモダール用法が強まり、意志はあっても「いつか」行うつもりだがまだ何も兆しがない不確実性の余地を感じさせてしまうと思われる。

つまり、Leeman-Bouix によると FP とは必ずしも時間的に実現に近い未来を表すわけではないが、たとえば既に事行の実現のために何らかを準備し始めているなど、FP を用いた時には現在の状況で既に何らかの兆しがあるため、その事行の実現は保証されたものとして示されるということである。

5.2.3. MAINGUENEAU, Dominique (2010)

Maingueneau も Leeman-Bouix と同様の考えであり、(12) を例として挙げている。

[...] l'énonciateur présente le procès comme déjà déclenché, dans le prolongement de la situation présente [...]

(Maingueneau, 2010 : 121)

発話者は、既に作動しているものとして事行を現在の状況の延長線上に提示する。

- (12) Commencez à vous réjouir,
Étranger, je vais vous ouvrir.

(René Char : Maingueneau, 2010 : 120 より引用)

今から喜んでください

見知らぬ人よ、あなたに扉をあけてさしあげます.

ここでは、既に作動し、現在の延長上に FP の事行が存在することが明確に Commencez à vous réjouir という文で示されている。

また、彼は J.-J. Franckel (1984 : 65-70) の説にしたがい、FP に関する以下の 3 つの特徴 (op.cit. : 120) を提示している。

1. Le FP suppose une *contigüité* [...] FP は隣接性を前提とする。
2. En usant du FP, l'énonciateur pose son énoncé comme certain, validé, [...] FP を使用することで、発話者は自身の発語に確かさや有効性を付随させる。
3. [...] la négation au FP suppose qu'on ait d'abord sélectionné, pris en compte la forme positive pour la nier ensuite : [...] FP による否定文は、まず肯定形が考慮されて選ばれ、それからその肯定文を否定する、ということを前提とする。

三つ目の具体例として、たとえば「*Je ne vais pas manger* (僕は食べないつもりだ) と言うには、まず *manger* (食べる) という行為を行う可能性を考慮に入れていないと難しい」⁸⁵ と述べている。

⁸⁵ « [...] : on dira difficilement *Je ne vais pas manger* si n'a pas été d'abord envisagée la possibilité de manger ; [...] » (Maingueneau, 2010 : 120)

以上をまとめると、つまり FP の使用には、現在との隣接性により発語に発話者の確信さという価値をもたらすため、不定詞で表される事行が生起する可能性があらかじめ考慮されているということが前提として暗示されるのである。

彼はさらに、語りにおける未来という時の位置づけに関して次のように述べている。

[...], elle [= histoire, 筆者註] ne connaît pas de présent, de passé et de futur. Il existe néanmoins des tournures destinées à anticiper sur la suite des événements : *allait* ou *devait* suivis de l'infinitif. (id.)

語りには現在も過去も未来もない。しかしながら出来事の続きを先取りするための言い回しが存在する。それは、*allait* / *devait* infinitif である。

(13) Le roi devait / allait mourir peu après. (id.)⁸⁶

王は間もなく死ぬことになる。

語りの中の未来というものは、「語り手が「王は死ぬだろう」という現在時からの予想といった主観的様相を投影して、真正の未来を述べるということではなく、語り手が既に知っている将来に基づいた先取りを行うことである。その意味で、Benveniste の言う *prospectif*、つまり« pseudo-futur » (偽性未来) であるのだ⁸⁷ と論じている。

つまり、語りにおいて未来形で表されているものは「未来」ではなく、語りの展開のなかで時に発生する事実の「先取り」である。したがって、語りには時間概念が存在せず、存在するのはある事行が他の事行の前か後かということにすぎないため、未来という単語を用いず *prospectif* や「偽性」と表現する、ということの意味していると思われる。

⁸⁶ 以降、本論文では、歴史的用法として用いられている *aller* を過去形においた歴史的迂言未来である *allait+infinitif* 型は、本論筆者により太字と二重下線で強調することとする。

⁸⁷ « Quand on trouve un énoncé comme *Le roi devait / allait mourir peu après*, on n'a pas affaire à un véritable futur, qui projette à partir du présent une modalisation subjective, mais à l'anticipation sur un avenir déjà connu du narrateur. À ce propos, Benveniste parle d'un « pseudo-futur », qu'il appelle **prospectif**. » (Maingueneau, 2010 : 120)

5.2.4. BARCELÓ, Gérard Joan et Jacques, BRES (2006)

Barceló et Bres (2006) は *aller* を現在形に活用させた迂言的未来形を *présent prospectif* (前望的現在形), *aller* を半過去形に活用させた迂言的未来形を *imparfait prospectif* (前望的半過去形) とよび, それぞれの基本的意味を探求している. 各時制の基本的意味は, 解釈を助ける「指令」(instructions) の束によって記述される.

présent prospectif を特徴づける指令は, [+prospection] というアスペクト的指令と, [neutre] という時間的指令である. [+prospection] については, 次のように規定されている.

[...] le PRP [= *présent prospectif*] est une forme au départ aspectuelle, marquant l'aspect prospectif. En d'autres termes, le temps impliqué par le procès est saisi comme mouvement vers la borne initiale du procès. (Barceló et Bres, 2006 : 164)

前望的現在形は, 元来アスペクト的な形式であり, 前望的なアスペクトを示すものである. 言い換えると, 事行によって含意される時間は, 事行の始点へと向かう動きとして捉えられる.

また, [neutre] は, Barceló et Bres (2006) の体系では, 現在形に付与されているものと同じである. 現在形に [neutre] という時間的指令を付与しているのは, 語りの現在形 など, 発話時を指示しない現在形を念頭においている. そして, *présent prospectif* に関しては次のように言っている.

C'est une illusion d'optique due à son instruction aspectuelle [+prospection] qui a pu laisser penser que le PRP était d'instruction temporelle [+futur] : [...] (ibid. : 165)

前望的現在形が [+futur] という時間的指令を持つと考えさせるのは, [+prospection] というアスペクト的指令に起因する錯視である.

そして、語りに現れる次の例を引いている。

(14) *Un lycéen résume oralement Bel-Ami de Maupassant*

Bel-Ami commence au moment où Duroy / un ancien militaire un peu désabusé / marche dans les rues de Paris / à ce moment-là il va rencontrer ancien camarade / Forestier qui lui a réussi et qui va essayer de l'aider à devenir un gentilhomme [...] (ibid. : 166)

高校生が口頭でモーパッサンの『ベラミ』を要約している：

『ベラミ』の始まりは / 少し醒めた退役兵のデュロワが / パリの街路を歩いていたところだ / そのとき、戦友のフォレストイエと再会する / フォレストイエは成功していて、デュロワが紳士になるのを助ける (…).

一方、*imparfait prospectif* については、時間的指令のみが *présent prospectif* と異なり、[+ passé] になっている。[+ passé] は *aller* がおかれている時制である半過去形と同じである。そして、*imparfait prospectif* の特質として、過去から見た未来の事行が実現したか否かを動詞形式だけからは予想できないということを挙げている。(ibid. : 178-179).

(15) Je me lève au bruit ; j'allais sortir de ma chambre pour passer dans la cuisine, quand un caillou lancé d'une main vigoureuse traversa la cuisine après en avoir cassé la fenêtre, vint ouvrir la porte de ma chambre et tomber au pied de mon lit ; de sorte que si je m'étais pressé d'une seconde j'avais le caillou dans l'estomac.

(J.-J. Rousseau, *Les Confessions* : Barceló et Bres, 2006 : 179 より引用)
私は物音で目覚めた。私は寝室から出て、台所に移ろうとしていた。そのとき、頑健な手で投げられた小石が台所を横切り、台所の窓を割り、私の寝室の扉を開け、ベッドの足元に落ちた。なので、もし私があと1秒急いでいたら、小石が私の胃に命中していただろう。

つまり、j'allais sortir という形式自体からは、「寢室を出る」という事行が果たされたか否かは両方あり得るということである。この例文では、その実現が妨げられたことが文脈から分かるが、*imparfait prospectif* には事行が実現した例も当然ある。5.6 節で検討する、半過去形に活用した迂言的未来形歴史的用法 (FP-IMP-H) は、事行が実現した場合に対応している。

以上までの先行研究をまとめると、*futur proche* とも呼ばれる FP は、近い未来が即時であるとは限らないが、準助動詞 *aller* による漸進性・連続性の保証と現在形との接触により既に何らかの兆しが動いているため、事行の実現を前提として示されるものであるという点で共通していると言えるだろう。

5.3. 「歴史＝物語」における単純未来形と迂言的未来形の出現傾向⁸⁸

本論文のコーパスである *La Proclamation de la Commune · Jeanne d'Arc* ・訃報 (*Libération* 紙) 内で生起する FS, FH, FP-PR-H, FP-IMP-H の数を提示し、グラフ化したものが以下の表 5-1・図 5-1, 表 5-2・図 5-2, 表 5-3・図 5-3 である。(表 5-1, 表 5-2, 表 5-3 のみ, 会話内・書き手の意見・引用など歴史的用法として用いられていない FP である FP-PR と FP-IMP を参考として加えている。)

⁸⁸ 歴史的用法であると分類されない FP である FP-PR, FP-IMP の生起はあまり多くなく, FP-PR の数の大半は会話内であるたため, 分析対象外とし図より除外することとする。

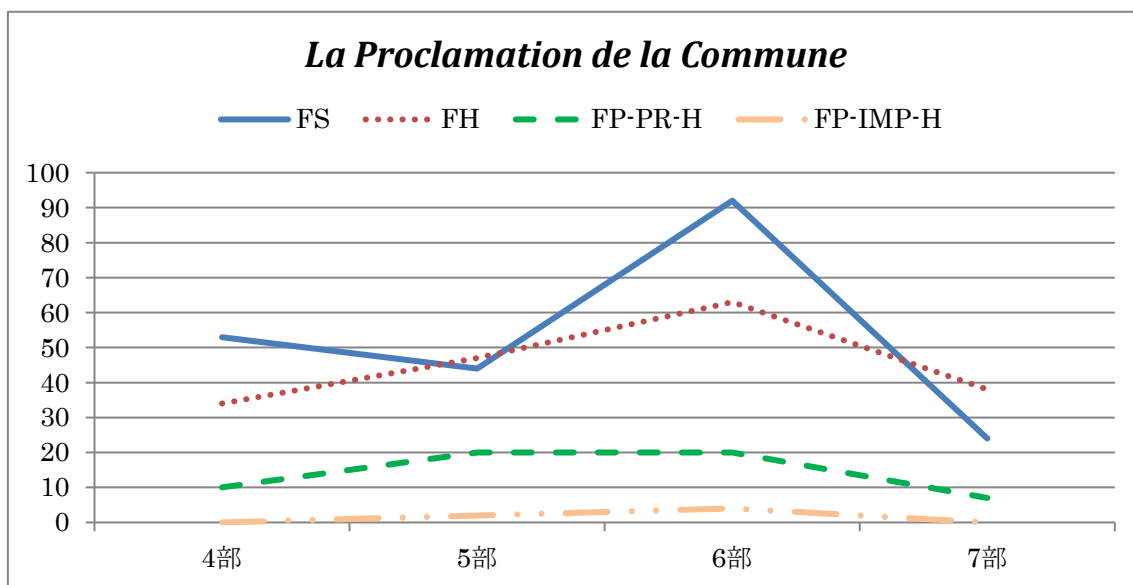


図 5-1 : *La Proclamation de la Commune* における単純未来形・迂言的未来形の出現傾向

表 5-1 : *La Proclamation de la Commune* の単純未来形・迂言的未来形の生起数⁸⁹

部	第 4 部	第 5 部	第 6 部	第 7 部 (第 1・2 章)	合計
ページ	171-218	219-288	289-366	367-398	
FS	53	44	92	24	213
FH	34	47	63	38	182
FP-PR-H	10	20	20	7	57
FP-IMP-H	0	2	4	0	6
FP-PR	0	13	4	1	18
FP-IMP	3	3	0	0	6

このコーパスでは、書き手の意見や会話、手紙などの語りでない部分で用いられる FS を除く 3 つの時制の中で、最も未来表現として使用されているのは FH である。したがって、第 3 章 3.1 節で提示する Benveniste の表が示す、「歴史＝物語」(histoire) での未来形は *allait + infinitif* (本章では FP-IMP-H に相当) が用いられるという説とは矛盾している。また、クライマックスとなり得るテキストの終盤にかけて多数生起する FH

⁸⁹ FH は出現頻度が高かったため、単純未来形の統計を出す第 2 章の表では章ごとに生起数を詳細に提示したが、迂言的未来形はそれほど多くないため、この著書を構成している各部を簡略化して提示することとする。

とは異なり、2つのFP-Hは各章ごとの出現頻度に大きな差は見られず、テキスト全体として観察した場合の固有の特徴はこの図表からは確認することができない。

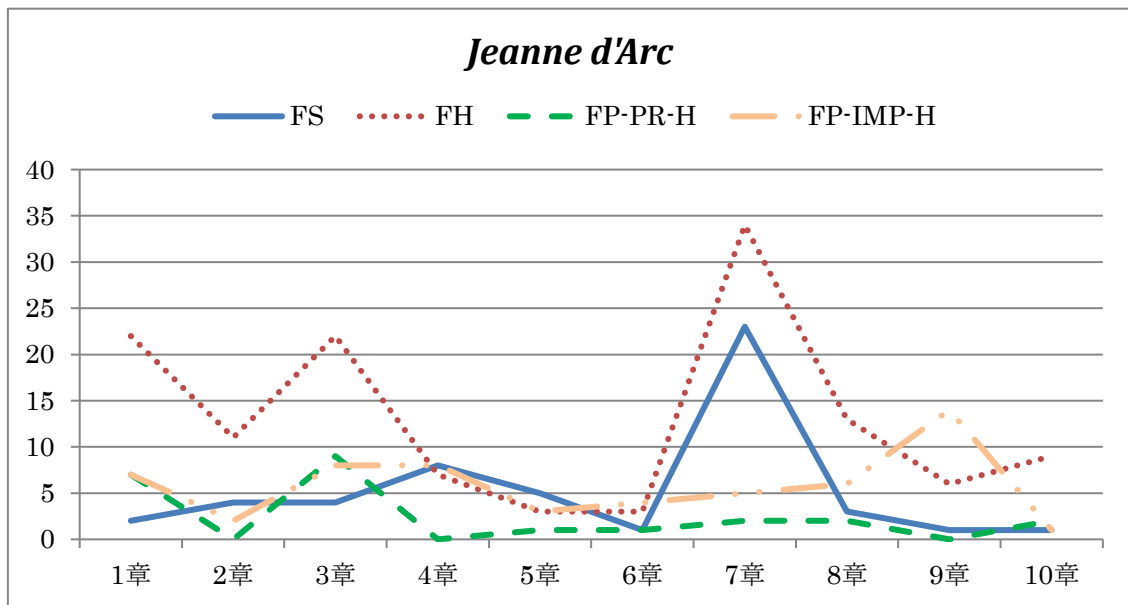


図 5-2 : *Jeanne d'Arc* における単純未来形・迂言的未来形の出現傾向

表 5-2 : *Jeanne d'Arc* における単純未来形・迂言的未来形の生起数

章	1	2	3	4	5
ページ	3-13	14-27	28-45	46-55	56-62
FS	2	4	4	8	5
FH	22	11	22	7	3
FP-PR-H	7	0	9	0	1
FP-IMP-H	7	2	8	8	3
FP-PR	0	0	0	1	0
FP-IMP	0	0	0	0	0

表 5-2 (つづき)

章	6	7	8	9	10	合計
ページ	63-70	71-99	100-108	109-121	122-125	
FS	1	23	3	1	1	52
FH	3	34	13	6	9	130
FP-PR-H	1	2	2	0	2	24
FP-IMP-H	4	5	6	14	1	58
FP-PR	0	0	0	0	0	1
FP-IMP	1	0	0	0	0	1

このコーパスでも、語りの中の未来形として **FH** が主に用いられていることが明らかであり、次に多く使用されているのは **FP-IMP-H** である。これは、単純未来形（ここでは **FH**）の使用頻度が顕著であることから、同じく「話」レベルに属するとされる迂言的未来形（ここでは **FP-PR-H**）の使用が次に多そうという自然な予測とは異なる結果である。したがって、*prospectif* とされる *allait + infinitif*（ここでは **FP-IMP-H**）は固有の特性を有している可能性があると考えられる。

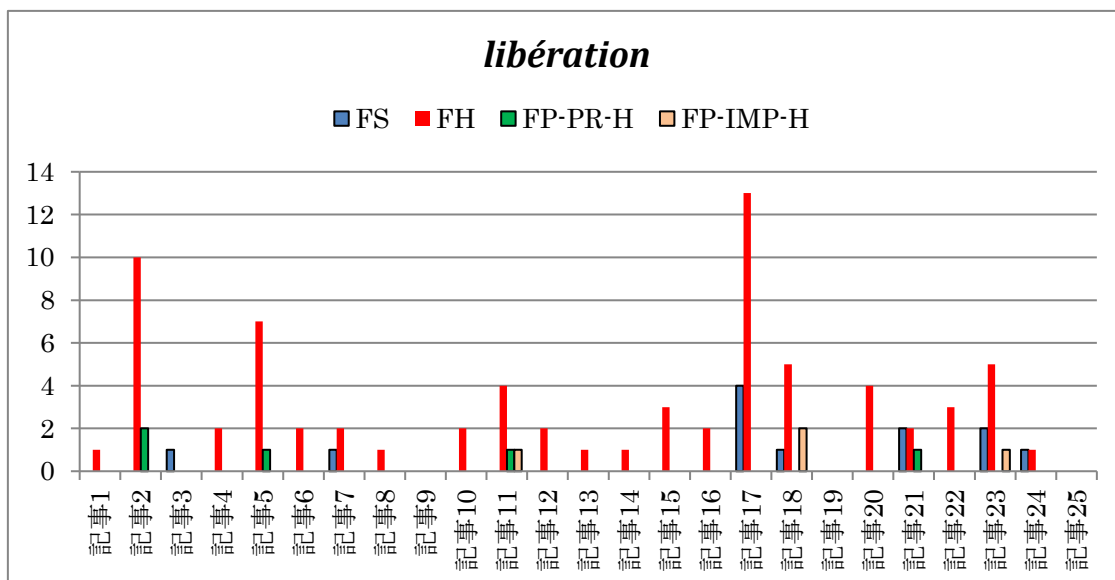


図 5-3-a： 記事（*Libération*紙）における単純未来形・迂言的未来形の出現傾向

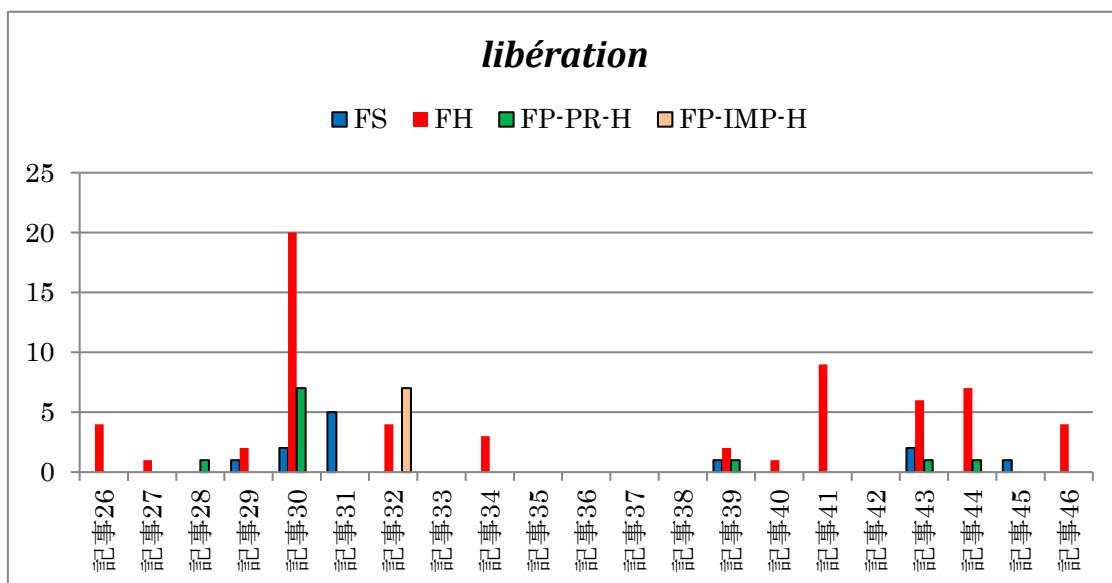


図 5-3-b：訃報（*Libération* 紙）における単純未来形・迂言的未来形の出現傾向

表 5-3：訃報（*Libération* 紙）における単純未来形・迂言的未来形の生起数

記事	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
単語数	326	711	1023	985	989	1621	690	235	749	543
FS	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
FH	1	10	0	2	7	2	2	1	0	2
FP-PR-H	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0
FP-IMP-H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
FP-PR	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
FP-IMP	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

記事	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
単語数	1102	704	744	580	932	421	1797	771	443	958
FS	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0
FH	4	2	1	1	3	2	13	5	0	4
FP-PR-H	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
FP-IMP-H	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0
FP-PR	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
FP-IMP	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 5-3 (つづき)

記事	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
単語数	643	589	1899	359	317	635	606	641	1422	2528
FS	2	0	2	1	0	0	0	0	1	2
FH	2	3	5	1	0	4	1	0	2	20
FP-PR-H	1	0	0	0	0	0	0	1	0	7
FP-IMP-H	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
FP-PR	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
FP-IMP	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

記事	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
単語数	702	1006	430	622	564	445	385	401	523	545
FS	5	0	0	0	0	0	0	0	1	0
FH	0	4	0	3	0	0	0	0	2	1
FP-PR-H	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
FP-IMP-H	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0
FP-PR	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
FP-IMP	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

記事	41	42	43	44	45	46	合計
単語数	971	421	1441	2960	210	1152	
FS	0	0	2	0	1	0	24
FH	9	0	6	7	0	4	136
FP-PR-H	0	0	1	1	0	0	16
FP-IMP-H	0	0	0	0	0	0	11
FP-PR	0	0	0	0	0	0	2
FP-IMP	0	0	0	0	0	0	0

同じく「歴史＝物語」に属する歴史テキストコーパスと比較しても、訃報ではFHは同様に多くの記事で生起しているのに対し、FP-Hの生起が圧倒的に少ないことが明らかである。訃報の叙述は現在形基調も過去形基調もあるが、FP-PR-H、FP-IMP-Hともに使用頻度がこれほど少ないことには、訃報というジャンル特有の未来表現におけるテキストスタイル的特徴が存在する可能性を示していると考えられる。その一つとしては、書籍ではなく記事であるため、故人の人生経歴における印象的な出来事をいくつか概略的に取り上げる形式であり、歴史書のような事行間の緊密なつながりには乏しいということが関係していると思われる。

5.4. 歴史的未來と歴史的迂言未來の構造的差異

歴史叙述において未來が表される際に、FP-H も用いられることがある。5.3 節の統計表から分かるように、分析対象が全 228 ページである *La Proclamation de la Commune* では、FH が 182 例に対して FP-H が 63 例、全 125 ページである *Jeanne d'Arc* では FH が 130 例に対して FP-H が 82 例、さらに全 46 件の訃報記事では、FH が 136 例に対して FP-H は 27 例と、どのコーパスでも FP-H の使用を少なからず確認でき、第 4 章 4.2.2.3 で FH との共起の例を概略的に観察し、歴史叙述においても 2 つの未來形の間には明確な性質的区別があるため使い分けられていることが了解された。さらに 5.3 節から、FP-PR-H と FP-IMP-H という 2 つの FP-H の使用にも差異が見られ、それは単なる事行成立の時の違いにとどまらずそれぞれ固有の特性を有するためであると仮説を立てた。以降ではさらに詳しくこの問題について考えてみたい。

5.4.1. 歴史的用法を示さない迂言的未來形

はじめに、分析対象外ではあるが、参考として FP-PR・FP-IMP の例を提示しておく。5.3 節の表からも確認できるが、訃報のコーパスには FP-IMP は生起せず、*Jeanne d'Arc* においても FP-PR, FP-IMP とともに非常に生起が少ない。

- (16) Nous allons suivre les conséquences de la journée du 18 mars pendant la décade qui l'a suivie, jusqu'à la proclamation effective de la Commune — le 28 mars, en essayant de comprendre la manière dont le Comité central prit en main les administrations — l'attitude des maires légaux et des conciliateurs — la « résistance » de la bourgeoisie — le problème militaire et celui des élections — la situation en province. (LPC 第 6 部 1 章: 291)

われわれは、三月一八日の事件からそれにつづく一〇日間、つまりコミュニケーションの実際の宣言の日、三月二八日にいたるまでの期間を、中央委員会が行政を引き受けた方法、合法的区長たちと和解派の態度、ブルジョアジーの《抵抗》^{レジスタンス}、軍事問題と選挙問題、地方の状況などを理解することに努めながら、事件の諸結果を追ってみよう。(LPC 和訳書『下』: 149-150)

これは、「予告」に相当するであろう例である。第 6 部第 1 章の最後のパラグラフ内で用いられ、次の章である第 6 部第 2 章では何を叙述するのかという予告を行っている。つづく章は「中央委員会の仕事」というタイトルであることから明白である。prit en main（引き受けた）という prendre の単純過去形が使用されている理由として、Nous allons suivre（われわれは追ってみよう）という書き手から読み手への現在時における語りかけと対比し、次章の内容の一部を単純過去形で表すことで、次章が再度過去の出来事に関する書き手の主観的判断を排除した「語り」であるという側面を意識させるためであると考えられる。

- (17) La nouvelle de la disparition de Christiane Menasseyre lundi, va attrister des milliers de professeurs de philosophie. Ils lui doivent pour beaucoup la pérennité en France d'un enseignement philosophique de la philosophie, inséparable de toute démarche citoyenne démocratique et laïque. [...]

(*liberation.fr*; 02/08/2019)⁹⁰

月曜日にクリスティアン・ムナセール氏が亡くなったというニュースは、何千人もの哲学の教授を悲しませることだろう。非宗教的で民主的であるどんな市民運動とも切り離せない、思想における哲学的な教えがフランスで持続している多くは、彼女のおかげである。

この訃報の記事は、現実時間軸上に位置する書き手の現在時を基準としてこれから予測される状況が FP-PR によって示されている例であるため、過去の事行を叙述する際の *historique*（歴史的用法）には分類されない。

- (18) Cependant, transférée à Beaufort, situé à une soixantaine de kilomètres de Beaulieu, au milieu des bois, Jeanne allait faire une nouvelle tentative d'évasion : « Quand j'ai su que les Anglais allaient venir pour me prendre, dit-elle lors du procès, j'en étais fort courroucée et cependant les voix me défendirent souvent que je ne saute de cette tour. Et finalement, par crainte

⁹⁰ https://www.liberation.fr/livres/2019/08/02/mort-de-christiane-menasseyre-belle-ame-philosophique_1743397/

des Anglais, j'ai sauté et me suis recommandée à Dieu et à la Vierge Marie et j'ai été blessée en ce saut. » Une corde qu'elle avait fabriquée pour se laisser descendre dans les fossés lâcha et Jeanne tomba sans connaissance, mais elle n'avait vraisemblablement pas de fracture et sa forte constitution lui permet de se rétablir. (JDA 第 6 章 : 67-68)

しかしながらボーリュウ城からおよそ六十キロ、森の中にあるボールヴォワールの城に移されても、ジャンヌは再び逃亡を試みている。処刑裁判の法廷においてジャンヌはこう語っている。「イギリス兵が私を捕らえに来ると知って私は怒りましたが、声は度々私にこの塔から飛び降りないように命じました。けれどどうとうイギリス人を恐れて飛び降り、神様とマリア様の御加護を求めました。この飛び降りて怪我をしました。」彼女が壕にすべり降りるためにしかけた紐が切れ、ジャンヌは落ちて気絶した。だが骨折した様子もなく、丈夫な体質のおかげで間もなく快復している。(JDA 和訳書第 6 章 : 87)

この例の一つ目の allait faire は歴史における事行を叙述しているなかでの生起のため FP-IMP-H であるが、二つ目の allaient venir は、引用符ギユメ (guillemets, « ») で示されているとおり、ジャンヌ・ダルクの発言内において生起している FP-IMP であるため、historique には属さない。また、主節の動詞時制が ai su (知った) と複合過去形であり、que 関係節で FP が半過去形で用いられているため、この FP-IMP は時制の一致によるものである。迂言的未来形に関する先行研究に従うと、イギリス兵がジャンヌを捕らえに来るために既に動いている状態であるという含意を表している。

5.4.2. 歴史的未來と歴史的迂言未來の共起

第 4 章で明らかになったように、実際に歴史テキストを観察すると、必ずしも歴史テキストの語り第 3 章 3.3 節で提示した図 3-1 の *histoire* に分類されている動詞時制のみで構成されているわけではないことが分かる。図 3-1 では、本来単純未來形は *histoire* のジャンルである歴史テキストには生起せず、未來、つまり先取りを表す際には *allait* + 不定法を用いるとされている。したがって、FP-IMP-H の生起に違和感はない。また 4.2.4 節で提示した歴史叙述的時間軸という理論の導入により、基準時を表す歴史的現

在に立脚した際の FH や FP-PR-H の使用は妥当性があるとした。ここでは、過去時制を基調とした語りにおける FP-IMP-H は、現実時間軸上での語りであるとしている。

さまざまな未来表現が一つのパラグラフ内に混在している (19) を見てみよう⁹¹。

- (19) C'était [半過去] rejeter la Bourgogne dans l'alliance anglaise. Il semble [歴史的現在] pourtant que Philippe le Bon, fils de Jean sans Peur, ait quelque temps hésité [接続法過去]. Cependant l'Université de Paris, qui d'ores et déjà a élaboré [複合過去] la théorie de la « double monarchie » mettant France et Angleterre sous une même couronne, celle du roi anglais, a dépêché [複合過去] dès le mois de mars 1420, à Troyes où se trouvent [歴史的現在] Charles VI et Isabeau de Bavière, « quelques notables personnes », entre autres Pierre Cauchon, « maître ès arts et licencié en décret », qui vont pousser [FP-PR-H] activement les négociations avec le roi d'Angleterre ; et c'est [歴史的現在] finalement, le 21 mai 1420, ce traité de Troyes qui élimine [歴史的現在] du trône le dauphin légitime, accusé d' « horribles et énormes crimes », et decide [歴史的現在] que « la couronne et royaume de France, avec leurs droits et appartenances, demeurereont [FS] et seront [FS] perpétuellement de notre fils le roi Henri et de ses hoirs (héritiers) ». Charles VI et Isabeau conservent [歴史的現在] leur vie durant leurs droits et dignité de roi et reine ; Henri V de Lancastre épouse [歴史的現在] leur fille Catherine de France ; à l'enfant qui naîtra [FH] de ce mariage est promise [歴史的現在] la double couronne de France et d'Angleterre. Le mariage allait être célébré [FP-IMP-H] le 2 juin suivant à Troyes. Henri V fera [FH] avec Charles VI, le 1^{er} décembre 1420, dans Paris, une entrée solennelle ; [...]
- (JDA 第 1 章 : 10-11)

この事件は、ブルゴーニュ公を決定的にイギリスとの同盟に追いやることになった。だが、ジャン^{サン・アール}無畏公の息子のフィリップ^{ル・ボン}善良公はややためらったかに見える。しかしこの時すでにフランスとイギリス二ヶ国を、一王家すなわちラ

⁹¹ (19) のフランス語文と和訳文内において角括弧 [] (crochets) で表されている時制は、本論筆者が加筆したものである。

ンカスター王家のもとに置く<二元王国>の理論を準備していたパリ大学は、一四二〇年三月になると、急遽シャルル六世および王妃イザボーがいたトロワに「数人の優れた人物」を派遣した。この中に「教養学士兼教会法学士」ピエール・コーションなる人物がいて、イギリス国王との折衝を熱心に推し進めている [FP-PR-H]。こうしてついに一四二〇年五月二十一日、正統な王太子を王位継承から除外し、「恐るべき、途方もない犯罪」と弾劾されたあの「トロワ協定」が生まれることになる。この協定は「フランス王国の王位は、それに付随する諸権利および諸々の物件と共に、以後永久に我らが息子となる国王ヘンリーおよびその後継者に属するものとする [FS]」と規定している。この協定によりシャルル六世と王妃イザボーは、生きている限りは国王及び王妃の権利と栄誉を保有しうるであろう。ランカスター家のヘンリー五世は、シャルルとイザボーの娘カトリーヌを妃に迎えてその婿となり、この結婚から生まれるべき [FH] 王子はフランスおよびイギリス王国の二重の王位を約束されることとなったのである。結婚式はトロワの町で六月二日に挙行された [FP-IMP-H]。一四二〇年十二月一日、ヘンリー五世はシャルル六世を伴って華々しくパリに入城した [FH]。 (JDA 和訳書第1章:16)

過去の出来事を語る際に用いられる未来形の機能とそれを可能とするメカニズムに関して、これまでの章で図示とともに説明を試みてきたが、この(19)のように、現実時間軸上での未来形 FP-IMP-H と、歴史叙述的時間軸上での FP-PR-H や FH の生起が同じパラグラフ内で確認されることもある。この矛盾に関して以下で詳しく分析していく。FH, FP-PR-H, FP-IMP-H それぞれの機能的・構造的差異を明らかにしていく。

まず、歴史的用法の元である FS と FP の違いの一つとして、渡邊(2014)は発話時点からの断絶と連続性を挙げている。歴史叙述では語り手がテキストを語る発話時点と記述されている過去の出来事の時点の一致はないが、歴史的現在によって定位された時点からの連続性と断絶として、歴史叙述においてもこうした性質が有効となっていると考えられる。この各未来時制の歴史的用法がそれぞれの本質的性質を共有しているという理論は、この後コーパスに沿った各未来時制の歴史的用法の特質を探るうえで重要な点である。

5.2 節の先行研究や第4章 4.2.2.3 で観察したように、本論文のコーパスにおいても

FP-PR-H は、歴史的現在で定位される直前の事行からの時間的連続性を強調したい時に用いられている。時間軸に沿った歴史的現在や単純過去形のみによる叙述では表すことができなかった出来事間の緊密性と切迫性を、FP-PR-H を用いることによって示すことが可能となる。（後に分析する 5.6 節の FP-IMP-H も同じく FP-H であるため、基準時が歴史的現在ではなく過去形で定位されるという差異はあるが、同様の性質を有する。）

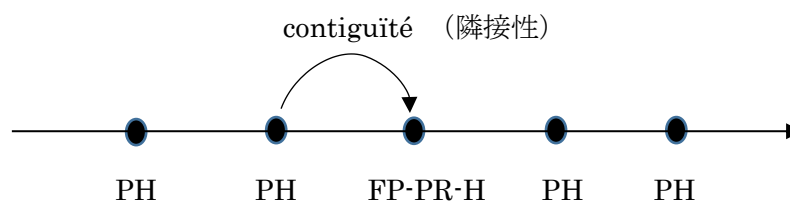


図 5-4 : FP-PR-H の隣接性

この出来事間の緊密性と切迫性という効果は跳躍や断絶を持たないため、潜在的選択肢を暗示せず、決定された一方向へ進むというつながり、すなわち隣接性を重視する FP という時制の性質が大きく関係している。

一方 FH は、第 4 章 4.2.3 節で分析したように直前の文で定位された（非明示の場合もある）基準となる虚構的現在時から跳躍し、事実の先取りを行う。そしてその先取りした出来事の発生が近いかどうかという時間的な距離の問題は考慮されない。しかしこの跳躍こそが、FH が開かれた未来を示す機能を持つことと関係していると考えられる。なぜなら、跳躍の際に定位された現在時と断絶するため、FH の事行実現までにおける複数の潜在的可能性の暗示が可能となるからである。これを図示したものが図 5-5 である。

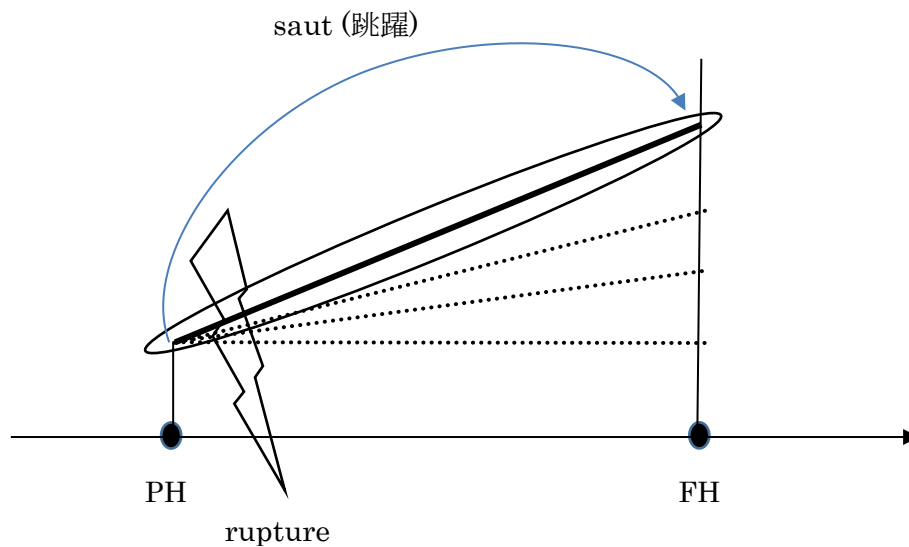


図 5-5 : FH の跳躍

これら図 5-4 と図 5-5 で示した性質を参照し，以降実例とともに観察していく．例文は確認されなかった場合を除き，すべてのコーパスより提示するようにし，FP-H の総合的な特徴を明らかにすることを試みる．

- (20) **Esbroufe.** Bouclettes blondes et regard bleu insondable, l'enfant de Roubaix arrive à Bangkok en 1989. La région est en effervescence : Aung San Suu Kyi s'est dressée face à la junte birmane, les militaires tentent un coup d'Etat aux Philippines, une paix fragile se dessine dans le Cambodge post-Khmers rouges que va bientôt quitter l'envahissante armée vietnamienne... Arnaud s'immerge, parcourt ces pays en curieux. Il commence à écrire pour *le Mékong*, puis très vite RFI et *Libération* qu'il rejoint en janvier 1999. Pas sûr que son premier article sur la « *stabilisation monétaire du FMI en Asie* » l'ait franchement emballé. Arnaud préfère le terrain, l'immersion, les lectures d'ouvrages spécialisés (lui-même en signera plusieurs pour l'Institut de recherche sur l'Asie du Sud-Est contemporaine), les curiosités et le temps long. Un journalisme sans esbroufe à la croisée des chemins

entre reportage et recherche.

(*liberation.fr*; 29/04/2019)⁹²

「はったり」. 金髪のカールと底知れぬ青い目を持つこのルーベの子供は、1989年にバンコクに到着した。その地域は混乱していた。：アウンサンスーチー氏がビルマの軍事政権に反旗を翻し、フィリピンでは軍部がクーデターを企て、はびこっているベトナム軍が間もなく撤退することになるクメールルージュ後のカンボジアでは、脆弱な平和が形成された。アルノーは没頭し、好奇心を持ってこれらの国を旅した。 *Mékong* 紙への寄稿を始め、すぐに *RFI* 紙、 *Libération* 紙にも寄稿し、 *Libération* 紙に 1999 年 1 月に入社した。「アジアにおける IMF の通貨安定化」という最初の記事が、はっきりと彼を夢中にさせたのかどうかは定かではない。アルノーは、現地で仕事をする事、没頭すること、専門書を読むこと（彼自身、現代東南アジア研究所向けに専門書をいくつか発表することになる）、好奇心を持つこと、そして時間をかけることを好んだ。報道と研究の狭間で、はったりがないジャーナリズムである。

この例では、FP-PR-H と FH の生起が確認できる。FP-PR-H は *bientôt*（間もなく）との共起により、近接未来とも呼ばれる FP だが、必ずしも近い未来を指すとは限らないことが分かる。*bientôt* は均一的な間隔がなく、語り手や読み手の時間的感覚に依存するものである。したがって、FP-PR-H の使用は、時間的に近い・遠くに重点が置かれるのではなく、先行研究が論じているように現在形との隣接性・連続性によって事行が実現の延長線上にすでに存在していると暗示することが目的であることがこの例からも考えられる（したがって、間もなくだろう、という含意はあくまでも推論によって導かれる）。図 5-4 に沿うと、FP-PR-H が *que* 関係節内にあることから明らかなように、主節の動詞である歴史的現在による *se dessine*（形成される）という事行に、*ya bientôt quitter*（ベトナム軍が間もなく撤退する）が隣接しており、「平和が形成される」延長線上に位置し、撤退の兆しが既に進み始めていることを表している。つまり、FP-PR-H の使用により、平和の形成が実現することを補強することができる。それに対して、FH の事行である *signera*（発表することになる）は、第 4 章での分析のとおり FH と共起しやすい基準時との断絶のマーカでもあり、補足情報を表す記号文字で

⁹² https://www.liberation.fr/planete/2019/04/29/mort-d-arnaud-dubus-ancien-journaliste-de-libe-a-bangkok_1724098

ある丸括弧 (parenthèse) 内で生起しており、名詞化された「現地で仕事をする」、「没頭する」「専門書を読む」などの好んだ事柄たちを羅列することから一時的に断絶や跳躍をし、先の未来ではアルノー自身も専門書を「発表することになる」という事行を潜在的選択肢の中から先取りして読み手に提示している。東アジアに関心があったアルノーの、ジャーナリストとしての人生における出来事たちのまとめの一つであり、「未来」における集大成のような大きな成果の一つに相当することを先取りしている。

次の例 (21) は、第 4 章 4.2.4 節で複合過去形と FH の共起の例として考察したが、迂言的未来形には触れていないため、再度分析してみよう。

- (21) Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement, véritable conseil de guerre, qui ne se séparera que vers 2 heures du matin, au moment où vont commencer les opérations, arrête le dispositif militaire. M. Thiers est arrivé depuis deux jours à Paris. A Paris, il n'a trouvé que 12 000 hommes armés (la division Faron) plus 3 000 gendarmes. Il a immédiatement obtenu de Bismarck l'autorisation de porter l'armée à 40 000 hommes. Il doit se présenter le 20 mars devant l'Assemblée nationale. Cette échéance approche. Thiers est pressé d'agir. (LPC 第 5 部 2 章 : 236)

この間に (零時)、実際上の作戦会議である政府の一会議が軍隊の配置を決定する。この会議は作戦がいよいよ開始される瞬間、午前二時頃にやっと解散されるだろう。ティエール氏は二日前からパリに来ていた。パリで彼が見つけたのは、武装した一万二〇〇〇人の兵士 (ファロン師団) と三〇〇〇人の憲兵だけであった。彼はただちにビスマルクから、軍隊を四万人に引き上げる許可を獲得した。彼は三月二〇日に、国民議会の前に姿を現わさなければならない。この期限は近づいている。ティエールは行動を急ぐ。(LPC 和訳書『下』: 46)

この例は興味深く、FH と FP-PR-H 双方とも、午前二時という同じ時に関して叙述している。しかしながら異なる 2 つの時制によって述べられていることによって、それぞれの未来の出来事を異なる印象で捉えることとなる。

まず、直前の事行で歴史的現在によって定位されている Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement arrête le dispositif militaire (零時に政府の

一会議が軍隊の配置を決定する) という作戦と FP-PR-H で表されている **vont commencer** (作戦がいよいよ開始される) との間には、他の選択肢は閉じられ、零時から二時までの間に実行へ向けての動きが始まっているという緊密なつながりがあり、切迫している状況だという印象を与える。一方、FH で表されている、会議は **ne se séparera que** (やっとう解散されるだろう) には、会議が「零時に軍隊の配置を決定する」という基準時の事行との緊密なつながりは感じられず、跳躍した先の出来事を先取りしている印象を受けるだろう。つまり、零時に軍隊の配置を決定したことは一事行であり、さらに作戦に関する様々な議論を経て、ne...que で局所性が強調され、和訳でも「やっとう」と加えられているように、「ようやく解散に至る」という文脈を表している。これはまた、「軍隊の配置の決定」からの一連の終着点を示しているとともに、そこに至る過程の存在を提示しているということである。つまり、FH を終着点として用いることにより、基準時から FH の事行実現までに様々な執筆されていない選択的事行があったこと、それらを経たことを暗に示すことができるのである。

もう 1 つ類似した例を見ておこう。この例も第 4 章 4.2.3 節の (19) で観察したが、FP-PR-H は分析していなかったため、ここで再度取り上げる。

(22) Dès le 15 février, l'Assemblée **s'attaque** à la garde nationale. Les « trente sous » ne **seront payés** qu'aux sédentaires présentant une sorte de certificat d'indigence. Dès lors la garde ne **sera** plus le peuple en armes mais une foule d'indigents secourus par la charité publique. Puisqu'il **est** impossible de désarmer la garde (dont on sait qu'elle ne **se laissera** pas faire) ou de la livrer aux Prussiens (qui n'**ont pu** forcer les défenses de Paris), on **va** la **discréditer**, la **dissocier**, puis la **dissoudre**. (LPC 第 5 部 1 章 : 223)

二月一五日以後、議会は国民衛兵を攻撃する。「三〇スー」は、ある種の貧窮証明書を提示する駐屯兵にしか支払われなくなるだろう。そのときから、衛兵はもはや武装した人民ではなくして、公共の慈善によって救済される貧乏人の群れとなるだろう。衛兵を武装解除し(彼らがされるままにならないことはわかっている)、あるいは、それをプロイセン兵(彼らはパリの防備を破ることができなかった)に引き渡すことは不可能なので、衛兵の信用を失わせ、分裂させ、ついで解散させようとするのだ。(LPC 和訳書『下』: 18-19)

この例は、FP の隣接性と FH の跳躍という性質が明白な事例となっている。ここでは、第 4 章 4.2.3 節でも観察したように、FH で示されるはじめの 2 つの事行は前文脈からの話題的断絶がなされており、基準時となる l'Assemblée s'attaque à la garde nationale (議会が国民衛兵を攻撃する) という事行の結果の展開へと跳躍している。それに対して、va discréditer, dissocier, dissoudre (衛兵の信用を失わせ、分裂させ、解散させようとする) という FP-PR-H によって表されている事行は、「衛兵を武装解除する」、「衛兵をプロイセン兵に引き渡す」などは不可能なので、他の選択肢は閉じられ、FP-PR-H の事行へと真っすぐに漸進するという「攻撃する」の方向性を示しており、歴史的現在で定位されているその時点と流れがつながっている、つまり隣接していることが明らかである。

また、(20) でも見られた丸括弧内の FH である ne se laissera pas (国民衛兵はされるままにならない) も 4.2.3 節での分析同様、丸括弧の補足説明という性質にともない基準時から断絶し、さらに on sait que 以下の補足節の中にあることで視点が当時の人々と融合し、後の展開の潜在性が感じられる。また、この例では断絶を伴った跳躍と親和性が高い ne...que の局所性や、ある事態の最終結末を表わす ne...plus が FH と共起している。

これらの事例は、トピックの焦点の変化で表すと分かりやすいだろう。以下は、渡邊 (2014 : 137-138) の迂言的未来形と単純未来形に関する理論と図を参考に、本節で議論した概念⁹³ を取り入れ改変し、さらに本論筆者が焦点を導入した FP-PR-H (図 5-6) と FH (図 5-7) の図である。図 5-6 と図 5-7 で t_0^1 は、歴史叙述の現段階を疑似的に発話時 t_0 に準ずる時点として表したものである。図 5-6 では、迂言的未来形の構成要素となる移動動詞 aller の意味として有する漸進性を反映し、可能世界を想定していない直線的な時間への位置づけである。そして aller によって連続性が保証されている。これは、のちに分析する FP-IMP-H も含めた FP-H 全般に共通した特徴である。それに対して、図 5-7 においては、動詞事行を P とし、それが記述されなかった・起こらなかった可能性 (偽) の中に他の様々な出来事が起きた可能性を潜在的な可能性として (non-P) と定位する。この non-P の総体をここでは潜在的世界 (monde potentiel, MP と略号する。) と呼ぶことにし、書き手や史料などによって真だと選択され FH によって位置づ

⁹³ 第 3 章 3.4 節を参照のこと。

けられる P は、語られる出来事の総体を期待世界 (m*) として構成している。点線は対立する事行 P / non-P だけではなく潜在的可能性⁹⁴ もあることを表している。t₀¹ と t₊₁ の間には断絶がある。

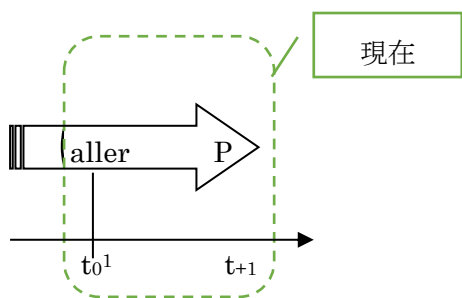


図 5-6 : FP-PR-H の視点

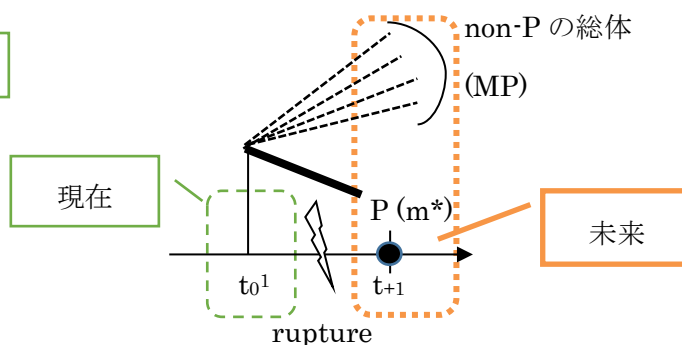


図 5-7 : FH の視点

FP-PR-H では定位された現在とのつながりが重要であり時間的連続性を見るため四角で示される視点の範囲が広い。しかしながら、FH では現在とのつながりではなく、未来という時の枠組みを構築し、FH で表される先取りした出来事（潜在的選択肢も含む）に視点を置く。（図 5-7 のオレンジの点線による枠を指す。）

このように、定位された基準時としての現在との時間的なつながりを示し、未来の潜在的 가능성을暗示しない FP-H と、定位された現在と断絶し時間的跳躍した先の未来までに存在する潜在的 가능성을暗示する FH とでは、歴史叙述においても働きが大きく異なっている。

5.5. 現在形に活用した歴史的迂言未来 (FP-PR-H)

単純未来形と同様に一般に「話」レベルに属すると言われる迂言的未来形も、第 4 章 4.2.4 節で提示した歴史叙述的時間軸の導入により使用が可能となる。つまり、現実時間では過去にあたる事行を、歴史叙述的時間軸で基準時の虚構的現在として歴史的現

⁹⁴ 物語と異なり、歴史は新しい史料の発見等によって事実が変わる可能性を有しているため、また、同じ出来事に関する書物でも書き手によって選択される事実が異なるため、点線で表されている。

在で定位し、そこに立脚することによって FP-PR-H は用いられる。しかし、この同じ時間軸上の 2 つは同様に未来の事行を表すが明確な性質的違いを有し使い分けられている。

まず、次の例を見てみよう。

- (23) Né à New York, Peter Fonda marche vite sur les traces de son père, qui ne l'encouragea ni ne le freina dans ses envies de devenir acteur. Jusqu'à une tardive réconciliation, ils entretiendront des rapports distants. Fonda fils s'illustre au théâtre, à la télé et sur grand écran, mais refuse vite le moule du jeune premier éclatant, avec notamment un rôle de patient d'hôpital psychiatrique dans *Lilith* (1964) de Robert Rossen. Cheveux longs et consommateur de drogues hallucinogènes, il préfère frayer avec les Byrds ou les Beatles. C'est chez le pape du système D, Roger Corman, qu'il va s'épanouir, dans un rôle (déjà) de biker dans *Les Anges sauvages* (1966) et en pubard sous LSD dans le bien nommé *The Trip* (1967).

(*liberation.fr*; 18/08/2019)⁹⁵

ニューヨークで生まれたピーター・フォンダは、すぐに父親 [名優ヘンリー・フォンダ, 筆者註] の跡を継ぎました、父親は俳優になりたいと思っていた彼を励ましもせず、抑えることもしなかった。遅れて和解するまで、彼らは遠い関係を維持することになる。息子のフォンダは、演劇、テレビ、大作映画で有名になったが、特にロバート・ロッセン監督の *Lilith* (1964 年) で精神病院の患者役を演じるなど、華々しい若手俳優の型をすぐに拒否した。長髪で幻覚ドラッグを使用する彼は、「バーズ」や「ビートルズ」と親しくするのを好んだ。システム D の法王 [=低予算映画の大御所, 筆者註] であるロジャー・コーマンのもとで、彼は *les Anges sauvages* (1966 年) のバイカー役 (既に) や、うまく名付けられた *The Trip* (1967 年) での LSD 中毒の広告俳優役などで開花することになる。

⁹⁵ https://next.liberation.fr/cinema/2019/08/18/mort-d-un-biker-nomme-fonda_1745910

(23) では、FP-PR-H はパラグラフの最後に用いられてる。立脚元は直前に叙述されている事行とは限らず、ここでは *Fonda fils refuse vite le moule du jeune premier éclatant* (ピーター・フォンダは華々しい若手俳優の型を拒否する) を基準時として、FP-PR-H である *va s'épanouir* (コーマンのもとで開花することになる) が用いられているが、基準の事態に隣接し、1994 年、1966 年、1967 年の映画出演作が提示されていることもあり、連続性の上で兆しを伴いつつ開花していく様子が明確に読み取れる好例である。ここからは直線的な漸進性で表されているため、「開花しない」という選択肢は少なくとも閉じられており、FP-PR-H で示されている事行へ展開の動きがあることを強調することができる。もし FH を用いた場合、最終的に「開花する」が、読み手にはそれまでの過程・兆しを感じられず突然開花したような孤立した印象を与える。孤立した提示のため、「開花しない」可能性も必然的に暗示される。

一方、この例には FH も生起しているが、立脚する基準時 t_0^1 は、父親は *encouragea* (励ます)・*freina* (抑える) こともしなかったに相当する。そこから断絶し、*Jusqu'à une tardive réconciliation* (遅れて和解するときまで) という時間副詞を伴い、この時の枠組みを構築された未来へ跳躍し、達成された事行 P である *entretiendront* (遠い関係を維持することになる) を先取りしている。先取りすることによって、そこには和解するまでの潜在的な事行(執筆されていない事行を含む)の過程を経たうえで non-P「維持しない」という選択肢が見え隠れしているが、最終的に「維持する」を選択したということが暗示される。この FH の一文は一時的にピーター・フォンダの経歴から離脱し補足説明の話題転換が行われていることから、FH が連続性ではなく断絶という性質を有することが裏付けられるであろう。

歴史テキストは書き手の知識に基づくため、書き手にとっては FH を使用しても完全に起こる確実な事行である。しかしながら読み手にとっては、FP-PR-H は、事行実現に至る動きが感じられるためリアリティがあり近い未来の印象を与え、一方 FH は、断絶により実現までの動きや過程の提示なしに孤立的に示されるため、現実性の感覚がわからない遠い心的距離感を与えるのかもしれない。つまり、事行の実現に向かう動きとしては、連関的 FP-PR-H と跳躍的な FH と言えるかもしれない。これは先に提示した図 5-6・図 5-7 を歴史叙述の時間軸に沿ってより詳細に改変した以下の図 5-8・図 5-9 の視点 PDV-E の差異によると分かりやすいだろう。図 5-9 の FP-PR-H では、PDV-E は現在から事行の発生まで連続してその過程も含むのに対し、図 5-8 の FH での PDV-E は

基準時である疑似的現在とは **rupture** (断絶) し、現在とは異なる「未来」という時の枠組みの中で生ずる事行 **P**, **non-P** (複数) のみに焦点が当てられる。FH は特にこの断絶を伴いながら、書き手や読み手が位置する現実から虚構的な歴史叙史的への世界の移行が、読み手に心的距離を生み出していると考えられる。

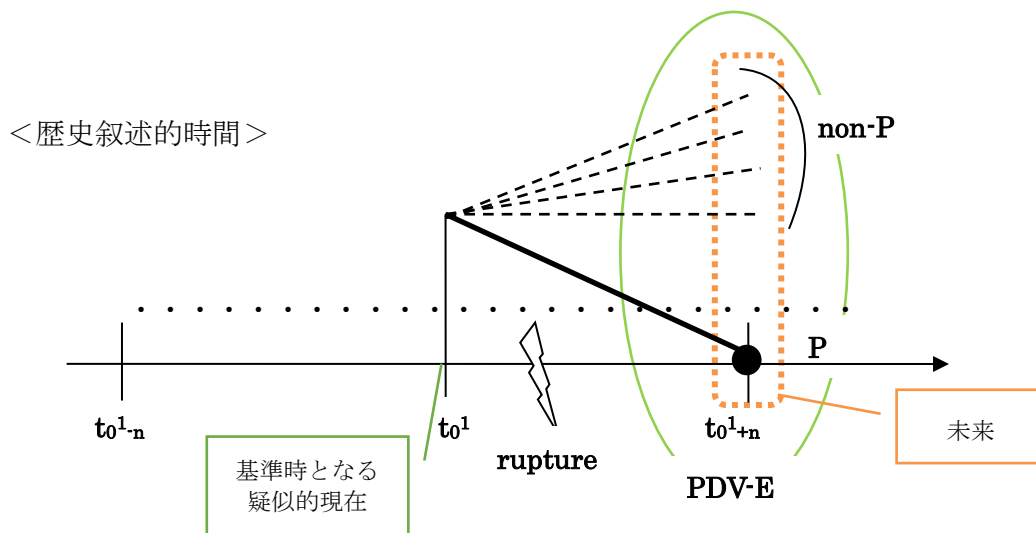


図 5-8：歴史叙史的時間軸上の FH

図 5-7 をベースとし、焦点に関しては以下の仮説が提示できる。4.2.4 節で既に述べた歴史叙述の自立性⁹⁶ からして、書き手の存在が覆い隠された、まるで出来事を歴史の空間の中に定位する「歴史」の目のような視点 PDV (point de vue de l'événement historique, PDV-E と略号する。)があると仮定する。「歴史を作っている主体」とは歴史的空間に出来事が存在していると保障している存在である。この PDV は「歴史=物語」の中にある事態 (événement, E と略号する。) を捉える。以下では、動詞自体が表す行為や状態の事行 (procès, P と略号する。) と文全体で表される出来事である出来事という事態 (événement, E) を別扱いする。FH では PDV-E は基準時 t_0^1 と t_0^{1+n} との間で断絶が発生しているため、事態 E を捉えることができなく事行 P, non-P のみに焦点が当てられると考えられる。

それでは、FP-PR-H はどうであろうか。図 5-9 を見てみる。

⁹⁶ 理論の土台となる言語的時間に関しては第 3 章を参照のこと。

<歴史叙述的時間>

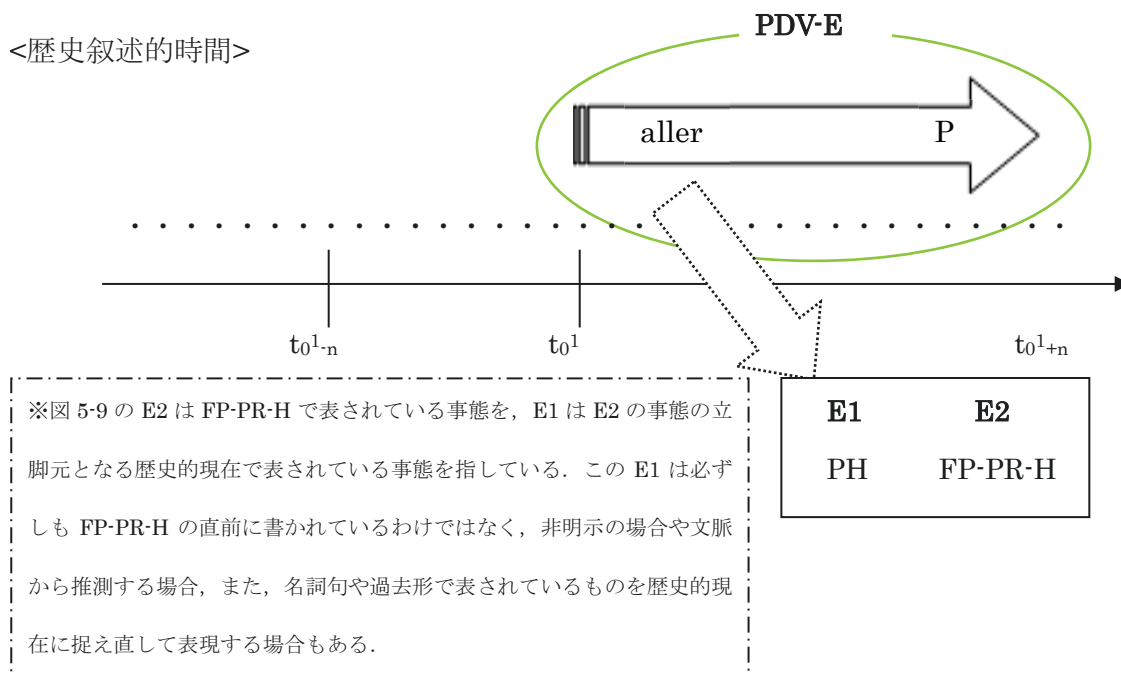


図 5-9 : 歴史叙述的時間軸上の FP-PR-H

FP-PR-H も FH 同様、PDV-E という 1 つの焦点から成る。しかし、FP-PR-H には 5.2 節で述べたように、準助動詞 aller で連続性が保証されており断絶がないため、PDV-E は前後の連続した展開（事態、E1 と E2）を捉える。したがって、暗示される連続性と確実さも包括する。このように、FP-PR-H と FH は、迂言的未来形と単純未来形としては同じ「話」レベルに属する未来形というくくりではあり、歴史叙述的時間軸上で 1 つの視点から捉えられるという共通点はあるが、その性質は異なっている。FH は「未来」という時の枠組みが構築された中での事行、FP-PR-H は虚構的現在時 t_0^1 に既に動きが開始されるため後の事行が現在に組み込まれたもの、つまり語りの現在に属するものと捉えることができるかもしれない。

次の例は、FH や FP-PR-H が生起しているが、分析対象としてこれまで取り上げてきた歴史的用法とは少し叙述内容の性質が異なるため、歴史的用法の例外として挙げておくことにする。

(24) [...] Dans ce mouvement suscité par les éléments négatifs, donc créateurs de la société existante — le prolétariat — la pratique sociale se veut et se fait libre, dégagée des poids qui pèsent sur elle. Elle se métamorphose d'un bond en communauté, en communion au sein de laquelle le travail, la joie, le loisir, l'accomplissement des besoins — et d'abord des besoins sociaux et des besoins de sociabilité — ne se sépareront plus. A la suite du « progrès » économique, l'homme va s'affranchir de l'économie elle-même. La politique et la société politique vont disparaître en se résolvant dans la société civile. La fonction politique comme fonction spécialisée n'existera plus. La quotidienneté se transforme en fête perpétuelle. La lutte quotidienne pour le pain et le travail n'aura plus de sens. (LPC 第7部2章 : 389)

既存の社会の否定的な、つまり、創造的な要素であるプロレタリアートが推し進めたこの運動において、^{ブラティック・ソシアル}社会的実践は、自己の上へのしかかる重荷から放たれ、自由たろうとし、また自由なものとなる。それは一挙に^{コミュニテ}共同体に、^{コミニ}宗教共同体に^{オン}転換し、そこでは労働、快楽、余暇、さまざまな欲求 — 第一に社会的欲求と社会性の欲求 — の充足がもはや切り離せなくなる。経済的《進歩》の結果として、人間は経済そのものから解放されるだろう。政治と政治社会は姿を消して市民社会のうちに吸収されるだろう。専門化された機能としての政治の機能はもはや存在しないだろう。日常生活は永遠の祭りに変貌する。パンと仕事を求める日常闘争はもはや無意味となるだろう。

(LPC 和訳書『下』: 332-333)

この例はこれまで取り上げた歴史的用法とは少し系統が異なる。書き手の現在 t_0 時からの未来に関する叙述ではないため、発話時からの未来の際に生起する FS を用いるのではないが、歴史的に実際に起こった出来事の叙述でもない。既に過去の出来事であるため結末は知っているにもかかわらず、当時の t_0^1 時点にあたかも自分が存在しており、そこからの書き手の展望・希望を述べている形である。歴史叙述的時間軸上での FH と類似しているが、これまで取り上げてきた FH は書き手の主観的判断は含まない。そのため、FS の主観的側面と FH の客観的側面が組み合わさったような、例外的な例である。

以下は分析であるが、FP-PR-H、FHともに基本の性質は同じである。

(24) では、形成されたコミュニンの重要性に関して叙述している。「コミュニンの社会的実践は自由をもたらす」という文脈的情報を E1 とし、FP-PR-H を用いることによって E2 「経済の進歩により人間は経済から解放される」, 「政治と政治社会は市民社会に吸収されて姿を消す」という、自由の象徴であるコミュニンが形成されたことによってすでにその兆しが見える切迫性と、その基準時としての虚構的現在時に隣接した連続・漸進性が感じられる。一方同じ基準時に立脚する FH を用いた「さまざまな欲求も充足が切り離せなくなる」, 「専門化された政治の機能は存在しないだろう」, 「日常闘争は無意味となるだろう」という事行は、基準時から断絶・跳躍する性質からもたらされる潜在的可能性を暗示し、その中の「期待値の高い事行」を先取りし希望として提示している。これらは現段階ですでに動いている兆しがあるわけではなく、将来そのような状態になるだろうというように、FH で示される事行の実現には現実味がない不安定な印象を与える。

5.5.1. 現在形基調の歴史的迂言未来 (FP-PR-H)

本節以降では、現在形基調・過去形基調の叙述別に例文を挙げ、生起する FP-H を分析し、それぞれの特徴を明らかにしていく。本節ではまず、現在形基調の叙述における FP-PR-H を図 5-8 と図 5-9 に沿って観察しよう。次の例は、FP-PR-H が主節の動詞として用いられている例である。

(25) Elle sera le catalyseur de sa chute lorsqu'en 2017, Mugabe manoeuvre pour s'assurer qu'elle lui succédera à la tête du pays. En novembre, une révolution de palais, fomentée par l'armée et le vice-président du pays, Emmerson Mnangagwa, impose sa destitution. Les Zimbabwéens descendent en masse dans la rue pour célébrer le départ de l'ancien libérateur devenu dictateur. Ils vont, hélas, vite déchanter. Les successeurs de Mugabe se montrent tout aussi autoritaires et accrochés au pouvoir, réprimant à leur tour les opposants. Un blocage politique qui condamne de facto tout espoir de reprise de l'économie. Dans ce contexte de tensions,

Emmerson Mnangagwa remporte une victoire douteuse lors de l'élection présidentielle de 2018. Retiré à « Blue Roof » sa résidence à Harare, Mugabe avait appelé à voter pour l'opposition. Trop tard, pour celui qu'on surnommait « Camarade Bob » pendant la lutte de l'indépendance, et qui aura raté sa sortie, laissant un pays exsangue et désormais sans illusions.

(*liberation.fr*; 06/09/2019)⁹⁷

ムガベは彼女 [ムガベ夫人, 筆者註] が自分の後を継いで国のトップになるのを確保するために工作し, 2017年に彼女は彼の失墜のきっかけとなる. 11月には, 軍と国の副大統領のエマーソン・ムナンガグワによって扇動された宮殿革命が, 彼の解任を強いた. ジンバブエの人々は, 独裁者になったかつての解放者の辞任を祝うため, 一斉に街に繰り出した. 彼らはしかしすぐに期待を捨てることになる. ムガベの後継者たちも同じように独裁的な態度を示し, 権力にしがみつき, すべての反対派を弾圧した. 政治的な膠着状態で, 事実上, 経済回復の希望は封鎖された. このような緊迫した状況の中, 2018年の大統領選挙では, エマーソン・ムナンガグワが怪しい勝利を収めた. ハラレの住居「Blue Roof」に引っ込んだムガベは, 野党への投票を呼びかけていた. 独立闘争中に「同志ボブ」とあだ名をつけられ, 出口を逃してしまった彼は, 大量失血し今や幻想はない国を残してしまった. 遅すぎたのだ.

FH で表されている一つ目の事行 sera は, en 2017 (2017年) という時間副詞との共起により, 「2017年の未来」の枠組みを構築し, 基準時 manœuvre (妻が国のトップになるために工作する) からの連続性から断絶し, 跳躍した先の事行がどのような結果に終わるのかを先取りしている. 二つ目の FH による事行 succédera (跡を継ぐ) は que 関係節内に生起しているように, 主節の動詞である同じく manœuvre を基準時として未来の枠組みを構築し, 複数の潜在的選択肢の中から最終的にムガベの妻が succédera という事行が達成される方向へ跳躍することを示している. しかしながら, そこには何らかの兆しのような裏付けがなく事行が定位されるため, この二つ目は単に主節の動詞に対する時間的後方性を表しているに過ぎない. FH は基準時と断絶しており, PDV-E

⁹⁷ https://www.liberation.fr/planete/2019/09/06/zimbabwe-la-derniere-mort-de-robert-mugabe_1749788

は命題全体の事態 E ではなく事行 P / non-P (複数) のみに焦点が当てられるため、基準時の事行「工作する」と FH の事行「跡を継ぐ」, 「失墜のきっかけとなる」との関係に読み手は切迫性や密接性を感じられないという効果を利用していると考えられる。それに対して、E2 に相当し FP-PR-H で表されている vont, hélas, vite déchanter (すぐに期待を捨てることになる) という事態は、E1 である宮殿革命が impose sa destitution (ムバベの解任を強いた) という事態に立脚しており、E2 は準助動詞 aller によって保障される E1 からの連続性の上で起こった事態であることを FP-PR-H を用いることによって読み手に明確に示すことが可能となる。時間的間隔はここでは vite (すぐに) という副詞により表現されているが、すぐに事行が起こったかどうかは分析上さほど問題ではなく、PDV-E が E1 から E2 への連続性全体に当てられていることが重要である。つまり、E1 の「ムバベの解任を強いた」からの延長戦上に何らかのネガティブな兆しがあるため E2 「ジンバブエの人々は希望を捨てることになる」が生起するという連続性全体を PDV-E は捉える。ここでは、兆しがすぐ後に述べられており、「後継者たちも独裁的で権力にしがみつき、すべての反対派を弾圧した」とあり、E1 から E2 への連続上にこれらの事行が兆しとして発生していたため、他に選択肢のない閉じられた未来として「民衆は希望を捨てることになる」へ漸進しているのである。FP-PR-H を用いると選択肢が閉じられるということから、望むも望まなくもその方向に進むしかないという、そうせざるを得ないネガティブなアспектとも親和性が高いと考えられる。

つづいて *La Proclamation de la Commune* からの例を見てみよう。

- (26) Paris s'éveille dans la liberté, mais il ne le sait pas encore. Il aspire à la fête. C'est un frémississement qui parcourt la ville. Bientôt, devant les barricades qui entourent l'hôtel de ville, autour des 20 000 fédérés qui campent avec leurs canons et leurs mitrailleuses sur la place, parmi les retranchements de Montmartre et de Belleville, les groupes vont se former. Ils vont lire les affiches, multiples, contradictoires, les unes posées pendant la nuit, d'autres qui ne cesseront de sortir de l'Imprimerie nationale pendant la matinée et d'être placardées sur les murs, les unes du gouvernement, les autres du Comité central. (LPC 第 6 部 1 章 : 290)

パリは自由のなかで目覚める。だがまだそれに気づいていない。パリは祭りを渴望する。ざわめきが街を駆けめぐる。やがて、市庁舎をとり囲むバリケードの前に、大砲や霰弾砲と一緒にその場で野営している二万人の連盟兵のまわりに、モンマルトルとベルヴィルの防御陣地の間に、さまざまな集団がつくられはじめる。彼らは多くの矛盾したビラを読むだろう。あるものは夜のうちに貼り出されたものであり、他のものは午前中に国立印刷所から運び出されて、あちこちの壁に貼られつづけるだろう。一方は政府側のものであり、他方は中央委員会のものである。(LPC 和訳書『下』:147-148)

これは、パリ・コミューンが宣言される直前の様子の描写である。一つ目の FP-PR-H では、E1 は人民が自由を得る喜びが近づいていることを予感しざわついている事態が、E2 は至る所でさまざまな集団が vont se former (つくられはじめる) 事態が当てはまる。二つ目では、E1 が一つ目の FP-PR-H の事態を非明示の歴史的現在として捉えなおした「さまざまな集団がつくられる」に相当し、隣接した連続的な事態として E2 に vont lire (集団は多くのビラを読むだろう) が該当する。ざわめきが兆しとなり、漸進性により臨場感があり近い未来に実現する方向に向かっている印象を与える FP-PR-H が用いられている。一方、FH は主節の動詞時制に FP-PR-H が用いられている文の qui 関係節内において生起している珍しい例であるが、基準時は主節の動詞時制 FP-PR-H ではなく、「あるビラは夜のうちに貼り出された」という事行でありそれに立脚し、cesseront (他のものは午前中に…から運び出されて、あちこちの壁に貼られつづけるであろう) が用いられている。夜に貼り出された事行はすでに終わった確定されたものであるが、他のものはまだ明確な兆しがない未確定であるため、P / non-P しか焦点が捉えられず、たとえば政府側からによる妨害が起こり貼りつづけられないのはいかなど、さまざまな潜在的選択肢の余地を残し、事行の実現に不安定な印象を与えている。密接に関連性のある事行でありながら FP-PR-H がつづけて用いられず FH が使用されていることから、上記のような FH との性質の差異を強く考慮して使い分けられているのではと考えられる。

最後に、*Jeanne d'Arc* より FP-PR-H が多く生起するパラグラフの例を分析してみる。

(27) Dès les premières opérations, on peut comprendre que Salisbury est décidé à mener méthodiquement son attaque. Les « méchantes places » dont il avait été question lors du conseil décidant le siège d'Orléans, ce sont les places de la région entre Dreux et Chartres. Salisbury va d'emblée les neutraliser et s'en assurer la possession afin d'éviter toute surprise : [...] ; en suite de quoi il concentre ses troupes à Chartres et entreprend des opérations dans la région même de l'Orléanais. Le 5 septembre 1428 il peut écrire au maire de la cité de Londres pour le mettre au courant d'une prise d'importance : celle de la petite cité fortifiée de Janville « par plus forts assauts qu'on vit jamais » ; auparavant Le Puiset et Toury étaient tombés entre ses mains ; Janville va devenir un peu le « quartier général » de Salisbury. De là des opérations de moindre importance vont être menées sur Artenay, Patay, Châteaudun, tandis que, poussant plus loin, jusqu'à la Loire, l'un de ses capitaines va s'emparer de la ville et du château de Meung, puis de Beaugency; c'est alors que Salisbury va mettre à sac, sur la rive gauche de la Loire, le sanctuaire de Notre-Dame de Cléry dont il pille sans vergogne le trésor avant de détruire l'édifice. (JDA 第3章 : 29-30)

包圍軍の司令官ソールズベリーが、作戦の当初から組織的な攻撃を計画していたことは明らかである。オルレアンの包圍を決定した会議の時から問題となっていた「厄介な町々」とは、ドルーとシャルトルの中間の地域の町々であった。ソールズベリーはそれらの町を一挙に中立化させて、奇襲されるのを防ぐために町を占領した。(…)この後、彼は部隊をシャルトルに集結し、オルレアン地域そのものに向けての作戦に入った。一四二八年九月五日には、彼はロンドン市長に宛てて重要な戦果について報告をしたためている。「かつてない激しい攻撃で」武装した小さな町ジャンヴィルを占領したのである。これに先立ってル・ピュイゼとトゥーリーも陥落していた。以後ジャンヴィルは暫くの間ソールズベリーの作戦本部となった。ここから比較的小規模な作戦がアルトネー、パター、シャトーダンなどの町や村に向けて行われる一方、その部下の一人はさらに遠くロワール川に向けて進撃し、マンの町と城、およびボージャンシーを占領した。ソールズベリーがロワール川左岸のクレリーの聖母教会の聖

域を略奪し、破廉恥にも財宝を奪い去ったうえ建物を破壊させたのはこの時のことである。 (JDA 和訳書第3章:39)

この例では、*Dès les premières opérations, on peut comprendre que Salisbury est décidé à mener méthodiquement son attaque* (司令官であるソールズベリーが当初から攻撃を計画していた) という事態が E1 に相当し、*va d'emblée les neutraliser* (ソールズベリーは厄介な町々を一挙に中立化する)、そして *va s'en assurer* (ソールズベリーはそれらの町を占領する) という事態 E2 が、計画通りという E1 から連続性の中で行われたということを FP-PR-H は示している。次は「一四二八年九月五日までにジャンヴィルを占領した」という事態を基準時 E1 とし、*va devenir* (以降暫くジャンヴィルはソールズベリーの作戦本部になる)、*vont être menées* (ジャンヴィルから小規模な作戦が行われる)、*va s'emparer* (さらに遠くのマンとボージャンシーを占領する)、*va mettre à sac* (教会の聖域を略奪する) という事行すべてが「ジャンヴィルの占領」を Imbs (1960) のいう *tremplin* (踏み台) とし、その延長線上に E2 として連続して進行している。FH には *flash forward* という連続生起による効果が見られたが、この例の FP-PR-H の連続生起では、ある命題に沿った未来の事行のまとまりを先取りする機能はない。断絶と跳躍の性質を有していないため流れから切り離れた先取りはできず、ある一つの命題に沿っているため連続して生起はするが、FP-PR-H の各事行間の連続性が重要なのではなく、それぞれの事行が基準時 E1 との連続上にあることをあくまで示すのみである。

5.5.2. 過去形基調の歴史的迂言未来 (FP-PR-H)

本節で扱う過去形基調に生起する FP-PR-H は、訃報コーパスには 1 例も確認されず、LPC, JDA においても約 7 例 (曖昧な例も含む) という非常に少ない生起数であった。現在形基調の叙述において FP-IMP-H は挿入として少なからず用いられるため、過去形基調のテキストでは FP-PR-H が使用しづらい何かしら理由があるのではと推測する。またこの事実に対して、第 4 章で分析したとおり FH の生起は過去形基調の叙述内でも珍しくないということも考慮して観察していくこととする。

まず、現実時間軸からの語りの最後に生起している以下の例を見てみよう。

(28) Si nous reprens *La Vérité sur la Commune*, nous y lisons qu'au cours de l'après-midi du 18 mars, peu avant 4 heures, la foule circulait entre les baraquements édifiés sur les boulevards extérieurs, près de la place Pigalle. Un peu à l'écart de la foule, un dessinateur prenait des croquis. A côté de lui se tenait un sergent de francs-tireurs et un homme de haute stature, d'allure militaire bien que vêtu en bourgeois. Des groupes passaient, chantaient *La Marseillaise*, criaient « Vive la République ! » Chaque civil avait à son bras un militaire : mobile ou cavalier, marin ou zouave. C'est de cette foule en fête que ya surgir le drame : [...] (LPC 第 5 部 2 章 : 271)

再び『コミューンの真相』を取り上げることにすれば、そこにはつぎのことが読みとれる。三月一八日の午後、四時少し前、群集はピガール広場近くの外回りの大通りに建てられた軍の廠舎の間を歩き回った。群集から少し離れたところに、一人の画家がスケッチをしていた。彼の傍には、義勇兵の軍曹が立っており、さらにその横には、平服を着ている軍人のような様子の子の背の高い一人の男がいた。いくつかのグループが通り過ぎ、彼らはラ・マルセイエーズを歌い、《共和国万歳》と叫んだ。市民はそれぞれ軍人―遊動隊員とか騎兵、水兵とかアルジェリア歩兵―と腕をくんでいる。ドラマは、この祭り気分の群集から起こることになる。(LPC 和訳書『下』:111)

このパラグラフでは、パリ・コミューン宣言の三月二十八日の直前である三月十八日の状況を描写している。はじめに 1 人称複数形である *nous* が主語として用いられているように、現実時間軸上で書き手が位置する *t₀* からの回顧的な語りを半過去形で行っており、FP-PR-H を含む文の前でその物語的な語りが終わっている。E1 はこの半過去形による語り全体に相当し、仮に歴史的現在に置き換えることでそれに立脚し E2 では FP-PR-H の ya surgir (ドラマが起こることになる) を用いることにより、ドラマが三月十八日の午後四時少し前における街の様子延長線上にあることを明示する。つまりパリ・コミューン宣言へ向かう道のりの上で起きる様々な出来事といった新たな展開のはじまりを想起させていると考える。書き手の存在が見えていた現実時間軸から FP-PR-H が生起する歴史叙述的時間軸に移行することによって、回顧的から前望的へ視点が変わり、出来事を歴史の空間の中に定位し「歴史を構築する主体」である PDV-E が

漸進性を捉える。同時に読み手も一体化して進むことで、臨場感・没入感をもたらしていると考えられる。

次の例は、現在形基調に複合過去形による詳細な叙述が挿入されているとも捉えられるかもしれないが、見ておこう。

- (29) En effet, guerre civile et guerre étrangère contribuent également au malheur de la France en ce début du XV^e siècle. Après une période qui a marqué une détente sensible, aussi bien à l'intérieur d'un royaume où la révolte dite des Maillotins a été matée par Charles VI à son avènement, qu'à l'extérieur puisque les relations ont été sereines, cordiales même, avec le dernier descendant des Plantagenêts, Richard II, lequel a épousé Isabelle, fille de ce même Charles VI. La date entre toutes dramatique, celle qui va marquer le début de malheurs inexpiables, est celle de 1407, lorsque, le 23 novembre au soir, Louis d'Orléans est assassiné – et par des hommes de main dont on ne tardera pas à savoir qu'ils ont été armés par son propre cousin, Jean sans Peur, le duc de Bourgogne. (JDA 第1章：3-4)

実際、フランス王国内部の対立とイギリスとの間の戦争が、競い合うように十五世紀初めのフランスの不幸を作り出していた。この時期に先立つある期間、動乱は鎮静化してはいた。フランス王国の内部にあつては、重税を不満として戦闘用の〈槌^{マイヨ}〉を奪って蜂起したパリ市民の〈槌一揆^{マイヨタン}〉と呼ばれた暴動は、国王シャルル六世の治世当初に鎮圧されていた。対外的にもイギリスとの関係は平穏となり、プランタージネット王家最後の国王リチャード二世との間は友好的とすら言えた。この国王は、シャルル六世の幼い娘イザベルをその妃に迎えている。修復困難な不幸の始まりを告げる劇的な日付は一四〇七年という年である。この年の十一月二十三日の夜、オルレアン公ルイが暗殺された。下手人たちの背後にはルイの従兄弟にあたるブルゴーニュ公ジャン無畏公^{サン・ブール}がいて、彼らに武器を提供していたことが間もなく判明した。(JDA 和訳書第1章：7-8)

はじめの歴史的現在による contribuent également au malheur de la France (フランスの不幸を作り出していた) の文と FP-PR-H の va marquer le début de malheurs

(不幸の始まりを告げる)の文は内容的につながっているため、上記で述べたとおり現在形基調に過去形による叙述が挿入されているとも言えるかもしれない。フランスの不幸に先立つある期間の状況を複合過去形によって描写している。これは、歴史的現在の事行よりも時間的に前方に位置するためと、一般に複合過去形の特徴として挙げられているように、複合過去形は現在の事行に接触し、複合過去形による事実の結果は現在に影響している場合もある際に用いられるためであると考えられる。ここでは、複合過去形による叙述はフランスの不幸を作り出す予兆として影響していると捉えられる。

パラグラフのはじめにフランス王国内の対立とイギリスとの対立が起こっていることをすでに述べているため、それが不幸の始まりと言える兆しであろう。したがって、過去形基調の叙述から切り替わるこの FP-PR-H の一文から展開がはじまり、E1 は「十五世紀初めに先立つ期間、動乱は沈静化していた」に、E2 はそれに隣接し漸進する FP-PR-H である va marquer (一四〇七年に不幸が始まることを告げる) が相当する。その漸進を感じるひとつの例として、一四〇七年十一月にオルレアン公ルイが暗殺されたことが挙げられるように、FP-PR-H を用いる理由には、時間軸の変更にとまなう過去時制による回顧的から前望的への「視点」の方向性の変化から派生する、展開が始まるというマーカーとしての機能と、基準時からの連続性を暗示する機能が考えられる。

パラグラフは FH を用いて終わっているが、これはオルレアン公ルイの暗殺という重大な事態の結末を表し、前未来形の bilan (総括) としての機能のように、出来事の終わりを示すマーカーの役割を果たしている。

さらに、もう 1 例見ておこう。

- (30) Plus on étudie les textes du temps, plus on perçoit de façon évidente la part prise par l'Université de Paris au procès et à la condamnation de Jeanne. Elle a fourni au régent Bedford l'équivoque sur laquelle ce procès va se dérouler tout entier : faire à la prisonnière un procès d'hérésie, ce qui à la fois dissimule le caractère politique et même militaire de cette action menée contre une prisonnière de guerre, et permet d'atteindre, au-delà de celle dont on avait tant redouté la présence au combat, celui pour qui elle combattait : [...]

(JDA 第 7 章 : 71)

ジャンヌの生きた時代が残してくれた様々な記録の研究が深まるにつれ、ジャンヌの処刑裁判に関してパリ大学が演じた役割の大きさが、紛れもない事実として明らかになってくる。パリ大学はまずイギリス国王の摂政ベッドフォードに対して、この審理全体がその上に展開されることになる裁判の不明朗な筋書きを提供した。すなわち、この女性捕虜に対して行うのは異端裁判なのである。それは、戦闘の捕虜に対して行うこの行動の持つ政治的・軍事的な仕返しとも言える性格を、覆い隠せるであろう。またそれは、戦場に現れるのをひどく恐れられてきたこの女性を飛び越えて、彼女がその人のために戦った人物に傷を負わせることができるであろう。(JDA 和訳書第7章:91)

この例文は過去基調というよりも、現在形基調のパラグラフではあるが主節の動詞時制が過去形の一文の中において **sur laquelle** 関係節内で **FP-PR-H** が生起しているという例であるため、本節の趣旨とは少しずれるかもしれない。E1 には「異端裁判である」という事態が相当し、その隣接した連続性として E2 にその裁判が **va se dérouler** (展開されることになる) という事態が当てはまる。パリ大学が裁判の不明瞭な筋書きを **a fourni** (提供した) 事行を複合過去形とし、回顧的な視点を挿入している。複合過去形の生起との共起に関しては、もともと現在形や迂言的未来形が属する「話」レベルに同じく分類されるため不自然ではない。ここでは純粋に時間の流れを、

「(裁判の筋書きを) 提供した」(複合過去形)

↓

「裁判が始まる」(時制は非明示だが文脈より把握可能)

↓

「(裁判の審理が) 展開される」(FP-PR-H)

として表し、その流れごと挿入している。「裁判が始まる」と「その裁判が展開される」の間は当然断絶を含まない連続上にあるため、FH ではなく FP-PR-H が用いられている。そして、その後の叙述である裁判の意図を時間的に中立な歴史的現在 (Barceló et Bres (2006) による [neutre] という時間的指令) で説明している。

以上より、はっきりと過去形基調に生起する FP-PR-H であるとして分析可能な例がほぼないことが確認されたが、特徴としては、現実時間軸からの叙述の中で挿入される

ことによって一時的に視点の方向性を回顧的から前望的へ変えることになり、臨場感・没入感を与えたり新たな展開のはじまりのマーカ―として機能するということが明らかとなった。過去形基調において FP-PR-H が生じづらい理由としては、歴史叙述的時間軸から現実時間への移行は読み手自身が位置する時間軸への移行であるため、その時間軸上の過去時に実際に起きた事態間の連続性を示す上でさほど違和感を与えないのかもしれない。一方、書き手や読み手に密接な現実時間上から回顧的視点によって語りを追っている途中で連続性という性質を示すために虚構的時間軸である歴史叙述的時間軸が挿入されることには、テキストや読み手に異質感を与える可能性が一つとして考えられるであろう。一方、FH は断絶という性質を孕んでいることにより語りの流れが一度中断するため、虚構的時間軸を挿入しやすいのではないかと推測する。

次節からは、FP-IMP-H に関する分析をはじめていく。

5.6. 半過去形に活用した歴史的迂言未来 (FP-IMP-H)

構造的側面では、基本的に FP-IMP-H は FP-PR-H と同様の特質を有すると考えられる。つまり、同様に *aller* が基準時との隣接性・連続性を暗示する。進行方向に関して、*allait* が過去形であるからといって過去の方角なのではなく、前望的な未来の方角である。

出現傾向の点では、FP-IMP-H は FH との類似点も見られる。時間副詞との共起や、パラグラフや章の終わりにも用いられやすい点である。しかしながら、相違点も当然存在する。たとえば時間副詞との共起は、FH の場合継起的な展開から離脱し、その時間副詞が示すときに達成される事行と潜在的可能性のみの提示であるが、FP-IMP-H の場合、時間副詞が表すときに事行が達成されるために既に実現へ向けた動きがあることを暗示する。たとえば、5.3.節で例として取り上げた (19) で確認できる。FH で表される *l'enfant qui naîtra de ce mariage est promise [...]*。(この結婚から生まれる王子は...約束されることとなった) は、未だ結婚していなく仮定の話の中のため何の兆しもなく、将来達成されることになる事行の提示のみであるのに対して、FP-IMP-H で表される *Le mariage allait être célébré le 2 juin* (結婚式は六月二日に挙行された) は、時間副詞が示す時の前に既にそのようになる流れがあり、その時間副詞のときに「ようやく」達成されるというニュアンスである。また、FH と異なる特徴としては、パラグラフの

はじめに生起することが比較的多いということも挙げられる。FP-PR-H でも同様に用いられるが、FP-IMP-H ほどの頻度ではない。コーパス JDA では、FP-IMP-H の生起中およそ 5 分の 1 の割合で用いられている。これは、断絶という性質がなく、図 5-9 の FP-PR-H と同様に PDV-E が事行の動きを含めた連続性まで捉えるため、これから継起的な展開が始まることを先取りして明示しやすいためではないかと考えられる。さらに、特にコーパス LPC でよく見られた、流れからの離脱・挿入のマーカである丸括弧 (parenthèse) と FH の共起だが、3 つのコーパス内の FP-IMP-H では (実は FP-H 全般でも) まったく確認されなかった。これもやはり、丸括弧の機能を考慮すると、FH の断絶と FP-H の連続性という性質の違いが理由なのではないかと思われる。

次の (31) は過去形基調のパラグラフにおいて FP-IMP-H が生起している例である。実例に沿いながら FP-IMP-H の構造図の仮説を見ていこう。

- (31) Sa première étape est Auxerre le lendemain. La ville avait une garnison bourguignonne ; les troupes royales allaient camper trois jours sous ses murs tandis que se déroulaient des pourparlers qui faisaient mal augurer de la suite des événements : finalement les gens d’Auxerre fournirent vivres et denrées, mais n’ouvrirent pas leurs portes et s’engagèrent seulement à tenir la même conduite que celle que tiendraient les bourgeois des autres villes sur le parcours : Troyes, Châlons et Reims. (JDA 第 4 章 : 52)

最初の重要な目標となる町は翌日着いたオーセールであった。この町にはブルゴーニュ派の守備隊が置かれていた。王太子の軍は町側との折衝が行われる間、町の城壁の下で三日間幕営しなければならなかった。交渉は事態の見通しを明るくするものではなかった。ともかくもオーセールの市民たちは、食料の供出は行ったが町の門は開くことはせず、単に予定された行程上の町々、トロワ、シャロン、ランスがすることになるのと同じ行動をとることだけを約束したにとどまった。(JDA 和訳書第 4 章 : 66, [一部本論筆者加筆])

第 3 章 3.3 節ならびに第 4 章 4.2.4 節で触れたように、Benveniste が提示した *histoire* (「歴史＝物語」) における予見時称のひとつは、FP-IMP-H であった。また過去における未来は一般に条件法を用いるとも言われている。(31) の例では、この 2 つが生起し

ている。ここでの条件法 tiendraient は、単純過去形 s'engagèrent との時制の一致によるものとなっている。過去における未来が条件法だと思われる理由の一つは、過去の事行は通常過去形で述べられるため、このようにその時制の一致としての働きにより単純未来形の代わりに条件法が用いられるためであると思われる。歴史テキストにおける未来を表す条件法に関しては、第 6 章で論じることとする。ここではしかし条件法との共起は以下の図 5-10 のとおり 2 つの焦点による時間構造により、奇妙なものではないことに触れておく。(31) は過去形基調で語られている。したがって、基準時が歴史的現在で示される歴史叙述的時間軸ではなく、FP-IMP-H は書き手や読み手が現実時間軸上の現在 t_0 からの視点 (point de vue du narrateur, PDV-N と略号する, ①) をもって rétrospectif (回顧的) に事態 (événement, E) を捉えている語りであることが分かる。つまり、PDV-N は événement 全体を回顧的にみる視点である。したがって、下記の図 5-10 のように、読み手に対して実際に起きた事行の連続性ごと振り返るという、客観性を伴って事態を見ているイメージを与える。図 5-10 の E2 は FP-IMP-H で表されている事態を、E1 は E2 の事態の立脚元となる過去の事態を指している。この E1 は必ずしも FP-IMP-H の直前に書かれている事態というわけではなく、また非明示の場合もあり、文脈から推測することもある。(31) では、「王太子の軍は翌日オーセールに到着した」という事態が E1 に、allaient camper trois jours (王太子の軍は三日間幕営しなければならなかった) という事態が E2 に該当する。ここでなぜ FP-IMP-H を用いるのか。まず「オーセールに到着」し「三日間幕営する」という事行間には、断絶ではなく連続性・漸進性があるため FP-H を用いる。また、王太子の軍がオーセールに到着した後の状況描写を主に半過去形を用いて叙述している。「幕営する」のはそのうちの一つの事行であるため、aller が半過去形におかれた FP-IMP-H を用いている。さらに、FH ではない理由としては、三日間続くこと、また、すぐに町へ入ることが認められず王太子軍と町側との折衝が行われることになったため、和訳で「しなければならなかった」と表現が加えられているとおり「幕営する」ことを余儀なくされた。つまりそれ以外の選択肢がなく、閉じられた状態であったため、潜在的選択肢を暗示することで開かれた未来を表す FH は適切ではない。

<現実時間>

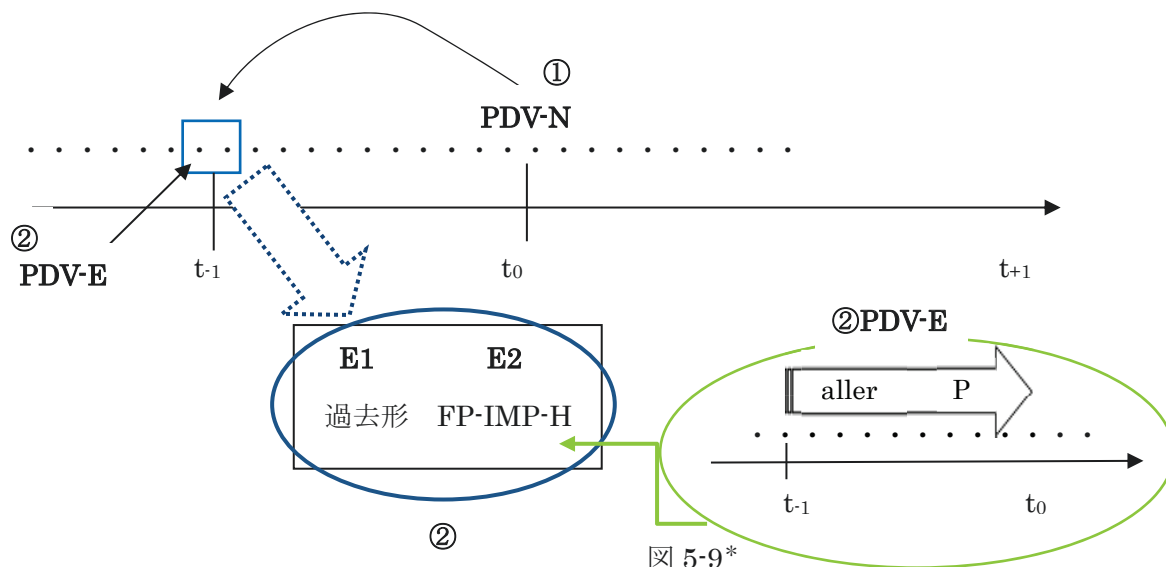


図 5-9*

※図 5-9*の E2 は、歴史叙述的時間上で、基準時 t_0 における事行が歴史的現在で表される FP-PR-H を一部変更した図である。FP-IMP-H では、FP-PR-H と同様の特質は保持するが現実時間軸上のため、基準時となる事行の時制は過去形で表される。

図 5-10 : 現実時間軸上の FP-IMP-H

先に述べたとおり、歴史叙述の自立性からして、FP-PR-H 同様、FP-IMP-H における PDV-E は断絶のない前後の連続した展開（事態，E）に視点を当てているため、FP-IMP-H が暗示する連続性と確実さも包括する。つまり、PDV-E は E1 と E2 へ視点を向けるが同時に E1 から E2 への動きしか捉えないため、潜在的可能性はない。

このように、FP-PR-H と FP-IMP-H は同様の特質を有するが、歴史叙述的時間軸上で 1 つの焦点から捉えられる FP-PR-H，現実時間軸上で 2 つの焦点から捉えられる FP-IMP-H と違いも有し、この 2 つの間にはメカニズム上明確な差異があると言える。また性質に関しても、PDV-E 内で断絶がなく基準時からの事態 E を捉えるこの 2 つと、断絶を伴い「未来」という時の枠組みが構築された中での事行 P, non-P しか捉えられない FH との間には明らかな違いがあるようである。

5.6.1. 過去形基調の歴史的迂言未来 (FP-IMP-H)

本節では、まず過去形基調の叙述内で生起する FP-IMP-H の特徴を見ていく。

準助動詞 *aller* が半過去形であるため、過去形基調において用いられることは自然な形であるように思われる。しかし 5.3 節の統計表から明らかなように、過去を叙述しているテキストでは FP-PR-H よりも FP-IMP-H の方が生起が多いであろうという一般的な予測とは必ずしも一致しない。書き手が歴史的現在と過去諸時制のどちらをテキストやパラグラフ全体の基本動詞時制として用いるのかに依存するからである。しかしどちらを選択しても 5.5 節・5.6 節で図示したとおり両方の生起が可能である。以降では過去形基調と現在形基調の叙述に生起する FP-IMP-H を図 5-10 に基づいて観察し、それぞれの特徴を明らかにしていく。

まず、過去基調に FH も生起している次の例を見てみよう。

- (32) [...] Ce dernier itinéraire la **fera** passer ensuite par Saint-Valéry-sur-Somme, Eu, Dieppe et enfin Rouen où elle a dû arriver vraisemblablement la veille de Noël 1430. Elle fut enfermée dans une tour du château de Bouvreuil, jadis construit par Philippe Auguste, où résidait Richard Beauchamp, comte de Warwick, précepteur du petit roi d'Angleterre Henri VI et gouverneur de Rouen, qui allait, pendant les cinq mois à venir, être « le geôlier de Jeanne d'Arc ».

(JDA 第 6 章 : 70)

最後の旅程でジャンヌはこのあとサン・ヴァレリー・シュル・ソンム、ユー、ディエップの町々を通過しており、ルーアンに到着したのはおそらく一四三〇年のクリスマスの前の晩であつたらしい。彼女はここでブーヴレイユの城に閉じ込められるが、この城はその昔国王フィリップ・オーギュストが建設したもので、この時点では、幼いイギリス国王ヘンリー六世のお守り役で、ルーアンの守備司令官であつたウォリック伯リチャード・ビーチャムが居住していた。彼はこれ以後の五ヶ月間を「ジャンヌ・ダルクの牢番」を勤めて過ごすことになる。

(JDA 和訳書第 6 章 : 90)

ここでは、同パラグラフ内に FH と FP-IMP-H が共起している。先に分析した FP-PR-H と同様に、FH もまた歴史時間軸上で 1 つの焦点 PDV-E から捉えられるため FP-IMP-H とはメカニズムが異なる。したがって、この 2 つが共起しているということは興味深い例である。(32) では、過去形基調であり現実時間軸上からの回顧的な視点による語りに、歴史叙述的時間軸の FH である fera が挿入されていると考えることができる。FP-IMP-H の allait, pendant les cinq mois à venir, être (これ以後の五ヶ月間を...過ごすことになる) では、PDV-N が知識と共に回顧的に見ることでその事行の動きに注目することになる。そのため、「今後五ヶ月間過ごす」という事行の実現に対して兆しを伴った確実なものとして現実性を帯びることになる。対して FH の fera passer ensuite (このあと...通過する) は、FP-IMP-H とは異なり、虚構的な歴史叙述的時間軸上での基準時となる現在時 (この例文では非明示) に立脚した視点を有し、図 5-8 のように断絶した先の未来を示すため、実現までの動きや過程のほめかしがなく事行のみが孤立的に提示され、一連の展開の有無とは関わらず、跳躍先で示される事行が達成したという選択肢の先取りのみを提示するような印象を与える挿入となっている。FH は潜在的選択肢の存在があり、その中から選択された事行の提示、FP-IMP-H は潜在的可能性がない事行の提示とともにそこへ向かう動きまでを暗示する機能を有するだろう。つまり、E1 には「ルーアンの守備司令官だったビーチャムが城に住んでいる」が、E2 には「ビーチャムは五か月間「ジャンヌ・ダルクの牢番」を勤めて過ごすことになる」が相当し、ビーチャムには他に選択肢がない中で以降五か月間を牢番として過ごすということを意味している。

- (33) Séduit par les concerts à rallonge du groupe à l'Ivanhoe de Bourbon Street, l'homme de l'ombre Allen Toussaint, dont le piano et les idées de production s'entendent dans plus de disques enregistrés à La Nouvelle-Orléans que la plupart des mélomanes ne seraient dans la capacité d'énumérer, persuada son collaborateur Marshall Sehorn d'en faire le groupe maison de Sansu, le label qu'ils avaient fondé ensemble en 1965. Bientôt rebaptisé The Meters pour faire honneur à son sens de la syncope, le groupe allait enchaîner les tubes et les turbines, pour son propre compte (les standards multirepris et multisamplés *Cissy Strut*, *Just Kissed My Baby* et *Hey Pocky A-Way*) ou

pour une multitude de solistes, divas, crooners qui avaient besoin de se délier les jambes, d'Allen Toussaint lui-même à Labelle, le super groupe de Philadelphie qui allait obtenir un tube atomique avec les Meters, *Lady Marmalade*.
(*liberation.fr*; 23/07/2019)⁹⁸

バーボン通りにあるアイバンホーでの長期にわたるライブに魅了された裏方の人物であるアラン・トゥーサン、彼のピアノと制作アイデアは、ニューオーリンズで収録された多くのレコード内で聴くことができ、ほとんどの音楽愛好家がリストアップできないほどであるが、彼は共同経営者のマーシャル・セホーンを説得し、[les Neville Sounds, 筆者註]を彼らが 1965 年に共同で設立したレーベル「サンス」のハウスバンドにした。シンコペーションの意義に敬意を表してまもなく The Meters と改名したこのバンドは、自分たちのために（何度もリピートされ、何度もサンプリングされたスタンダード曲 *Cissy Strut*, *Just Kissed My Baby*, *Hey Pocky A-Way*), あるいは多数のソリスト、ディーバ、足をほぐす必要のあったクルーナ（甘い声の男性歌手）のために、次々とヒット曲やタービンを生み出していった。アラン・トゥーサン自身から、The Meters と一緒に爆発的なヒット *Lady Marmalade* を獲得することになるフィラデルフィアのスーパーグループである Labelle のためにまで。

この例は、単純過去形と書き手による現在時 t_0 時からの意見を表している条件法が生起しているため、現実時間軸上の PDV-N からの回顧的な語りであると分かりやすい例である。一つ目の FP-IMP-H では、E1 は「1965 年アラン・トゥーサンとマーシャル・セホーンによりレーベルのハウスバンド les Neville Souonds=The Meters になった」という事態が、それに連続する E2 は allait enchaîner (次々と ヒット曲を 生み出した) が該当する。二つ目の FP-IMP-H の構造における E1 は、一つ目の E2 の事態からの連続性とも解釈できるが、あえて別に設けるのであれば E1 は「自分たち以外の人達にもヒット曲を書く」、E2 には allait obtenir (スーパーグループ Labelle が爆発的ヒットを 獲得する) という事態が相当するであろう。2 つとも過去形で叙述されている各事行の連続上に生起している出来事であり、意図的に時間軸を変えて視点の方向性を

⁹⁸ https://next.liberation.fr/musique/2019/07/23/la-nouvelle-orleans-pleure-le-grand-frere-du-funk-art-neville_1741684

変更して新しい展開を想起するわけでもないため、FP-PR-H にする必要性はなく、断絶の性質を有する FH も不適合である。

PDV-N を伴って回顧的に連続性を見ているため、事行の実現が確実なものとして読み手は現実性が感じられる。また、基準時からの漸進性という性質によりその先に実現する事行を表すため、出来事間の連続性を示しながらの終着点として、この例文のようにパラグラフの終わりにも用いられやすい。

次は *La Proclamation de la Commune* からの例であるが、このコーパスでは過去形基調に生起する FP-IMP-H がこの 1 例しか確認されなかった。

- (34) Le dispositif d'attaque contre Montmartre (particulièrement important, en raison de la force de la position et du nombre des canons, en raison aussi de l'activité du comité local et de la population) n'était qu'une partie d'un plan beaucoup plus vaste, visant à occuper tous les quartiers ouvriers, ainsi que les points stratégiques (forts, arsenaux boulevards, édifices publics) et à désarmer complètement la population des quartiers périphériques. Le général Faron avec sa division, ayant sous ses ordres le général Le Mariouse, devait s'emparer de Belleville et des Buttes-Chaumont. D'autres détachements allaient, sous le commandement des généraux Wolff, Derroja et Maudhuy, occuper la place de la Bastille, l'hôtel de ville. Le général Hanriou investira la rive gauche, le 135^e de ligne restant en réserve générale au Luxembourg et au Panthéon. Comme l'indique Da Costa, c'est un plan d'occupation militaire de Paris tout entier. (LPC 第 5 部 2 章 : 238)

モンマルトル（ここは、陣地の威力、大砲の数からいって、また、地区委員会や住民の活動が活潑なことからも、とくに重要な地点である）に対する攻撃配置は、すべての労働者居住地区と戦略的地点（保塁、兵器廠、大通り、公共建造物）を占領し、パリの周辺地区の住民を完全に武装解除することを目指す非常に広範な計画の一部でしかなかった。ファロン Faron 将軍はその師団をとめない、ル・マリウズ Le Mariouse 将軍を指揮下にしたがえて、ベルヴィル、ビュット＝ショーモンを占領するはずになっていた。他の分遣隊はウォルフ Wolff, デロジャ Derroja, モーデュイ Maudhuy 将軍の指揮下に、バスティー

ユ広場、市庁舎を占領しようとしていた。アンリューHanriou 将軍は左岸を包囲し、第一三五戦列歩兵は全体の予備軍としてリュクサンブールとパンテオンに残される。ダ・コスタが指摘しているとおり、それはパリ全部の軍事占領計画である。(LPC 和訳書『下』: 49)

先に論じたとおり、時制の半過去形は歴史叙述的時間軸上とも考えられるが、(34)では半過去形を用いた一連の流れの事態「パリ全部の軍事占領計画」の一つとしての事行に allaient occuper という FP-IMP-H が用いられているため、現実時間軸上と考えるのが自然であると思われる。E1 の事態には「パリ全部の軍事占領計画を立てた」が、E1 に隣接する E2 には allaient occuper la place de la Bastille, l'hôtel de ville. (バスティーユ広場や市庁舎を占領しようとしていた) が当てはまる。つまり、この FP-IMP-H は E1 の計画が進行中であることを示している。一方、FH の基準時もまた同様に「パリ占領計画を立てた」であるが、FH の事行である investira la rive gauche (アンリュー将軍は左岸を包囲する) には、事行 P/non-P へ向かう兆しがまだないことを表している。パラグラフの最後で c'est un plan d'occupation militaire de Paris tout entier (それはパリ全部の軍事占領計画である) と語られているとおり、最終的にそれを達成するために、FP-IMP-H の事行のように現在進行中なわけではなく時間的距離が近いかどうか問題ではないが、「未来」という枠組み内では「アンリュー将軍は (左岸を) 包囲する」という事行が計画に組み込まれていることを示すために FH が用いられていると考えられるであろう。つまり、パリ全部の軍事占領計画における様々な執筆されていない潜在的選択肢の存在を提示しながら、一連の軍事占領の流れの終着点・まとめとして FH が使用されている。

5.6.2. 現在形基調の歴史的迂言未来 (FP-IMP-H)

つづいて、FP-PR-H の分析手順のように、現在形基調の文連鎖の中にも生起することが可能であることが分かる例を見てみる。

- (35) Dès le début de la nuit, un général dont on ignore le nom inspecte des casernes, dont celle du Château-d'Eau. Il y donne des ordres précis : [...] Il

laisse des instructions féroces : la troupe fera feu, sans sommations, sur tout attroupement. [...]

A peu près en même temps, un adjudant passe dans les postes de la garde à Montmartre. Il est porteur d'un ordre (faux) d'évacuation signé du maire : Clemenceau. On obéit. Grâce à cette ruse, sept hommes seulement restent pour garder 171 pièces d'artillerie qu'allait attaquer un corps d'armée, plus un petit détachement au Moulin de la Galette. (LPC 第5部2章:234-235)

夜のはじめから、名前はわからないが一人の将軍が兵営を巡視する。そのなかにシャトー＝ドーの兵営がある。彼はそこで、明確な命令をあたえる。(…)
彼はおそるべき指示を残す。つまり、一切の不穏な集団に対して、部隊は無警告で発砲せよというのである(…)

ほとんど同じ頃、一人の特務曹長がモンマルトルの衛兵の哨所に立ちよる。彼は、区長クレマンソーの署名のある(にせの)撤退命令の伝令である。人々は従う。この計略のおかげで、軍団が攻撃しようとしていた一七一門の大砲を守るために、たった七人と、ムーラン・ド・ラ・ギャレットにいるわずかな分遣隊が残ったにすぎない。(LPC 和訳書『下』:42-43)

この例では、歴史叙述的時間軸上での語りの途中で、現実時間軸上の現在時 t_0 からの回顧的視点 (PDV-N) とともに FP-IMP-H が挿入されていると考えられる。すべてが歴史叙述的時間軸上の語りであるとする、過去形である FP-IMP-H の事行は、この FP-IMP-H が立脚することになる歴史的現在よりも前に発生していることを意味する。しかしながら、(35) では、明らかにそれまでの歴史的現在で示されている事行である passe (立ち寄る), obéit (従う), restent (残る) などよりも時間的に後方に起こった事行である allait attaquer (軍団が攻撃しようとしていた) が FP-IMP-H を用いて表されている。したがって、ここで現実時間軸上からの視点 PDV-N が挿入されていると考えられる。restent と allait attaquer は同一文内にあり主節の動詞と関係節の動詞だが、この同一文の中で時間軸が異なっていることは興味深い。現実時間軸上で述べていた守る(味方)側の視点から、「軍団の攻撃」という攻める(敵)側の視点に代わっている点が、技巧的に用いられていると思われる。これは、視点も時間性も自由に変えられるという、書き手の主体性の多様性の結果である。過去形基調における FP-PR-H

の生起では、視点が回顧的から前望的方向へ変わることから派生した、新たな展開が始まるマーカーとしての機能が観察されたが、現在形基調における FP-IMP-H の挿入では、同じく視点の変化は起こるが異なる機能として働いている。

異なる時間軸が途中で挿入されたとしても、図 3-5 (p.51) や図 4-4 (p.81) のように歴史叙述的時間軸の事行は本来現実時間軸上の過去に生起したものに相当するため、歴史叙述的時間軸上の一事行を現実時間軸上での基準時とし(ここでは非明示)、FP-IMP-H はその基準時との隣接性と連続性を提示している。基準時となる E1 は前段落にある「将軍 (政府側) が出す指示」であり、E2 は「軍団の攻撃」が該当する。

次は訃報の例を見てみよう。

(36) Spontanéité

La rencontre avec Cassavetes, en 1957, se fait pour l'aspirant acteur avec une spontanéité digne du cinéma indépendant que tous deux allaient incarner et défendre. Cassel voulant assister à l'un des ateliers organisés par Cassavetes, les deux discutent, avant que Cassavetes le quitte pour aller tourner *Shadows* (1958). Cassel le suit, au début juste pour regarder le tournage, avant d'y travailler gratuitement toute la nuit puis sur le reste du film. S'ensuivent au début de petites apparitions ailleurs (*Docteur Jerry et Mister Love*, en 1963, de Jerry Lewis ; la série sixties *Batman* ; chez Don Siegel pour *les Tueurs*, en 1964, et *Un Shérif à New York*, en 1968), mais la fidélité à Cassavetes sera constante jusqu'à la fin - il jouera dans *Opening Night* (1978) et *Love Streams* (1984) - , culminant en amant d'un soir dans *Faces* (1968), pour lequel il sera d'une part nommé à l'oscar du meilleur second rôle mais aussi, derrière la caméra, l'un des indispensables techniciens de la « Cassavetes touch » : « *On était une équipe de sept, déclarait-il au site Indiewire. J'ai tout fait, filmé des plans, chargé les caméras, déplacé les lumières. Chacun alternait pour filmer des plans avec la deuxième caméra. Cette manière de faire un film était si amusante. Pas*

de syndicats à gérer, ni d'horaire de tournage. » (liberation.fr; 09/04/2019)⁹⁹

「自発性」

1957年のカサヴェテスとの出会いは、俳優志望の彼 [シーモア・カッセル, 筆者註] のために作られたもので、両者が体現し擁護することになるインディペンデント映画にふさわしい自発性を備えていた。カッセルは、カサヴェテスが主催するワークショップに参加したいと言い、2人で話し合ったが、カサヴェテスは彼を残して *Shadows* (1958年) の撮影に向かった。カッセルは彼の後を追ひ、最初は撮影の様子を見るだけだったが、そこで一晩中タダで働き、その後は映画の残りの部分を担当することになった。当初は、(ジェリー・ルイスの *Docteur Jerry et Mister Love* (1963年), 60年代の *Batman* シリーズ, ドン・シーゲルの *les Tueurs* (1964年), *Un Shérif à New York* (1968年) など) 小さな出演作が続いたが、カサヴェテスへの忠誠心は最後まで変わらない。— *Opening Night* (1978年), *Love Streams* (1984年) に出演することになる—, *Faces* (1968年) では一夜限りの恋人を演じ、アカデミー賞助演男優賞にノミネートされることになるが、カメラの向こうでは「カサヴェテス・タッチ」に欠かせない技術者の一人として活躍していたのだった。「私たちは7人のチームでした、と彼は *Indiewire* というウェブサイトで明らかにしました。私はカットを撮影し、カメラを運んだり、照明の移動もすべてしました。2台目のカメラでカットを撮影するために、それぞれが交替で行っていました。このような映画の作り方は、とても楽しかったです。労働組合との関係もなく、撮影のスケジュールもありませんでした。」

(35) と同様、歴史的現在によって定位されている事行である *se fait* (作られた) より FP-IMP-H の事行の方が時間的後方に位置するため、同一文内であるが主節の動詞時制と *que* 関係節内の時制が定位する時間軸が異なっており、歴史叙述的時間軸上の語りの中への現実時間軸上からの挿入であると考えられる。E1 には名詞化されているが「1957年にカサヴェテスと出会った」という事態が該当し、E1 に立脚し連続的な関係である E2 には *allaient incarner* et *défendre* (両者が体現し擁護することになる)

⁹⁹ https://next.liberation.fr/cinema/2019/04/09/seymour-cassel-la-vie-en-roles-libres_1720366

が相当する。ここでわざわざ FP-IMP-H を挿入して用いる意図としては、出会いからの両者の連続的な関係性を強く暗示したいということが一つとして挙げられると思われる。もし同じ歴史叙述的時間軸である FH を用いていた場合、出会いから断絶があるという事実を内包することになるため、将来構築されることとなる「未来」の世界の中でこのようになるという事行のみが孤立的に提示されることになってしまい、両者の密接な継続的關係性の末の終着点であることを示すことが難しい。また、FH と同様に歴史叙述的時間軸上に生起する FP-PR-H であった場合、PDV-N の存在がなく PDV-E による漸進性への焦点のみであるため事行実現の切迫性や臨場感を与えるだろう。今回用いられた FP-IMP-H の場合、PDV-N の現実時間軸上 t_0 からの回顧的な視点が必ず付随するため客観性・現実性の印象が強くなると考える。客観性が強くなるということは、「説明」という機能の意味合いが強くなるということでもある。つまり、今回は FP-IMP-H を挿入して事行を先取りすることで、先の未来の「説明」が挿入されることになり、パラグラフ内の文脈を補強している。したがって、断絶を含んでよいのか、連続性を示す中ではより臨場感を与えたいのか、より客観相を伴った現実性を暗示したいのか、など文脈によって何を読み手に強調したいのかによってどの未来表現を用いるか、挿入するかなどが使い分けられるのだと考えられる。最後に生起している 3 つの FH は、一つ目の la fidélité à Cassavetes sera constante jusqu'à la fin (カサヴェテスへの忠誠心は最後まで変わらない) の内容を表しているが、小さな出演作が続いたり大きな賞にノミネートされたとしても、他の執筆されていない潜在的な事行があったとしても、最終的にはこうである、という一連のまとめとして機能している。

さらに、*Jeanne d'Arc* からの例も考察してみる。

- (37) [...] Les interrogatoires allaient ainsi se succéder, mardi 27 février, jeudi 1^{er} mars, samedi 3 mars. Puis, après une semaine de temps d'arrêt, l'interrogatoire reprend le samedi 19, mais à huis clos, dans la prison. Il est alors mené par un autre universitaire, Jean de La Fontaine, qui d'ailleurs est déjà intervenu à quelques reprises ; la semaine du 12 au 17 est marquée par des interrogatoires quotidiens sauf le vendredi 16 ; les 24 et 25 quelques assesseurs parmi lesquels les délégués de l'Université de Paris au grand complet la visitent encore dans sa prison ; après quoi l'instruction du procès

est considérée comme terminée.

(JDA 第 7 章 : 79)

審理はこうして二月二十七日火曜, 三月一日木曜, 三月三日土曜と続けられた.
次いで一週間の中断期間を置いた後, 十日の土曜に審理は再開された. しかし
これ以後の訊問は非公開で, 牢獄の中で行われた. 訊問を担当したのはパリ大
学の別の神学者メンバーのジャン・ド・ラ・フォンテーヌで, この人物は既に
何度かの訊問に同席していた. この週の十二日から十七日まで, 十六日の金曜
を除いて訊問は毎日行われ, 二十四日と二十五日には何名かの陪席者が同席し
ているが, この際はパリ大学から派遣されたメンバーは全員このジャンヌの牢
を訪れており, この日をもって「予備審理」は終了した.

(JDA 和訳書第 7 章 : 100)

この例では, パラグラフのはじめの主節動詞の時制として FP-IMP-H が生起しており, その後の事行はすべて歴史的現在による叙述であるため, はじめに挿入がなされていると考える. はじめだけに用いてその後は [neutre] という時間的指令である歴史的現在で叙述することで, はじめに挿入された FP-IMP-H の影響によりこれから継起的で連続的な展開が始まることを予感させていると思われる. FP-IMP-H 以降の文脈からもそのように解釈が裏付けられるであろう. はじめに回顧的に事行を提示してパラグラフに現実性を帯びさせ, そのあとは [neutre] である歴史的現在の継起的な生起によりスピード感を伴いつつも各事行に現実味の影響を与えていると考える. これが FP-IMP-H が現在形基調のパラグラフのはじめに用いられる意図の一つなのではないだろうか. 最後に, 5.3 節で例示した (19) でも挿入による効果が見られるため見ておこう.

- (19) C'était rejeter la Bourgogne dans l'alliance anglaise. Il semble pourtant que Philippe le Bon, fils de Jean sans Peur, ait quelque temps hésité. Cependant l'Université de Paris, qui d'ores et déjà a élaboré la théorie de la « double monarchie » mettant France et Angleterre sous une même couronne, celle du roi anglais, a dépêché dès le mois de mars 1420, à Troyes où se trouvent Charles VI et Isabeau de Bavière, « quelques notables personnes », entre autres Pierre Cauchon, « maître ès arts et licencié en décret », qui vont pousser [FP-PR-H] activement les négociations avec le roi

d'Angleterre ; et c'est finalement, le 21 mai 1420, ce traité de Troyes qui élimine du trône le dauphine légitime, accusé d' « horribles et énormes crimes », et decide que « la couronne et royaume de France, avec leurs droits et appartenances, demeurereont [FS] et seront [FS] perpétuellement de notre fils le roi Henri et de ses hoirs (héritiers) ». Charles VI et Isabeau conservent leur vie durant leurs droits et dignité de roi et reine ; Henri V de Lancastre épouse leur fille Catherine de France ; à l'enfant qui naîtra [FH] de ce mariage est promise la double couronne de France et d'Angleterre. Le mariage allait être célébré [FP-IMP-H] le 2 juin suivant à Troyes. Henri V fera [FH] avec Charles VI, le 1^{er} décembre 1420, dans Paris, une entrée solennelle ; [...]

(JDA 第 1 章 : 10-11)

この事件は、ブルゴーニュ公を決定的にイギリスとの同盟に追いやることになった。だが、ジャン^{サン・ポール}無畏公の息子のフィリップ^{ル・ボン}善良公はややためらったかに見える。しかしこの時すでにフランスとイギリス二ヶ国を、一王家すなわちランカスター王家のもとに置く<二元王国>の理論を準備していたパリ大学は、一四二〇年三月になると、急遽シャルル六世および王妃イザボーがいたトロワに「数人の優れた人物」を派遣した。この中に「教養学士兼教会法学士」ピエール・コーションなる人物がいて、イギリス国王との折衝を熱心に推し進めている [FP-PR-H]。こうしてついに一四二〇年五月二十一日、正統な王太子を王位継承から除外し、「恐るべき、途方もない犯罪」と弾劾されたあの「トロワ協定」が生まれることになる。この協定は「フランス王国の王位は、それに付随する諸権利および諸々の物件と共に、以後永久に我らが息子となる国王ヘンリーおよびその後継者に属するものとする [FS]」と規定している。この協定によりシャルル六世と王妃イザボーは、生きていた限りは国王及び王妃の権利と栄誉を保有しうるであろう。ランカスター家のヘンリー五世は、シャルルとイザボーの娘カトリーヌを妃に迎えてその婿となり、この結婚から生まれるべき [FH] 王子はフランスおよびイギリス王国の二重の王位を約束されることとなったのである。結婚式はトロワの町で六月二日に挙行された [FP-IMP-H]。一四二〇年十二月一日、ヘンリー五世はシャルル六世を伴って華々しくパリに入城した [FH]。

(JDA 和訳書第 1 章 : 16)

ここでも現在形基調で語られており、歴史叙述的時間軸での語りである。したがって FH や FP-PR-H の生起もある。FP-IMP-H で表されている事行は、そこに現実時間軸が挿入されているということである。なぜ現実時間軸を挿入して FP-IMP-H で述べるのかに関しては、「...した」という過去がもつ実際に現実に起きた事行であるという印象を強く与えるためではないだろうか。それまでの時間的に中立な [neutre] である歴史的現在による淡々とした事実の提示の、物語を聴いているような語りの中で、ふと視点が現実からの回顧的な向きへ変わり、読み手に現実性をもたらす効果があるのではないかと思われる。

本節で分析した以上までの例より、2つの時間軸が混在した語りは、テキストに彩りを与え、読み手をひきこむ効果があると考えられる。

最後に (19) に生起する各未来表現を詳細に考察してみよう。

まず FS となっている demeurereont, seront は「トロワ協定」の文言であるため FH ではない。

次に FP-PR-H は、歴史叙述的時間軸上で PDV-E のみの焦点が捉え、E1 には「フランスとイギリスを一つの王家のもとに置きたいパリ大学が一四二〇年三月に優秀な人物を派遣する」が、E2 には vont pousser (ピエール・コーションによるイギリスとの折衝を押し進める) が該当する。

そして FH である naître は、歴史叙述的時間軸上で生起し、基準時には「イギリスのヘンリー五世とフランスの王家の娘カトリーヌとの結婚」が相当する。そこから断絶し、未実現の構築された未来で「生まれる」と仮定される王子を、「生まれない」non-P などの潜在的可能性を暗示しながら提示している。

さらに FP-IMP-H は、現実時間軸上で2つの焦点から成り、E1 には「一四二〇年五月二十一日にトロワ協定と結婚の取り決めを行った」、E2 には Le mariage allait être célébré le 2 juin (一四二〇年六月二日に結婚式を挙げた) が相当し、PDV-E はその2つの事態の連続性を捉え、PDV-N がその事態の動きを現実の知識とともに回顧的に客観性を伴って見ている。

最後の FH である fera の基準時は「六月二日の挙式」であり、そこから断絶し、「一四二〇年十二月一日に結婚したイギリスとフランスの王家が揃ってパリに入城する」という「未来」の枠組みをここでは時間副詞を伴いながら構築することによって、跳躍的に表現している。

5.7. まとめ

FH と FP-H の特徴と成立のメカニズムを考察した結果、以下のことが解明された。

まず、テキスト全体のレベルから見ると FH は終盤の山場となりそうなあたりに頻繁に使用されているのに対して、FP-PR-H, FP-IMP-H とともにテキスト全体における特別な特徴は見られなかった。

次に、文レベルからみると、FH はパラグラフの終わりに比較的多く用いられているのに対して、FP-H はパラグラフのはじめにも生起している。これは、FH の場合、断絶に伴い過去の事行群が開かれるという機能があり、跳躍という性質とともに叙述の流れの終着点になりやすいという特徴、FP-H の場合、基準時との連続性という性質からパラグラフで語られる連続的な事行群が始まったという印象を示しやすいという特徴と、特に FP-IMP-H の場合には現実時間軸から始まることで読み手にこの先語られることに対する現実性を与えるという特徴に由来するものと思われる。

構造的側面からは、FH や FP-PR-H は歴史叙述的時間軸と PDV-E という 1 つの視点からなるのに対し、FP-IMP-H は現実時間軸と、PDV-N, PDV-E の 2 つの視点から成り立っていることを示した。この異なる時間軸は叙述の途中に挿入されることにより視点が増えることで付随する効果が存在することが観察された。たとえば、FP-PR-H は過去形基調の叙述で、視点の回顧的から前望的方向への変化から派生する展開が始まるマーカーとしての機能が挙げられる。

特質面からは、事行の実現に向かう動きとして、FH は跳躍的で静の未来であり、歴史叙述的時間上という、現実時間からの時間性の移行と、断絶による PDV-E の焦点による遠い心的距離感に対して、FP-H は連関的で動の未来であり、FP-PR-H はすでに兆しが見える切迫性、事行実現に至る動きが感じられるため臨場感がもたらされ、FP-IMP-H は現実時間軸の現在 (t_0) からの PDV-N による回顧的視点によって現実性や客観性がもたらされるという特質が明らかになった。また、FH は構築された「未来」という枠組みの中で孤立的に事行のみを提示するが、潜在的選択肢を暗示する開かれた広い未来であり、FP-H は事行の提示に加えその動きが現在既に始まっていることを暗示したり展開の動きを感じられる可能性が閉じられた狭い未来であるということは、使い分けされる大きな理由の一つであろう。これらの特質が、継起的に語るだけで静的な語りになりそうな歴史テキスト内に彩りを加えていると考えられる。

第6章 歴史的未來と歴史的條件法の機能的差異

6.1. 本章の手順

本章では、これまでに検討してきた FH, FP-H と並んで「歴史＝物語」のテキスト内で用いられる過去未來を表す條件法¹⁰⁰ について、FH と比較しながら考察する。本論文では、「歴史＝物語」のテキストに生起するこの単純未來形を歴史的未來 (futur historique, FH と略号する.) と呼んだことと平行的に、條件法についても、「歴史＝物語」のテキスト内で時制の一致によるものも含め未來を表す表現として用いられるものを歴史的條件法 (conditionnel historique, Cond-H と略号する.) と呼び、以下のような條件法を指す。この例はナポレオン 3 世の治世に関することを歴史家が執筆した歴史書からの引用である。

- (1) Le conflit, qui était proche, Niel ne le **VERRAIT** pas. En août 1869, la mort le surprit.¹⁰¹ (P. de la Gorce, *Napoléon III et sa politique* : 136,

Grevisse, 1975 : 733 より引用)

戦いは近かったのだが、ニエルはそれを見ることがなかった。というのも、1869 年 8 月、彼は亡くなったからである。

また、歴史的條件法ではないその他の條件法を Cond と略し、Cond と Cond-H の両方を示す際には総称として條件法と呼ぶこととする。

次節以降の論述の手順は、次のとおりである。6.2 節では先行研究を挙げながら條件法の時制的用法の特徴を確認する。6.3 節では「歴史＝物語」における単純未來形と條件法の統計表を作成し、それをもとに本論文のコーパスにおける各未來表現のテキスト

¹⁰⁰ 過去から見た前未來として條件法過去を用いる場合もあるが、本論文では前未來形を取り上げていないことと同様に、條件法過去も研究対象としては取りあげないこととする。

¹⁰¹ 以降、本章の例文と和訳文における Cond-H は、本論筆者により太字と破線下線で強調することとする。

内使用傾向を明らかにする。6.4節では FH と Cond-H の構造的差異の図示を試み、使い分けの基盤となる明確な違いに関する仮説を提示する。6.5節では FH と Cond-H の共起とそれぞれのテキスト内における機能をコーパスからの引用事例を用いて考察し、6.6節でまとめとする。

6.2. 条件法の時制的用法の特徴

条件法には多様な用法があり, Damourette et Pinchon (1911-1937), Wilmet (2007), Togeby (1985), Confais (1995), Bres (2012) などをはじめとした夥しい先行研究で論じられているが, 本論文で問題とする時制的用法に関しては, ほぼ説明が一致していると言える。

6.2.1. GREVISSE, Maurice (1986)

Grevisse は以下のように条件法の一般的価値を定義している。

Le conditionnel présent marque un fait futur par rapport à un moment passé : [...]

(Grevisse, 1986 : 1299)

条件法現在 は、過去のあるときに対する未来の事柄を示す。

これは、過去のあるときに過去形で基準時を定位し、そこから時間的後方時に生起する事行を条件法現在で表すということである。一般に間接話法で時制の一致がなされた結果として用いられている。以下の (2) がその例である。

(2) Il m'a dit qu'il REVIENDRAIT ce soir. (id.)

彼は私に今夜戻って来ると言った。

ここでは、過去のあるときとは複合過去形による a dit (言った) のときに該当し、その発言時を基準時としたときに時間的に後に起こる事行である revenir (戻って来る) を条件法現在 reviendrait として表している。この例が過去のあるときではなく現在を

基準としている場合には、基準時からの後方性に FS を用いた以下の (3) となる。

- (3) Il me dit qu'il **REVIENDRA** ce soir.
彼は私に今夜戻って来ると言っている。

また、単純未来形との関係に関しては、Grevisse (1975 : 733-734)¹⁰² は、過去から見た未来を表す条件法が持つ意味を考えるのなら、単なる直接話法の単純未来形や前未来形から間接話法への *transposition* (転置) であるため、そこには条件法が本来有する « l'idée de doute, d'éventualité, de condition » (疑念, 偶発, 条件といった考え) という法としての意味価値は何ら存在しないと述べている。以下がその例である。

- (4) Il m'a dit : « Je **REVIENDRAI** ce soir. » (op.cit. : 1299)
彼は私に言った, 「今夜戻って来るよ」と。

条件法が生起している間接話法 (2) は FS を用いた直接話法 (4) の単なる転置であり, (3) の FS に当然条件法の意味的価値が含まれていないことと同様に, (2) の条件法現在も本来の意味的価値を含有していないという理論である。この条件法は *Discours indirect libre* (自由間接話法) でも見られる (id.) ことを示すために, 次の (5) を提示している。

- (5) Elle souhaitait un fils ; il **SERAIT** fort et beau, et **S'APPELLERAIT** Georges.
(G. Flaubert, *Madame Bovary*, II, 3, Grevisse, 1986 : 1299 より引用)
彼女は男の子を望んでいた ; 元気でかわいい子が欲しいと思った。名前はジョルジュにしよう。

¹⁰² Goosse, A. によって改訂された Grevisse, M. による *Le Bon Usage* 内では, *futur du passé, futur antérieur du passé* という項目が廃止され, *conditionnel* の一用法という小さな扱いとして取り上げられるようになったため, 詳細に執筆されている 1975 年版を一部使用した。

また、未来の事行を表すが「過去から見た未来」ではない条件法に関しては、以下のように説明し、(6) がその例である。

Le conditionnel présent marque un fait conjectural ou
imaginaire, dans le futur [...]. (op.cit. : 1300)

条件法現在は、未来においては、推測や想像の事象を示す。

(6) Un geste un peu douteux et ils RECEVRAIENT une balle dans la tête.

(P. Mille, *Sous leur dictée* : 167, Grevisse, 1986 : 1300 より引用)

少しでも怪しいしぐさをしたら、彼らは頭に銃弾を受けることになる。

つまり、同じく「未来」の事象を表す場合であっても、「過去から見た未来」ではない条件法では、本来持つ意味的価値が機能する。したがって、過去未来を表す条件法は「条件法」とは言い難い特殊な用法であると言い得るだろう。

6.2.2. 朝倉季雄 (2002)

条件法の上記の点に関して、朝倉 (1980 : 109) ¹⁰³ は以下のように述べている。

「その起源 [形態, 筆者註] によっても明らかのように、元来は直説法の価値を持ち、「過去における未来」を表わした。それと同時に、未来は常に不確実性を含むところから、条件法は早くから法としての価値を持つに至り、偶発性、可能性、非現実性を表わして、直説法に対立した。」

¹⁰³ 朝倉季雄 (1980) による『フランス文法事典』では条件法の起源から叙法とされるまでを説明しているが、木下光一により再編集され改訂された『新フランス文法事典』(2002)では時制の一致の項目や条件法の一用法としての項目で直説法としての価値を持つと触れるのみにとどまっているため、同一著者ではあるが異なる書物である朝倉 (1980) より一部取り上げた。

このように、条件法とはその語尾形態（-r + avoir の半過去形，筆者註）から裏付けられているように元来「過去未来」を表すものであったと朝倉は説明している。つまりその後「未来」の特性から派生して条件法独自の意味的価値を持つようになり、他の未来形との差別の道を辿って行ったと考えられる。したがって、独自の意味的価値を含まない「過去未来」を表す条件法は、特殊な用法というよりは、これこそ起源的本質であると言うべきである。実際に、「Clédat (1897 : 168-169) や Brunot (1936 : 755, 758) は条件法とは区別して、直説法の中に過去における未来 (futur dans le passé) (….) という時制を設けることを主張した。」と、朝倉 (2002 : 139) では述べられている。

また朝倉も、主節の過去から見た未来として条件法現在を用いる場合には「時制としての価値を持つのみであり、法としては直説法に加えられる」(ibid. : 138) と説明しており、Grevisse と一致している。

(7) Je savais qu'il arriverait aujourd'hui.

私は彼が今日着くことを知っていた。 (id.)

さらに第 1 章 1.3 節で取り上げたとおり、朝倉 (ibid. : 227-228) は過去を起点とした未来に関して、「単未 [単純未来形，筆者註] は語り手が事実として確認していることを述べるもので、単に予想された事実を述べる条・現 [条件法現在，筆者註] とは異なる。」と明確に述べ、この 2 つは異なる価値を伴って使用されるとしている。この説明に従うと、FH を用いた (8) は、語り手はこの出来事が過去の事象であるということを知識として有していることを暗示している。一方 (9) は、条件法現在を用いているため、「ある予兆 [=雲が厚さを増していった] があるのでやがて日は隠れるだろう」という、語り手が単に発話時より時間的に後方に位置する事行を予想した事実であることを示している。(9) は従属節だけではなく独立節でも用いられるという例でもある。

(8) En 1825 il part pour Florence où il restera secrétaire d'ambassade jusqu'en 1828.

1825 年、彼は F に旅立ち、1828 年まで大使館書記官としてそこに留まることになる。

(Giraud, J., *L'école romantique française*, 16, 朝倉, 2002 : 228 より引用)

- (9) Les nuages qui frôlaient les sommets s'épaississaient. Bientôt le soleil disparaîtrait.

山頂をかすめていた雲は厚さを増していった。やがて日は隠れるだろう。

(H. Castillou, *Thaddëa*, 12, 朝倉, 2002 : 139 より引用)

6.2.3. PATARD, Adeline (2017)

近年の研究では、「過去から見た未来」という時間的用法を、実はすべての用法の基盤であるとする考え方が一般的になっている。

たとえば Patard は、フランス語の条件法が成立する歴史的経緯にも留意した結果、時間的用法を出発点としている。Patard によると、中世ラテン語では、単純未来形の前身である「不定法+habere の現在」(例 : *cantare habeo*) と、条件法の前身である「不定法+habere の半過去」(例 : *cantare habebam*) の間には、基準点が現在か過去かという違いしかなかった。たとえば、渡邊 (2019 : 64) によると、(10) も (11) も 4 世紀の例であるが、いずれも運命を示しており、違うところは、(10) では発話時から、(11) では過去時から見ているということだけである。つまり、これらの意味は構成原理で理解できるものである、と述べている。

- (10) Mortem timetis : quid timetis ? ventura est : timeam, non timeam, venire habet ; sero, cito, ventura est.

(Augustinus Hipponensis : Bourova et Tasmowski 2007 : 31 より引用)
君は死をおそれている。なにをおそれることがあろうか。死は来るのだ。おそれようが、おそれまいが、かならず来るのだ。おそかれ早かれ、死は来るのだ。

(和訳は渡邊, 2019 : 64 による)

- (11) [...] saginatus carnem domini figurabat, quae ab incredulis filiis carnis abrahamae propter salutem credentium immolari habebat [...]

(Gregorius, *Iliberritanus* : Patard, 2017 : 115 より引用)
いけにえの子羊は神の血肉を体していた。その血肉は、信者の祝福のため、アブラハムの血肉をもつ不信者の子らによって屠られることになる。

(和訳は渡邊, 2019 : 64 による)

かつては「不定法+habere の現在」型の形式と意味的には明確な差異のなかった「不定法+habere の半過去」型の形式が、独自の価値を得るようになった過程を、Patard は「構文化」(constructionnalisation) という概念を用いて説明している。構文化とは、概略的には、新たな形式と新たな意義が組み合わせられることであり、その際、非構成性 (non-compositionnalité) が見られることが多い (Legallois, 2016: 4)。フランス語の条件法の各用法の意味も、中世ラテン語の「不定法+habere の半過去」型の形式と違って、もはや構成原理では説明できない。しかし一方で、それらの用法の発生、継承の関係は、「過去から見た未来」から跡付けることができる。

6.2.4. GOSSELIN, Laurent (2018)

また、Gosselin は本論文でも依拠している分岐的時間 (temps ramifié)¹⁰⁴ のモデルを条件法に適用する最近の試みであるが、その基礎には「基準点が過去時にある」という、時制的用法の特徴が据えられている。次の例、

(12) Vendredi dernier, Marie savait qu'hier midi, Luc { **se préparerait à / disposerait à / serait sur le point de** } faire les courses.

(Gosselin, 2018: 30)

リュックがきのうの正午には買い物を { する用意をする / する準備ができて
いる / しようとしている } ことを、マリーは先週金曜日には知っていた。

について、次の図 6-1¹⁰⁵ のように示している。

¹⁰⁴ 第3章 3.4 節を参照のこと。

¹⁰⁵ この図は本論筆者によるものではなく、Gosselin (2018: 31) が描いた図を引用したものである。本論文では図 6-1 として示すこととする。

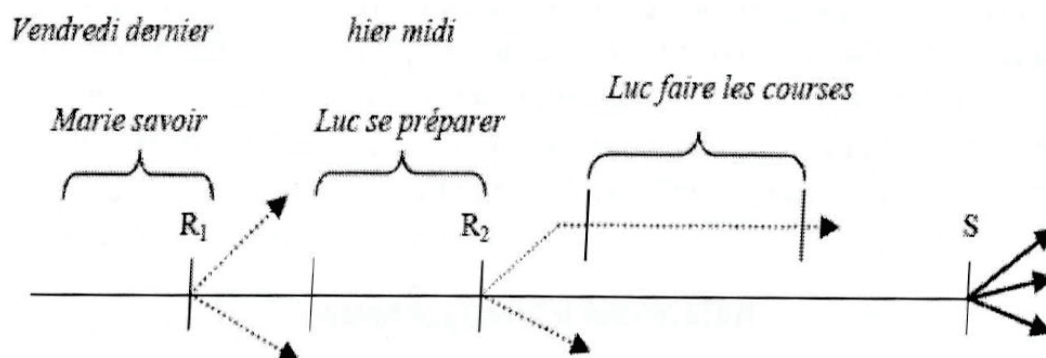


Figure 5 : Structure de (27a)
 « Vendredi dernier, Marie savait qu'hier midi, Luc {se préparerait à / disposerait
 à / serait sur le point de} faire les courses »

図 6-1 : (11) を用いた Gosselin による条件法の分岐的時間モデル

先週金曜日を R_1 、昨日正午を R_2 とし、それぞれの基準点からの分岐的時間が想定される。リュックが買い物に行くことは、 R_2 からの分岐的時間に位置づけられることになる。

このように、様々な先行研究ではこの単純未来形と条件法という 2 つの動詞時制が「過去から見た未来」を表すことができると確認されているが、2 つの形式の違いやテキストへの影響などに関してはあまり分析されていない。以下では本論文のコーパスを用いることで、Cond-H の特徴を実証的に考察したい。

6.3. 「歴史＝物語」における単純未来形と条件法の出現傾向

La Proclamation de la Commune, Jeanne d'Arc, 訃報 (*Libération* 紙) に生起する FS, FH, Cond, Cond-H の数を提示し、グラフ化したものが下の表 6-1・図 6-2, 表 6-2・図 6-3, 表 6-3・図 6-4 である。

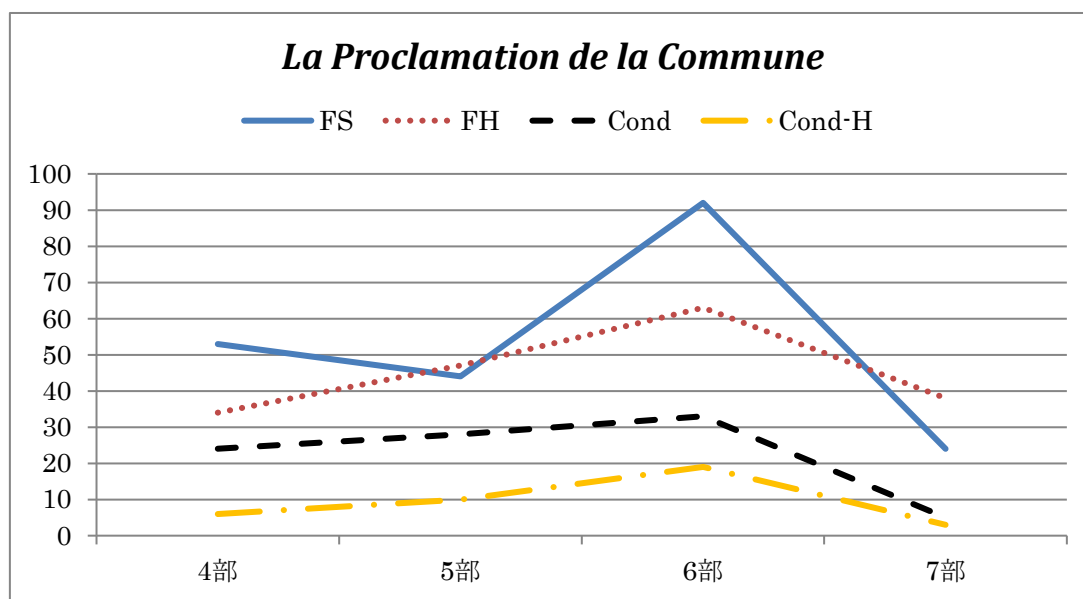


図 6-2 : *La Proclamation de la Commune* における単純未来形・条件法の出現傾向

表 6-1 : *La Proclamation de la Commune* における単純未来形・条件法の生起数¹⁰⁶

部	第 4 部	第 5 部	第 6 部	第 7 部 (第 1・2 章)	合計
ページ	171-218	219-288	289-366	367-410	
FS	53	44	92	24	213
FH	34	47	63	38	182
Cond	24	28	33	5	90
Cond-H	6	10	19	3	38

La Proclamation de la Commune で FS の生起が多い理由としては、会話の挿入や手紙などの引用が非常に多いからである。語りの中の未来表現である FH と Cond-H を比較すると、圧倒的に FH の方が多い結果となっている。これは、「過去から見た未来」といえば Cond-H であるという通説を大きく裏切る結果である。それに対し、Cond の

¹⁰⁶ FH は出現頻度が高かったため、単純未来形の統計を出す本論文の第 2 章の表では章ごとに生起数を詳細に提示したが、条件法はそれほど多くないため、この著書を構成している各部を簡略化して提示することとする。

生起数は Cond-H と比較すると少なくはない。つまり、このコーパスにおいては未来表現として FH を主に使用し、条件法は法としての意味価値を表すために用いられていることが多いということであろう。全体を通して、ついにコミュン宣言をするときとその直前を語るためテキストのクライマックスとなり得る終盤第 6 部にかけて、未来表現が多く用いられていることが確認できる。

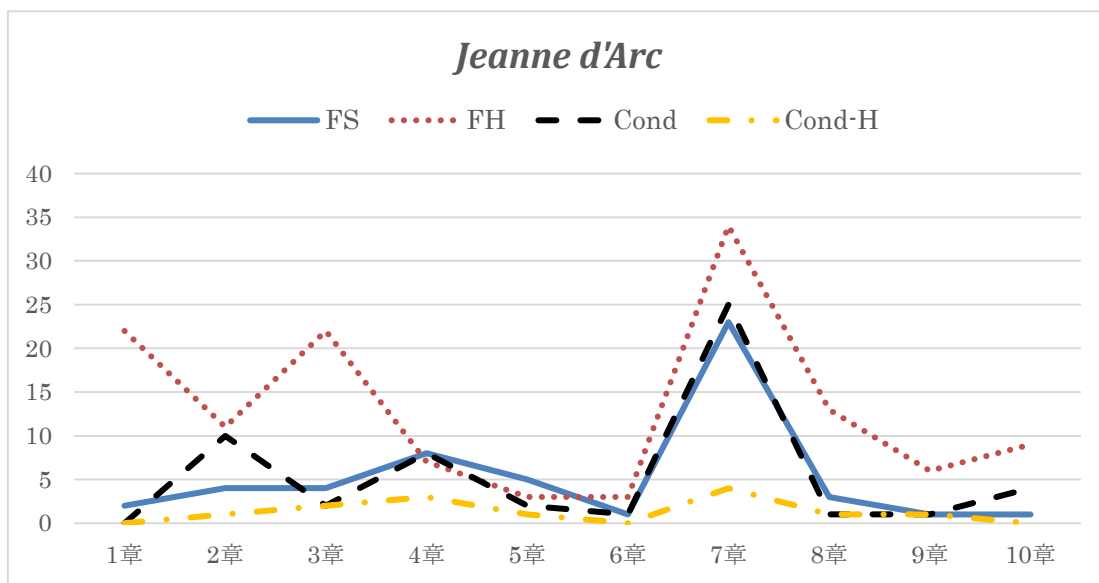


図 6-3: *Jeanne d'Arc* における単純未来形・条件法の出現傾向

表 6-2: *Jeanne d'Arc* における単純未来形・条件法の生起数

章	1	2	3	4	5
ページ	3-13	14-27	28-45	46-55	56-62
FS	2	4	4	8	5
FH	22	11	22	7	3
Cond	0	10	2	8	2
Cond-H	0	1	2	3	1

章	6	7	8	9	10	合計
ページ	63-70	71-99	100-108	109-121	122-125	
FS	1	23	3	1	1	52
FH	3	34	13	6	9	130
Cond	1	25	1	1	4	54
Cond-H	0	4	1	1	0	13

Jeanne d'Arc では、FH の生起数の多さが顕著である。それに対して Cond-H はほぼ見られないことから、未来を表す際には FH を主に使用することが確認される。この前望的視点を有する FH の使用頻度から、本コーパスは主に歴史叙述的時間軸上で時系列順に事行を追っていくテキスト形式であることが明らかである。Cond が次に多く生起している理由としては、このテキストでは書き手の見解が Cond を用いて導入される傾向があるからである。*Jeanne d'Arc* でも処刑裁判の章でありテキスト叙述の山場と言える第 7 章に単純未来形と Cond が俄かに非常に多く用いられていることが分かることから、クライマックスと相関関係があるのではないかと考えられる。

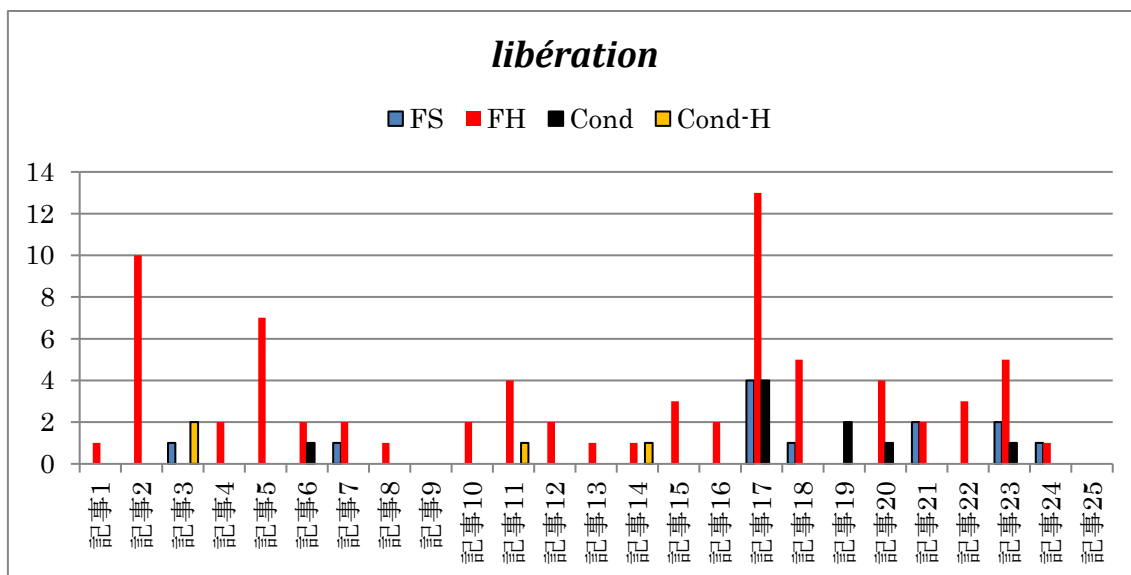


図 6-4-a：訃報（*Libération* 紙）における単純未来形・条件法の出現傾向

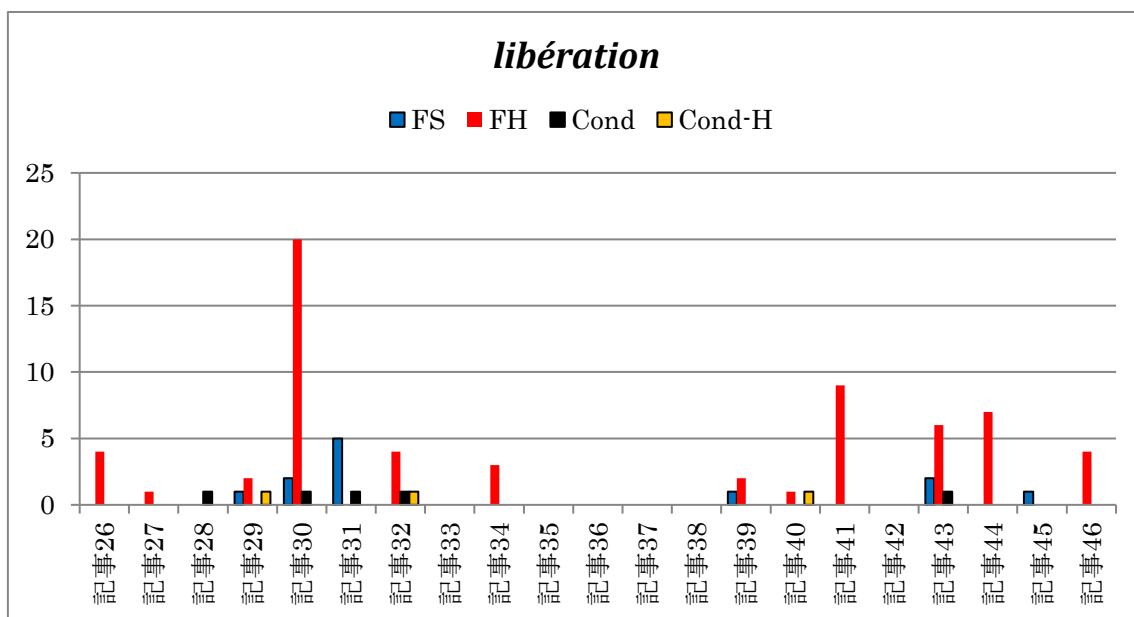


図 6-4-b：訃報（Libération 紙）における単純未来形・条件法の出現傾向

表 6-3：訃報（Libération 紙）における単純未来形・条件法の生起数

記事	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
単語数	326	711	1023	985	989	1621	690	235	749	543
FS	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
FH	1	10	0	2	7	2	2	1	0	2
Cond	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
Cond-H	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0

記事	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
単語数	1102	704	744	580	932	421	1797	771	443	958
FS	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0
FH	4	2	1	1	3	2	13	5	0	4
Cond	0	0	0	0	0	0	4	0	2	1
Cond-H	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0

記事	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
単語数	643	589	1899	359	317	635	606	641	1422	2528
FS	2	0	2	1	0	0	0	0	1	2
FH	2	3	5	1	0	4	1	0	2	20
Cond	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1
Cond-H	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

表 6-3 (つづき)

記事	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
単語数	702	1006	430	622	564	445	385	401	523	545
FS	5	0	0	0	0	0	0	0	1	0
FH	0	4	0	3	0	0	0	0	2	1
Cond	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
Cond-H	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

記事	41	42	43	44	45	46	合計
単語数	971	421	1441	2960	210	1152	
FS	0	0	2	0	1	0	24
FH	9	0	6	7	0	4	136
Cond	0	0	1	0	0	0	14
Cond-H	0	0	0	0	0	0	7

訃報はそれぞれの記事が全く異なる内容であり執筆者も同様であるにもかかわらず、全体的に FH の使用頻度が群を抜いていることが図 6-4-a と図 6-4-b よりはっきりと確認できる。未来表現自体の使用がそもそも少ないのだが、その中でも Cond, Cond-H ともに条件法の生起が非常に少ない。Cond は、訃報は故人の経歴の紹介を主とする記事であるため書き手の意見などはなるべく排除されているためであると考えられるが、過去形基調の叙述は少なくないため、時制の一致の働きによる Cond-H の生起も多いことが予想されるのに反して、実際には少ないという事実は興味深い結果である。

6.4. 歴史的未來と歴史的條件法の構造的差異

Cond-H では FH の分析で見られた傾向は確認されなかった。つまり、連続して生起したり、時間副詞とともに生起するといった現象はほぼ観察されなかった。これは、Cond-H には FH が有する、一連の流れからの断絶や跳躍して事行の先取りをする性質がないことに起因すると考えられる。歴史テキスト・訃報において生起している条件法は、書き手の意見を表した Cond が非常に多く、すべてのコーパスで Cond-H の生起数より上回っている。Cond-H が生起する場合、多くは (13) のように que などの関係節を介した従属節内であり、主節の動詞時制が過去形のための時制の一致の働きによるものである。

(13) Toujours est-il que Cauchon pouvait ensuite lire la sentence définitive déliant Jeanne de l'excommunication : « Mais parce que tu as témérement délinqué contre Dieu et la Sainte Eglise... nous te condamnons par sentence définitive à mener une solitaire pénitence en prison perpétuelle, au pain de douleur et à l'eau de tristesse, afin que tu y pleures ce que tu as commis. »

Jeanne supposait évidemment qu'après cette abjuration elle serait en tout cas conduite en prison d'Eglise ; mais, tandis que la foule commençait à se dissiper, l'évêque donne un ordre : « Menez-la où vous l'avez prise. »

Elle est donc reconduite dans la prison du château de Rouen — [...]

(JDA 第7章 : 95)

ともかくもここで、コーションはジャンヌを破門から解き放す判決文を読むことができた。「しかしながら汝は神と聖なる教会に背いたがゆえに……我らは改めていま本判決により汝を、キリストのご受難を偲ぶパンと水のみによる永久入牢に処することに決定する。汝がそこで犯してきた罪に涙するために。」

ジャンヌはこの改悛の後には、いずれにせよ教会の牢に入れられると考えていたはずである。だが群衆が散り始めた中で、コーションはこう命令を下した。

「この女を引き出してきた場所に連れて行け。」

それゆえ、彼女はルーアン城内の牢獄に連れ戻された—

(JDA 和訳書第7章 : 117)

ここでは、Jeanne supposait (ジャンヌは考えていた) という事態よりも時間的に後方に起こる、elle serait en tout cas conduite en prison d'Eglise (彼女は教会の牢の中に入れられる) が Cond-H として表されている。この一文には après cette abjuration (この改悛の後) という時間副詞が挿入されているため、関係節 que を挟んだ時間関係と時制の一致の働きがわかりやすい例である。

しかしながら、単なる時制の一致により Cond-H が用いられるわけではなく、その使用には何らかの意図があると推測できる。この例では、supposait (考えた) という事行を行う主体はジャンヌであるが、「教会の牢の中に入れられる」というのは他人によってであり、事行を行う主体はジャンヌではない。そして、引用部分の最後の一文から

明らかのように、結果としてはジャンヌの考えとは異なり、教会ではなくルーアン城の牢であった。したがってここから、Cond-H の PDV は Cond-H が示す事態のみにフォーカスされるため、Cond-H が表す事行の行く先と実際の結果にずれが生ずるということが起こるのだと考えられる。たとえばもし FH が用いられていた場合、「教会の牢に入れられる」という事態は複数の可能性の中から選択されたものであることを暗示し、その事態は達成の方向へ向かうことまでを示す。つまり、書き手が位置する現実時間の t_0 時には実際に起こった出来事だという意味まで含まれるのである。このことにより、Cond-H を用いると想像という虚構＝想像世界が創られ、主節と関係節の間に断絶が起き、世界（位相）の変化（*changement de monde*）がおこるのではと考えられる。この想像の世界には書き手は介入できないため、現実の結果とは異なるという事態を表すことが可能だと仮定できる。

また、(14) のように、従属節内以外で見られないわけではない。

- (14) La brigade Paturel, partant de la place Clichy, devait contourner le cimetière Montmartre par l'avenue de Saint-Ouen, la rue Marcadet, la rue des Saules. De là elle se porterait par la rue de Norvins vers le parc du Moulin de la Galette. Pendant ce mouvement, un bataillon s'établirait en bas de la Butte, côté nord et ouest, le 17^e bataillon de chasseurs restant en réserve, à la disposition du général de division Susbielle, boulevard de Clichy et place Pigalle, avec des gardes républicains et deux pièces d'artillerie. (LPC 第5部2章:236-237)

パテュレル旅団はクリシー広場を出発してサン＝トゥアン大通り、マルカデ街、ソール街をへてモンマルトル墓地を一周するはずであった。そこから、旅団はノルヴァン街を通ってムーラン・ド・ラ・ギャレット公園へ向かうことになる。この移動の間、一大隊がビュットの下、北と西側に布陣することになる。猟歩兵第一七大隊は、スュビエル師団の将軍の指揮下におかれ、クリシー大通りとピガール広場に、憲兵と二門の大砲をもって予備として残される。

(LPC 和訳書『下』: 47)

ここでは、過去形基調で語られているある場面に関する叙述に、Cond-H が用いられている。半過去形で表されている事行である、*La brigade Paturel devait contourner le cimetière Montmartre*（パテュレル旅団はモンマルトル墓地を一周するはずであった）が基準時となっており、*De là elle se porterait [...] vers le parc du Moulin de la Galette*（そこから、旅団は（…）ムーラン・ド・ラ・ギャレット公園へ向かうことになる）とあるように、「そこから」により時間的關係が明白であるため、半過去形の基準時の後の事行を表す際に「過去未来」を表す Cond-H が用いられている。ここで FH を用いた場合、事行が選択されるため実現する方向へ進むことが前提となるため、*devait*（はずだった）が示している「つまり、まだ実現できていない」という内包している意味を表すことができず、「はずだった」という虚構の事行を述べる際には FH は適切ではないと考えられる。Cond-H が用いられている 2 つの事態は、この「はずだった」が示す世界内での生起を表していることが読み取れる。つまり、Cond-H は虚構＝想像世界を創ることで生起するのだという（13）で提示した仮説を裏付けている。「はずだった」という虚構＝想像世界の事態を叙述しているため、これらが現実世界で実際に起こったのかどうかという結果までは含まない。下記の図 6-5 が示すとおり、基準時の事態である *La brigade Paturel devait contourner le cimetière Montmartre* は PDV-N からの視点であるが、*De là elle se porterait [...] vers le parc du Moulin de la Galette* や *Pendant ce mouvement, un bataillon s'établirait en bas de la Butte, côté nord et ouest*（この移動の間、一大隊がビュットの下、北と西側に布陣することになる）という Cond-H の事態は PDV-N ではなく PDV-E が創った世界でありその中に定位されるため視点の変化が起きており、同時に、現実世界から見る PDV-N と虚構＝想像世界を捉える PDV-E という「世界の変化」も起きている。つまり、PDV-N と PDV-E の間に断絶があるのである。

下記は Cond-H の構造を図示したものであり、また比較のために FH の構造を再提示している。

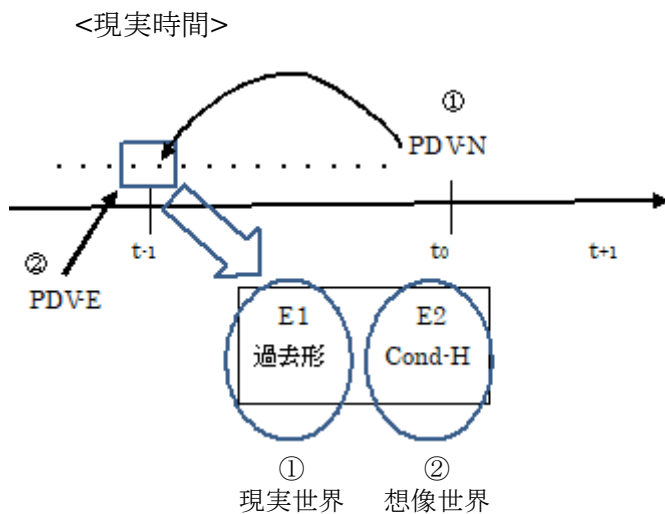


図 6-5 : Cond-H の時間構造

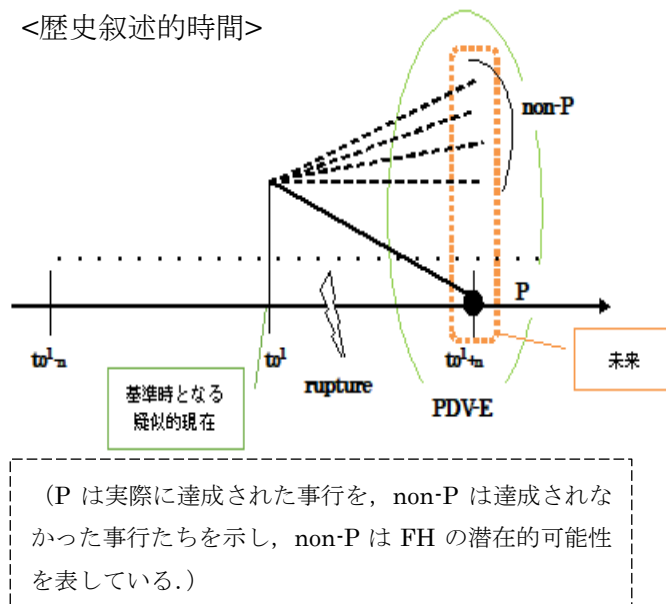


図 6-6 (=図 5-8) : FH の時間構造

Benveniste (1966 : 241) は第 3 章で提示したとおり, *histoire* (「歴史=物語」) (歴史叙述はこの下位分類に含まれる.) は単純過去形を基調として用いる語りだと考えていた. そしてその歴史叙述の特徴に関して, 歴史叙述の自立性を主張している. また, 条件法は, 渡邊 (2014 : 68) によると, 「P [事行, 引用者註] は発話時点 t_0 に直接定位されるのではなく, あくまでも PDV (t_{-1}) を介して, PDV (t_{-1}) からの後方性として定位される. そのため, P と t_0 との直接の前後関係はきまっていない。」という特性を有している. これら 2 つの仮説から, 「歴史」を構築する主体¹⁰⁷ の PDV (*point de vue de l'événement historique*, PDV-E, ②) が t_{-1} に存在し, その PDV-E は, Cond-H が示す事態である「 t_{-1} 時点における基準時に対してのみの未来」を捉えると考えられる. このように, PDV-E は Cond-H が表す事態 (=E2) のみに当てられるため (図 6-5 の ②), 結果的に Cond-H で示される事行がその後 t_0 の前後に起こったのか起こっていないのか, *incertitude* (不確実性) の生じる余地を残す. つまり, PDV-N は過去へ視点を向け E1 を過去形に置いた後は役割を終え不介入となり, Cond-H は PDV-N を持つ書き手が, 事行の実現の責任を取れない事行なのである. PDV-N からの「事実」と PDV-

¹⁰⁷ 「歴史」というものを作っている主体とは, まるで書き手の存在が消え, 出来事を歴史の空間の中に定位する「歴史の目」のような視点 (=PDV-E) であることを指している. この主体は, 出来事が歴史的空間に存在していると保障している存在である.

E が捉える事態は、「現実」と「虚構・想像」という世界が異なる（現実世界の過去に相当する歴史的時間ではない）。したがって E2 は書き手の範囲外となり現実世界での実現 / 未実現を把握できず、それは E1 がいくら続いても E2 にはならないことを示し、E2 の実現を保障せず、E1 と E2 の間には断絶があるということである。

これらの仮説は、Cond-H が時間副詞との結びつきが弱いことから裏付けられるだろう。時間副詞と Cond-H の組み合わせは、本論文の歴史テキスト・訃報コーパスのすべての中で 4 例しか観察されなかった。このように、断絶・跳躍を含むため PDV-E が一連の事行のまとまりを捉えた上でその叙述の終着点となりやすい FH (図 6-6) に対して、Cond-H の PDV-E は Cond-H の事態のみを捉え、結果的に不確実性を残すため、Cond-H はあるテーマに関する一連の記述のまとめである章や段落の終わりで使用されることにもその特性ゆえにあまり向かないと言えるだろう。この PDV-E は Cond-H を虚構＝想像世界の中で「実現する事行」として捉えるが、それが現実世界の t_0 時までには「実際に」実現するかは関与しない。

以上のように、構造的側面では、歴史叙述的時間軸で複数の潜在的可能性を暗示しつつ、その中の一つの事行の実現を捉える PDV-E という 1 つの視点から成る FH に対して、Cond-H での語りは現実時間軸からの過去への回顧的視点の方向とともに E1 を捉える PDV-N と、E2 の事態のみを想像的位相で捉える PDV-E の、2 つの PDV が混在する複雑な仕組みとなっている。

つづいて、上記に提示した図に基づいた詳細な実例分析を行う前に、Cond と Cond-H とともに解釈可能である例外的な例を観察しておこう。

- (15) [...] L'un des Internationaux les plus influents, Benoît Malon, soutient l'appel des maires légalistes et conciliateurs. Il ne cache pas son pessimisme en ce qui concerne l'action du Comité central et les élections. Il abandonnerait volontiers le mouvement révolutionnaire. Tel autre international influent, Goullé, prend la parole pour souligner que l'Internationale n'a qu'un de ses membres au Comité central, Varlin et que par conséquent sa responsabilité n'est en rien engagée. (…)

(LPC 第 6 部 3 章 : 320)

もっとも大きな影響力をもつインターナショナル派の一人、ブノワ・マロンは、合法主義者と和解派の区長たちの呼びかけを支持する。彼は中央委員会の行動と選挙に関する悲観論を隠さない。彼は自ら革命運動を放棄することになる。また別の有力なインターナショナル派グーレは、インターナショナルは中央委員会にただ一人のインターナショナル会員ヴァルランを送っているにすぎず、したがってインターナショナルは何の責任も負わされないことを強調した発言をする。

(LPC 和訳書『下』: 205)

(15) では、現在形基調の叙述に、唐突に条件法が挿入され、また現在形基調に戻っている。これは、歴史叙述的時間での叙述中に、異質な現実時間が挿入されたことを意味する。つまり、丸括弧などのような「挿入」の機能を果たしているのではないかと考えられる。書き手が先に述べておきたい情報をあえて現実時間軸から挿入することで、強調したい意図があり、つまり他の事行と比較して Cond-H の事行になにほどこか「重要性」の価値が加えられる。FH と丸括弧を使用しない理由としては、丸括弧の使用には重要性の価値は付随せず、あくまで補足の情報という位置づけであり、強調の意味は有していないと説明できる。大きな影響力を持つ人物であるブノワ・マロンが「革命運動を放棄しよう」と思ったということは重要な出来事であると捉えられるため、補足説明の記号文字である丸括弧ではなく、時間軸の挿入という形を採用していると考えられる。また FH を用いない理由としては、潜在的可能性を付随し最終的に選択された事行を先取りし、その事行達成への方向へ進んでいく方向性が提示されるのに対して、Cond-H は事行が生起した時点 (E2) のみに視点がフォーカスされ、その事行の達成までは関与しないことによる不確実性を示すため、書き手は事態が「本当に達成される」のかではなく、事態の「提示」に重きを置いているからであると考えられる。

Cond か Cond-H か曖昧である例として取り上げたが、和解派を支持し革命運動を放棄するという時間的關係として解釈すると Cond-H だが、悲観して革命を放棄するという論証的關係と解釈した場合には Cond であると考えられる。どちらと解釈しても、条件法であるため、第 3 章で取り上げたとおりの t_1 の時点における P / non-P の分岐的時間を有し、 t_0 時まで実際に放棄したのかどうかはまでは関与しないため不明である。

6.5. 歴史的未來と歴史的條件法

本節では、前節 6.4 節で提示した各時制の時間構造と視点の理論に基づき、本論文のコーパスの実例とともに実証していく。

6.5.1. 歴史的條件法を示さない條件法

本論文の研究対象ではないため詳細な分析は行わないが、参考として Cond の例を挙げておく。(16) は FH と Cond が同一文内で用いられている例である。

(16) Le contraste éclate notamment lorsqu'on aborde l'une des accusations les plus sérieuses : la question de ses voix.

« Quel aspect avait saint Michel quand il vous apparut ? ... Etait-il nu ?

— Pensez-vous que Dieu n'ait pas de quoi le vêtir ?

— Avait-il des cheveux ?

— Pourquoi les lui aurait-on coupés ? ...

— Avait-il une balance ?

— Je n'en sais rien. » Et d'ajouter : « J'ai grand-joie quand je le vois. »

Ce n'est qu'à la quatrième séance du procès, le 26 février, que Jeanne prononcera, avec le nom de saint Michel, ceux de sainte Catherine et sainte Marguerite comme étant les « voix » qu'elle entend et qui s'adresseraient à elle, sous une apparence visible :

« Comment savez-vous que la chose qui vous apparaît est homme ou femme ?

— Je le sais bien et les reconnais à leur voix, et elles me l'ont révélé ...

[...]

(JDA 第 7 章:82)

この対照は、とりわけ最も重大な告発の対象に論が及んだ時、はっきりと見えてくる。(声)の問題である。

「おまえに聖ミシェル様が現れる時、どんな姿をしているのか？……裸なのか？」

「神様は着せるものをお持ちでないとお考えですか？」

「髪の毛はあったか？」

「どうして聖ミシェル様の髪の毛を刈ってしまうのですか？」

「秤^{はかり}は持っていたか？」

「全く存じません。」そしてこう付け加えている。「聖ミシェル様に会えた時はとても嬉しゅうございました」と。

ジャンヌがその〈声〉を聴き、彼女に話しかけるものの実態を追及された時、聖ミシェルと共に、聖女カトリーヌとマルグリットの名前を初めて口にし、自分が目にした形で答えたのは、二月二十六日の第四回の審理の場以後のことであった。

「おまえに現れるというものが男か、女か、どうして解るのか？」

「良く解ります。あの方たちの声で解るのです。それに聖女様たちが私におっしゃって下さいました。」
(JDA 和訳書第 7 章:104)¹⁰⁸

この例文は、ジャンヌが聖なるものの〈声〉を聴くことができるという事実が真実であるのかを裁判において判事が追及している場面である。FH と Cond が用いられている該当箇所は現在形基調の歴史叙述的時間軸上での叙述となっている。質問に対してそれまではぐらかしていたジャンヌだが、非明示の基準時（第 3 回までの審理）^{to1} から時間副詞を伴って二月二十六日に跳躍したときに、ようやく事行 prononcera (答える) を「答えない」を含めた潜在的可能性の中から選択して実行することを FH を用いて表している。一方、裁判中〈声〉がジャンヌに s'adresseraient (話しかける) ことを判事が問う際、判事はその事行に疑いを抱いているという含みを表すために、doute (疑念) の意味的価値を有する Cond が用いられていると思われる。ここでは、ジャンヌが〈声〉が entend (聴こえる) ことは歴史的現在で表していることにより、判事はその事実を仮に認めているのだと仮定しても、〈声〉が「話しかける」という事行には Cond を用いることによって、判事はその事実に対して強い疑いを持っているということが良く分かる使い方であろう。歴史テキストの語りの部分に ^{to} 時の書き手の意見として現れているわけではないが、ここでは条件法が有する法としての意味的価値を示しているため

¹⁰⁸ 対象の和訳部分の一部「二月二十六日」は、和訳書では「二月二十七日」と記載されているが、原文どおりに筆者が変更した。

Cond なのであり、それを含意しない Cond-H ではない。実際に続く文脈の中で Comment savez-vous [...] ? (どうして君は解るのか?) との判事の発言があることにより、Cond には判事が抱く疑念というモダリティが書き手によって反映されていると解釈できる。もし、Cond-H だと解釈した場合、Cond-H は法としての意味的価値を有さず過去に置かれた基準時からの時間的後方性を示すことになるが、〈声〉がジャンヌに「話しかける」ことは恒常的なものであり、E2 のみが捉える未実現かもしれない未来を表しているわけではない。そのため、Cond であると考えられる。また、もし FH を用いていた場合、これも基準時からの時間的後方性を示し、さらに事行「話しかける」が選択され書き手の t_0 時には事実として実現していると認識されるため、ここでは不適合である。

次に、訃報ジャンルからの例を見てみよう。

(17) « Lavabo »

Rivers s'accoutume finalement à Paris, notamment au XVIII^e arrondissement où il vit avec sa femme, Babette, rencontrée en 1981. « *Un quartier formidable, il y a des Noirs, des Arabes, des Juifs, des Portugais, des Yougoslaves... [...] Pas un quartier populeux mais populaire. Les gens y sont impeccables, toute la Terre devrait être comme ça.* » Il se partage entre ce Paris qui l'a adopté et le Tarn-et-Garonne, où il possède un ranch avec des chevaux. (liberation.fr, 24/04/2019)¹⁰⁹

「洗面所」

リヴァースはようやくパリに、特に 1981 年に出会った妻のバベットと一緒に住んだ 18 区に慣れてきた。「素晴らしい地域で、黒人、アラブ人、ユダヤ人、ポルトガル人、ユーゴスラビア人が住んでいて... (…), 人口の多い地域ではないが、人気のある地域だ。そこにいる人たちは完璧だ、全世界がそうであるべきだ」。彼は、自分を採用してくれたこのパリと、自ら所有する馬を飼っている牧場のあるタルヌ＝エ＝ガロンヌ県を行き来する。

¹⁰⁹ https://next.liberation.fr/musique/2019/04/24/dick-rivers-l-elvis-de-nice_1723178

この訃報の記事は、歌手であったディック・リヴァースの生前の発言の中で Cond が用いられている例である。発言内での生起であるため FS と FH の関係性と同様に、主観的側面が排除された歴史的事実ではなく、発言には必ず話し手のモダリティが付随するため、Cond-H には属さない。また、現在形基調で話し、主節の動詞時制に Cond が使用されているため、この Cond は時制の一致ではなく、また、*toute la Terre devrait être comme ça* (全世界がそうであるべきだ) には話し手の当為 (「~すべきだ」) といった価値判断が内包されている。

6.5.2. 歴史的未來と歴史的條件法の共起

前節の Cond に対して、Cond-H とは何を示すのかコーパスから例を挙げて観察していく。「歴史＝物語」に属するテキストには豊富な種類の動詞時制が用いられ、未來表現ではこれまで FH, FP-PR-H, FP-IMP-H を分析してきたが、本章では以降、Cond-H も存在することを確認する。

第4章で提示した以下の (18) をこれまでの章で行った分析を踏まえて再度考察してみよう。

- (18) Cependant, Jeanne ne perd pas de vue son but premier et insiste à nouveau pour que le dauphin se rende à Reims : ce qui fait le roi, c'est le sacre ; et pour le peuple il n'y aura [FH] plus d'hésitation lorsque Charles aura été sacré ; elle-même ne l'appelle que : le dauphin ; c'est après le sacre qu'il deviendra [FH] son roi. Perceval de Cagny qui fut le familier du duc d'Alençon et plus tard raconta son histoire nous montre pendant cette seconde quinzaine de juin Jeanne « fort marrie du long séjour » que le roi faisait à Gien. C'est dans cette ville que l'armée du sacre allait être rassemblée [FP-IMP-H] ; « bien que le roi n'eût pas d'argent pour payer son armée, tous les chevaliers, écuyers, gens de guerre et du commun ne refusaient pas d'aller le servir pour ce voyage en la compagnie de la Pucelle, disant qu'ils iraient partout où elle voudrait aller ». Elle eut certainement à renouveler ses instances et à le presser d'aller recevoir ce sacre après lequel

il n'y aurait [Cond-H] plus de doute pour les populations ; de fait, selon l'usage, le roi expédia de Gien les invitations aux bonnes villes du royaume et à ses vassaux ; l'une d'entre elles fut même envoyée au duc de Bourgogne. Enfm, le mercredi 29 juin, l'armée s'ébranle en direction de Reims.

(JDA 第 4 章 : 51-52)

だがジャンヌは当初からの目標を見失うことなく、王太子が直ちにランスに赴くことを改めて主張した。人を国王にするもの、それはカペ王家以来の伝統のランスの教会で行われてきた、国王の身を神聖化する聖別の儀式である。王太子シャルルが聖別されれば、一般大衆の中にはもはや迷いはありえない [FH]。今はまだ彼女自身もシャルルを〈王太子〉としか呼べないのであり、シャルルが彼女にとって〈国王〉となる [FH] のは聖別・戴冠の儀式を終えてからのことである。アランソン公に親しく、後に同公の生涯の記録を著すことになるペルスヴァル・ド・カニーは、その年代記で、王太子のジアンにおける六月後半の「長い滞在」をジャンヌが無念がっていた状況を伝えている。ジアンの町は聖別式に向かう部隊の集結地であった [FP-IMP-H]。「国王は軍隊に支払うための資金を持っていなかったが、あらゆる騎士、準騎士、兵士その他の人々も、乙女が同行するこの遠征に、国王のために参加することを拒まず、口々に乙女の望むところならどこへでも赴くと述べた。」確かに彼女はその主張を繰り返し、聖別式を受けに行くことを急がせて、これが終われば大衆に迷いはなくなる [Cond-H] ことを説かねばならなかったが、ともかくもその結果、国王は慣例に従い、ジアンから聖別・戴冠式典への招待状を国王に忠誠な町々や国王の家臣団に送ることとなった。その一通はブルゴーニュ公にも送り届けられている。こうしてついに六月二十九日、遠征軍はランスに向けて進み始めた。

(JDA 和訳書第 4 章 : 65)

このパラグラフには、様々な未来表現が用いられている。つまり、たとえば常に FH を用いる、常に FP-PR-H を用いるなど、テキストや書き手によって未来を表現する際に動詞時制が限定されるというわけではないため、それぞれの未来表現は明確な区別がなされたうえで適切に用いられているのだということがこの例から分かるであろう。

まずはじめは現在形基調で叙述されており、歴史叙述的時間軸上の基準時に立脚し、

FH の生起が成立している。一つ目の FH である *pour le peuple il n'y aura plus d'hésitation* (一般大衆の中にはもはや迷いはありえない) は, *ce qui fait le roi, c'est le sacre* (人を国王にするもの, それは聖別の儀式である) という歴史的現在による事象を基準時としている。また, *ne...plus* との共起により, 王太子が聖別されるとどうなるかという事態の最終結末を表している。そこには, 今王太子が聖別されていない時点では, 大衆の中で様々な思いがあるという潜在的 가능성을暗示している。二つ目の FH である *il deviendra son roi* (シャルルが彼女にとって〈国王〉となる) は, 基準時が明確な動詞として明示されていないが, *après le sacre* (聖別の儀式の後) という名詞句が内包する「聖別の儀式をする」という事象を基準時として定位し, そこから跳躍した後方性と, 王太子を王にするために直ちにランスへ赴くことが重要であるとするジャンヌたちの, 一連の行動の最終地点を表している。同時に, 2つの FH 両方とも潜在的選択肢の中から FH で表された事行の方向へ進んでいくという叙述の方向性も示している。

次に, FP-IMP-H である *allait être rassemblée* (ジアンの町は集結地であった) の一文から聖別式を行うことへの展開描写が始まり, この後は過去形基調に移行する。(正確には « *Perceval de Cagny qui fut [...] que le roi faisait à Gien.* » の部分から過去形であるが, この部分は書き手による, 後にこの時を振り返った人物による年代記からの説明の挿入であり, パラグラフの流れからは離脱しているため, ここでは考慮していない。) したがって, この FP-IMP-H は新たな連続した展開叙述が始まるということを示すマーカーの役割として機能している。同時に, 現実時間軸からの PDV-N の知識を伴った, 読み手に現実性を与える回顧的な視点による叙述展開となることも示している。さらに, FP-IMP-H が用いられているということは, PDV-E もあり, 非明示の基準時 *l'armée du sacre* (部隊が聖別式に向かう) (=E1 に相当) からの連続性も示している。

最後に, Cond-H が表す事象である *il n'y aurait plus de doute pour les populations* (大衆に迷いはなくなる) は, 時間構造や視点は FP-IMP-H と類似している。現実時間軸からの PDV-N と「歴史」の構築主体である PDV-E を伴い, 単純過去形の *Elle eut à renouveler ses instances et à le presser d'aller recevoir ce sacre* (彼女はその主張を繰り返す, 聖別式を受けに行くことを急がせた) の事象を基準時とし, *après lequel* という関係節の後に時制の一致の働きとして Cond-H が用いられている。Cond-H の場合には, PDV-N は過去に時制を置いた (E1) を基準時として E2 の立脚元を構築し, その後関与せずに視点が PDV-E へ移行し, その PDV-E は Cond-H の事態 E2 のみしか

捉えないため、その時点では Cond-H の事行が起こるとして提示しているが、 t_0 までに事行が実際に成立するのか、実現には不確実性の含みを帯びて読み手に提示する。実際に、「聖別式後は大衆の迷いがなくなるだろう」という Cond-H で表している未来における事象は、ジャンヌが説得している主張、つまり推測でしかないことが文脈から分かり、PDV-N からの視点ではないため、不確実性が感じられる。これがもし、歴史的現在と FH の aura で表されていたとしたら、一つ目の FH と同様に「迷いがなくなる」には、潜在的選択肢の中からその方向へ叙述が進むという、事実の提示の印象を読み手に与えるだろうと思われる。これは、6.2.3 節で提示した朝倉（2002）の説明である、単純未来形は語り手が事実として確認したものであり条件法現在は単に予想された事実を述べる、という 2 つの時制の異なる価値と一致する。注意すべきは、この不確実性は条件法のモード的な価値由来のものではなく、Cond-H の時間構造の仕組みにより生まれるものであるため、Cond-H は Cond のモード的な価値を有してはいないという点である。同じ事象が同パラグラフ内で異なる時制の使用によって意味的差異を利用し明確に区別されている興味深い例である。

また、訃報の記事における FH と Cond-H の共起の例を見ていこう。

- (19) [...] Le dernier livre qu'il publia s'intitule *Fragilité* (Minuit, 2017). Invulnérable aux sirènes du dehors – argent ou réputation –, robuste et bon marcheur, sa fragilité était en lui. Quand il l'écrivait, il ignorait que la maladie le rongeait déjà. Il l'ignorait encore quand il s'attelait à son dernier livre, qu'il était sur le point de finir et auquel ne manquera que la conclusion : « l'Absence ». Absent, il ne savait pas qu'il le serait quand le livre paraîtra aux éditions de Minuit. [...] (*liberation.fr*, 02/07/2019)¹¹⁰
- 彼 [ジャン＝ルイ・クレティアン, 筆者註] が最後に出版した本は *Fragilité* 『脆さ』(Minuit, 2017 年) という題である。— お金や評判といった— 外界のサイレンに影響されず、頑丈で健脚家である彼は、自分の中に脆さを抱えていた。彼にとって最後の本 [= *Fragilité* の次の本, 筆者註] を書いていたときには、すでに病気が自分の体を蝕んでいることを知らなかった。彼は、完成

¹¹⁰ https://www.liberation.fr/debats/2019/07/02/mort-du-philosophe-et-poete-jean-louis-chretien_1737588

間近であったこの本に取り組んでいたときには、まだそのことに気づいていなく、この本は « l'Absence » (不在) という結論だけが欠けることになる。

この本が Minuit 社から出版されるときには、彼は自分が « Absent » (不在 = 死ぬ) となることを知らなかった。

この例では、同一文内に FH と Cond-H が共起している。さらに、このパラグラフは過去形基調だが、その中で FH が用いられている。一つ目の FH は半過去形の *Il l'ignorait encore quand il s'attelait à son dernier livre* (最後の本を書いていたときには、すでに病気が自分の体を蝕んでいることを知らなかった) を基準時として、それを歴史的現在として変換して依拠し、そこから離脱して *il était sur le point de finir* (完成間近であった) の時点へ跳躍し、最終的には亡くなることになり *ne manquera que la conclusion* (結論のみ欠けることになる) という事象の方向へ向かう。歴史叙述的時間軸での語りでも、現在形を介さず過去から未来へと一気に大きい飛躍をする展開であり、このことでより時間的距離が感じられるため、FH の事行に少しの重みや強調的価値を与える効果があるのではと考えられる。二つ目の FH は、*quand* という同時性を表す接続詞で結ばれている、もう片方の主節の動詞時制が半過去形 *il ne savait pas* (彼は知らなかった) であるため、本来ならば時制の一致の働きとして Cond-H を用いて *le livre paraîtrait* 「本が出版される」という未来を表してもよいはずである。しかしながら FH を用いている点に、FH が有する、書き手による知識に基づく確実性という性質が関係していると考えられる。つまり、FH による *paraîtra* (出版される) という事行は、記事の書き手が執筆している t_0 時において決定されている、または実現している未来の事象であり、PDV-E から見ても「出版される」方向へ進んでいくことを表している。もし Cond-H を用いていた場合には、 t_0 時まで PDV-E は関与しないため、本当に出版される、もしくは出版されたのか不確実さを残す。同様に、同一文内の Cond-H である *il le serait* (彼はそうなる) は半過去形 *savait* からの時制の一致として生起しているが、図 6-5 で示したとおり、PDV-N は基準時として過去に *savait* という事行を置いた後関与せず、PDV-E が虚構 = 想像世界を創り、その中に *il le serait* を定位する。Cond-H を用いると PDV-E 時点ではあくまでその時の虚構 = 想像世界では事行が成立することを示し、 t_0 時までは問題としていない。また、「知らなかった」という事態が続いても「いなくなる」という事態にはならないため双方を連続的に関連付けることは

できない。すなわち、E1 と E2 は非連続性の関係にあり、捉える世界・位相が異なるため断絶していると言える。さらに、視点の方向性も変化し、事実を回顧的視点から見ているのと同時に、前望的視点により想像を行っている。

次に、現在形基調のパラグラフにおける Cond-H と FH の生起を観察してみる。

- (20) [...] Afin d'éviter une agression qui entraînerait le renversement immédiat de la République, le Comité central invite à former un cordon défensif autour de la partie de Paris occupée par les Prussiens ; cette partie sera évacuée ; la garde et l'armée établiront sur le pourtour des barricades surveillées, de sorte que l'ennemi « *isolé sur un sol qui ne sera plus notre ville, ne puisse en aucune façon communiquer avec les parties retranchées de Paris* ». Ainsi, curieusement, le peuple armé conserve l'image du sol sacré, de la ville inviolable et inviolée. « *La bourgeoisie parisienne, notent Lanjalley et Corriez, qui manifesta plus tard un si profond mépris pour le Comité central... lui fut alors reconnaissante de son intelligente intervention.* » [...] (LPC 第4部2章:200)

共和国の急速な崩壊をひきおこしかねない攻撃を回避するために、中央委員会はプロイセン兵によって占領されるパリの一部のまわりに防衛線をつくることを呼びかける。この部分は明け渡されるだろう。国民衛兵と正規軍はこの周囲に監視のバリケードを築くだろう。そうすれば敵は「もはやわれわれの都市ではない土地の上に孤立し、いかなる方法によっても、パリの防御される部分と連絡することはできなくなる」。こうして奇妙にも、武装した人民は、聖なる土地、侵しえずまた侵されたことのない都会というイメージを保持するのだ。ランジャレーとコリエは述べる。「のちに中央委員会に対して、かくも深い軽蔑を表明したパリのブルジョアジーは……そのとき、賢明な介入に感謝したのである」。(LPC 和訳書『上』:350)

(20) では、現在形基調の叙述においての FH と Cond-H の差異が確認できる。この例は (15) と同じく歴史叙述的時間軸上での現在形基調の叙述であり、現実時間軸からの Cond-H が挿入されている。図 6-5 に当てはめると、Cond-H の基準時となり、PDV-

N が過去に置く E1 は非明示であるが、「攻撃するという回避する」というように名詞を動詞化すると、名詞 *agression* (攻撃) を動詞にした「攻撃した」が基準時の事態 E1 に該当し、それに基づく未来の事態 E2 が *entraînerait le renversement immédiat de la République* 「共和国の崩壊をひきおこしかけない」という Cond-H で表されている。

これまでの分析に従うと、Cond-H の部分をもし FH にすると、*entraînera* 「ひきおこすことになる」という事行が選択され、その事行達成の展開の方向へ進むことを示し、潜在的可能性を暗示する開かれた未来を表すことになる。したがって、他とは時間軸の異なる Cond-H を挿入して用いた点に、PDV-N から PDV-E への変化に注目を当てたいという意図があると考えられる。現実時間軸の過去に基準時としての E1 を置く PDV-N は、役目を果たした後は関与せず、視点が PDV-E へと移行する。PDV-E が虚構＝想像世界を創り、その中に Cond-H で表される E2 の事態を定位する。ここでは E2 に相当する「共和国の崩壊をひきおこす」という事態の主体はプロイセン兵であり、その攻撃を回避するために呼びかける主体は中央委員会である。因果関係を考慮すると「崩壊をひきおこすかもしれない」ことに立脚し「その攻撃を回避する」のだというように立脚元としての E1 と E2 が逆のように考えられるかもしれないが、時間的關係から見ると、PDV-N が「中央委員会が呼びかけた」を配置した後に PDV-E が構築した虚構＝想像世界の中で「プロイセン兵によって共和国の崩壊がひきおこされる」という E2 の事態が起こるため、時制の一致が行われている。このように主節の事態である E1 の主体と関係節内の事態である E2 の主体は異なり、E2 の事態は、あくまで PDV-N によって現実世界の過去に置かれた E1 に立脚して PDV-E が構築した虚構＝想像世界の中に定位されている出来事にすぎないため、Cond-H で表されている E2 の事態は必然的に和訳で「～しかねない」と表されているような不確実性を帯びることになるのである。以上のように、Cond-H が生起する場合、現実世界の E1 と虚構＝想像世界の E2 間には、この世界変化と主体の変化が発生するのだという仮説が立てられる。したがってこの点に Cond-H を用いることの技巧的価値が存在するのだと考えられる。

それに対して、2つの FH は書き手の知識に基づいて叙述の方向性を表している。一つ目は *le Comité central invite à former un cordon défensif* (中央委員会は防衛線をつくることを呼びかける) を t_0^1 の基準時とし、*cette partie sera évacuée* (この部分はやがて明け渡される) という先の展開へ跳躍している。二つ目は、「やがて明け渡され

る」という事態を新たな基準時とし、防衛線の周囲に *la garde et l'armée établiront des barricades surveillées* (国民衛兵と正規軍は監視のバリケードを築く) という展開方向へ跳躍している。FH は必ず立脚点としての歴史的現在に依存していると論じてきたが、この仮説と矛盾し二つ目は FH に基づいていると考えられるかもしれない。しかし、第 3 章 3.2 節で説明した Benveniste (1974) の言語的時間による、発話の度に何度も基準時の現在の定位が可能であるという理論に基づき、一つ目の FH の事行が新たに基準時としての現在となっているために二つ目の FH の生起が可能なのであることを改めて指摘しておく。

6.5.3. 現在形基調の歴史的条件法

前節までは、歴史叙述には、歴史的現在で叙述される現在形基調と単純過去形と半過去形等で記述される過去形基調の 2 種類が存在することを観察し、それぞれにおける FH と Cond-H の比較を行い相違点を確認してきた。以降の節では Cond-H に焦点を当て詳細に分析していくこととする。まず本節では、現在形基調の叙述内で用いられる Cond-H の特徴を明らかにしていこう。また、本論文の訃報コーパスには現在形基調での Cond-H の生起が 1 例も確認されなかった点にも触れておきたい。

まず、主節の動詞時制で用いられている次の例を見てみよう。

- (21) [...] *Quittant l'hôtel de ville pour les palais d'État, redevenant ainsi pleinement pouvoir d'État, le gouvernement de la défense nationale cesse de se confondre avec la mairie et la municipalité parisiennes, confusion dangereuse mais bénéfique pendant ces deux mois. Il faut donc procéder à un simulacre d'élections municipales. Va-t-on demander aux électeurs de désigner une municipalité parisienne ? Non. C'est ce que demandent les « rouges ». Ce serait la Commune. Assez habilement, le gouvernement de la défense nationale fait élire des maires (le 5 novembre) et des adjoints (le 7 novembre) par arrondissement. Bonne formule. Puisqu'il y a des élections, les « rouges » perdent un argument. Et l'on ne risque pas de reconstituer la Commune. D'autant que les maires d'arrondissement, élus à la place des*

maires provisoires, sont surveillés par un maire de Paris, nommé par le gouvernement, un des Jules : Ferry. (LPC 第 4 部 1 章 : 176)

国防政府は、市庁舎を去って国家の所在地におもむき、こうして国家権力に完全に立ちかけた以上、パリの市役所および市政と混同されることをやめる。この混同は、過去二カ月のあいだは、危険ではあったが有益であった。したがって、見せかけの市政選挙にとりかからなければならない。選挙人にパリ市政を選任することを求めようとするのか。そうではない。それこそ《赤》の望むところである。それはコミューンになるだろう。かなり巧妙にも、国防政府は区ごとに区長（十一月五日）と助役（十一月七日）を選出させる。うまい方式である。選挙が行われる以上、《赤》は論拠を失う。しかも、コミューンを再建する危険を冒さなくてすむ。その上、臨時区長にかわって選出された区長たちは、政府によって任命されたパリ市長、ジュール一派の一人であるフェリーによって監視されるのである。(LPC 和訳書『上』: 308)

この例では、FP-PR-H も生起するような歴史叙述的時間軸上の現在形基調の叙述に、現実時間軸の Cond-H が時制の一致ではなく主節の動詞時制として用いられている。

第 5 章 5.4 節で提示したように、構造的には FP-PR-H は歴史叙述的時間軸上で PDV-E という 1 つの視点から成り立っており（図 6-7 を参照）、Il faut donc procéder à un simulacre d'élections municipales（見せかけの市政選挙にとりかからなければならない）という現在形で表される事態を E1 の基準時として定位し、準助動詞 aller に保障されたそこからの後方的な連続性を帯びた事態 E2 である on va demander aux électeurs de désigner une municipalité parisienne（選挙人にパリ市政を選任することを求めようとする）を FP-PR-H は示している。すなわち、E2 はすでに E1 の事態である見せかけの選挙に関して考え始めているため、E2 の事態に va demander と FP-PR-H を用いている。（ただし、LPC ではこの文が疑問形に置かれており、E2 の事態実現に関しては疑義を呈している。）

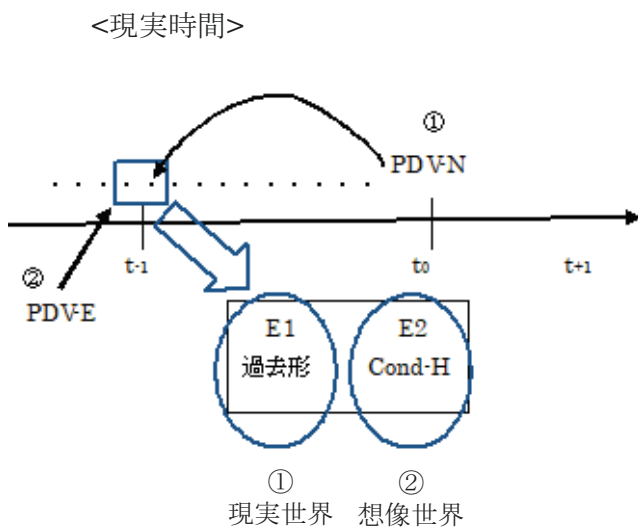


図 6-5 : Cond-H の時間構造

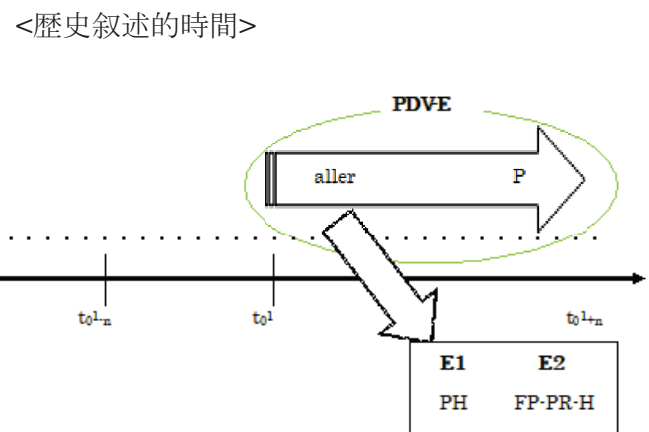


図 6-7 (= 図 5-9) : FP-PR-H の時間構造

一方，歴史叙述的時間軸のパラグラフの途中に，唐突に現実時間軸上に位置する Cond-H の事行 serait (なるだろう) の挿入が行われている。構造的側面からは，本来は疑似的な現在形による語りであるが，現実時間の挿入によりまず一つの視点 PDV-N が t_0 から回顧的に見ることになるため，E1 の時制が過去形に置かれることには異議はないだろう。図 6-5 に当てはめると，はじめに PDV-N が捉える E1 は C'est ce que demandent les « rouges » (それこそ《赤》の望むところであった) であり，この事態は現実世界の過去形として定位される。次に E2 の立脚元を過去に置くことで役目を終えた PDV-N の関与なしに，二つ目の視点 PDV-E が虚構＝想像世界を創り事態 E2 である Ce serait la Commune (コミュニンになるだろう) を中に定位し，この世界のみを捉える。このように，まず異質な現実時間軸の挿入は意図的に回顧的な視点を導入することを意味するため，書き手による E2 の事態の強調であり，この事態にある程度の重要さの価値を付加していると考えられる。また同時に，この Cond-H の挿入は現実世界から虚構＝想像世界への歴史空間の転換が付随しているため，PDV-E が E2 の事態の行く先まで捉えないことにより生まれる不確かさを暗示したい場合に有効でもあると思われる。過激派である《赤》が望むとおりに「コミュニンになってしまうだろう」という想像だが，E1 の主体である政府側はそれを望んでいないことが文脈からも明らかであり，事行達成に不確かさの余地を残す Cond-H はここでは適切に用いられている。も

し代わりに FH を使用した場合、潜在的可能性の中から Ce sera la Commune (コミュニオンになるだろう) という事態が書き手が有する知識に基づいて選ばれたことを示すため、読み手にこの事態が実現する方向へ叙述が向かうという確実的な印象を与えることになるのである。後の叙述である on ne risque pas de reconstituer la Commune (コミュニオンを再建する危険を冒さなくてすむ) という一文からも、「コミュニオンになる」という事態に確実性はなく、さらにその事態実現の方向への展開を望んでいないということが読み取れ、FH ではなく Cond-H を用いたことに妥当性が感じられる。また、その虚構＝想像世界の展開が現実世界で実現されることを望んでいないという同様の理由で、E1 から E2 への連続性を示す FP-H も相容れない。Cond-H の使用は歴史空間の転換と主体の変更を伴うため E1 と E2 の間には断絶があり、特に虚構＝想像世界を創り事態をその中に定位するという特徴ゆえ、FP-H のように E1 の延長線上に E2 の実現があるという、現実世界での連続性を表すことは不可能である。

次の例は、現在形基調であるため時制の一致ではないが、Cond-H が que 関係節内で用いられている例である。

(22) Et de nouveau c'est une altercation entre Jeanne et les capitaines qui considèrent que, après cette victoire inattendue, il leur suffirait de « garder la cité en attendant le secours du roi ». Jeanne, elle, décide de donner l'assaut à ce qui est l'enjeu principal : le fort des Tourelles, et elle éprouve certainement une vive satisfaction à voir les troupes camper aux Augustins pour être plus près du théâtre des opérations. (JDA 第 3 章 : 43)

だがここでもジャンヌと他の隊長たちの間で議論が起きた。予定されていなかった勝利が得られた以上、町の守備を固めて国王からの援軍を待てば充分と隊長たちは考えた。ジャンヌのほうは、一挙に主要な攻撃目標トゥーレル城塞の攻略にもちこもうと決意していた。オルレアン側の部隊がオーギュスタン砦一帯に野営して、戦闘行動の舞台に極めて接近している事実は、彼女にとってこの上もなく好都合と思えた。(JDA 和訳書第 3 章 : 55-56)

この例は、ジャンヌと隊長たちの考えの相違を叙述している場面である。関係代名詞が多いパラグラフのはじめの一文の一部を改変すると、Les capitaines considèrent que,

après cette victoire inattendue, il leur suffirait de « garder la cité en attendant le secours du roi » となる。つまり、記号文字コンマ (virgules ,) の挿入部分を除くと、que 関係節内に Cond-H を動詞とする一文がある。したがってこの例でも同様に、歴史叙述的時間上での語りに現実時間から挿入されていることが分かる。この例では歴史叙述的時間上における que 関係節内での生起であるため、Cond-H の代わりに本来この時間軸上で基準時からの時間的後方性を表す FH でも成り立つと考えられる。しかし、異なる時間軸を挿入してまで Cond-H を使用しているのである。それはなぜであろうか。

(21) と同様に図 6-5 を用いて分析すると、過去形の E1 には les capitaines considèrent (隊長たちは考える) を PDV-N が過去に置いたものが相当し、E2 には PDV-E が構築した虚構＝想像世界内に定位される il leur suffirait (充分であろう) が当てはまる。ここでの挿入は、これまでの考察と同様に、PDV-E が E2 の事態のみを捉えることによる、「E2 の事態は虚構＝想像世界内に定位されたもの」であることを示したい、つまり隊長たちの内面にスポットライトを当てたいという意図が考えられる。想像であるため本当に現実の未来において十分なのかどうかという事態の実現に当然不安定さが残る。しかしそれでも書き手の介入なしに、今は攻撃するよりは守備に回れば十分ということで想像世界の中では成立しているということを強調したいと解釈される。

それに対してもし FH を用いた場合、これまでの FH の分析より、「守備を固めて援軍を待てば**十分だ**」という事態の確実性が書き手の知識により付随し、その事態実現の方向へこれから進むことを示すことになる。

この読み手に与える意味的差異の存在ゆえに、主節の動詞時制が歴史的現在である que 関係節内ではあるが、意図して Cond-H が挿入という形で使用されていると考えられる。

最後にもう一例、関係節 dont 内で Cond-H が生起している例も見ておくことにする。

(23) Fidèles à leurs engagements, Clemenceau et Millièrè vont à Versailles, où l'Assemblée s'installe. Le 20 mars, Clemenceau dépose le projet relatif à l'élection dans le plus bref délai d'un conseil municipal de 80 membres, dont le président aurait les fonctions de maire de Paris (ce projet, élaboré et accepté par les élus, n'accorde pas la représentation proportionnelle au peuple de Paris). Quant à Millièrè, en même temps qu'un projet de loi sur

l'élection à tous les grades dans la garde, il dépose une proposition de prorogation pour trois mois des échéances (effets de commerce). Clemenceau et Millière demandent l'urgence. (LPC 第6部4章:328-329)

約束に忠実に、クレマンソーとミリエールは、国民議会がおかれているヴェルサイユへ出かける。三月二〇日、クレマンソーは、八〇人の議員で構成され、その議長はパリ市長の職務を果すはずの市議会のできるだけ早急な選挙に関する計画案を上程する（議員によって作成され承認されたこの計画案は、パリの人民に比例代表制をあたえていない）。ミリエールの方は、衛兵のあらゆる階級の選挙に関する法律案と同時に、支払期日（手形）の三ヵ月延長を上程する。クレマンソーとミリエールは緊急決議を要求する。

(LPC 和訳書『下』: 220-221)

この例の Cond-H を含む一文は、関係詞 *dont* を用いつつ Clemenceau dépose le projet relatif à l'élection dans le plus bref délai d'un conseil municipal（クレマンソーは、市議会のできるだけ早急な選挙に関する計画案を上程する）と le président d'un conseil municipal de 80 membres aurait les fonctions de maire de Paris（八〇人の議員で構成される市議会の議長はパリ市長の職務を果すはず）という2つの事象から成り立っている。ここでも歴史的現在基調の叙述であり、歴史叙述的時間軸上で出来事が語られているが、「市議会の議長はパリ市長の職務を果すはず」という未来の事象を同じ時間軸上で生起する FH ではなく、異なる軸である現実時間軸上で生起する Cond-H を用いて表している。

(21)・(22)と同様、現実時間軸 t_0 からみた過去 t_1 に歴史叙述的時間を構築しているため、例文中では歴史的現在を用いた叙述でも、Cond-H の構造図では PDV-N が事態を過去に置き、以下のようにになっている。E1 は「クレマンソーが市議会の選挙に関する計画案を上程した」という事態が相当し、E2 は「市議会の議長がパリ市長の職務を果すはずだ」という事態が当てはまる。職務を果すことになるのは市議会の選挙の計画案を上程した後であるため、E2 である Cond-H は E1 が過去形で置かれた事態に立脚している。ここで Cond-H が生起している理由にもこれまで論じてきた説明が適用可能であり、PDV-N の介入がなく、虚構＝想像世界へ歴史空間を転換する PDV-E は、Cond-H の事態のみにフォーカスし、その後の現実世界における事態の展開方向までは

捉えない。「議長が(…)上程する」という知識に基づき現実世界の PDV-N により過去 t_1 に置かれた事態と、「市議会の議長は(…) 果すはず」という PDV-E により構築された虚構＝想像世界内に定位された事態という、外的側面(現実の事実)から内的側面(想像)への歴史空間の転換を、Cond-H を用いることにより表すことが可能となる。このことが固有の重要な特性であり、異なる時間軸に挿入してまで用いられる理由である。

Cond-H の事態は虚構＝想像世界内という内的側面の事態であるため現実世界での振る舞いは関与範囲外であり、結果的に現実での事行達成に不確実さの価値が付随する。もし FH を用いた場合、基準時からの断絶を含み連続性はなく事行実現に不安定さを残しつつも、虚構＝想像世界ではなく現実世界で潜在的可能性の中から選択された事行であるため、実現の方向へ向かうという方向性までが暗示する対象となる。つまり、虚構＝想像世界内の域に過ぎない Cond-H と現実世界での方向性までを表す FH という明確な差異が存在する。

6.5.4. 過去形基調の歴史的条件法

本節では、様々な過去形基調の叙述で生起している未来表現の一つである Cond-H を実例を挙げながら分析していく。一般に予想されるとおり、主節の動詞時制(過去形)に対する時制の一致により使用される例が多く見られる。

まず、「単純過去形」を基調としている叙述から分析していくこととしよう。訃報のコーパスには 1 例も確認されなかった。次の(24)は第 5 章 5.6.1 節で FP-IMP-H の部分を検討したが、ここでは前章で論じなかった条件法を分析してみる。

- (24) Sa première étape est Auxerre le lendemain. La ville avait une garnison bourguignonne ; les troupes royales allaient camper trois jours sous ses murs tandis que se déroulaient des pourparlers qui faisaient mal augurer de la suite des événements : finalement les gens d'Auxerre fournirent vivres et denrées, mais n'ouvrèrent pas leurs portes et s'engagèrent seulement à tenir la même conduite que celle que tiendraient les bourgeois des autres villes sur le parcours : Troyes, Châlons et Reims. (JDA 第 4 章 : 52)

最初の重要な目標となる町は翌日着いたオーセールであった。この町にはブルゴーニュ派の守備隊が置かれていた。王太子の軍は町側との折衝が行われる間、町の城壁の下で三日間幕営しなければならなかった。交渉は事態の見通しを明るくするものではなかった。ともかくもオーセールの市民たちは、食糧の供出は行ったが町の門は開くことはせず、単に予定された行程上の町々、トロワ、シャロン、ランスがすることになることと同じ行動をとることだけを約束したにとどまった。(JDA 和訳書第 4 章 : 66, [一部加筆])

過去形基調の叙述とは現実時間軸上の t_0 から事態の実際の生起時である t_1 への回顧的な視点による語りである。この例では、二つ目の記号文字 : (deux-points) 以降は単純過去形基調の叙述となっている。歴史叙述的時間軸上に生起する歴史的現在による叙述の性質と同様に、オーセールの市民たちの行動を単純過去形を用いて淡々と継起的に語っている中で、継起的から外れ先取りした虚構 = 想像の未来の事行である tiendraient (することになる) を Cond-H で表している。構造的には、E1 は les gens d'Auxerre s'engagèrent (オーセールの市民たちは約束した)、E2 が les bourgeois des autres villes sur le parcours tiendraient la conduite (予定された行程上の町々がすることになる行動) に適合し、E2 の事態は E1 の事態の時間的後方に生起し、E1 に立脚しているが、E1 と E2 の間には 2 つの歴史空間の断絶がある。これまでの分析と同様、FH の視点 PDV-E は、基準時からの断絶から生じる潜在的可能性も含みながら跳躍先の「未来」からの事行展開の方向性までという広範囲に渡って関与する。それに対して、Cond-H は PDV-E が構築する虚構 = 想像世界の中に Cond-H が表す事態 E2 が定位されるために必要な立脚元を、まず PDV-N が現実世界で過去 t_1 へを視点を向け E1 を過去に配置する役割を果たす。つまり PDV-N の機能なしに「歴史」というものを作る主体である PDV-E の行いは存在しない。(24) では、「この後訪れる予定の他の町々であるトロワ、シャロン、ランスが王太子軍に対して行う (食糧の供出など) と予想されることのみをオーセールも行う」と約束し、この「約束した」は単純過去形で表されているため、PDV-N は現実世界で実際に行われた出来事として捉えているが、「他の町々が行うと予想されること」は PDV-E が構築した虚構 = 想像世界の中のことであり、現実には達成されるのかは不明である。これを Cond-H の使用は表している。

このように、現実時間軸上での語りでは、書き手による知識や資料 (= 情報源) に基

づきながら回顧的視点で叙述展開を見ているイメージであるが、様々な情報から書き手が選択した出来事を叙述するため、流れよりも個々の事行にスポットライトが当てられる印象の叙述であると考えられる。したがって、まるで出来事が自ら語っていくような印象を与える歴史叙事的時間軸での叙述のような事実の前望性を感じることは難しい。PDV-E が虚構＝想像世界を創りその中に E2 を定位し、その世界だけを捉えるという Cond-H での未来表現にもこのスポットライトの性質が表れていると言える。

同様の例をもう 1 つ確認しておこう。

- (25) Millière protesta contre ce singulier mode de formation des compagnies de marche qui aurait pour résultat inévitable de désorganiser la garde nationale, d'en militariser une partie et d'en démoraliser le reste.

(LPC 第 4 部 2 章 : 194)

ミリエール [=革命派, 筆者註] はこの歩兵中隊を形成する奇妙な方法に抗議した。この方法の不可避的な結果は、国民衛兵を解体し、その一部を軍隊化し、残りの部分の士気の沮喪をひきおこすであろう。(LPC 和訳書『上』: 341)

この例でも、qui 関係節内で主節の動詞時制である単純過去形に対する時制の一致の結果として Cond-H が用いられている。和訳で 2 つの文に分割されているように、qui 以下は ce singulier mode (奇妙な方法) の結果説明を表している。したがって E2 の基準時である E1 は Millière protesta contre ce singulier mode (ミリエールはこの奇妙な方法に抗議した) が、E2 は ce singulier mode aurait pour résultat inévitable (この奇妙な方法は不可避的な結果をひきおこすであろう) が相当する。E1 と E2 の関係は時間的前後関係を示していると同時に、原因と「予測」結果の関係でもある。歩兵中隊を形成するという奇妙な方法はどのような結末を未来にひきおこすと考えられるのかという予測・想像を述べているが、この語りに現実時間上に生起する Cond-H を用いることを選択したことにより、現実世界で「抗議した」という事実と、虚構＝想像世界の中で de désorganiser la garde nationale, d'en militariser une partie et d'en démoraliser le reste (国民衛兵を解体し、その一部を軍隊化し、残りの部分の士気の沮喪) を「ひきおこす」という歴史空間の転換が行われている。FH のように跳躍先の事行の方向性に展開が進んでいくことを示すのではなく、この Cond-H の事態が起こると

いうのは虚構＝想像世界の域に過ぎず結果的に現実世界では不確実性を示すことになり、その Cond・H の虚構＝想像世界内の事行達成が現実世界で起こることを防ぐために抗議する、という理にかなった叙述の成立に貢献していると思われる。

つづいて、「半過去形」が基調となっている叙述の例を抜粋し、詳細に考察していこう。

(26) Photogrammes

Le problème de *Roger Rabbit*, c'était les mouvements, racontait Williams. A la différence d'un *Mary Poppins*, où les cadres étaient fixes, la caméra de Zemeckis, elle, bouge. Et le lapin avec. Ayant déjà bricolé sur des pubs auparavant, Williams savait qu'il pouvait relever ce défi mais que le processus serait très long et coûteux car il s'agissait, pour faire les choses bien, de dessiner les personnages sur des photogrammes reconstituant le film image après image, avec l'idée d'intégrer parfaitement les personnages en leur donnant du volume et en travaillant la lumière afin de faire croire qu'il s'agissait de cartoons en 3D (quand il s'agit en réalité de 2,5D). [...]

(*liberation.fr*, 18/08/2019)¹¹¹

「フォトグラム」

*Roger Rabbit*の問題は、その動きにあった、とウィリアムズは語っていた。フレームが固定されていた *Mary Poppins* とは違い、ゼメキス監督のカメラは動く。そして、カメラと一緒にウサギも動く。以前にもすでに CM を作ったことがあったウィリアムズは、この挑戦に応じることはできるが、そのプロセスは非常に長く、費用もかかるだろうと分かっていた。というのも、ものをよくするためには、キャラクターにボリュームを与えてまるで 3D アニメ（実際には 2.5D であるとき）であるように信じさせるために光を操りながら、キャラクターに完璧に統合するというアイデアとともに、映画の 1 コマ 1 コマを再現したフォトグラムにキャラクターを描かなければならなかったのだ。

¹¹¹ https://next.liberation.fr/cinema/2019/08/18/richard-williams-createur-de-roger-rabbit-pose-un-lapin_1745911

この訃報は、*Roger Rabbit*『ロジャー・ラビット』の生みの親であるリチャード・ウィリアムズに関する記事である。単純過去形と半過去形による語りの違いに関しては本論文の分析対象ではないため取りあげないが、Benveniste (1966) や Maingueneau (1994) ではフランス語の動詞時制を *discours* (「話」) / *histoire* (「歴史＝物語」) の二つの次元に区別する場合、半過去形は両方に属すものとし、この区分分けに相当するものとして Weinrich (1973 : 61-62) は説明 (*commentaire*) / 語り (*récit*) の二つのレベルに分け、半過去形は「語り」の時制として分類している。したがって、半過去形は「語り」(＝「歴史＝物語」)の時制に属するという点においては共通している。この論に従い、歴史テキストや訃報における叙述・語り部分に用いられる半過去形は、他の「歴史＝物語」に属する時制である単純過去形などと同様に、現実時間軸上に定位されるものであるとする。

このパラグラフでは映画『ロジャー・ラビット』の制作に関して半過去形を基調として叙述しており、その叙述の途中の *que* 関係節内において未来表現として **Cond-H** の生起が確認できる。つまり、主節の動詞時制である半過去形との時制の一致によるものである。同じ現実時間軸上での生起のため異質さはなく、**Cond** が有する法としての意味価値も示さない。構造的側面では、PDV-E の E1 は Williams savait (ウィリアムズは分かっていた) という事態、E2 は *le processus serait très long et coûteux* (そのプロセスは非常に長く、費用もかかるだろう) という事態が当てはまる。E2 の事態は E1 時においてはまだ実現していない未来の事態であるため未来表現を用いることに異論はなく、また、「想像の中ではそのようになると分かっていた」ということから、時間構造と視点の関係から派生した **Cond-H** が表す虚構＝想像世界と親和性があることも明らかである。一見すると、現実時間の PDV-N からの回顧的視点による叙述であるため知識として事実を知っており、虚構＝想像世界とは相容れないと考えられるかもしれないが、この虚構＝想像世界は、事態 E1 を過去の時点に置く役割のみを果たし他には関与しない PDV-N から事態 E2 のみをフォーカスする PDV-E へ視点が移行した際に構築されるため、現実世界から歴史空間への転換が同時に起こり、結果的に PDV-E が捉える範囲外である現実世界における E2 の事態の展開に不確実性が帯びることは妥当である。(26) はこの **Cond-H** が表すのは想像の中の事態であり、E1 と E2 は世界が異なり、知っている主体であるウィリアムズと時間も費用もかかる主体 (実体はない) で

あるプロセスという、主体もまた異なるため、2つの事態の間に連続性はないことが理解しやすいであろう。

次の例文はコーパス LPC からであるが、同じく que 節内における Cond-H の例であるため確認してみよう。

- (27) Parmi ces 90 élus, l'élément révolutionnaire dominait. Il était aisé de prévoir que dans ces conditions, autant par sa composition qu'en vertu de la situation, l'Assemblée parisienne irait plus loin que les attributions et compétences d'un conseil municipal. (LPC 第6部7章:361)

これら九〇人の選出議員のあいだでは、革命的な分子が優勢であった。この条件のもとでは、すなわち、議会の党派構成とそれがおかれた状況から、パリの議会が、市議会の権限と能力を超えてはるか先に進むことが容易に予想された。(LPC 和訳書『下』:281)

ここでも現実時間軸上の t_1 での叙述展開において、基準時となる事態を立脚点として時間的後方に位置するが状況から推測される虚構＝想像世界の事態にすぎないものを表す際に Cond-H が用いられている。2つの視点 PDV-N と PDV-E から成り立ち、E1 が Il était aisé de prévoir (容易に予想された) という事態、E2 が l'Assemblée parisienne irait plus loin (パリの議会がはるか先に進む) という事態に当てはまると仮定できる。E2 の「パリの議会が進む」のは E1 の「予想した」時点よりも時間的後方に位置する事態であるため、E1 を基準時としていることが分かる。また、この例では E1 である主節の動詞の意味からも読み取れるように、E2 の事態は PDV-N によって現実世界で「容易に予想された」対象の事態であるため、PDV-E が捉える範囲である Cond-H で表された E2 (=予想された中身) が虚構＝想像世界内に位置していることが明白であろう。PDV-E はその後現実世界での事態の展開までは関与しない。したがって、E1 と E2 は、予想した結果として起こるという関係性ではない。予想の結果として事態が起こる方向へ進むことを表すのであれば、歴史的現在や FH を用いることとなるであろう。

最後に、FP-IMP-H と同一文内に生起する Cond-H を双方を比較しながら分析してみることにする。

(28) [...] Le pape souhaitait une entente des forces occidentales pour tenter d'arrêter la menace ; il allait dans ce but déléguer en France Guillaume d'Estouteville, chargé d'autre part d'obtenir l'abolition de la Pragmatique Sanction par laquelle, en 1438, Charles VII s'attribuait le droit de désigner évêques et abbés de monastère — ce qu'on appelait le régime de la commende — et qui n'allait pas tarder à être transformé en une nomination pure et simple des membres du haut clergé par le monarque (concordat de Bologne, 1516) : avant-projet de cette Eglise d'Etat et de son clergé de fonctionnaires qu'on allait voir s'établir et qui en fait caractériserait l'Eglise de France du XVI^e à l'aube du XX^e siècle.

(JDA 第9章 : 112-113)

ローマ教皇は異教徒の脅威を防ぐために諸国家間の協調を望んでいた。この目的で彼はギヨーム・デストゥートヴィルをフランスに使者として派遣した。この使者は、一四三八年にシャルル七世がわがものとした司教や修道院長を指名する権利の廃止を求める役割も帯びていた。—このいわゆる部外者聖職制はその後、教会の高位聖職の国王による任命のみに限る制度に変わるが（一五一六年のボローニャの協約）、これは国家教会と国家官僚的な聖職者の青写真とも言うべきものであり、やがてこの制度は確立されて十六世紀から二十世紀初めに至るまでのフランスのカトリック教会の特徴となるものである。

(JDA 和訳書第9章 : 139)

この例では、半過去形が基調となっていると同時に、未来表現として FP-IMP-H の生起も多く確認される。FP-IMP-Hに関しては第5章で詳細に分析したが、本章で Cond-H の構造の仮説を提示し図式化した結果、以下の図 6-5・図 6-8 のとおり、時間構造の仕組みが非常に似ていることが明らかとなった。

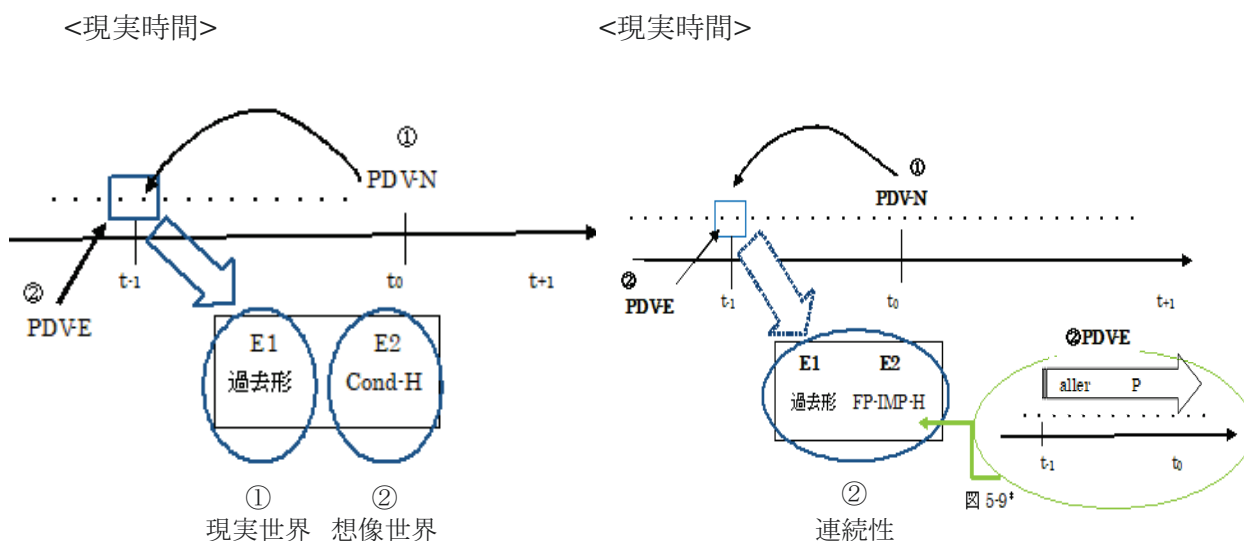


図 6-5 : Cond-H の時間構造

図 6-8 (=図 5-10) : FP-IMP-H の時間構造

双方ともに同じ現実時間軸上に位置し、同じく 2 つの視点①PDV-N と②PDV-E を有している。したがって、この 2 つの時制は構造的には共起しやすい時制であると言えよう。(28) 内には 3 つの FP-IMP-H の生起があるが、Cond-H と同一文において que 関係節内と qui 関係節内として並列して生起している三つ目のみ比較分析の対象として取り上げる。

両時制とも基準時である過去形に置かれた事態 E1 を必要としているが、この例では動詞としては非明示であり、名詞化されている。双方は同じ E1 「国王は教会の高位聖職者の任命のみを行うとする制度」を共有し、FP-IMP-H で表される事態 E2 である on allait voir s'établir (この制度は確立される) は、図 6-8 の PDV-E が捉えるとおり、基準時からの連続性の性質を示している。したがって、この制度ができたこととしっかり確立されることは常に隣接して進行しており断絶はない。それに対して、Cond-H で表される事態 E2 である cette Eglise d'Etat caractériserait l'Eglise de France du XVI^e à l'aube du XX^e siècle (この制度は十六世紀から二十世紀初めに至るまでのフランスのカトリック教会の特徴となる) は、図 6-5 の PDV-E (②) が捉えるとおり、PDV-N が t₁ に配置した E1 に立脚し時間の後方性ではあるが連続性はなく、また、PDV-N も PDV-E も続く展開には関与しないため、事態が不確実性という性質を帯びる。これは、FP-IMP-H の PDV-E が E2 の事行の aller に保障された基準時からの進行性にフォーカスして、PDV-N を伴うため確実性を帯びるのに対して、Cond-H の PDV-E は E2 の事態

の存在のみにフォーカスされ、その事態の展開までは捉えないことに起因する。しかしこの一文ではこれまで考察をしてきた例と異なり、Cond-H が du XVI^e à l'aube du XX^e siècle（十六世紀から二十世紀初めに至るまで）という時間副詞を伴っていることで、不確実な性質を持つ Cond-H に事行の達成の保障が付加されている。しかしながら一般に現実世界での生起時を表す時間副詞と、虚構＝想像世界を表す Cond-H が共起することは、属する世界が異なるものの共起であるため、あまり見られない例である。

6.6. まとめ

歴史テキスト・訃報における 2 つの未来表現の仕組みと機能的差異を考察した。その結果、次の 5 点が確認された。

まず、FH、Cond-H とともに歴史的現在基調でも、過去形基調でも用いられることができる。

次に、FH は歴史テキスト・訃報の中で FS の意味価値を有するものとしては使用されていない。また、Cond-H も同様に、過去における未来を表すという価値のみを有し、条件法本来の意味価値は排除される。

また構造的観点では、FH は歴史叙述的時間軸上での t_0^1 を基準時とし、PDV-E のみの前望的 (prospectif) な視点で用いられる。それに対し、Cond-H は現実時間軸上での t_0 からの PDV-N が t_1 に視点を向け過去に時制を置く役割を果たす。その PDV-N が基準となり、PDV-E が構築され、Cond-H で表される虚構＝想像世界が創られる。したがって世界の異なる E1 と E2 は非連続性上にあって関連付けられないことになる。Cond-H は虚構＝想像世界から出て現実世界での展開には関与せず、FH は基準時 t_0^1 を設定する語り手と読み手は展開の流れを見ているようであるが、Cond-H は一点にフォーカスする。

さらに性質的差異としては、FH と Cond-H はどちらもある種の時間的後方性を示すが、FH は断絶を伴った跳躍・先取りの性質を持つため潜在的選択肢があり、その中から選ばれた跳躍先であり一連の叙述の結末である FH の事行方向に展開が進む、つまり FH は歴史叙述的時間軸上における事行の発生が前提である。一方、Cond-H は PDV-E が定位される虚構＝想像世界の中で生じる事行が問題となるため、結果的に現実世界において事行が達成することに不確実性の生じる余地を与える。さらに Cond-H は現在形

基調の場合、「情報の挿入」や「強調機能（ハイライト）」という表現価値を担うことがある。

最後に文体論的観点より、時系列に沿った過去形や歴史的現在のみの語りよりも、**FH**を使用することでドラマチックな物語展開をもたらす可能性を付与している。さらに**Cond-H**を混ぜることで、現実世界（外側）から虚構＝想像世界（内面）へと転換する視点を導入し、変化の富んだ叙述となっている。

第7章 文学テキストにおける単純未来形

7.1. 本章の手順

本章では、これまでに分析してきた歴史的事実を語ったテキストと異なり、フィクションが主である物語という文学テキストにおける単純未来形を分析する。文学テキストをコーパスとした迂言的未来形や条件法と単純未来形との比較分析は、田口（1993）や Maingueneau（2010）、西村（2015）などをはじめ、これまでも少なからず研究がなされてきており、FH に焦点を当てる本論文の主旨から外れるため、参考程度にとどめることとする。ただし、歴史叙述的なジャンルとの比較は行わない。そのため、ここでは研究対象を FH を含む単純未来形に絞り考察することとする。文学テキストを研究対象として取り上げた理由としては、まず、歴史テキスト・訃報などと同様「歴史＝物語」レベルに属するがジャンルが異なる文学テキストにおいても、何らかの形で「先取り」がなされることはあると思われるが、FH が用いられることはあるのかという検証を行うためである。また、FH が生起する場合としない場合、作品によってテキスト性質の違いがある文学テキストそれぞれの特徴・差異を明らかにすることも目的の一つである。

本章の論述の手順は、次のとおりである。7.2 節では物語小説 *Le Petit Prince*¹¹² をコーパスとし、単純未来形の出現傾向に着目する。7.3 節では 13 話からなる短編物語小説集 *Miss Marple au Club du Mardi*¹¹³ をコーパスとする。この作品は、過去の事件に関して語り合う「火曜クラブ」の記述が外側で、語られる過去の事件の進行が内側という、入れ子構造形式となっているため、この構造形式の小説で見られる出現特徴を観察する。7.4 節ではテキスト全体としては一貫性がなく章ごとに完結するエピソードが語られる自伝的小説 *Terre des hommes*¹¹⁴ をコーパスとし、小説という形式でありフ

¹¹² 本論文では、SAINT-EXUPÉRY, Antoine de. (1999) を資料として用い、和訳はアントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ（著）・小島俊明（訳注）（2009）を参考とする。

¹¹³ 本論文では、CHRISTIE, Agatha. (tr. fr. par Sylvie, DURASTANTI) (2013) を資料として用い、和訳はアガサ・クリスティ（著）・中村妙子（訳）（2021）を参考とする。

¹¹⁴ 本論文では、SAINT-EXUPÉRY, Antoine de. (1971) を資料として用い、和訳はアントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ（著）・堀口大樹（訳）（2021）を参考とする。

イクション要素も含むが、書き手自身の経験、つまり事実が基盤となっているため、歴史的将来の生起を確認する。7.5 節ではそれまでの節における分析を踏まえ、文学テキストにおける単純未来形の *anticipation*（先取り）機能の特徴を明らかにし、7.6 節で各テキストジャンル間の同異点をまとめる。

これらの物語テキストを分析する理由としては、歴史テキスト・訃報と同じく「歴史＝物語」レベルに属するが、「事実」を第三者としての書き手が叙述しているのか、「物語」を書き手が「創作する」のかには大きな違いがあるからである。これまでの章では「歴史＝物語」における歴史テキストの単純未来形を考察してきたが、本章では物語テキストに現れる単純未来形の生起や機能を分析する。それにより、「歴史＝物語」レベル全般の *FH* や単純未来形の特徴を明らかにする。また、物語テキストの様々なジャンルとそこに現れる単純未来形と相対的に見ることで、*FH* とはどのようなものなのかを再検討することが目的である。

各テキストジャンルの一般的な特徴を提示するにはコーパスの数が不十分であるが、本論文の焦点は *FH* に関する分析であるため、各文学テキストジャンルの特徴はあくまで参考として提示するに留める。

7.2. *Le Petit Prince* における単純未来形

本節では、物語小説として分類される *Le Petit Prince* に生起するすべての *FS* を観察し、このジャンルにおける *FS* の特徴を明らかにしていく。本論文では *FS* の分析の際、伝統的な二分用法分けである時間的用法・モダール用法に関しては一つ一つの *FS* に対して行わないが、本節のコーパス分析に限り例として取り上げることとする。また、このコーパスは虚構の物語のため、*FH* の生起はないであろうという予測を確認する。以降、典型的な言表連鎖を取り上げながら、以下の手順によってコーパスを検討する。7.2.1 節では本コーパスを選んだ理由を述べ、7.2.2 節では「会話文でみられる単純未来形」を分析する。つづいて7.2.3 節では「会話文以外でみられる単純未来形」の例を挙げ、用いられる際の傾向を観察する。最後に、7.2.4 節で物語小説における *FS* の特徴をまとめる。

7.2.1. *Le Petit Prince* をコーパスとした理由

まず、この作品はフランスで最も読まれている児童文学書の一つである。第2章で提示したとおり、*Le Petit Prince* は99ページからなる作品であるが、そのうちFSの生起は100例以上あり、かなりの頻度で使用されている。それゆえ、この形態はこの物語を研究する場合でも非常に重要なものとなるとみなすことができるであろう。また、この物語に登場するFSのほとんどが会話表現内において使用されている点にも目を向けたい。これは、FSがこの作品では各登場人物の特性や主体の姿勢に密接にかかわるものであることを意味し、そのことが物語全体に何かしらの効果をもたらしているのではないかと仮説を立てることができる。

7.2.2. 物語小説の会話文でみられる単純未来形

文学テキストにおけるFSの生起は、一般的に登場人物間の会話内が主であろうと予想するとおり、コーパスである*Le Petit Prince* では119例のFSの生起中103例という9割弱(86.5%)が会話内で用いられているものである。

次の(1)では、まず会話文で見られる典型的な例を見てみよう。

- (1) — Bien sûr. Et si tu es gentil, je te **donnerai** aussi une corde pour l'attacher pendant le jour. Et un piquet. »

La proposition parut choquer le petit prince :

« L'attacher ? Quelle drôle d'idée !

- — Mais si tu ne l'attaches pas, il **ira** n'importe où, et il **se perdra**. »

(LPP 第4章 : 20)¹¹⁵

「もちろん、そうさ。それにきみがいい子なら、綱もあげよう。昼のあいだ羊をつないでおくためにさ。それから、^{ぼうくい}棒杭も」

この提案が、王子さまにひどくショックを^{あた}与えたようだった。

「羊をつないでおく？おかしな考えだね！」

¹¹⁵ 以降、コーパスである*Le Petit Prince* からの例文の場合には、LPPと表記することとする。

「でも、つないでおかないと、どこかまわず行っちゃまうよ。そして迷子になっちゃまう」
(LPP 和訳書第 4 章:27)¹¹⁶

引用符ギュメ (guillemets, « ») によっても明白であるが会話文内で用いられており、ここは主人公である《ぼく》が《王子さま》に話しかけている場面である。「いい子にしていたら綱を与える」と約束したり、「羊をつながないと勝手に行って迷子になってしまうかもしれない」と推量したりしている部分を FS を用いて表現している。このように話し手の主観的様相が何らかの形で未来の側面に反映されている FS を、第 1 章で提示したように、従来の研究ではモダール用法と分類している。

つづいて類例も確認してみよう。

(2) — Créer des liens ?

— Bien sûr, dit le renard. Tu n'es encore pour moi qu'un petit garçon tout semblable à cent mille petits garçons. Et je n'ai pas besoin de toi. Et tu n'as pas besoin de moi non plus. Je ne suis pour toi qu'un renard semblable à cent mille renards. Mais, si tu m'apprivoises, nous **aurons** besoin l'un de l'autre. Tu **seras** pour moi unique au monde. Je **serai** pour toi unique au monde...

(LPP 第 21 章 : 71-72)

「絆を創る？」

「そうさ」と狐は言った。「きみはまだぼくにとっては、十万人の少年しょうねんと変わらない一人の少年にすぎない。だから、ぼくはきみを必要としていない。それにきみだって、ぼくを必要としていない。ぼくはきみにとって、十万匹の狐とか変わらない一匹の狐にすぎない。しかし、きみがぼくを飼いならせば、ぼくたちはお互いに相手が**必要になる**。きみはぼくにとって、この世で唯一の存在に**なるだろう**。ぼくもきみにとって、この世で唯一の存在に**なるだろう**……」

(LPP 和訳書第 21 章 : 129)

¹¹⁶ 以降、本論文において LPP 和訳書とはサン＝テグジュペリ (著)・小島 (訳注) (2009) を用いることとする。

(2) も同様に、－（ダッシュ記号）や？（疑問符）という記号文字、コンテキストからこれは《ぼく》と狐の会話文内で FS が用いられていることが分かる。狐を飼いなしたら今後お互いに必要な存在、唯一の存在になるだろうという確信を FS で述べている。ここでも FS の使用によって話し手の未来への主観的判断が投影されていることが読み取れる。

次に、もう一つの用法である時間的用法の例も見てみよう。

- (3) Je crayonnai donc une muselière. Et j'eus le cœur serré en la lui donnant :
« Tu as des projets que j'ignore ... »
Mais il ne me répondit pas. Il me dit :
« Tu sais, ma chute sur la Terre... c'en sera demain l'anniversaire... »

(LPP 第 25 章:86)

そこで、ぼくは口輪を鉛筆で描いた。そして、それを彼にあげるとき、胸が締めつけられる思いがした。

「ぼくの知らない計画けいかくを持ってるんだろう……」

けれども、彼はそれには答えず、こう言った。

「ねえ、ぼくが地球おに降り立あすって……明日はその記念日きねんびなんだ……」

(LPP 和訳書第 25 章 : 157)

この例では *demain* という時間的様相を示す要素の提示に基づき時間的用法と捉えることができる。さらに、もう一つ同様の例を見てみる。

- (4) Le lendemain revint le petit prince.
« Il eût mieux valu revenir à la même heure, dit le renard. Si tu viens, par exemple, à quatre heures de l'après-midi, dès trois heures je commencerai d'être heureux. Plus l'heure avancera, plus je me sentirai heureux. À quatre heures, déjà, je m'agiterai et m'inquiéterai : [...] (LPP 第 21 章 : 73)

翌日よくじつ、王子さまがまたやって来た。

「昨日きのうと同じ時刻じこくに来た方がよかったのに」と狐が言った。「たとえば、きみが午後四時に来るとすると、ぼくは三時になるともう嬉うれしくなりはじめる。そ

して、時間がたつにつれて、^{こうふくかん}幸福感が^ま増してくる。四時には、もうそわそわして、気をもんでしまう。(…)」 (LPP 和訳書第 21 章 : 133)

この例でも、*dès trois heures* (三時になると) や *À quatre heures* (午後四時に), *l'heure avancera* (時間がたつにつれて) という時間表現の提示によって時間的用法と分類することができる。

このように時間的用法とモダール用法の二分割にすべての FS を分類したところ、表 7-1 のようになる。

表 7-1: 単純未来形の各用法の生起数

用法	時間的	モダール	曖昧	合計
生起数	12	93	14	119
%	10	78	12	100

Le Petit Prince を用法分けしていく過程で、時間的用法とモダール用法のどちらも言えない曖昧な場合があった¹¹⁷。つまり、2つの用法間には常に曖昧性があるものと考えられ、それはこの物語においてのみ起きる問題なのではなく一般的に起こり得る問題であると思われる。なぜなら、発話とは話し手が何らかの意図をもって発するメッセージであり、発話するという行為がある以上、そこには話し手の何かしらの主観的様相が含まれているのである。こうした視点に基づいて観察していくと、時間的用法の例として挙げた (3), (4) に対しても、物語の展開やテーマを考慮するならば、たとえば期待や希望などといった主観的な側面を伴って解釈することも可能となるだろう。物語の

¹¹⁷ 第 1 章 1.2 節で触れたように、研究者によって、時間的用法とモダール用法へのカテゴリーの提示・分類が異なることから、形式的に二分割することには一定の有効性があると考えられるが、本来二分法にすることは非常に困難であり、常に曖昧さがあると考えられる。本論文では第 1 章 1.2 節に従い用法分類しているが、「曖昧」と分類したのは非フランス語母語話者である筆者であることを明記しておく。文学テキストは前後の文脈の影響が少なからずあるため、明確な分類が難しいという側面がある。このことから、二分法ではなく、時間的側面とモダール側面の 2 軸から成り、中心に近いほど曖昧性が高く、遠ざかるほどどちらかの側面が大きいことを表す散布図形式が有効ではないかと考える。

連続性を考慮に入れず抜粋した例文の分析では、前後のコンテキストや発話状況がないため、モダリティを見いだすことは難しい場合がある。つまり、統辞的（文法的）レベルからは、単純未来形の基本的な視点として、これら2つの用法があることは正当化できる。しかしながら、文学テキスト分析は、常に物語や語りの展開の中で用いられるFSの分析であるため、第4章で提示したMaingueneau（1994）の主張である未来形の本質はモダール性にあることには妥当性があり、時間的用法の未来形にさえもモダール性が孕まれているという見方をすることも可能である。このようなモダール性を内包するFSは物語展開においても重要な効果を表している可能性がある。

第2章2.4.5.1.の出現傾向の図2-5で観察されたように、テキストの後半にFSの使用が多数見られる現象が確認できる。このようなFSの出現傾向と物語の展開は強く結び付いており、物語を劇的なものにする効果を与えているのではないかと考えられる。すなわち、*Le Petit Prince*では後半部分に物語の筋における山場（クライマックス）が設置されているが、この山場とモダリティを内包するFSとの関係は偶然的なものではなく、物語の書き手が意図的に用いたと推測されるのである。物語の山場とは登場人物の心的な側面が最も表れる部分であり、話し手の主観的様相を含有するFSが物語展開において選択されるのは自然なことではないだろうか。むしろ、これらの表現が使われていることが物語のクライマックスを引き立てていると言えるであろう。

*Le Petit Prince*におけるクライマックスの場面とは、自分の星へ帰る《王子さま》と《ぼく》とのお別れの場面であり、その場面での《王子さま》と《ぼく》の会話の例をいくつか挙げてみる。

- (5) — Que veux-tu dire?
— Quand tu **regarderas** le ciel, la nuit, puisque j'**habiterai** dans l'une d'elles, puisque je **rirai** dans l'une d'elles, alors ce **sera** pour toi comme si riaient toutes les étoiles. Tu **auras**, toi, des étoiles qui savent rire ! »
Et il rit encore.
« Et quand tu **seras consolé** (on se console toujours) tu **seras** content de m'avoir connu. Tu **seras** toujours mon ami. Tu **auras** envie de rire avec moi. Et tu **ouvriras** parfois ta fenêtre, comme ça, pour le plaisir... Et tes amis **seront** bien **étonnés** de te voir rire en regardant le ciel. Alors tu leur **diras** :

“Oui, les étoiles, ça me fait toujours rire !” Et ils te **croiront** fou. Je t'aurai joué un bien vilain tour... »

Et il rit encore.

« Ce **sera** comme si je t'avais donné, au lieu d'étoiles, des tas de petits grelots qui savent rire ... » (LPP 第 26 章 : 92)

「それ、どういう意味」

「ぼくは、^{むすう}無数の星のうちの一つに住むんだ。無数の星のうちの一つで笑うんだ。だから、きみが夜、空を見あげると、さながらあらゆる星が笑っているみたいだろう。きみは、笑うことのできる星を持つことになるんだ！」
そう言って、王子さまはまた笑った。

「悲しみがやがて^{やわ}和らぐとき（和らがないなんてことはないよ）、ぼくと知り合ってよかったと思うよ。きみはいつでもぼくの友だちなんだ。きみはぼくと一緒に笑いたくなるよ。そして、ときにはこんなふう^{きぼ}に気晴らしに窓を開けてよ……するときみの友人たちは、きみが空を眺めて笑うのを見て、とてもびっくりするだろう。そのときには、《そうなんだ、星を見るといつも笑いたくなるんだよ！》と言うのさ。すると、友人たちはきみがおかしくなったと思うだろう。ぼくはきみに、ひどい^{いたずら}悪戯をしたことになるだろうね……」

そう言って、彼はまた笑った。

「そうすると、ぼくは、星の代わり^かに、笑うことのできる小さな鈴^{おず}をたくさんあげたようなものだね……」 (LPP 和訳書第 26 章 : 167-169)

(6) Cette nuit-là je ne le vis pas se mettre en route. Il s'était évadé sans bruit. Quand je réussis à le rejoindre il marchait décidé, d'un pas rapide. Il me dit seulement :

« Ah ! tu es là ... »

Et il me prit par la main. Mais il se tourmenta encore :

« Tu as eu tort. Tu **auras** de la peine. J'**aurai** l'air d'être mort et ce ne **sera** pas vrai... » (LPP 第 26 章 : 93)

その夜、彼が出かけるのを、ぼくは見なかった。彼は、こっそり、^ぬ抜け出したのだ。彼に追いつくことができたとき、彼は^{はら}肝を決めて、^{あしはや}足早に歩いていた。

そして、ただこう言った。

「ああ！ついてきたの……」

王子さまはぼくの手を取った。けれども、また苦しんだ。

「きみは間違えたね。つらい思いをするよ。ぼくは死んだようになるけど、それは本当じゃないんだよ……」 (LPP 和訳書第 26 章:171)

これらのいずれの例も、《王子さま》が旅立った（死んだ）後にも希望や未来があることを《王子さま》が、FS を用いることで、《ぼく》に願ったり、希望したり、誓ったり、確信し、物語のフィナーレを構成する効果をあげているものである。

このように、主人公である《王子さま》や《ぼく》の強い思いが込められた約束のような語りかけは上述したクライマックス効果を生み出している。この効果は FS の使用によって提示されている。したがって、FS には使用場面やタイミングによって物語の展開に重要な効果をもたらす機能もあり、それは文体論的に見て重要な役割を担っていると考えられるものである。

また、第 4 章の歴史テキストや訃報の分析で確認された flash forward 機能が、文学テキストである本コーパスにおいても見られる。以下がその例である。

(7) Il se découragea un peu. Mais il fit encore un effort :

« Ce sera gentil, tu sais. Moi aussi, je regarderai les étoiles. Toutes les étoiles seront des puits avec une poulie rouillée. Toutes les étoiles me verseront à boire... »

Moi je me taisais.

« Ce sera tellement amusant ! Tu auras cinq cents millions de grelots, j'aurai cinq cents millions de fontaines... »

Et il se tut aussi, parce qu'il pleurait... (LPP 第 26 章 : 94-95)

彼はやや気落ちした。けれどもまた気をしっかり持とうとした。

「ね、すてきだろうな。ぼくも、星を眺める。すると、星という星が、さびついた滑車かつしやのある井戸になるだろう。星という星が、ぼくに飲み水を注いでくそそれるだろう……」

ぼくは、黙っていた。

「すごく面白いだろうな！きみが五億の鈴を持つことになり，ぼくが五億の泉を持つことになるなんて……」

そして，彼も口をつぐんだ．それというのは，泣いていたから……

(LPP 和訳書第 26 章：173)

元来映画などの虚構の話の中で取り入れられている flash back のように，flash forward も実際に起きた事行の先取りだけではなく，想像などの虚構の未来の先取りとしても機能するものであると考える．実際，FH による flash back も歴史叙述的時間軸という虚構的時間軸上で発生する現象である．

ここでは，前向きな気もちになるように様々な事行を想像することで一つの虚構的世界を構築し，その中のすべての事行を FS で表現している．後の未来という枠組みに起こればよいと願う事行がひとつのまとまりとして継起的に目の前に提示されることで，リアリティーがもたらされる．このすてきだろうな・面白いだろうなという願望と，モダリティーの側面を有し未来の事行を表す FS が flash forward としてうまく作用している例である．

つづいて次の例は (4) に追加したものであるが，ここでも flash forward 機能を確認できる．

(8) Le lendemain revint le petit prince.

« Il eût mieux valu revenir à la même heure, dit le renard. Si tu viens, par exemple, à quatre heures de l'après-midi, dès trois heures je **commencerai** d'être heureux. Plus l'heure **avancera**, plus je **me sentirai** heureux. À quatre heures, déjà, je **m'agiterai** et **m'inquiéterai** : je **découvrirai** le prix du bonheur ! Mais si tu viens n'importe quand, je ne **saurai** jamais à quelle heure m'habiller le cœur... Il faut des rites. (LPP 第 21 章：73-74)

翌日，王子さまがまたやって来た。

「昨日と同じ時刻に来た方がよかったのに」と狐が言った。「たとえば，きみが午後四時に来るとすると，ぼくは三時になるともう嬉しくなりはじめる．そして，時間がたつにつれて，幸福感が増してくる．四時には，もうそわそわして，気をもんでしまう．ぼくは幸福の代価に気づくことになるだろうな！けれ

ども、いつと決めずに君がやって来ると、何時に心の準備をしたらよいか、さっぱりわからないことになる。節目というものが必要なんだ」

(LPP 和訳書第 21 章 : 133)

(8) では時間副詞との共起と相まって、スピード感を伴いながら *par exemple* (たとえば) という一つの世界のまとまりが眼前に提示されている。歴史テキストにおける *flash forward* は現実時間軸上 t_0 からの回顧的視点から見れば実際に起きた事行のまとまりの先取りであったが、歴史叙述的時間軸上の基準時 t_0^1 からの視点のみではまだ達成されていない不安定な未来のことであった。したがって、虚構の物語を扱う文学テキストのジャンルにおいて *flash forward* が未実現の想像の世界の先取りとして機能することは自然なことであるだろう。(5) においても (7)・(8) と同様に、FS を連続して用いることで話し手の確信や願望といった主観的様相を、構築された一つの虚構の未来世界の中に取り込み、一気に相手に提示している。これにより、話し手と聞き手の間でこの虚構的未來世界がリアリティーを伴って共有されることになるのだと考えられる。

7.2.3. 物語小説の会話文以外でみられる単純未来形

Le Petit Prince において、会話外で用いられる FS は全 119 の FS の生起中 16 例しか見られなかった。またその 16 例は二人称 *vous* との共起か否かに関わらず、読み手へ向けての語りかけであると文脈から分かるものであった。次の (9) を見てみよう。

- (9) Ainsi si vous leur dites, « La preuve que le petit prince a existé c'est qu'il était ravissant, qu'il riait, et qu'il voulait un mouton. Quand on veut un mouton, c'est la preuve qu'on existe », elles **hausseront** les épaules et vous **traiteront** d'enfant ! Mais si vous leur dites : « La planète d'où il venait est l'astéroïde B 612 », alors elles **seront** convaincues, et elles vous **laisseront** tranquille avec leurs questions. Elles sont comme ça. [...]

(LPP 第 4 章 : 24)

かくして、もし彼らに「王子さまが存在していたという証拠、それは、王子さまがすてきだった、にこにこしていた、羊を欲しがったということだ。人が羊

を欲しがれば、その人が存在している証拠になる」などと言えば、彼らは肩かたをすくめ、きみたちを子供あつか扱いするだろう！しかしながら、「王子さまの出身である星は、B612 番という小惑星だった」と言えば、おとなたちは納得なっとくし、そっとしておいてくれるだろう。おとなたちって、そういうもの。

(LPP 和訳書第 4 章 : 31)

この例では、話し手が読み手へ向けて語っている場面であるが、会話文ではなく、さらに二人称 vous を伴った言表連鎖のため、vous は読み手であるわれわれ（子ども）を指すことが明らかである。ここでは、もし～したら、～するだろうという話し手の想像に沿った虚構的世界のなかでの未来を FS で表している。したがって、地の文ではあるが実際に起きた事行に関する叙述ではないため、FH は生起しない。

次の (10) は直接的表現である 2 人称は用いられていない例である。

- (10) [...] **J'essaierai**, bien sûr, de faire des portraits le plus ressemblants possible. Mais je ne suis pas tout à fait certain de réussir. Un dessin va, et l'autre ne ressemble plus. Je me trompe un peu aussi sur la taille. Ici le petit prince est trop grand. Là il est trop petit. J'hésite aussi sur la couleur de son costume. Alors je tâtonne comme ci et comme ça, tant bien que mal. Je **me tromperai** enfin sur certains détails plus importants. Mais ça, il **faudra** me le pardonner. Mon ami ne donnait jamais d'explications. [...]

(LPP 第 4 章 : 25)

もちろん、ぼくは肖像画しょうざうがをかぎりなく本物ほんものそっくりに描くようにつとめる。しかし、うまくいくかどうか、まったく自信じしんがあるわけではない。ある絵はうまく描けても、ほかのはもう似にても似つかないもの。背丈せたけについても、少し間違まちがっている。こちらの王子さまは大きすぎる。あちらでは彼は小さすぎる。彼の服の色についても、ためらいがある。そこでぼくは手さぐりで、どうにかこうにか描いている。結局けっぎょく、ぼくはもっと大切な細部さいぶを間違まちがえてしまいそうだ。でも、その点てんは許ゆるしてもらわないといけない。ぼくの友だちは、一度だって説明してくれなかった。

(LPP 和訳書第 4 章 : 33)

読み手に対して二人称 *vous* を用いるという直接的な表現はしていないが、コンテキストから、登場人物間の会話文でもなく、読み手に語りかけていることが読み取れる。特に *il faudra me le pardonner* という文から、話し手の独白のパラグラフではあるが、語りを向ける相手（ここでは読み手）がいることが明白である。この例においても、話し手自身がまだ経験していない未実現の未来を述べる際に *FS* を用いているため、語りの部分での生起であっても *FH* ではないことが分かるだろう。つまり、これまでの分析から本コーパスである *Le Petit Prince* には *FH* は用いられていないことが観察され、「歴史＝物語」ジャンルのテキストでも何らかの形で先取りされることはあるが、フィクションだけの物語小説では *FS* と *FH* の両立は不可能であると考えられる。ただし、このように断定するにはコーパスの数が不十分であるため、さらなる考察が求められる。

7.2.4. まとめ

以上の約 100 ページからなる物語小説をコーパスとした分析の結果から、以下のことが確認された。

文学ジャンルのなかでも代表的な物語小説である *Le Petit Prince* では、*FS* の生起の 9 割弱という大半が会話文内であった。これは、物語は通常一人称と二人称の登場人物同士の交流で進んでいくからであろう。このような形で会話文内に非常に多く用いられているため、話し手の主観的な側面を伴った *FS*、つまりモダール用法が多く、時の副詞との共起はあまり観察されない。さらに、*probablement* (きっと)・*peut-être* (おそらく)・*sans doute* (たぶん)、といった推定を表す副詞との共起もほとんどない。この推定を表す副詞との共起が少ない理由は、*FS* の使用自体にそもそも未来における事実現の曖昧さが暗示されるためであると思われる。

また、歴史テキストと共通するいくつかの特徴的な使い方も明らかになった。まず、物語の山場を引き立てるクライマックス効果が観察された点である。物語とは後半に位置する山場に向けて展開していくことが少なくないが、ここは登場人物の心的な側面が最も表れやすい部分であるためモダリティを含有する *FS* と相性が良く、後半に多く用いられる傾向がある。これにより物語を単調ではなく劇的なものにするという効果がある。歴史テキストでは、書き手が *t₀* からの未来への展望として *FH* を多く使用していた。次は、*flash forward* 機能である。これは、話し手が想像した一つの虚構の未来世

界を FS の連続使用により構築することで、聞き手にまとまりとして一気に提示でき、話し手と聞き手の間でその虚構的未来世界がリアリティーを伴って共有されることができる機能である。

歴史テキストとの相違点としてはまず、FH は実際に生じた歴史的事実を叙述することに用いられるため、完全に虚構＝想像世界である物語では全く生起しない点がある。コーパス *Le Petit Prince* における FS は、その事行がこのような未来になるという、基準時 t_0^1 との時間的断絶を伴った未来の先取りの側面を強調するというよりも、物語であるというテキストジャンルの特性により、話し手のモダリティの表現方法の一つとして主に使用されているという点が重要であると思われる。また、丸括弧 (*parenthèse*) など補足情報を挿入する記号文字との共起は地の文において短い独白を挿入した際に一度見られたのみであった。これもまた、登場人物同士の会話で展開される、物語というジャンルの特性によるものであろう。補足情報などを挿入する記号文字は、既知の未来の事行を先取りして表すことができる FH には適していたが、未実現の事行を表す FS とはあまり相容れないものである。

7.3. *Miss Marple au Club du Mardi* における単純未来形

本節では、短編小説集である *Miss Marple au Club du Mardi* 内で生起するすべての FS を観察し、このジャンルにおける FS 使用の特徴を明らかにすることを試みる。また、前節のコーパス同様フィクションの物語であるため FH の生起がないであろうことも確認する。以降は、以下の手順に沿ってコーパスを検討していく。まず 7.3.1 節では本コーパスを選択した理由を述べ、次に 7.3.2 節では「物語ジャンル全般にみられる単純未来形」として、構成・構造の異なる物語小説に関係なく見られる例を挙げ観察し、検討する。つづいて 7.3.3 節では「入れ子構造の小説でみられる単純未来形」を分析する。最後に、7.3.4 節で入れ子構造の短編物語小説において FS が用いられる際の特徴をまとめる。

7.3.1. *Miss Marple au Club du Mardi* をコーパスとした理由

まず、本作品は 30 ページ以下の一話完結型短編小説を 13 話で構成された短編集である。7.2 節では約 100 ページからなる物語小説における FS の特徴を明らかにしたが、同じ物語小説ジャンルでも短編・入れ子構造の小説ではどのような傾向が見られるのか、同異点を探ることも重要であると思われる。また、30 ページ以下の短編小説でも 13 話すべてにおいて FS の生起が少なからず確認されたことから、物語ジャンルにおける FS 使用の意義は存在すると考えられるであろう。しかしながら、この短編集では登場人物たちが口頭で何かの事件に関して物語するという形式を採用している。ミス・マーブルたち登場人物の会話を外側、彼らがそれぞれの事件を事件関係者の会話形式で語る話を内側とし、同じ会話という形状で大枠が小枠を囲っているため、マトリョーシカのような入れ子構造になっている。そのため、会話外の部分はほぼなく、また物語のはじめからおわりまでが、事件という時系列が重要な話とそれに沿った会話であるため、元来未来を示すマーカーである FS をどのように用いているのかという点にも注目したい。さらに、このコーパスの原典の言語は英語でありコーパス対象はフランス語訳であるため、異なる言語特徴を持つ英語で未来形を用いている箇所と FS の生起が常に一致しているとは限らず訳者が恣意的に FS を用いる形であるため、どのような場面に FS を使用するのか浮き彫りにしやすいと思われる。そのため、生起傾向にも注目したい。

7.3.2. 物語ジャンル全般にみられる単純未来形

本コーパスでは、数少ない 2 種類の会話の外であるナレーション部分では単純過去形が用いられており、FS の生起はまったく確認されなかった。したがって、まず会話でもナレーションでもないが、物語ジャンルにおいてよく見られる手紙の中の例文を見よう。

- (11) — Et puis il y a le papier, dit l'inspecteur Drewitt.
Il se tourna vers sir Henry.
— Un papier dans la poche de la fille, monsieur. Écrit avec une espèce de crayon pour artiste. Il était tout détrem pé, mais nous avons réussi à le lire

quand même.

— Et cela disait quoi ?

— Cela venait du jeune Sandford. « D'accord, écrivait-il, je te **retrouverai** sur le pont à 20 h 30. R.S. » Et ma foi, il était aussi près que possible de 20 h 30 - quelques minutes après - quand Jimmy Brown a entendu le cri et le plouf ! (MCM 第 13 話:266)¹¹⁸

「しかし、死んだ娘のポケットから手紙が出てきましたね」と警部がひきとった。サー・ヘンリーの方に向き直って、「図画鉛筆かなんかで走り書きしてありましたが、びしょぬれでした。なんとか判読はできたものの」と言った。

「それで文面は？」

「サンドフォード青年からの手紙です。〈承知した。八時半に橋のところで **会おう**。R・S〉とありました。ジミー・ブラウンが悲鳴や水音を聞きつけたのが、かれこれ八時半か—もう二、三分あとのことでしたからね」

(MCM 和訳書第 13 話 : 413)¹¹⁹

第 4 章の 4.2.1 節では、FH を示さない単純未来形として 3 つに分類した。(11) はその分類Ⅲに当てはまり、事件を詳細に語っている部分であるが、ギュメ (guillemets, « ») という記号文字で表された手紙の引用内で用いられている。à 20 h 30 (八時半に) という時間副詞を伴った FS の例であり、未来の事行の約束を表している。FS はこのように、発話内だけではなく手紙や宣言など引用箇所内にも用いられ、そこにも当然引用元である書き手や話し手の主観的様相が含まれている。また、会話部分でない語りの部分では、se tourna (向き直った) と先に述べたとおり単純過去形が用いられていることが分かるだろう。

つづいて、4.2.1 節の分類 I 「予告」に当てはまる例を挙げてみる。

¹¹⁸ 以降、コーパスである *Miss Marple au Club du Mardi* からの例文の場合には、MCM と表記することとする。

¹¹⁹ 以降、本論文において MCM 和訳書とはクリスティー (著)・中村 (訳) (2021) を用いることとする。

(12) — Je **reprendrai** mon récit là où je l'avais interrompu. J'étais aussi abasourdi et perplexe que vous. Je crois que je n'aurais jamais découvert la vérité – probablement pas –, mais on m'a éclairé. Cela avait été très intelligemment fait.

« Environ un mois plus tard, je dînais avec Philip Garrod. Dans le courant de la conversation, il fit allusion à un cas intéressant dont il venait d'avoir connaissance. (MCM 第5話:95)

では話のつづきを申し上げるとしましょう。私自身、まったく啞然として、狐につままれたような気持ちでした。自分の力では真相などとても一まあ、わからなかったでしょうがね。いわば、蒙をひらいてもらったんですよ。それもなかなか気のきいたやりかたでしたな。

それからひと月ばかりして、私はフィリップ・ガロッドに招かれていっしょに食事をしました。食事のあとでよもやまの話をしている時に、ガロッドがふっと、最近知るところとなったのだがと前置きして、あるおもしろい事件について話しはじめたのです。 (MCM 和訳書第5話:139-140)

(12) は、話し手が発話時 t_0 視点から過去形を用いて事件当時の気持ちを振り返ったり、その事件の詳細のつづきを語っている箇所からの抜粋である。ここでは話し手が発言のはじめに、中断していた話のところから再開すると述べ、この後に語ることは何に關してかを相手に前もって説明するという「予告」を FS を用いて行っている。

このように、歴史テキストにおいて FS はその後の展開を予告するという機能が観察されていたが、物語テキストにおいても同様に用いられることが確認された。

さらに、類例を見てみよう。

(13) « Comme je l'ai dit, cette affaire n'avait rien d'extraordinaire, en fait. Mon malaise tenait à l'addition de deux choses : cette Amy Durrant dont nous ne savions rien, et l'étrange histoire de la dame espagnole. Et j'en **ajouterai** une troisième : quand je m'étais penché la première fois sur le corps, Mlle Barton, qui se dirigeait vers les maisons, s'était retournée. Elle s'était retournée avec une expression d'angoisse poignante – je ne vois pas comment la

qualifier autrement —, une espèce d'incertitude douloureuse que je ne suis pas près d'oublier. (MCM 第8話:149)

というようなわけで—まったく何ということもなかったのです。ただ、二つのことが重なっているためになんとなく不安な気持ちがしたのですね。まずこのエイミ・デュラントという女性については、誰も何一つ知らないということ、それにあのスペイン女の奇妙な言いぐさです。そう、それからもう一つ、つけ加えておきましょう。私が最初に死体の上に身をかがめたときのこと、ミス・バートンはちょうど小屋のほうに歩きだしていたんですが、ふとふりかえった顔を私はちらと見たのです。なんというか、狂おしいばかりに気づかわしげな表情が浮かんでいたんですよ。一種悩ましげな不安そうな面持ちが、私の脳裡にまざまざときざみつけられたのでした。 (MCM 和訳書第8話:229)

ここでは発言のはじめに用いられているわけではないが、話し手の事件についての気づきを t_0 時点から主に半過去形で語っている叙述の中で、FS によって三つ目の気づきを付加すると述べている。その一文のすぐ後に、: (deux-points) という記号文字以降で詳細が語られていることから明らかなように、FS の使用とともにこの後語ることに對する手筈の役割を行っている。これは (12) と同様に予告用法である。しかしながら発言の途中で用いられていることから、段落や発言のはじめに限って用いられる機能ではないことが分かる。またここから、後の展開を物語る予告をするという先取り機能のほかに、語りの途中で用いて視点の位置を過去から t_0 へ一瞬戻すことで、FS の前後で全く違うことを話す区切りではなく、ワンクッション置くような柔らかい語りの区切りとしての役割も果たしていると考えられる。

最後に、4.2.1 節の分類Ⅱの例を見てみよう。

(14) « Nous lui répliquâmes que bien sûr nous serions ravies de l'aider, et il nous pria alors de venir dans sa chambre, de crainte que son épouse n'arrive entre-temps. Nous montâmes avec lui. Je n'oublierai jamais ce qui se passa ensuite... J'en ai encore des picotements dans les doigts.

« M. Sanders ouvrit la porte de sa chambre à coucher et tourna le commutateur. Je ne sais qui d'entre nous l'aperçut en premier...

« Mme Sanders gisait sur le plancher, face contre terre... morte.

(MCM 第 10 話 : 198-199)

わたしたちはもちろん、お役に立てばうれしい、よろこんで拝見しようと申しました。すると彼はちょっといっしょに二階に来ていただけないか、下に持ってきてお見せしているところへ家内がいつ帰ってこないともかぎらないからと申しました。そこでわたしたちはいっしょに二階にあがって行きましたの。つぎに起こった出来事をわたしはけっして忘れないでしょう—思い出すと、今でも小指の先までうずくようですわ。

サンダース氏は寝室のドアをあけて、スイッチをおしました。その光景を一番先に見たのは誰だったでしょうか—

ミセス・サンダースは床にうつぶせに倒れて死んでいたのです。

(MCM 和訳書第 10 話 : 308)

分類Ⅱの FS は、語られている過去の出来事に対する書き手や話し手の意見や考えなどの主観的判断を述べる際に用いられている。(14) では、事件の詳細を時系列に沿って淡々と単純過去形を用いて語っている。その途中で視点が話し手の t_0 時に移り、その語っている発話時において話し手が過去の事件に関して抱いた意見の挿入が、FS によって示されている。FS を用いた一文の事行は未来時に達成される事行であり、つづく一文の事行は t_0 時において発生している事行であるため、同じく話し手の意見の挿入であっても時制が区別されている。また、一人称や *ne...jamais* と共起することで話し手の FS で示された事行に対する未来における達成が強調されていると言えるだろう。

次の例文も同じく発話者の意見の挿入の例である。

- (15) « J'abordai donc le problème d'une façon que vous **jugerez** peut-être ridiculement méthodique. Qui était passé au cottage ce matin-là ? Je n'éliminai personne. En voici la liste.

Sir Henry sortit une enveloppe de sa poche et en tira un papier.

(MCM 第 9 話 : 173)

私はこの点にさぐりを入れてみました。あなたがたがごらんになったら、重箱のすみをつつくような細心さだとおかしくお思いになったでしょうな。その

朝、ローゼン家にやってきたのは誰々か？私は誰一人として除外しませんでした。ここにリストがありますがね」

サー・ヘンリーはポケットから封筒を取り出して、一枚の紙をぬき出した。

(MCM 和訳書第 9 話：266)

ここでも事件に関する単純過去形を用いた語りの途中に話し手の意見が挿入されている。(14)とは異なり基準時となる現在形は現れていないが、文脈より発話時 t_0 の存在が暗示されている。また、聞き手を指す二人称と *peut-être* という推量を表す副詞との共起により、発話時では聞き手はまだ知らないため *juger* (判断する) ことはできないが、もし知ったならそのときは... という仮定世界における未来の事行達成に対する話し手の意見を FS を用いて表している。

以上の 2 つの例より、同じ語りの途中の挿入でも、歴史テキストにおける FH の挿入と物語テキストにおける FS の挿入は性質がまったく異なることが了解された。

7.3.3. 入れ子構造の小説でみられる単純未来形

Miss Marple au Club du Mardi 内のそれぞれの短編は、登場人物同士の会話形式と、彼らがそれぞれの事件を事件関係者間の会話も再現して物語る形式という、二重の形式によって構成されている。それ以外である地のナレーション部分においては、FS の生起はまったく確認されなかった。事件に関する語りでは、約 3 割弱 (27.6%) 使用されているが、事件内の会話部分もあるとはいえ時系列に沿って物語ることが大半のため、基本的に未来形が生起しづらい形式ではある。次の (16) を見てみよう。

(16) « — Cela me paraît clair, dis-je. De toute évidence, il court une histoire sur toi. Tu dois la connaître aussi bien que n'importe qui. Et tu vas me la dire.

« — Mais c'est si atroce ! gémit Mabel.

« — Bien sûr que c'est atroce, fis-je avec brusquerie. Mais rien de ce que tu pourras me rapporter à propos de ce que les gens ont dans l'esprit ne peut m'étonner ni me surprendre. Alors, Mabel, me diras-tu enfin en langage clair

ce qu'on raconte sur toi ?

« Elle lâcha enfin le morceau. (MCM 第 6 話 : 101)

『そんなことはわかっていますよ。あなたのことでなにか妙な噂がとんでいるんでしょう？それがどんな噂か、それはあなたにははっきりわかっているにちがいませんよ。さあ、わたしに話しておしまい』

『そりゃあ、ひどい噂ですの』とメイベルはうめくように言いました。

『わかりきったことですよ』とわたしはテキパキと言ってやりました。『人間についてどんなひどいことをきかされたって、今さら驚きも呆れもしませんよ。さあ、メイベル、あなたのことでどんな噂がとんでいるか、単刀直入にわたしに話しておしまいなさい』

というわけで、やっと事情を聞きだすことができたのでした。

(MCM 和訳書第 6 話 : 151-152)

ここは、事件内におけるミス・マーブルと姪のメイベルの会話の場面である。まず、同じ動詞を用いた FP-PR と FS の使用が確認できるが、これらの比較分析は本論文の主旨からはずれるため、本コーパスである短編物語小説においても FP-PR の生起が見られることだけ触れておく。(16) で用いられている FS は、予想判断や命令など話し手ミス・マーブルの主観的側面が反映されており、モダリティを孕んだものである。それでは事件内の叙述はすべて話し手の主観的様相を含んだ FS であるのだろうか。確認するために、(17) を見てみる。

(17) « Cette fois, on identifia le poignard. C'était celui qui avait été exhumé du tumulus sur la colline et qui avait été acheté par Richard Haydon. Personne n'avait l'air de savoir où il s'était trouvé jusque-là, dans le sanctuaire ou dans la maison.

« La police était convaincue — et le sera toujours — qu'il avait été poignardé par Mlle Ashley, mais puisque nous étions tous d'accord pour témoigner qu'elle n'avait jamais été à moins d'un mètre de lui, elle ne pouvait pas étayer son accusation. Si bien que cette histoire a été et est toujours un mystère. (MCM 第 2 話 : 41-42)

調べてみると短剣は例の塚から掘り出されたもので、リチャード・ヘイドンが買い取ったものとわかりました。ヘイドンがどこにしまっておいたものか、屋敷うちか、森の祠の中か、誰一人として知っている者はいなかったようです。

警察は、ヘイドンがミス・アシュレーに刺し殺されたものだという意見を終始変わらず持ちつづけていました。しかしわれわれがミス・アシュレーは三メートル以上はヘイドンに近よらなかったと証言したので、彼女を告発するわけにもいかなかったのです。そんなわけで事件はそれっきり迷宮入りとなって、今日にいたったのです」 (MCM 和訳書第 2 話: 59-60)

ここでは、警察が昔も今も変わらずある意見を確認しているということを FS を用いて表している。これは事件内の語りではあるが会話内ではないため、話し手の主観的な側面が含まれていないと思われるかもしれないが、警察が変わらず確信し続けると発表しているわけではないため、話し手の予想が内包されていると考える方が自然であろう。このように、FS は会話内ではない語りの部分にも用いられるということが確認された。これは第 4 章で引用した Maingueneau (1994) による未来形の本質はモダール性にあるという主張を裏付ける一つの要素としても考えられるであろう。

つづいて、ダッシュ記号 (tired, —) との共起の例も見ていこう。

(18) — C'est arrivé à une amie à moi, poursuivit-elle prudemment.

Tout le monde lui murmura des encouragements légèrement hypocrites. Le colonel Banttry, Mme Banttry, sir Henry Clithering, le Dr Lloyd et la vieille miss Marple, tous étaient convaincus que la prétendue « amie » était Jane elle-même. Elle aurait été incapable de se rappeler quoi que ce soit concernant quelqu'un d'autre, ou même de s'y intéresser.

— Mon amie, reprit Jane, — je ne vous dirai pas son nom —, était une actrice, une actrice très connue. (MCM 第 12 話: 234)

「あたくしの友だちの身に起こった出来事ですよ、これは」とジェーンはうっかり口をすべらせないように用心しながらつづけた。

一同は励ますように、しかし、いささか偽善がましく、「なるほど」とか、「ほう」などとつぶやいた。バントリー大佐、ミセス・バントリー、サー・ヘンリ

ー・クリザリング、ドクター・ロイド、それにミス・マーブルと、なみいる人々はみな一様に、ジェーンの“友だち”というのは、ジェーン自身のことにちがいないと確信していたのだった。いったいジェーンは、自分以外の人間にはまるで興味を感じないたちだった。

「あたくしの友だちは（名前は伏せておきますけれど）女優でしたーとても有名な女優でしたの」
(MCM 和訳書第 12 話：365-366)

この例では、語りの流れの中でダッシュ記号 (tired, -) による挿入が行われている。この挿入の中で FS は一人称とともに用いられており、名前は伏せて語っていくという話し手の未来意志が含まれていると読み取れる。意志を伴った未来の事行の方向性の先取りではあるが、発話時 t_0 から未来へ向かってまだ達成されていない曖昧さを含んだ言表である。したがって歴史テキストの場合とは異なり t_0 時から過去を振り返ることによる事実の先取り挿入ではないため、使用する記号と先取りという機能は同じでも、テキストによって性質は異なることが明らかとなった。また、このように丸括弧 (parenthèse) やダッシュ記号 (tired, -) という記号文字による補足情報の挿入は、本コーパスでは 1 例しか見られなかったことを強調しておきたい。これは、7.2.4 節の長編物語小説のまとめにおいても述べたとおり、使用することは不可能ではないが、同時に、発話時 t_0 からの時系列に沿った語りや会話では挿入する必要性があまりないため、また物語というテキストジャンルの特性上、叙述の途中で先の未来において確定している事実の先取りをする機会が少ないために共起しづらいのではと考えられる。

さらに、本コーパスには段落や節がないため、発言の終わりに用いられる FS の例を挙げてみる。

- (19) — Et c'est tout ? demanda Joyce, au bout d'un instant de silence.
— On en était là l'année dernière. Mais maintenant, Scotland Yard tient la solution. Vous aurez sans doute l'occasion de la lire d'ici deux ou trois jours dans les journaux.
— La solution, répéta pensivement Joyce. Je me demande... Donnons-nous cinq minutes de réflexion avant de parler. (MCM 第 1 話 : 21)
「お話はそれだけですか？」とジョイスがたずねた。

「昨年まではそれだけでしたね. しかし, 最近になって真相がスコットランド・ヤードの知るところとなりましてね. 二, 三日のうちには, たぶんみなさんも新聞でごらんになるでしょうが」

「真相ねえ」とジョイスが考えこんだように言った. 「さあ, どういうことなんでしょうね. ねえ, めいめい五分間考えて, それから順に意見を言いましょよ」
(MCM 和訳書第 1 話: 28-29)

ここは, 登場人物の一人であるサー・ヘンリーによる事件に関する語りが終わったあとの会話である. l'année dernière (昨年), maintenant (最近になって) と時の副詞がつづき, 発言の最後に d'ici deux ou trois jours (二, 三日のうちには) を伴ってこの事件の展開の最終的な結末を FS で述べることにより, 事件の未来の展望とともに話の区切り・まとめを示す働きをしている.

類例を次の (20) で見てみよう.

(20) — Et que s'est-il passé en réalité?

— Qui pourrait le dire ? fit sir Henry en haussant les épaules. L'a-t-on poussé par-derrière ? A-t-on tendu en travers des marches une ficelle que l'on a soigneusement ôtée par la suite ? Nous ne le saurons jamais.

— Mais vous pensez que c'était... eh bien, que ce n'était pas un accident ? Pourquoi ça ? demanda le Dr Lloyd. (MCM 第 9 話: 168)

「でも真相はどういうことなんですか？」

「誰にわかりますか, そんなことが？」サー・ヘンリーは肩をそびやかした.

「うしろから一突きしたもののか, 木綿糸か, ひもを階段のてっぺんに渡しておき, あとから抜けめなく取り去ったのか？それは永久に謎でしょうな」

「しかし, きみはそれが—なんというか, つまり, ただの事故だというふうには考えていないらしいね？それはどうしてだ？」とドクターがきいた.

(MCM 和訳書第 9 話: 259)

ここでは, 事件の語りのあとに登場人物たちによる推理が会話形式で行われている. 事件の真相は今後どうなるのかに関する意見をサー・ヘンリーが FS で述べ, 話の区切

りとしていることが読み取れる。また、われわれは決して知ることはないだろうという永久に謎である曖昧さと、分岐的時間や現在時との連続性からの断絶という性質を含む FS 自体がもつ潜在的な未来事行達成に対する曖昧さが相まって相乗効果をもたらしていると思われる。

これら 2 つの例が代表するように、発言の最後に FS が生起することは少なからず確認され、これは歴史テキストでよく見られる章や節の最後に用いられる FH と同じく、展開の終着点やまとめの役割を果たしているものと考えられるであろう。

最後に、短編の一番最後に使用されている例文を観察しておこう。

(21) — Pourquoi dites-vous le « soi-disant jardinier », tante Jane ? demanda Raymond, intrigué.

— Eh bien, ce ne pouvait pas être un vrai jardinier, non? répondit miss Marple. Les jardiniers ne travaillent pas le lundi de Pentecôte. Tout le monde sait ça.

Avec un sourire, elle replia son tricot.

— En vérité, c'est ce petit détail qui m'a mis sur la bonne voie, dit-elle en regardant son neveu. Quand tu seras propriétaire et que tu auras ton propre jardin, tu n'ignoreras plus ces petites choses-là. (MCM 第 3 話 : 64)

「名乗っていた、なんて、どうしておっしゃるんですか、ジェーン伯母さん？」とレイモンドがげげんそうに言った。

「だってほんものの庭師のはずはありませんもの。聖霊降臨祭後の第一月曜には、庭師は庭仕事を休むものですからね。誰だってそんなことぐらい、知っていますわ」

ミス・マーブルはほほえみながら編みものをたたんだ。

「わたしが正しい手がかりを見つけたというのね、そもそもそのちょっとしたことがきっかけだったんですよ」とじっとレイモンドを見ながら言った。

「あなたにしてもね、ちゃんと所帯を構えて自分の庭を持つようになったら、こうしたことがわかるようになるんでしょうけれどね」

(MCM 和訳書第 3 話 : 92-93)

このように、短編の最後が FS で終わる話が 13 話中 3 例確認されたが、これは決して少なくない数であると思われる。すべて登場人物間の会話内で用いられており、話し手の主観的判断が込められた一文で FS の生起とともに話を終えている。つまり、未来への投企を暗示しつつモダリティを内包する FS は発言や章・節のみならず、小説の最後とも親和性が高いのであろう。(21) では、甥のレイモンドの潜在的な未来の可能性を見つめ、その一つが選択されたらわかるでしょうという話し手ミス・マーブルの願望や皮肉などの主観の様相が込められていることが読み取れる。

さらに、この例文では最後に si 節と現在形ではなく、quand と 3 つの FS が続いており、単なる仮定ではなくひとつの潜在的な未来世界のひとつを構築して分かりやすく、そしてリアリティを伴って対話相手や読み手に提示しているとも受け取れるかもしれない。

確認のため、もう 1 例挙げておこう。

(22) Comme si, dans le silence qui suivit, elle avait entendu des reproches informulés, elle reprit vivement la parole.

— Vous pensez que j'ai trahi une confiance, mais ce n'est pas le cas. J'ai changé tous les noms. En fait, il ne s'appelait pas sir Ambroise Bercy. Vous n'avez pas remarqué le regard ahuri d'Arthur quand j'ai prononcé ce nom ? Il n'a rien compris d'abord. J'avais tout modifié. Comme on dit dans les revues et au début de certains livres : « Les personnages de cette histoire sont purement imaginaires... » Vous ne saurez jamais qui ils étaient en réalité. (MCM 第 11 話:233)

一瞬の沈黙があった。人々の無言の批判を感じたのだろう、ミセス・バントリーは急いで言った。

「打ち明け話をこんなふうになさにご披露してとお思いでしょうけれどねーでも、そうじゃありませんのよ。名前をすっかり変えてしまいましたもの。ほんとうはアンブローズ・バーシーなんて名前じゃありませんのよ。はじめにそう申し上げたとき、アーサーがぼかんと間のぬけた顔をしたのに気がおつきになりませんか？ ちょっととまどったんですわーすっかり変名にしてみましたの、よく雑誌や本のまえがきに、"この物語の登場人物はまっ

たぐの虚構の人物である、と書いてあるようにね.ほんとのところ,誰が誰か,みなさんにはとてもおわかりにならないでしょうよ」

(MCM 和訳書第 11 話 : 360-361)

ここでも小説の最後に用いられているが, FS の一文には話し手の未来への展望の中に皮肉や確信といった主観の様相が込められていることが文脈からも分かるであろう.

7.3.4. まとめ

以上の約 30 ページからなる短編物語小説をコーパスとした分析から, 以下のことが確認された.

本コーパス *Miss Marple au Club du Mardi* では, FS の生起が会話外のナレーションにあたる部分ではひとつも確認できなかった. これには, 7.3.1 節で述べたとおり, この短編集では登場人物たちの事件語りと各自が推理をし合う会話という二重の入れ子形式を採用していることも無関係ではないだろう. そのため会話外の部分はほとんどなく, そのわずかなナレーションの部分では 7.3 節のすべての例文をみても分かるとおおり, すべて単純過去形を用いている. 時系列に沿って出来事が明らかになっていく会話形式の物語の途中でナレーション部分に元来未来を示すマーカである FS を用いること自体, 成立しづらいのであろう.

コーパス *Le Petit Prince* との共通点としては, まず上記のとおり地のナレーション部分では, FS の生起はほとんど見られない点が挙げられる. 次に, 4.3.2 節では, 本コーパスに用いられている単純未来形は FS として 3 つに分類できるとし, つまり短編物語小説においても FH は生起しないことを確認した. また, 話し手の主観的判断を伴った生起が多く, 時の副詞, 推定を表す副詞, 記号文字との共起もほとんど見られない. 物語という性質上基本的に時系列に沿って話が進行するため, 純粹に時間的未来を表す FS は用いられにくい形式ではある. その FS もナレーション部分ではなく会話や発言の中の語りを使用されるため, 最終的には話し手の主観の様相が内包されていると言え, 物語テキストにおいても Maingueneau (1994) による未来形の本質はモダール性にあるという主張は肯定できるのではないかと思われる.

歴史テキストとの共通点としては, 後の展開を予告・予言するという先取り機能が見

受けられた。また、歴史テキストにおいて FH が章や節の最後にしばしば用いられる展開の終着点やまとめの役割を果たしているように、短編物語小説においては発言や小説の最後に未来への投企を暗示しつつモダリティを内包する FS として、同様の役割を持って多く用いられていることが観察された。

歴史テキストとの相違点としては、以下の 4 点が挙げられる。まず、歴史テキストは書き手の主観的側面を排除した t_0 時から過去の既知の事実を振り返ることによる先取りの挿入であるのに対して、短編物語小説では途中で FS の一文が挿入される際、語られている過去の出来事に対する話し手や聞き手の意見や考えなどの主観的様相を述べる言表、また発話時 t_0 から未来へ向かってまだ達成されていない曖昧さを含んだ言表の挿入であった。これは、丸括弧 (parenthèse) や ダッシュ記号 (tiret, -) という記号文字による補足情報の挿入でも同様である。したがって、FH の挿入と FS の挿入は性質がまったく異なることが了解された。さらに、FH と上記の記号文字の共起による補足情報の挿入は、歴史テキストでは親和性が高かったのに対して、物語小説 *Le Petit Prince*・*Miss Marple au Club du Mardi* ともにほぼ確認されなかった。これは、物語というジャンルの特性上、発話時 t_0 からの時系列に沿った語りや会話ではわざわざ記号文字と共に意見を挿入する必要性はなく、また歴史テキストのように流れから離脱し後の展開の先取りをすることは聞き手や読み手の興味を削ることにつながるためであろう。

また、歴史テキストでも物語小説 *Le Petit Prince* でも見られた flash forward 機能は確認されなかった。さらに、物語の山場に多く生起するクライマックス効果も第 2 章 2.4.5.2. の図 2-6 から分かるように現れていない。これは、短編物語小説は淡々と物語が進む形式であり、物語にアクセントをつけたり劇的な山場を設置するのは難しいということなのかもしれない。少なくともコーパスである *Miss Marple au Club du Mardi* では、これまで使用したコーパスにおけるような FS の生起に特別な傾向は見られず、物語の本筋に関わるような使用はされておらず、物語全体に対しては何らかの効果をもたらす機能は発揮されなかった。

結論として、本論文で扱った物語小説では、未来への投企を暗示しつつそれにとともなう登場人物の主観的様相を表現するためにモダリティを内包する FS が使用される、ということが主な使い方であることが了解された。

7.4. *Terre des hommes* における単純未来形

本節では、自伝的小説ジャンルに分類される *Terre des hommes* より抜粋した単純未来形を用いているすべての叙述を観察し、このジャンルにおける FS の出現特徴を観察していく。さらに、書き手自身の過去の事実を振り返るといふこのジャンルの性質により生起する FH についても注目していく。これまでの節と同様、以下の手順によってコーパスを検討する。7.4.1 節では本コーパスを選んだ理由を述べ、つづいて 7.4.2 節では「自伝的小説でみられる単純未来形」を提示し、特に生起箇所や人称、共起しやすい要素という点に着目しながら分析を行う。さらに 7.4.3 節では、文学テキストにおける生起が稀である FH の事例を提示し、「自伝的小説でみられる歴史的未來」を観察し、検討する。7.4.4 節ではそれまでの節で明らかになったこのジャンルにおける FS と FH の特徴をまとめる。

7.4.1. *Terre des hommes* をコーパスとした理由

まず、この作品は書き手の体験や知識を基にした自伝的小説あり、空想の物語形式である文学作品とは異なる。さらに、物語は時系列順に進んでいくわけではなく、また各章の内容も一貫しておらず、話は章ごとに完結している形となっている。全 215 ページから成り、200 例以上の FS が用いられているが、自伝的小説というジャンルの特徴上、登場人物間の会話もあるが比較的書き手が体験したことの叙述が多いため、FS は会話表現内よりも一人称での語りに多く見られる点に注目した。また、第三者がある過去の事実を振り返り記述する歴史テキストとは類似している点もあるが、完全な事実だけではなく物語的空想の記述部分もあるため、本論文のメインコーパスである歴史テキストとの比較、そして完全な物語のテキストとの比較は興味深い結果をもたらすのではないかと考える。さらに、7.2 節のコーパスと同じ著者であるサン＝テグジュペリの作品だが、それゆえにフィクション物語と自伝的小説という各テキストジャンルにおける単純未来形の生起の特性が明らかになりやすいのではと考えたため、同一著者の作品を選出した。

7.4.2. 自伝的小説でみられる単純未来形

文学テキストにおける FS というと、登場人物間の会話内に生起することが多いと想像するだろう。しかし *Terre des hommes* では全 192 の FS のうち、会話内は 23 例しか確認されなかった。したがって、このコーパスでは FS のほとんどが語りの叙述における生起であることが明らかとなり、これは、一般的な予想と反する結果である。

次の (23) では、まず会話内で用いられる例を見てみよう。

(23) Vint enfin le soir où je fus appelé à mon tour dans le bureau du directeur.

Il me dit simplement :

— Vous partirez demain ?

Je restais là, debout, attendant qu'il me congédiât. Mais, après un silence,

il ajouta :

— Vous connaissez bien les consignes ? (TDH 第 1 章:13)¹²⁰

やがて、ぼくも自分の順番に支配人室へ呼び出される夕^{ゆうべ}が来た。支配人はただ簡単にぼくに言った、

— きみには明日^{あす}、行ってもらおう」

ぼくは、そこに立ったまま待っていた、支配人の餞^{はなむけ}の言葉を待ちながら。それなのに、彼は、しばらく沈黙したあとで、簡単に言うのだった、

— 服務規程はよくわかっているでしょうね？」

(TDH 和訳書第 1 章 : 11-12)¹²¹

この例では単純過去形が基調となった語りの途中に会話文が挿入され、その中で FS が用いられている。単純過去形が基調となっていることは、このコーパスが単なる書き手自身の日記のような回顧集ではなく、小説という形をとった作品としていることを示すマーカーの一つと考えられるだろう。また、*demain* (明日) は発話時 t_0 を基準時と

¹²⁰ 以降、コーパスである *Terre des hommes* からの例文の場合には、TDH と表記することとする。

¹²¹ 以降、本論文において LPC 和訳書とはサン＝テグジュペリ (著)・堀口 (訳) (2011) を用いることとする。

する時を表す副詞であり、同じく t_0 を基準時とする FS と共起しやすい。このように時を表す副詞や表現は、会話文・叙述関係なく FS や FH と共起しやすいという事実とそのメカニズムはこれまでの章で確認してきたが、文学テキストにおいても当てはまることである。

以降は叙述の中で生起する FS の例を観察していく。次の (24) でも時を表す表現と共起している。

- (24) Il est maintenant onze heures du soir. Lucas revient du poste radio, et m'annonce, pour minuit, l'avion de Dakar. Tout va bien à bord. Dans mon avion, à minuit dix, on aura transbordé le courrier, et je **décollerai** pour le Nord. [...] (TDH 第 6 章:83)

いま、夜の十一時だ、ルカスが無線局から戻ってきて、ダカールからの郵便機が、夜中の十二時に着くとぼくに報告する。機上では万事が順調だそうだ。零時十分にはぼくの乗機に郵便物は積みかえられているはずだ。そしてぼくは、北へ向って離陸するはずだ。(TDH 和訳書第 6 章:114-115)

現在形を基調として、いま夜の十一時、夜中の十二時などの時間表現とともに動きが叙述されており、一連の事行の最終地点として零時十分に離陸することを FS を用いて表現している例である。同じく過去の事実を記述しているが第三者が執筆しているため三人称を用いる歴史テキストとの違いの一つである、書き手自身である登場人物としての je という一人称での語りがこの例の FS の文で確認できる。会話ではない叙述内において je や nous といった一人称を用いた FS は、本コーパス内の約 4.5 割 (44.6%) を占めている。そのような例は *Miss Marple au club du mardi* においては皆無である。したがって比較対象がないため断言はできないが、これは自伝的小説の特徴の一つとして挙げられるのではないかと考える。

つづいて、同じく一人称を用いており、パラグラフが FS から始まる例を見てみよう。

- (25) Je ne **me plaindrai** pas. Depuis trois jours, j'ai marché, j'ai eu soif, j'ai suivi des pistes dans le sable, j'ai fait de la rosée mon espérance. J'ai cherché à joindre mon espèce, dont j'avais oublié où elle logeait sur la terre. Et ce sont

là des soucis de vivants. Je ne puis pas ne pas les juger plus importants que le choix, le soir, d'un music-hall. (TDH 第7章 : 150)

ぼくに、訴える気持はない。三日以来、ぼくは歩いた、ぼくは渴いた、ぼくは砂の上の足跡を追った、ぼくは夜露を自分の希望とした。ぼくは地球のどこに住んでいるものやら忘れてしまった。自分の同類の所へ戻ろうとさがした。すべてこれこそ、生けるもののもつべき関心だ。ぼくには、どうしても、これを、今夜行くミュージック・ホールの選択以上に重要だと、思わないわけにはゆかない。(TDH 和訳書第7章:213-214)

(25) は、パラグラフを FS を用いた一文ではじめ、それまで行った事行を複合過去形・大過去形・半過去形で叙述している。したがってここでは基準時 t_0^1 は非明示だが、四日目の日を基準時として立脚した FS であり、歴史叙述的時間上での叙述である。また、文脈より後半の現在形での叙述は現実時間軸上 t_0 時点の書き手の意見であることが分かる。(25) ではこのようにパラグラフ内で時間軸の移動が行われているが、これは時間軸の移動による視点の変化を明白に表している好例である。

パラグラフのおわりに生起する FH には bilan の機能が確認されたが、パラグラフのはじめに後の展開の先取り機能を含有する FS を用いることにも、同様の役割を期待していると考えられる。そしてその先取りの bilan の FS をあえてはじめに使用することは、書き手のその一文への強調の意を暗示しているのではないだろうか。つづく例 (26) でも確認してみよう。

(26) Je ne sortirai plus de cette glu, sauf pour quelques secondes. Après trois heures trente de vol elle commence à m'inquiéter, car je me rapproche du Nil si j'avance comme je l'imagine. Je pourrai peut-être l'apercevoir, avec un peu de chance, à travers les couloirs, mais ils ne sont guère nombreux. Je n'ose pas descendre encore : si, par hasard, je suis moins rapide que je ne le crois, je survole encore des terres élevées. (TDH 第7章 : 118)

ぼくはもうこのとりもち 籠の中からは、出られないらしい、ほんの数秒間以上は。三時間半の飛行のあとで、この籠がぼくの気になりだす。なぜかというに、自分が思うとおりのスピードが出ているものなら、ナイル河が近づいているはずだ

から。もしかすると、運さえよければ、雲のあいだの回廊から、河が見えるかもしれないだ。ただ、回廊は、稀^{まれ}にしかない、ぼくはこれ以上、あえて降りえない。自分で思っているほどスピードが出ていないとしたら、まだ高い山のある土地の上空を飛んでいるはずだから。 (TDH 和訳書第 7 章:166)

このパラグラフは、Je (ぼく) に問題が発生しそこからの脱出が困難であるという状況を一貫して描写していることから、パラグラフはじめの FS の一文が、書き手が強調したい事行であるということが分かるだろう。また、ふたつめの FS は副詞 *peut-être* (もしかすると) と共起しているが、このともにモダリティや不確実性を暗示する副詞と FS の共起もコーパス内において少なからず見られたことを指摘しておく。

次に、FS が連続して生起する例である (27) を観察していこう。

(27) Un jour, pourtant, on le délivrera. Quand il sera trop vieux pour valoir ou sa nourriture ou ses vêtements, on lui accordera une liberté démesurée. Pendant trois jours, il se proposera en vain de tente en tente, chaque jour plus faible, et vers la fin du troisième jour, toujours sagement, il se couchera sur le sable. [...] (TDH 第 6 章:98)

だが、やがてある日、彼は解放されるはずだ。あまりにも年若い、食わしておいたり、着せておいたりする値打ちがなくなると、彼は法外な自由を与えらるる。三日のあいだ、彼はテントからテントへと、働き口を求めてむなしく回り歩く。日ごとに肉体は衰える、そして三日目の終りには、相変らずのおとなしきで、彼は砂上に横になる。 (TDH 和訳書第 6 章:137-138)

これは奴隷についての話であり、この続きは死にゆく奴隷に関するモール人¹²² の思想を半過去形で叙述している。第 4 章で分析したとおり、このように FS が連続で生起することによって、flash back の反対の flash forward と呼び得る、読み手の眼前にスピード感を伴った一つの仮想世界を作り出すことができる。ここでは時間副詞 *Un jour* (やがてある日) を伴った FS の連続を通して、奴隷の生活の最後はどのようになるの

¹²² TDH 和訳書第 2 章 (p.39) を参照のこと。(ムーア人。モーリタニア・イスラム共和国の約 70%を占める。)

かについて、まるでその部分の未来だけを切り取って提示しているような効果が観察できる。さらに、同様の例をもうひとつ見てみることにしよう。

- (28) Ces hommes se décaperont tout à l'heure de leur sueur, de leur alcool, de l'encrassement de leur attente dans les eaux régales de la nuit de guerre. Je les sens si près d'être purifiés. Mais ils dansent encore aussi loin qu'ils le peuvent danser le ballet de l'ivrogne et de la bouteille. Ils la poursuivent aussi loin qu'on peut la poursuivre, cette partie d'échecs. Ils font durer la vie tant qu'ils peuvent. Mais ils ont réglé un réveille-matin qui trône sur une étagère. Cette sonnerie retentira donc. Alors ces hommes se dresseront, s'étireront et boucleront leur ceinturon. Le capitaine alors décrochera son revolver. L'ivrogne alors dessoulera. Alors tous ils emprunteront, sans trop se hâter, ce corridor qui monte en pente douce jusqu'à un rectangle bleu de lune. Ils diront quelque chose de simple comme : « Sacrée attaque... » ou : « Il fait froid ! » Puis ils plongeront. (TDH 第 8 章 : 162-163)

この兵隊たちは、やがてのちほど、彼らの汗を、彼らのアルコールを、彼らの待ち遠しさの垢^{あか}を、戦いの夜の王水の中で、洗い落とすのだ。ぼくは感じる、彼らが、浄化のいかにも間近にあることを。それなのに、彼らはまだ踊っている、踊れるかぎりいつまでも、酔漢と酒瓶の舞踊を。彼らは続けている、続けられるかぎりいつまでも、このチェスの勝負を。彼らは、声明を、及ぶかぎり永く持続させようとしているのだ。だが、彼らは、^{たな}棚の上に目ざまし時計を一つ仕掛けておいた。だからこのベルが、やがて鳴りだすはずだった。そのとき、この兵隊たちは、立ち上がるはずだった。背伸びをするはずだった。ベルトを締めなおすはずだった、大尉は、そのとき、^{けんじゅう}拳銃を取りはずすはずだった。酔漢は、そのとき、正気に戻るはずだった。そのとき、彼らはいずれも、あわてずに利用するはずだった、月光が青く見せる長方形の戸口の一つへと、ゆるい傾斜を描いて登っている廊下を。彼らはもらすだろう、〈突撃でござる〉だの、〈寒うござるて！〉なぞという、簡単な言葉を。ついで彼らは飛びこんでゆくはずだった。(TDH 和訳書第 8 章 : 232-233)

ここではパラグラフのはじめとおわりに FS が用いられている。パラグラフのはじめで Ces hommes (=兵隊たち) がまもなく死ぬ運命にあることをまず提示している。後半の FS の連続の直前の「目ざまし時計をセットした」ことを合図として、それが鳴ってから死にゆくために突撃するまでの一連の未来の事行のまとまりを、FS の連続生起を用いることで flash forward としてダイナミックな描写を投与することを可能としている。そしてパラグラフの最後を FS で終えることによって、死にゆく兵隊たちの小さな物語の bilan の機能を果たしている。

さらに、FP との共起の例も挙げておこう。

- (29) [...] C'est à peine si m'atteint son faible soupir. Je suis la borne extrême que lèche la vague. À vingt mètres derrière moi, aucune toile n'eût remué. Sa brûlure m'a enveloppé une fois, une seule, d'une caresse qui semblait morte. Mais je sais bien, pendant les secondes qui suivent, que le Sahara reprend son souffle et va pousser son second soupir. Et qu'avant trois minutes la manche à air de notre hangar va s'é mouvoir. Et qu'avant dix minutes le sable remplira le ciel. Tout à l'heure nous décollerons dans ce feu, ce retour de flammes du désert. (TDH 第 6 章 : 84)

そのかすかな息吹きは、まだわずかにぼくに触れるだけだ。ぼくは波が触れるその最後の限界だ。ぼくから二十メートル後方では、天幕一つ揺るがなかったはずだ。焼ける痛みが、ただ一度だけ死人のような愛撫で僕を包んだ。ただぼくは、よく知っていた、そのつぎの何秒かのあいだに、サハラは息を吸い込んで、第二の息吹きを吐き出すはずだと。そして三分とたたないうちに、ぼくらの格納庫の通風筒は感動しだすはずだった。そして十分とたたないうちに、砂が天を満たすはずだった。やがてしばらくしたら、ぼくらは、この火の中、砂漠が吐き出す炎の中で、離陸するはずだった。(TDH 和訳書第 6 章 : 116-117)

(29) は飛行する直前に嵐が到来する話であるが、パラグラフのおわりで FP-PR と FS が連続して用いられている。ともに時間副詞を伴い、「そのつぎの何秒かのあいだに」息吹きを吐き出し、「三分とたたないうちに」感動しだす。「十分とたたないうちに」砂が天を満たし、「しばらくしたら」離陸する、というように同じ時間の流れに従って叙

述している。しかしながら、先の2つはFP-PRで後の2つはFSが用いられているのはなぜか。それは、直前の文の「ぼくは、よく知っていた」が関係していると思われる。第5章でメカニズムの差異を提示したとおり、FPは基準時から連続しているため事行の発生までにすでに何らかの兆しがある場合に用いられるが、「ぼくはよく知っていた」とおり、過去の経験や知識からすでに知っている兆しを感じていたためFPの2つの事行はこうなると予想がついていたのである。それに対して、FSの事行である「砂が天を満たす」のには、書き手がそのとき位置している基準時ではまだ兆しが見えず基準時から断絶した予想であり、それにとまなう離陸も同様であったためである。ここではパラグラフがFSの事行で終わり、一連の継起的な事行の終着点に、離陸するかしないかの曖昧性の余地を残している。

7.4.3. 自伝的小説でみられる歴史的未來

文学テキストにおいてはFHは生起しないだろうという予想に反し、FSとFHの合計213例中21例というわずかではあるが、FHの使用が確認された。

まず、次の(30)を見てみよう。

- (30) Il faut quinze jours de recherches pour retrouver dans le désert un avion dont on ne sait rien, à trois mille kilomètres près : or l'on nous cherche probablement de la Tripolitaine à la Perse. Cependant, aujourd'hui encore, je me réserve cette maigre chance, puisqu'il n'en est point d'autre. Et, changeant de tactique, je décide de m'en aller seul en exploration. Prévot préparera un feu et l'allumera en cas de visite, mais nous ne **serons** pas visités. (TDH 第7章:132)

砂漠の中で、行方不明の飛行機を見いだすには、三千キロ前後と見て、十五日間の捜索が必要だ。ところが人々は、たぶんぼくらをトリポリからペルシアへかけての広漠な範囲に捜索しているはずだ。こうと知りながらも、この日ぼくはまだ、このきわめてたよりないチャンスを、あてにしていた。というのも、これ以外全然チャンスがないからだった。今度は方針を変えて、ぼくは一人で探検に出かけることにきめた。プレヴォーは焚火の準備をしておいて、飛行機

が見えたら点火するはずだった。もっとも、飛行機は来はしなかったが。)

(TDH 和訳書第 7 章 : 186)

物語小説では語りの現在形を基調としたものがよく見られるが、時の進行に沿って叙述されている。この場合、歴史テキストでは歴史叙述的時間軸と名付けた時間軸は、物語や小説のジャンルにおいては疑似的に物語的時間軸と呼べるだろう。この 2 つは現実時間とは異なるという点、また虚構的基準時 t_0^1 を設定するという点では同じであるが、実際に起きた歴史的事実を述べているのか、物語としての虚構の出来事を述べているのかという性質の違いがある。物語において語りの現在形が基調として用いられるのは、語り手の現実の現在時 t_0 から振り返っているわけではなく、虚構の話でひとつの世界を構築し、歴史叙述的時間軸の t_0^1 のように基準時を用いて、虚構の話の中の事行を基準時 t_0^1 としているからである。つまり、物語小説では基本的にははじめからおわりまでずっと物語的時間軸上で話が進行していくのである。これは、歴史テキストが現実時間軸と歴史叙述的時間軸の 2 つの時間軸から構成されていることと異なっている。たとえば、7.2 節のコーパスである *Le Petit Prince* や 7.3 節のコーパス *Miss Marple au Club du Mardi* は実際に起きた事行が全く存在しない物語的時間軸一つにより構成されている。したがって、実際に起きた出来事を継起的に叙述することを前提とする歴史叙述的時間軸における FH の生起も、現実時間 t_0 を基準時と設定し事行に関する知識の保有を前提とした回顧的視点からの FH の挿入もなく、ただ t_0^1 を基準時として時間の流れに逆らわず虚構の物語が展開されていく形式となっていた。これら複雑な時間軸を以下のとおりに仮定し図示する¹²³。

¹²³ 図 7-1 で提示されている……軸は、可能世界における時間軸を表している。ここではたとえば、実際の歴史的出来事を基としたフィクション物語との融合小説である歴史小説は、物語時間軸と歴史叙述的時間軸とが合わさり歴史物語時間軸となることなどが考えられる。可能世界や分岐的時間に関しては第 3 章を参照のこと。

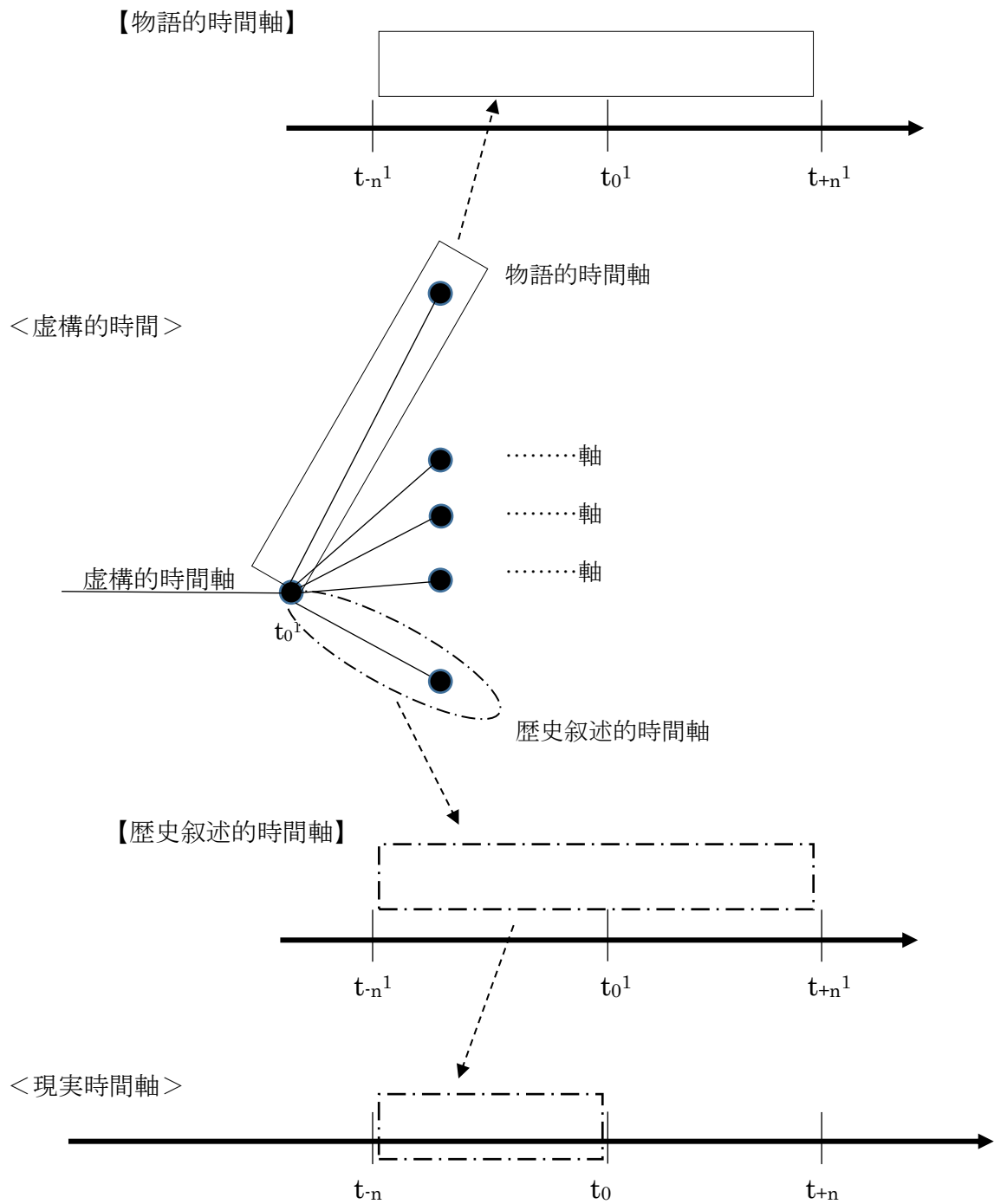


図 7-1：複雑な時間構成

本論文ではこれまで分析対象を歴史叙述にフォーカスしているため、歴史叙述的時間軸と現実時間軸の理論を提示し、現実時間軸の現在時 (=基準時) t_0 と、歴史叙述的時間軸の虚構的な基準時 t_0^1 として表してきた。しかし、本来虚構的な基準時である t_0^1 は

歴史叙述的時間軸上だけに設置されるものではない。

われわれが存在する現実時間軸がある。また、虚構的時間軸というものがあると設定する。この虚構的時間軸は t_0^1 を基準時として設置し、さまざまな現実ではない時間軸に分岐する。そして分岐先それぞれの時間軸の性質は異なる。たとえば、歴史叙述的時間軸は、第3章3.4節の理論をもとにした図3-5を簡略化したものが、上記図7-1の一部である。3.4節で考察したように、歴史叙述的時間軸は現実時間の過去 t_n の一部でありつながっているため、実際に起きた出来事を叙述する時間軸であり、現実時間 t_0 を基準時とした回顧的視点からの挿入も可能となっている。一方本章が提示した物語的時間軸は現実とは完全に分離し、 t_0^1 を基準時としたすべて虚構の出来事の叙述を扱う時間軸である。そのため、FHの生起は不可能となる。同じく t_0^1 を基準時として語りの現在形を用いる歴史叙述的時間軸と物語的時間軸は類似した時間軸ではあるが、FHは *futur historique* という名のとおり歴史的未來を表す未來表現であり、FHの使用には発話時 t_0 における既知の事実の知識の保有が不可欠であるためである。

ここで、例(30)を再び見てみる。一つの小さなパラグラフからの引用であるが、おわりの一文中にFSとFHが用いられている。つまりFHの生起が確認できる。したがって、本節のコーパスである *Terre des hommes* は、これまでの文学テキストコーパスのように図7-1に当てはまらないことが明らかである。これは、文学テキストのなかでも自伝的小説特有の仕組みがあり、それによりFHの生起が可能となっているのである。自伝的小説とは、書き手は登場人物でもあり、書き手が実際に体験した出来事を基とし、時に脚色した出来事も叙述する形式である。したがって、歴史叙述的でもあり物語的でもあるという二面性を持っており、そのため、例外的ではあるが基本的に歴史叙述的時間軸と現実時間軸によって構成されていると考えられる。物語的時間軸としなかった理由としては、読み手にとってはどの部分がフィクションであるのかが曖昧であり、確実なことは書き手が登場人物でもあることと実際の出来事が含まれているからである。したがって、自伝的小説に分類される *Terre des hommes* では、歴史テキストのように書き手（ここでは第三者ではなく本人）の現実時間軸からの回顧的視点が挿入されていることがある。これは文学テキストのなかでもこのジャンル固有の特徴の一つであろう。

(30) のはじめに生起しているFSは、歴史叙述的時間軸上で、ぼくは探検に行くことを決め、プレヴォーはこれから焚火を準備して点火する予定であるという役割分担を語りの現在形を用いた基準時 t_0^1 の視点から叙述している。しかし最後は、「もっとも、

飛行機は来なかったが」という書き手の現在時 t_0 に有する既知の事実を伴った回顧的視点を FH を用いて挿入している。この例文から、歴史テキストと比較すると、文学テキストにおける FH は一人称とも共起するという相違点、またパラグラフの最後の一連の流れの区切りのように用いられているという共通点があることが確認できる。

つづいて、前未来形と共起し、また FH が連続して用いられる例を見てみる。

- (31) On ne nous cherche toujours pas, ou, plus exactement, on nous cherche sans doute ailleurs. Probablement en Arabie. Nous n'entendrons d'ailleurs aucun avion avant demain, quand nous aurons déjà abandonné le nôtre. Cet unique passage, si lointain, nous laissera alors indifférents. Points noirs mêlés à mille points noirs dans le désert, nous ne pourrons prétendre être aperçus. Rien n'est exact des réflexions que l'on m'attribuera sur ce supplice. Je ne subirai aucun supplice. Les sauveteurs me paraîtront circuler dans un autre univers. (TDH 第7章:131-132)

人々は相変わらずぼくらをさがしてくれない。否、より正確に言うなら、人々はぼくらをよそにさがしているのだろう。たぶんアラビア内地をさがしているのだろう。実際ぼくらは、この翌日、ぼくらが自分たちの機を見捨ててしまったあとまで、飛行機の爆音は一度も聞かずにしまった。いかにも遠いあの一過は、ぼくらにはまるで無関心だった。砂漠さばくの中の、何千という黒点に混った、一黒点でしかないぼくらが、認められようとがんばっても無理だった。後日このもどかしさについて、いろいろぼくが、体験したように言いふらされたあれらの気持は、どれ一つとして正確でない。ぼくはもどかしさなどまるで感じなかった。ただぼくには救援者たちが、別の世界を駆けまわっていると思えただけだった。) (TDH 和訳書第7章:185-186)

この例でも、はじめの遭難している状況を歴史叙述的時間軸上の基準時 t_0^1 視点から語っているが、その後パラグラフのおわりまで現実時間軸上 t_0 からの回顧的な視点とともに FH を用いて叙述している。この例では、(29) の FS の連続生起と同様に、複数の FH が連続して用いられている。書き手は現在時 t_0 からの回顧的視点とともに、遭難してからのなかでも特に自分たちの飛行機を見捨てる前日に関する事行や感情など

の要約をひとつのまとまりとしてすべて FH を用いることで表現し、歴史叙述的時間軸上 t_0^1 に基準点を置きながら時間の進行に沿って物語を追っている読み手に対して先の未来のまとまりを先取りして提示しており、(29) や歴史テキストでの分析で見られたものと同じく **flash forward** として機能している。ここでは、これまでの虚構の物語として捉えられる登場人物としての **je** や **nous** による物語展開から不意に連続的に登場人物＝書き手としての一人称を用いた現実の事実やその事実に対する主観的様相が挿入されることによって、読み手にはこのテキストが自伝的小説であることを強く暗示し、また書き手にとっては自分の強調したい部分を表現する一つの手段として用いられているのではないかと考える。さらに、この例でもパラグラフの最後を FH で終えることによって、この遭難時の間でも特にこのときに対する話の **bilan** や区切りの機能を果たしていると思われる。

最後に、FH と直示語との共起の例を観察してみよう。

- (32) Eh ! bien sûr, j'ai déjà découvert cette évidence. Rien n'est intolérable. J'**apprendrai** demain, et après-demain, que rien décidément n'est intolérable. Je ne crois qu'à demi au supplice. Je me suis déjà fait cette réflexion. J'ai cru un jour me noyer, emprisonné dans une cabine, et je n'ai pas beaucoup souffert, j'ai cru parfois me casser la figure et cela ne m'a point paru un événement considérable. Ici non plus je ne **connaîtrai** guère l'angoisse. Demain j'**apprendrai** là-dessus des choses plus étranges encore. Et Dieu sait si, malgré mon grand feu, j'ai renoncé à me faire entendre des hommes !... (TDH 第 7 章:129)

そうだ！それは確かだ、ぼくはすでにもう、この明らかな事実を知っていた、耐えがたいものなんか一つもありはしないと。ぼくは**知るはずだった**、明日、そうして**あきつて**、いよいよ、耐えがたいものなんか一つもありはしないと、いよいよ、はっきりと拷問の苦痛に対してもぼくは半信半疑だ。ぼくは、このことは、すでに日ごろから考えていた。ぼくは、一度操縦室に閉じこめられたまま**でまし**溺死しかけたことがあった、そのとき、ぼくはあまり苦しまなかった。ぼくは、何度か自分の頭が割れたかと思ったが、だがそれは、大事件のようには思えなかった。今度ここでの場合も、ぼくは結局、**はんもん**煩悶せずに**すんだ**。このこと

で、明日、ぼくはもっと不思議な事実を教えられるはずだ。あんなに大きな焚火はしたものの、ぼくはじつは人間たちにわからせようとするのは、このときすでにあきらめていた！……) (TDH 和訳書第7章:182-183)

ここでは、歴史叙述的時間軸上の t_0^1 を基準時とした語りであることが明らかである。複合過去形が多く使用され、*demain* (明日) などの時間の直示語が用いられている。しかし文脈を観察すると、FH が用いられている文は既に知っている時点、つまり現実時間軸上 t_0 からの回顧だということが読み取れる。そしてこの FH は直示語と共起しており、つまり一文の中で2つの時間軸の混合が発生していると言わざるをえない。これはコーパスとして用いた歴史テキストでは見られなかった、文学テキストにおける FH が有する固有の特徴の1つと言えるのではないだろうか。直示語と物語テキストとの共起に関する研究では、Vuillanme (1990)¹²⁴ が挙げられるが、「歴史＝物語」のテキストに直示語が用いられることはまれにあることであり、これが時間軸の性質に影響を及ぼすわけではない。たとえば、現在形が語りの現在として使用されることが可能であることと同様に、直示語もまた、現実時間軸でも歴史叙述的時間軸でも用いることは可能なのである。

しかしこの例文は、自由直接話法とも関係してくると思われる。これまで述べてきたように、自伝的小説では書き手にとっての t_0^1 が登場人物にとっての t_0 であり、実際には両者とも同じ人物であるため、時には読み手にとってはどちらの視点からの叙述なのか曖昧である場合も存在する。(32) に2回生起する *j'apprendrai*, *demain* は、内的独白として登場人物自身の基準時 t_0 時 (歴史叙述的時間軸の t_0^1) からの視点により

¹²⁴ « Aujourd'hui + passé simple

On prononça le nom de Michel, par hasard, les beaux yeux de la baronne [Schwartz] brillèrent.

Par hasard aussi, c'était vraisemblable, car Mme la baronne n'avait jamais pu prendre au sérieux la haute fortune de notre héros. Elle laissait faire et c'était tout.

Pourtant, M. Schwartz ferma *aujourd'hui* la porte de son cabinet, sous prétexte de gros calculs. » (Féval, P., *Les Habits Noirs* : 186, Vuillaume, 1990 : 32 より引用)

(「今日＋単純過去形」)

ミシュルの名が発せられ、思いもよらず、シュワルツ男爵夫人の美しい瞳が輝いた。

偶然というのもまた、それはもっともらしく思えた。というのも男爵夫人はまさか私たちの英雄である子どもが莫大な財産が転がり込んでくることを、真に受けたことなどなかったからだ。彼女は息子にやりたいようにさせていた。ただそれだけだったのだ。

しかしながら、シュワルツ氏は「今日」(＝まさにその日) 自分の書斎の扉を閉めて、膨大な計算を始めたのだった。)

未来時制や *demain* という直示語が選ばれている自由直接話法¹²⁵とも受け取れるが、また、書き手が自身にとっての基準時 t_0 時（現実時間軸）から回顧的視点とともに FH を用いて語っているとも受け取れる。つまり、二重に解釈できるのである。この特性また、歴史テキストにおいても物語小説においても観察されることのないものである。

7.4.4. まとめ

以上の自伝的小説をコーパスとした分析をまとめた結果、以下のことが確認された。

文学ジャンルのなかでも自伝的小説に分類されるテキストにおける FS は、歴史テキストの FH と同様の効果である、パラグラフのはじめに用いられることによる展開の先取り機能、パラグラフのおわりに用いられることによる *bilan* や一連の話の区切り機能、*flash forward* 効果などを有することが明らかとなった。また、共起しやすい要素としても同じく時の副詞がしばしば観察された。

歴史テキストとの相違点としては、丸括弧やダッシュ記号との共起が全く見られなかったことが挙げられる。歴史テキストでは事実の提示を重視し、これらの記号文字は歴史的事行を第三者が知識と共に回顧的に振り返ることで、後の情報を先取りして展開の流れの途中で FH と共に挿入する役割をしていたが、自伝的小説は虚構の部分もあるかもしれないが物語であるため展開の流れを重視し、先に未来を知ると物語の展開を追う楽しさを消してしまうことになる、また同時に書き手が自身の過去の実体験を語る形式でもあるため、丸括弧などの記号文字とともに追加情報を途中で加える必要がないからであろう。

歴史テキストと *Le Petit Prince* と共通する特徴としては、小説の後半に FS が多く生起するというクライマックス効果が見られたことが挙げられる。

一方、*Terre des hommes* のような自伝的小説固有の特徴としては、FH の使用が見

¹²⁵ 田原いずみ（2018）を参照のこと。また、Rosier（1999）は以下の例を挙げている。
« Elle vida sa boîte dans la poubelle, sous la voûte enténébrée, et un chat lui fila dans les pieds. Au dehors, le ciel avait encore une certaine pâleur. Où est Guillaume ? Qu'est-ce qu'il fait, Guillaume? ce soir... sous ce ciel-là... » (Aragon, *Les Communistes* : Rosier, 1999 : 285 より引用) (彼女が暗い天蓋の下にあるゴミ箱の中の箱を空にすると、一匹の猫が足元に走り寄ってきた。外では、空はまだかなり暗かった。ギョームはどこ？彼は何をしているの？夜...こんな空の下で...)

られる点である。そもそも文学テキストは一人称の叙述が多いが、物語テキストとは異なり自伝的小説では当然登場人物＝書き手としての一人称が確認できる。そして、生起する FH の全 21 例中 20 例というほとんどが一人称との共起であることが観察された。これは、書き手自身が体験した出来事やそれを脚色した物語であるという自伝的小説の特性によるものであると言える。したがって、本コーパスにおける FH はすべて現実時間軸 t_0 からの回顧的視点による挿入としてのみ用いられている。Bakhtine (1984) が言うように¹²⁶ discours (「話」) ジャンル、つまりテキストジャンルは元来、無限の細分化が可能であるが、概略的に言うなら、本章で検討している文学テキストのうち *Terre des hommes* のみで FH の生起が可能になっているのは、この自伝的小説の特性に起因すると思われる。現実にかきた出来事を述べるという意味で、歴史叙述と相通じる面もある一方で、小説という形をとっていることから、虚構の物語とも一定の特徴を共有している、中間的な形態であると考えられる。

先に述べたとおり、自伝的小説の大きな特徴として、「je (私)」が語り手としての側面と、登場人物のひとりとしての側面をあわせもっていることを挙げるができる。そのことは、Lejeune (1975:31) のいう「自伝契約」(pacte autobiographique) の要件のひとつであり、たとえば、Jean-Jacques Rousseau の *Les Confessions* の序の例が挙げられており、そこでは次のように述べられている。

(33) « Je veux montrer à mes semblables un homme dans toute la vérité de la nature ; et cet homme ce sera moi. »

(J.-J. Rousseau, *Les Confessions*, Livre I, Première Partie, 1975 : 3,

強調は本論筆者による)

私は、自分の同類たちに、一人の人間をあるがままの真実の姿で示したいと思う。そしてその人間とは、私のことである。

¹²⁶ « La richesse et la variété des genres du discours sont infinies car la variété virtuelle de l'activité humaine est inépuisable et chaque sphère de cette activité comporte un répertoire des genres du discours qui va se différenciant et s'amplifiant à mesure que se développe et se complexifie la sphère donnée. » (Bakhtine, 1984 : 265) (discours (「話」) のジャンルの豊かさや多様性は無限である。なぜなら、人間の活動の潜在的な多様性には際限がなく、活動範囲ごとに「話」のジャンルのレパートリーがあり、この「話」は、与えられた範囲・領域が発展し複雑になるにつれてますます分化し増大していくのである。)

語り手にとっての t_0^1 が登場人物にとっての t_0 であることは物語・歴史に共通しているが、自伝的小説においては、これらの二者が現実としては同じ人物によって担われているため、どちらの視点から見ているのかが不分明になりがちである。本節 7.4.3 で見ている FH のとる視点は前者であり、7.4.2 節で見た FS の例は後者の視点をとっている。

つまり、図式的に言えば、次のような違いが認められる。

語り手にとっての t_0^1 に実際に登場人物を立たせ、そこを t_0 として単純未来形で発話させることができるか。

- － (23) ～ (29) ではそれが可能である。
- － (30) の最後の生起や、(31), (32) では不可能である。

本論文の論点に引きつけて言うと、「FH が生起しやすい」ということは、「叙述内容の現段階 (t_0^1) に基準点を置くことが容易である」ということにもなる。歴史テキストも自伝的小説も、現実の出来事を描写していると了解される文の連鎖から成り立っているため、 t_0^1 に基準点を置き、あたかも実際の出来事の進行のただ中に身をおいているかのように語るができるという点において共通しているのではないだろうか。

7.5. 物語における先取り (anticipation)

本節では、第 3 章 3.3 節で取り上げた *histoire* (「歴史＝物語」) / *discours* (「話」) に関する Benveniste (1966) と Maingueneau (1994) の仮説を再度取り上げ、文学テキストにおける *prospectif* に焦点を当てて物語における先取りについて検討する。以下は第 3 章 3.3 節の図 3-1 を再掲したものである。

discours	histoire (récit)
passé composé imparfait	plus-que-parfait imparfait
présent	passé simple
futur simple futur périphrastique	conditionnel prospectif (= allait / devait + infinitif)

(Benveniste (1966 : 238-245) と Maingueneau (1994 : 76) を参考に本論筆者が改変)

図 7-2 (=図 3-1) : discours と histoire の主要な時制の区分

Benveniste は、discours とは「話し手と聞き手とを想定し、しかも前者においてなんらかの仕方で後者に影響を与えようとする意図のあるあらゆる言表行為」¹²⁷ であり、動詞時制は単純過去形を除くあらゆる時制が使用されるものだとし、histoire (Weinrich による récit) という語りの方法は「物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示するもの」¹²⁸ であるため、使用される動詞時制は限定されており、未来を表す時制として使用される動詞時制は予見時称と呼び、allait / devait +infinitif であると定義づけている。これまでの先行研究でも、FS は「話」レベルに属するものだという点で一致しており、「歴史＝物語」レベルに用いられた場合、それは奇異であり特殊な技巧であるとしていた。この件に関しての本論文の立場を第 3 章で提示し、以降の章では「歴史＝物語」レベルのなかでも歴史テキスト・訃報記事の観察により、FS の一用法とされる FH の生起が可能である仕組みと FH の特徴を確認してきた。

それでは「歴史＝物語」レベルにおける、FH ではない FS の生起は特殊であるのだろうか。その問いに対する答えを明らかにするために、本章では「歴史＝物語」のなかでも FH の生起が少ないと予想される文学テキストにおいて、FS の生起を分析した。結論としては、文学テキストにおいても FS や FP-PR など予見時称以外の動詞時制も多く確認され、さらに言うところ、本論文の様々なコーパス分析の結果では、予見時称以外の未来時制の生起の方が多く見られた。これまでの先行研究では、discours / histoire,

¹²⁷ 第 3 章の註 39 を参照のこと。

¹²⁸ 第 3 章の註 40 を参照のこと。

つまり「話」でなければ「歴史＝物語」である（逆も然り）とし、「歴史＝物語」の下位分類である様々なテキストジャンル，またそれぞれの特性というものを考慮せず、「歴史＝物語」という枠組みひとつにまとめてしまい，それゆえの概略的な特徴を「歴史＝物語」の代表として挙げていたように思われる．しかしながら当然，テキストジャンルごとに異なる特性を有することは不思議ではなく，用いられる動詞時制の特徴もまた異なるものであると考えられる．本章のテキストジャンルである文学テキストをコーパス分析した結果では，未来表現として主に用いられていたものはFHでも *allait + infinitif* でも *devait + infinitif* でもなくFSであった．この事実はどのような説明が可能だろうか．第3章3.3節からの再掲であるが，Maingueneau (1994) は以下のとおり述べている．

Les **futurs**, futur simple et futur périphrastique (*tu partiras / tu vas partir*), relèvent uniquement du *discours* : de fait, ils sont le résultat de visées de l'énonciateur vers l'avenir à partir de son présent. (Maingueneau, 1994 : 76)

単純未来形と迂言的未来形という2つの未来形は *discours* のみに属する：実際，それらは発話者の現在から未来に対する照準の結果である．

ここで重要なのは，後半の「発話者の現在から未来に対する照準の結果である」という点である．たとえば物語小説では，前節7.4.3節で提示したとおり現実時間軸とはつながりのない t_0^1 を基準時とした物語的時間軸上で話が展開されている．そこでは登場人物が発話者であり，基準時の虚構的現在から未来への投企をFSで表している．会話文内でも会話文外でもFSは常に話し手と聞き手または読み手を想定した言表において用いられており，それはつまり「歴史＝物語」レベルの中に「話」レベルがあり，その「話」の中での生起であることを示していると考えられる．「話」レベルも一つにまとめられるのではなく下位分類が存在すると考えられ，その一つが，物語テキスト内における会話である．第3章3.2節のBenveniste (1974) の言語的時間の定義のとおり，発話することにより基準点，またそこから見た過去と未来が初めて設置されることから，「話」におけるFSの生起は自然であり，それは「歴史＝物語」内においても同様に適

用されるものであろう。このように、「歴史＝物語」と「話」は異なるものではあるが対立するものではなく、「歴史＝物語」内で「話」レベルが現れることが可能であり、たとえば会話の中に小説の引用が入る場合と同じように、物語の中に会話が入ることもまた自然なことである。その意味で、FSは「歴史＝物語」に生起しないという点には異を唱えるが、「話」に属するという点には同意する¹²⁹。

本章のもう一つのコーパスである自伝的小説においては、物語時間軸ではなく歴史叙時的時間軸が用いられ、また会話外の語りの部分でのFSの生起も少なくないが、FHではなくFSの叙述は同様に、本来基準時から未来への投企を表すものであるため、 t_0^1 時に登場人物としての書き手を立たせ、その目線から物語が展開するこのテキストジャンルにおいても予見時称 *allait / devait + infinitif* とはあまり相容れない。

従来の研究では、*histoire (récit)* レベルでは「...することになる」のような前望的未來の先取りはほぼなく、未來を表現する場合には一般的に「...することになっていた」のような予見時称 *allait / devait + infinitif* を用いるとされていた。しかし本章の文学テキストコーパスの分析から、以下の点が了解された。まず、「歴史＝物語」レベルと「話」レベルは下位分類を有することによりどちらか一方のレベルに縛られることはなく、「歴史＝物語」内で「話」が現れることが可能であると考えられる。また、 t_{-n}^1 方向へ視点を向けた回顧的叙述であれば予見時称は理にかなっているが、物語のような虚構的現在 t_0^1 を基準時とした前望的言表連鎖では、未來を表現する際に過去形の形態素を用いる予見時称はあまり相容れないものである。したがって、 t_0^1 から未来 t_{+n}^1 への投企を先取りするものとしてFSが用いられることは、実は珍しくないということが明らかになった。さらに、登場人物である話し手が未來を述べる際には主観的な側面が含まれているものであるため、モダリティを暗示するFSの使用はこの観点からも適しているだろう。

以上より、文学テキストにおけるFSは、奇異で特殊な技巧というよりも自然な使用なのである。

¹²⁹ ここで本論筆者が指すFSはFHではないものであり、一般的に先行研究が指すFHを含むFSとは異なる点を強調しておく。

7.6. まとめ

本章では、複数の異なる形式の文学テキストをコーパスとして用いて、文学テキストにおける FS の生起に関しての特徴を分析した。文学テキストの分析に関しては、本論文では FH が生起する歴史テキスト・訃報と同じ「歴史＝物語」レベル内だが異なるジャンルの比較分析の第一歩として概略的に観察することを目的としていた。そのため、文学テキストの中でもテキスト性質がそれぞれ異なるものを使用した結果、各テキストジャンルの数が固有の特徴を提示するには不十分であった。したがって、確認された特徴はあくまで本論文で見られたものであり、参考として留めざるを得ない。それぞれの分析結果は各節のまとめで詳細に述べたため、本節では、文学テキストの FS と歴史テキストの FH における機能的な共通点・相違点をまとめて列挙する。

まず、共通点から挙げていこう。

自伝的小説と歴史テキストとの共通点として大きな点は、FH の使用が観察されたことである。また、時の副詞との共起が少なからず見られた。

次に、約 100 ページある物語小説・自伝的小説・歴史テキストとの共通点として、クライマックス効果と flash forward 機能が確認された。

さらに、入れ子構造小説・自伝的小説・歴史テキストとの共通点では、後の展開を物語る予告をするという先取り機能がある。ただ、パラグラフのはじめに用いられることは短編物語小説にはなかった。そして、パラグラフのおわりに用いられることによる未来への投企を暗示しながらの展開の結末・bilan・一連の話の区切り機能も見受けられた。短編物語小説においては発言や小説の最後にしばしば使用されていた。

つづいて、相違点を挙げていこう。

入れ子構造小説と歴史テキストとの相違点として、FH と FS の挿入の性質の違いが挙げられる。歴史テキストは書き手の主観的判断を排除した言表、 t_0 時から過去の既知の事実を振り返ることによる先取りの挿入である一方、入れ子構造小説では過去の知らない出来事に対する話し手や聞き手の意見や考えなどの主観的様相を述べる言表、また発話時 t_0 から未来へ向かってまだ達成されていない曖昧さを含んだ言表の挿入であった。

次に、物語・入れ子構造小説（物語）と歴史テキストとの相違点であるが、大きな違いは FH が生起しない点である。また、物語小説では話し手のモダリティの表現方法の

一つとして主に使用され、時の副詞、推定を表す副詞、補足情報を挿入する記号文字との共起もほとんど見られない。これら二点は、物語というテキストジャンルの特性に起因するものであると考えられる。歴史テキストや自伝的小説はある大きな出来事の概略のため、時の副詞による時の提示が必要なときがある。しかし物語小説では、時系列に沿った詳細な話の流れ・展開が重要視され、流れから離脱し後の展開の先取りをすることは聞き手や読み手の楽しみを消すことにつながるからである。

最後に、歴史叙述と小説の中間的な形態であると考えられる自伝的小説と歴史テキストとの相違点だが、まず、自伝的小説では丸括弧 (parenthèse) やダッシュ記号 (tiret, —) との共起が全く見られなかった。これは、歴史テキストのように事実の先取りも可能ではあるが、結局物語でもあるため展開の流れを重視し、長編・短編物語小説と同様に先に未来を知ると物語としての楽しさがなくなってしまうからであろう。また同時に、書き手が自身の過去の実体験を語る形式でもあるため、丸括弧などの記号文字とともに追加情報を途中で加える必要がないからでもある。

以上までの議論により、3つの異なるタイプの文学テキストをコーパスとして分析したことで、文学テキストはより体系的に観察していく必要があるという課題が残った。しかし異なるタイプのコーパスの分析を通して文学テキストのFSの特徴を浮き彫りにすることができた。そのことにより歴史テキスト・訃報記事におけるFHとの詳細な比較分析が可能となり、これらのテキストのFHの機能的・文体的特徴をより明らかにすることができた。

結論

本論文では、歴史テキスト・訃報記事・文学テキストをコーパスとして、歴史叙述におけるフランス語の動詞時制単純未来形の機能に関する考察を行った。先行研究が論じているように、歴史の叙述の際に用いられる単純未来形の一用法を歴史的未來（FH）と分類するだけでは、なぜ過去についての叙述のなかで未來をあらわす単純未来形を用いることができるのか、FH がどのような構造と機能をもって使用されているのかを説明することにはならない。さらに、従来の用法研究では文脈を考慮しない文を取り上げるため、テキスト全体における FH の機能を理解することが困難であった。したがって、FH が多数生起する複数のテキストを使用し、実例を参照しながらその機能を検討してきた。その結果、次の4つの点が解明できた。

- (1) 意味論的観点から、歴史テキストという客観相の語りを中心とする「歴史＝物語」(histoire) の中に生起する FH は、FS と本質的な性質は共通していることが明確となった。本研究においての基盤であった断絶と跳躍の性質は、「話」レベルにおいては用法を表していたが、「歴史＝物語」レベルにおいては、よりこの性質を利用する側面が大きく、この前提を介して先取りやクライマックスなど様々な機能が生まれることが観察された。それは語りのレベルの移行と時制の移行という2段階の移行であり、それはまさに飛躍的と言えるものである。歴史テキストに現れる FH は、この飛躍によりもたらされる立脚点からの断絶と自立性は、FH の機能のもととなる重要な特徴であった。この飛躍をもたらす FH は歴史叙述において用いられた場合に、FH で示された事行が位置する時点において、その事行以外にも他の事行も可能であることを潜在的に含んでいるということを暗示する機能が見出された。FH の存在によって、歴史は閉じられたものではなく様々な可能性を持って開かれたものであることが理解された。
- (2) 語用論的観点から、FH の飛躍は flash forward と呼び得る時間軸上での先取り機能をもたらし、それはこの先取りした事実が起こる方向に向かって叙述

が進行していくという叙述の方向性の提示を行っていることが確認された。また、現実時間と歴史叙述的時間という 2 つの時間軸の導入によって、テキストを書き手が語る発話時と歴史的出来事の現在時が異なるという歴史叙述において、FH の使用が可能となる仕組みを明らかにでき、さらに、他の動詞時制との共起が可能となることもまた説明できた。

- (3) テキスト論的観点から、断絶・時間的跳躍機能を持つ FH は、書き手の歴史叙述に関する思想や意図といった主観的側面が、出来事を選択を介してテキストに反映されていることが理解できた。
- (4) 文体的にみると、単純過去形や歴史的現在だけを使用した叙述も可能である歴史テキストだが、FH を用いて物語的展開を行うことができ、生き生きとした劇的な文体的効果を示すことが明らかになった。つまりは、単純過去形を基盤とした叙述や、歴史的現在のみの叙述においては、記述される出来事が単調で変化の少ない描写となる可能性が高いのに対し、FH の導入は歴史的出来事を表現する場合に、その描写にアクセントをつける働きをしているのである。また、複数のコーパスにおいてテキストの後半のクライマックス場面にかけて FH の使用率が増加していく現象が見られた。これは文学テキストにおいても確認されたことであり、テキストにおける単純未来形全般の特性の一つと言えるだろう。

FH の分析には、歴史テキストに現れる迂言的未来形 (FP-H)・条件法 (Cond-H) など未来を表す他の動詞時制との比較を行うべきである。テキストを構成する動詞は多様であり、いかなる動詞を語り手が選択するかという問題は、テキスト空間内での言説的展開と動詞的な多様性との問題を提起することになる。本論文では上記 2 つの動詞時制との構造的・意味的・機能的比較を行った結果、以下の 3 点が確認された。

- (1) 構造的観点からは、以下の差異が確認できた。FH・FP-PR-H は歴史叙述的時間軸と PDV-E という 1 つの視点からなるのに対し、FP-IMP-H・Cond-H は現実時間軸と、PDV-N, PDV-E の 2 つの視点から成り立っていることを示した。

- (2) 意味的観点からは、以下の差異が明らかになった。FH は未来という枠組みが構築された中に孤立的に提示される「跳躍的で静の未来」である一方、FP-H は「連関的で動の未来」であり、提示された事行への動きが現在既に始まっていることを暗示し、準助動詞 *aller* に保障された漸進性を反映した直線的で閉じられた未来である。加えて、FP-PR-H の使用には切迫性や臨場感が表され、FP-IMP-H の使用には回顧的視点により現実性や客観性がもたらされることが明らかになった。つまり、FH・FP-PR-H は基準時 t_0^1 を設定する語り手と読み手が実際に前望的視点で見ているようであり、FP-IMP-H・Cond-H を用いると語り手と読み手が知識に基づいて回顧的視点によって見ているようである。また、Cond-H を用いた場合、「世界チェンジ (*changement de monde*) = 歴史空間の転換」が発生し、現実世界とは別の「虚構＝想像世界」が構築され、事行を行う主体の変化も起きることを表す。現実時間軸や歴史叙述的時間軸上には存在するが、歴史の流れを追っていることから離脱し、現実から虚構＝想像へ歴史空間の転換が行われ、その結果視点は虚構＝想像世界のみを捉える。Cond-H が表す事行はその中に定位されることを示し、事実を語る歴史叙述において「虚構＝想像の未来」を表すという、他の未来時制とは全く異なる性質を有することを示した。
- (3) テクストの機能的観点からは、FH は叙述の流れの結末になりやすいという特徴が見られ、FP-H はパラグラフのはじめで用いられやすく、ある小テーマの語りが始まったという印象を示しやすいという特徴が確認された。特に FP-IMP-H がパラグラフや章のはじめに用いられる場合には、読み手にこの先語られることに対するリアリティを与えるという効果のあることが観察された。FH と Cond-H に関しては、どちらもある種の後方性を示すが、FH は事行の発生が前提である。一方、Cond-H は歴史空間の転換と視点が捉える範囲の変化により、事行の発生に不確実性の生じる余地を与える。さらに、現在形基調の叙述に別の時間軸上で生起する Cond-H を挿入することで、その歴史の流れからはいったん離れて、別に注意を惹きたい情報となることも観察された。

また、FH に関するさらなる探究を行うには、同じ「歴史＝物語」という語りに分類されるものの中でも、歴史書と文学テキストを区別して考えなければならない。なぜな

ら、客観的に事実を叙述する歴史書と、虚構で成り立つ文学テキストでは、テキスト性質的に大きな差異があるからである。さらに、文学テキストの中にも、実際の事実に基づきながらもフィクション要素が入る自伝的小説と完全にフィクションである物語などを分けて考える必要があるであろう。したがって、物語小説・入れ子構造小説・自伝的小説という3つの種類の文学テキストのコーパスにおいてFSとFHの分析を行った結果、以下のような点が明らかになった。まず共通点から挙げていく。

- (1) 自伝的小説と歴史テキストとの共通点としては、FHの使用が観察されたことである。
- (2) 物語小説・自伝的小説・歴史テキストでは、クライマックス効果とflash forward機能が確認された。
- (3) 入れ子構造小説・自伝的小説・歴史テキストでは、後の展開を物語る予告をするという先取り機能がある。そして、パラグラフのおわりに用いられることによる未来への投企を暗示しながらの展開の終着点・bilan・一連の話の区切り機能も見受けられた。短編物語小説においては発言や小説の最後にしばしば使用されていた。

これに対して、相違点としては次の点が挙げられる。

- (4) 入れ子構造小説と歴史テキストでは、FHとFSの挿入の性質が違う。歴史テキストは書き手の主観的判断を排除し既知の事実を振り返ることによる先取りの挿入である一方、入れ子構造小説では過去の知らない出来事に対する話し手や聞き手の意見や考えなどの主観的様相を述べる言表、また発話時toから未来へ向かってまだ達成されていない曖昧さを含んだ言表の挿入であった。
- (5) 歴史叙述と小説の中間的な形態であると考えられる自伝的小説と歴史テキストとの相違点では、自伝的小説では丸括弧(parenthèse)やダッシュ記号(tiret, —)との共起が全く見られなかった。これは、歴史テキストのように事実の先取りも可能ではあるが、結局物語でもあるため展開の流れを重視し、物語小説と同様に先に未来を知ると物語としての楽しさがなくなってしまうからであろう。また同時に、書き手が自身の過去の実体験を語る形式でもあるため、丸括弧などの記号文字とともに追加情報を途中で加える必要がないからでもある。

以上、様々な比較分析を通して、単純未来形は歴史叙述という特定のテキストのジャンルにおいて、独自の機能を有するということが明らかになった。本研究により、FSの一用法として分類されるにとどまっていた FH の生起を理論的に解釈するために有効な方法を提示でき、言語学的視点に加え、「時間」の概念に関する認知的視点も取り入れた考察を通して、FH の使用が可能となる構造と FH 独自の機能を明確化できた。本研究により、FH の理論的解釈に貢献し、モダリティ・アスペクト研究の枠を超えて単純未来形の機能を包括的にとらえる可能性を示した。

この論文を結ぶにあたって、FH に対する今後の探究課題について以下の3点を述べておく。

- (1) FH の機能をより深く理解するためには、日本語などの他の言語との対照研究を行う必要があると考える。例えば未来を表す明確な表現がない日本語では、「～だろう」と翻訳されている例を本論文のコーパスでは多く見られたが、文脈に一致していない不自然な訳となる場合が多々確認された。また、現在形基調・過去時制基調・途中挿入による意味的效果などが一切反映されていなかった。同様の傾向が他の言語でも観察されると予想されるため、複数の同一テキストの翻訳を用いて詳細な分析と比較検討を行う必要があると思われる。
- (2) FH とテキストとの関係性を探る第一段階として、過去に実際に起きた出来事の叙述である歴史テキストとフィクション物語を中心とした文学テキストにおける探求を行ったが、FH の研究には歴史小説を取り上げることが必要である。歴史的事実を基盤としつつ書き手による想像の物語が加えられる歴史小説の研究は、FH の機能のさらなる理解を可能とするからである。
- (3) 登場人物などの視点からの語りへの転換の問題が挙げられる。本論文のコーパスでは各動詞時制の構造が示す視点が影響し、叙述の途中で挿入されることにより異なる視点の間における転換や登場人物の発話と語りの中の転換のように、転換のマーカとなる役割を果たしている例が見受けられた。この問題をさらに実例に沿って観察をつづけていく必要があるだろう。

以上より、本論文では単純未来形の用法の一つとして分類され、歴史的用法として表面的かつ限定的にしか研究されてこなかった歴史的未來を、複数コーパスの実例に沿っ

て詳細に分析した。その結果、この一つのマーカーから様々な独自の性質やテキスト的機能が解明され、同時に言語資料の性質の違いや書き手とテキストジャンルとの関係性などが明らかとなった。すなわち、様々な位相の要素間の関連性が意味価値の多様性を産み出すのである。本研究はフランス語の FH という形式を通じて、歴史叙述のテキストとその意味構築の多様性の解明に貢献した。

参考文献

- BAKHTINE, Mikhaïl. (tr. fr. par Alfreda, AUCOUTURIER) (1984) : *Esthétique de la création verbale*, Paris, Gallimard.
- BAKHTINE, Mikhaïl. (Valentin Nikolaevich, VOLOCHINOV). (tr. Fr. par Marina, YAGUELLO) (1977) : *Le marxisme et la philosophie du langage : essai d'application de la méthode sociologique en linguistique*, Paris, Éditions de Minuit.
- BARCELÓ, Gérard Joan et Jacques, BRES. (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Paris, Ophrys.
- BENVENISTE, Émile. (1966) : *Problèmes de linguistique générale I* , Paris, Gallimard.
- BENVENISTE, Émile. (1974) : *Problèmes de linguistique générale II* , Paris, Gallimard.
- BOUROVA, Viara et Liliane, TASMOWSKI. (2007) : « La préhistoire des futurs romans », *Cahiers Chronos*, 19 : 25-41.
- BRES, Jacques. (2012) : « Conditionnel et ultériorité dans le passé : de la subjectivité à l'objectivité », *SHS Web of Conferences*, 1 : 1719-1730.
<https://doi.org/10.1051/shsconf/20120100037>
- BRUNOT, Ferdinand. (1953) : *La pensée et la langue : méthode, principes et plan d'une théorie nouvelle du langage appliquée au français*, 3e éd., rev, Paris, Masson. [1926]
- CLÉDAT, Léon. (1897) : *Grammaire raisonnée de la langue française*, Paris, Le Soudier.
- CONFAIS, Jean-Paul. (1995) : *Temps, mode, aspect : les approches des morphèmes verbaux et leurs problèmes à l'exemple du français et de l'allemand*, 2e éd., rev. et augmentée, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail. [1990]
- CULIOLI, Antoine. (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome 1, Paris,

- Ophrys.
- CULIOLI, Antoine. (1999a) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome 2, Paris, Ophrys.
- CULIOLI, Antoine. (1999b) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome 3, Paris, Ophrys.
- DAMOURETTE, Jacques et Édouard, PICHON. (1911-1936) : *Des mots à la pensée : essai de grammaire de la langue française*, Tome Cinquième, Paris, Éditions d'Artrey.
- DO-HURINVILLE, Danh Thành. (2010) : « Étude des temps verbaux dans les articles nécrologiques », *Syntaxe et Sémantique* 11 : 83-111.
- DO-HURINVILLE, Danh Thành. (2015) : *l'Etude des temps verbaux dans la presse française contemporaine*, Hanoi, Éditions Université Nationale de Hanoi.
- GIRAUD, Jean. (1931) : *L'école romantique française : les doctrines et les hommes*, Paris, A.Colin. [1927]
- GOSSELIN, Laurent. (2018) : « Le conditionnel temporel subjectif et la possibilité prospective », *Langue française*, 200 : 19-33.
- GREVISSE, Maurice. (1975) : *Le bon usage : grammaire française, avec des remarques sur la langue française d'aujourd'hui*, 10e éd., rev, Gembloux, Duculot. [1936]
- GREVISSE, Maurice. (1980) : *Le bon usage : grammaire française, avec des remarques sur la langue française d'aujourd'hui*, 11e éd., rev, Gembloux, Duculot. [1936]
- GREVISSE, Maurice et André, GOOSSE. (1986) : *Le bon usage : grammaire française*, 12e éd., rev, Paris, Duculot.
- IMBS, Paul. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne : essai de grammaire descriptive*, Paris, Klincksieck.
- JEANJEAN, Colette. (1988) : « Futur simple et futur périphrastique en français parlé », BLANCHE-BENVENISTE, Claire et alii (éds.) : *Grammaire et Histoire de la grammaire : hommage à la mémoire de Jean Stefanini*, Publication de l'Université de Provence : 235-257.

- KOSELLECK, Reinhart. (1979) : *Vergangene Zukunft : Zur Semantik geschichtlichen Zeiten*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.
- KOSELLECK, Reinhart. (tr. fr. par Jochen, HOOCK et Marie-Claire, HOOCK) (1990) : *Le futur passé : contribution à la sémantique des temps historiques*, Paris, Éditions de l'École des hautes études en sciences sociales.
- LANSARI, Laure. (2009) : *Les périphrases verbales aller + infinitif et be going to*, Paris, Ophrys.
- LEEMAN-BOUIX, Danielle. (1994) : *Grammaire du verbe français : des formes au sens : modes, aspects, temps, auxiliaires*, Paris, Nathan.
- LEGALLOIS, Dominique. (2016) : « La notion de construction », *Encyclopédie Grammaticale du Français*. <http://encyclogram.fr>.
- LEJEUNE, Philippe. (1975) : *Le pacte autobiographique*, Paris, Éditions du Seuil.
- MAINGUENEAU, Dominique. (1994) : *L'énonciation en linguistique française*, Paris, Hachette.
- MAINGUENEAU, Dominique. (2010) : *Manuel de linguistique pour les textes littéraires*, Paris, A. Colin.
- MARTIN, Robert. (1971) : *Temps et aspect : essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Paris, Klincksieck.
- MARTIN, Robert. (1983) : *Pour une logique du sens*, Paris, Presses Universitaires de France.
- NOVAKOVA, Iva. (2001) : *Sémantique du futur : étude comparée français-bulgare*, Paris, L'Harmattan.
- PATARD, Adeline. (2017) : « Du conditionnel comme constructions ou la polysémie du conditionnel », *Langue française*, 194 : 105-124.
- RICŒUR, Paul. (1985) : *Temps et récit*, Tome III, Paris, Éditions du Seuil.
- RIEGEL, Martin, Jean-Christophe, PELLAT et René, RIOUL. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Paris, Presses Universitaires de France.
- ROCCI, Andrea. (2000) : « L'interprétation épistémique du futur en italien et en français : une analyse procédurale », *Cahiers de Linguistique française*, 22 : 241-274.

- ROSIER, Laurence. (1999) : *Le discours rapporté : histoire, théories, pratiques*, Paris, Duculot.
- ROUSSEAU, Jean-Jacques. [ed. de Jacques VOISINE] ([1782] 1975) : *Les Confessions*, Livre I, 3^e éd., rev, Paris, Garnier. [1964]
- SERBAT, Guy (1980) : « La place du présent de l'indicatif dans le système des temps » *L'information grammaticale* 7 : 36-39.
- STEN, Holger. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Copenhague, Munksgaard.
- TOGEBY, Knud. (1982) : *Grammaire française. Volume II : Les Formes Personnelles du Verbe*, Copenhague, Akademisk Forlag.
- TOGEBY, Knud. (1985) : *Grammaire française. Volume V : Les Formes Personnelles du Verbe*, Copenhague, Akademisk Forlag.
- TOURATIER, Chrstian. (1996) : *Le système verbal français : description morphologique et morphématique*, Paris, A. Colin.
- VET, Co. (1980) : *Temps, aspects et adverbes de temps en français contemporain : essai de sémantique formelle*, Genève, Droz.
- VUILLAUME, Marcel. (1990) : *Grammaire temporelle des récits*, Paris, Éditions de Minuit.
- WAGNER, Robert Léon et Jacqueline, PINCHON. (1962) : *Grammaire du français : classique et moderne*, Paris, Hachette.
- WARTBURG, Walter Von et Paul, ZUMTHOR. (1958) : *Précis de syntaxe du français contemporain*, 2. éd. entièrement remaniée, Bern, A.Francke. [1947]
- WEINRICH, Harald. (1964) : *Tempus*, Verlag W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart.
- WEINRICH, Harald. (tr. fr. par Michele, LACOSTE) (1973) : *Le temps : le récit et le commentaire*, Paris, Éditions du Seuil.
- WILMET, Marc. (2007) : *Grammaire critique du français*, 4e éd, Bruxelles, De Boeck. [1997]
- 青木三郎 (1998) : 「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 34 : 115-133.

- 朝倉季雄 (1980)：『フランス文法事典』東京，白水社. [1955]
- 朝倉季雄 (著)・木下光一 (校閲) (2002)：『新フランス文法事典』東京，白水社.
- 朝倉季雄 (監修)・富永明夫・鈴木康司 (共著) (1973)：『スタンダードフランス語講座，7』東京，大修館書店. [1972]
- 天野みどり・早瀬尚子 (編) (2017)：『構文の意味と広がり』東京，くろしお出版.
- ヴァインリヒ，ハラルト (著)・脇阪豊 [ほか] (訳) (1982)：『時制論：文学テキストの分析』東京，紀伊國屋書店.
- 大久保伸子 (1990)：「語り手の時制としての単純過去」『茨城大学教養部紀要』22：291-315.
- 大久保伸子 (2014)：「単純未来形の意志用法 / 時制とモダリティを表す仕組み」春木仁孝・東郷雄二 (編)『フランス語学の最前線 2』137-176，東京，ひつじ書房.
- 大橋保夫 [ほか] (1993)：『フランス語とはどういう言語か』東京，駿河台出版社.
- 小川紋奈 (2013)：「フランス語の単純未来形に関する一考察－*Le Petit Prince* における用例の分析から－」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』28：63-90.
- 小川紋奈 (2016)：「歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形の機能に関する研究－*La Proclamation de la Commune* をコーパスとして－」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』31：25-79.
- 小川紋奈 (2017)：「歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形－迂言的未来形 *allait + infinitif* との比較－」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』32：10-25.
- 小川紋奈 (2018)：「歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形－条件法との比較－」『ロマンス語学研究』51：85-94.
- 片木智年 (2005)：『星の王子さま☆学』東京，慶應義塾大学出版会.
- 川口順二 (2006)：「モダリティ動詞 *aller*」『藝文研究』(慶應義塾大学) 91：1-19.
- 川口順二 (2007)：「未来表現をめぐって」『藝文研究』(慶應義塾大学) 92：93-109.
- 岸彩子 (2014)：「情報の部分性と全体性 / 実況中継に用いられる現在形を巡って」春木仁孝・東郷雄二 (編)『フランス語学の最前線 2』215-248，東京，ひつじ書房.
- 塩田明子 (2005)：「話りの構造と時制－話し言葉の物語体現在－」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を探る (フランス語の諸問題Ⅲ)』180-192，東京，三修社.

- 塩田明子 (2013): 「時制の現れ方と語りの種類 -話し言葉におけるエピソード-」 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語をとらえる (フランス語の諸問題IV)』 47-59, 東京, 三修社.
- 田口紀子 (1993): 「物語の言語分析-ナラトロジー-」 大橋保夫 [ほか] (著) 『フランス語とはどういう言語か』 293-312, 東京, 駿河台出版社.
- 田原いずみ (2018): 「話法と語りの声-フランス語と日本語の場合-」 『言語文化』 (明治学院大学言語文化研究所) 35: 21-54.
- 東京外国語大学グループ《セメイオン》(1998): 『フランス語を考える (フランス語の諸問題II)』 東京, 三修社.
- 東京外国語大学グループ《セメイオン》(2005): 『フランス語を探る (フランス語の諸問題III)』 東京, 三修社.
- 東京外国語大学グループ《セメイオン》(2013): 『フランス語をとらえる (フランス語の諸問題IV)』 東京, 三修社.
- 西村淳子 (2004): 「テキストの時制分布と連関の形-テキスト言語学の方法-」 『武蔵大学人文学会雑誌』 (武蔵大学) 36-1: 37-73.
- 西村淳子 (2015): 『フランス語時制論: 発話行為のテキスト言語学』 横浜, 春風社.
- 西村牧夫 (2013): 「「発話時制」と「語り時制」」 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語をとらえる (フランス語の諸問題IV)』 32-46, 東京, 三修社.
- 練尾毅 (1998): 「近接未来形について」 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える (フランス語の諸問題II)』 34-44, 東京, 三修社.
- 練尾毅 (2005): 「未来時を表す現在形」 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を探る (フランス語の諸問題III)』 167-179, 東京, 三修社.
- 春木仁孝 (1993): 「時制・アスペクト・モダリティー」 大橋保夫 [ほか] 『フランス語とはどういう言語か』 東京, 駿河台出版社.
- 春木仁孝・東郷雄二 (編) (2014): 『フランス語学の最前線 2』, 東京, ひつじ書房.
- バフチン, ミハイル (著)・新谷敬三郎 [ほか] (訳) (1988): 『ことば対話テキスト』 東京, 新時代社.
- バンヴェニスト, エミール (著)・河村正夫 [ほか] (共訳) (1988): 『一般言語学の諸問題』 東京, みすず書房. [1983]
- バンヴェニスト, エミール (著)・阿部宏 (監訳)・前島和也 [ほか] (訳) (2013): 『言葉と

- 主体—一般言語学の諸問題—』東京，岩波書店。
- 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (2010)：『フランス語学概論』東京，駿河台出版社。
- 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (編著)，安西記世子・小倉博行・酒井智宏 (著) (2011)：『フランス語学小事典』東京，駿河台出版社。
- 南舘英孝 (1998)：「Aller + inf. と単純未来」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える (フランス語の諸問題Ⅱ)』22-33，東京，三修社。
- 宮脇玲奈 (2020)：「テキスト構造の観点からみる大過去形についての一考察」『フランス語学研究』54：45-66。
- 山口昌男 (2000)：『文化と両義性』東京，岩波書店。[1975]
- 山梨正明 [ほか] (編) (2015)『認知言語学論考』12，東京，ひつじ書房。
- 横井雅明 (2009)：「『星の王子さま』に見られる過去時称の切り替えに関する一考察」『アルテス・リベラレス』85：61-67。
- リクール，ポール (著)・久米博 (訳) (1987)：『時間と物語Ⅰ』東京，新曜社。
- リクール，ポール (著)・久米博 (訳) (1990)：『時間と物語Ⅲ』東京，新曜社。
- ルジュンヌ，フィリップ (著)・花輪光 (監訳) (1993)：『自伝契約』東京，水声社。
- 渡邊淳也 (2003)：「Devoir の機能について—認識的用法を中心に—」『玉川大学文学部論叢』(玉川大学) 43：105-139。
- 渡邊淳也 (2004)：『フランス語の時制における証拠性の意味論』早美出版社，東京。
- 渡邊淳也 (2009)：「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 55：123-144。
- 渡邊淳也 (2013)：「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 63：69-106。
- 渡邊淳也 (2014)：『フランス語の時制とモダリティ』東京，早美出版社。
- 渡邊淳也 (2017)：「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化」天野みどり・早瀬尚子 (編)『構文の意味と拮がり』223-245，東京，くろしお出版。
- 渡邊淳也 (2018)：『叙法の謎を解く』東京，白水社。
- 渡邊淳也・和田尚明 (編) (2018)：『諸言語における TAME の発現について』，筑波大学 TAME 研究会。

渡邊淳也 (2019) 「フランス語の単純未来形と条件法－叙法的対立とその源泉－」『言語・情報・テキスト』(東京大学) 26 : 63-78.

渡邊淳也・小川紋奈 (2018) : 「フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」渡邊淳也・和田尚明 (編) : 『諸言語における TAME の発現について』 59-82, 筑波大学 TAME 研究会.

和田尚明 (2013) : 「英語とフランス語の未来表現の比較」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 63 : 107-146.

和田尚明 (2015) : 「英語の 3 人称小説における過去時制形式の解釈メカニズム」山梨正明 [ほか] (編) 『認知言語学論考』 12 : 291-335, 東京, ひつじ書房.

和田尚明 (2015a) : 「Be Going To と Aller 未来形 : 英仏対照研究」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 68 : 121-182.

辞書

Grand Larousse de la langue française, en sept volumes, Tome troisième (1986), [sous la direction de Louis Guilbert, René Lagane, Georges Niobey], Paris, Librairie Larousse.

文例出典

CHRISTIE, Agatha. (2002) : *The Thirteen Problems*, New York City, Harper Collins Publishers.

CHRISTIE, Agatha. (tr. fr. par Sylvie, DURASTANTI) (2013) : *Miss Marple au Club du Mardi*, Paris, Éditions du Masque.

LEFEBVRE, Henri. (1965) : *La Proclamation de la Commune, 26 mars 1871*, (Trente journées qui ont fait la France, 26), Paris, Gallimard.

PERNOUD, Régine. (1981) : *Jeanne d'Arc, Que sais-je ?*, 211, Paris, Presses Universitaires de France.

SAINT-EXUPÉRY, Antoine de. (1971) : *Terre des hommes*, Collection Folio, 21, Paris, Gallimard. [1931]

SAINT-EXUPÉRY, Antoine de. (1999) : *Le Petit Prince*, Collection Folio, 3200, Paris, Gallimard. [1946]

アガサ・クリスティー (著)・中村妙子 (訳) (2021) : 『火曜クラブ』, 東京, 早川書房. [2003]

アンリ・ルフェーヴル (著)・河野健二 [ほか] (訳) (2011) : 『パリ・コミュニケーション』(上)(下), 東京, 岩波書店.

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ (著)・堀口大學 (訳) (2021) : 『人間の土地』, 東京, 新潮文庫. [1955]

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ (著)・小島俊明 (訳注) (2009) : 『対訳 フランス語で読もう「星の王子さま」』, 東京, 第三書房. [2006]

レジーヌ・ペルヌー (著)・高山一彦 (訳) (1997) : 『ジャンヌ・ダルクの実像』, 東京, 白水社. [1995]

訃報記事

以下は、*Libération* 紙の訃報欄 (DISPARITION) の 2019 年 1 月 1 日から同年 9 月 30 日までの資料を記載する。(2021 年 4 月 12 日最終閲覧)

1) BLANDINE VERLET REJOINT COUPERIN ET BACH

https://www.liberation.fr/culture/2019/01/01/blandine-verlet-rejoint-couperin-et-bach_1700552/

2) JOSEPH JARMAN, MORT D'UN GUERRIER POÈTE DU JAZZ

https://next.liberation.fr/culture/2019/01/11/joseph-jarman-mort-d-un-guerrier-poete-du-jazz_1702322/

3) JEAN-MANUEL ESCARNOT, « LIBE » PIED AU PLANCHER

https://www.liberation.fr/france/2019/01/13/jean-manuel-escarnot-libe-pied-au-plancher_1702729/

4) EMILIANO SALA, MERVEILLE ARGENTINE D'UN FOOT MONDIALISE

https://www.liberation.fr/sports/2019/01/22/emiliano-sala-merveille-argentine-d-un-foot-mondialise_1704623/

5) MARCEL AZZOLA, À BOUT DE SOUFFLET

https://next.liberation.fr/musique/2019/01/22/marcel-azzola-a-bout-de-soufflet_1704678/

6) JONAS MEKAS, « L'ŒIL-CAMÉRA » SE FERME

https://next.liberation.fr/cinema/2019/01/24/jonas-mekas-l-oeil-camera-se-ferme_1705006/

7) MORT D'ERIC HOLDER, ÉCRIVAIN BOULEVERSANT

https://next.liberation.fr/livres/2019/01/27/mort-d-eric-holder-ecrivain-bouleversant_1705671/

8) HENRY CHAPIER, ANIMATEUR DU LEGENDAIRE « DIVAN », EST MORT

https://www.liberation.fr/france/2019/01/27/henry-chapier-animateur-du-legendaire-divan-est-mort_1705727/

9) EMMANUEL HOCQUARD, LES MOTS BLANCS

https://next.liberation.fr/livres/2019/01/28/emmanuel-hocquard-les-mots-blancs_1705973/

10) DICK MILLER QUITTE LES PLATEAUX

https://next.liberation.fr/culture/2019/01/31/dick-miller-quitte-les-plateaux_1706589

11) TOMI UNGERER, BRIGAND DE GRANDS DESSINS

https://next.liberation.fr/livres/2019/02/10/tomi-ungerer-brigand-de-grands-dessins_1708593

12) MORT DE MAG BODARD, UNE HÉROÏNE TRÈS DISCRÈTE

https://next.liberation.fr/cinema/2019/02/28/mort-de-mag-bodard-une-heroine-tres-discrete_1712228

13) KEITH FLINT, LA TÊTE DANSANTE DE PRODIGY, EST MORT

https://next.liberation.fr/musique/2019/03/04/keith-flint-la-tete-dansante-de-prodigy-est-mort_1712964

14) DECES DE PIERRE DE SAINTIGNON, FIGURE POLITIQUE DE LILLE ET FIDÈLE DE MARTINE AUBRY

https://www.liberation.fr/france/2019/03/09/deces-de-pierre-de-saintignon-figure-politique-de-lille-et-fidele-de-martine-aubry_1714042/

15) PIERRE CHEVALIER, MORT D'UN GÉANT DISCRET DU CINÉMA

https://next.liberation.fr/cinema/2019/03/11/pierre-chevalier-mort-d-un-geant-discret-du-cinema_1714396

16) CAROLEE SCHNEEMANN QUITTE LES MARGES

https://next.liberation.fr/arts/2019/03/11/carolee-schneemann-quitte-les-marges_1714392

17) AGNÈS VARDA, GRANDE À PART

https://next.liberation.fr/cinema/2019/03/29/agnes-varda-grande-a-part_1718323

18) SEYMOUR CASSEL, LA VIE EN RÔLES LIBRES

https://next.liberation.fr/cinema/2019/04/09/seymour-cassel-la-vie-en-roles-libres_1720366

19) AVEC LA MORT DE KAZUO KOIKE, LA BD MONDIALE PERD UN DE SES ARCHITECTES

https://www.liberation.fr/culture/2019/04/19/avec-la-mort-de-kazuo-koike-la-bd-mondiale-perd-un-de-ses-architectes_1722355/

20) DICK RIVERS, L'ELVIS DE NICE

https://next.liberation.fr/musique/2019/04/24/dick-rivers-l-elvis-de-nice_1723178

21) MORT D'ARNAUD DUBUS, ANCIEN JOURNALISTE DE « LIBE » A BANGKOK

https://www.liberation.fr/planete/2019/04/29/mort-d-arnaud-dubus-ancien-journaliste-de-libe-a-bangkok_1724098

22) MORT DE JOHN SINGLETON, PIONNIER ENGAGÉ DU CINÉMA AFRO-AMÉRICAIN

https://next.liberation.fr/cinema/2019/05/01/mort-de-john-singleton-pionnier-engage-du-cinema-afro-americaain_1724293

23) BRISSEAU PÉRILLEUX

https://next.liberation.fr/cinema/2019/05/12/brisseau-perilleux_1726562

24) MORT DE DORIS DAY, ACTRICE PAS SI LISSE

https://next.liberation.fr/cinema/2019/05/13/mort-de-doris-day-actrice-pas-si-lisse_1726759

25) MORT DE MACHIKO KYO, ACTRICE INOUBLIABLE CHEZ MIZOGUCHI, OZU ET KUROSAWA

https://next.liberation.fr/cinema/2019/05/14/mort-de-machiko-kyo-actrice-inoubliable-chez-mizoguchi-ozu-et-kurosawa_1726898

26) FORMULE 1 : NIKI LAUDA, « L'ORDINATEUR » S'ETEINT

https://www.liberation.fr/sports/2019/05/21/formule-1-niki-lauda-l-ordinateur-s-eteint_1728521

27) FRANCO ZEFFIRELLI, PRISES EN SURCHARGE

https://www.liberation.fr/cinema/2019/06/16/franco-zeffirelli-prises-en-surcharge_1734108/

28) SUZAN PITT, DESTIN ANIME

https://www.liberation.fr/cinema/2019/06/18/suzan-pitt-destin-anime_1734490/

29) MORT DU PHILOSOPHE ET POÈTE JEAN-LOUIS CHRÉTIEN

https://www.liberation.fr/debats/2019/07/02/mort-du-philosophe-et-poete-jean-louis-chretien_1737588

30) ORT DE JOÃO GILBERTO: SAMBA TRISTE

https://next.liberation.fr/musique/2019/07/07/mort-de-joao-gilberto-samba-triste_1738631

31) MORT DE JOHNNY CLEGG : L'AFRIQUE DU SUD PLEURE « UNE ICONE »

https://www.liberation.fr/planete/2019/07/17/mort-de-johnny-clegg-l-afrique-du-sud-pleure-une-icone_1740592/

32) LA NOUVELLE-ORLÉANS PLEURE LE GRAND FRÈRE DU FUNK, ART NEVILLE

https://next.liberation.fr/musique/2019/07/23/la-nouvelle-orleans-pleure-le-grand-frere-du-funk-art-neville_1741684

33) MORT DE CHRISTIANE MENASSEYRE, BELLE AME PHILOSOPHIQUE

https://www.liberation.fr/livres/2019/08/02/mort-de-christiane-menasseyre-belle-ame-philosophique_1743397/

34) JEAN-CLAUDE BOUTTIER, LA VOIE DES POINGS

https://www.liberation.fr/sports/2019/08/04/jean-claude-bouttier-la-voie-des-poings_1743649

35) CYCLISME : MORT DU PRODIGE BELGE BJORG LAMBRECHT A 22 ANS

https://www.liberation.fr/sports/2019/08/06/cyclisme-mort-du-prodige-belge-bjorg-lambrecht-a-22-ans_1743943/

36) MORT DE DAVID BERMAN, LE FONDATEUR DE SILVER JEWS

https://www.liberation.fr/musique/2019/08/08/mort-de-david-berman-le-fondateur-de-silver-jews_1744386/

37) MORT DE DAVID BERMAN, FONDATEUR DE SILVER JEWS

https://www.liberation.fr/musique/2019/08/08/mort-de-david-berman-fondateur-de-silver-jews_1744465/

38) ENTRE 200 ET 300 PERSONNES RENDENT HOMMAGE A STEVE LORS D'UNE MARCHE BLANCHE A NANTES

https://www.liberation.fr/france/2019/08/10/entre-200-et-300-personnes-rendent-hommage-a-steve-lors-d-une-marche-blanche-a-nantes_1744737/

39) MORT D'UN BIKER NOMMÉ FONDA

https://next.liberation.fr/cinema/2019/08/18/mort-d-un-biker-nomme-fonda_1745910

40) RICHARD WILLIAMS, CRÉATEUR DE ROGER RABBIT, POSE UN LAPIN

https://next.liberation.fr/cinema/2019/08/18/richard-williams-createur-de-roger-rabbit-pose-un-lapin_1745911

41) PETER LINDBERGH, REGARD SANS FARD

https://next.liberation.fr/arts/2019/09/04/peter-lindbergh-regard-sans-fard_1749314

42) AFRIQUE DU SUD : L'EX-CHAMPION DU MONDE DE RUGBY CHESTER WILLIAMS EST DECEDE

https://www.liberation.fr/sports/2019/09/06/afrique-du-sud-l-ex-champion-du-monde-de-rugby-chester-williams-est-decede_1749771/

43) ZIMBABWE : LA DERNIERE MORT DE ROBERT MUGABE

https://www.liberation.fr/planete/2019/09/06/zimbabwe-la-derniere-mort-de-robert-mugabe_1749788

44) ROBERT FRANK, L'AMÉRIQUE EN NÉGATIF

https://next.liberation.fr/images/2019/09/10/robert-frank-l-amerique-en-negatif_1750555

45) MORT DE DANIEL JOHNSTON, GEANT FRAGILE DU ROCK INDEPENDANT

https://www.liberation.fr/musique/2019/09/11/mort-de-daniel-johnston-geant-fragile-du-rock-independant_1750795/

46) EN HONGRIE, LASZLO RAJK LIBRE POUR TOUJOURS

https://www.liberation.fr/planete/2019/09/13/en-hongrie-laszlo-rajk-libre-pour-toujours_1750925/